長野市の埋蔵文化財第149集

長野遺跡群

新諏訪町遺跡

救護施設旭寮建築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１８年３月

長野市教育委員会

長野市の埋蔵文化財 149 集　『　長野遺跡群　新諏訪町遺跡　救護施設旭寮建築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　』

正　誤　表

本書に下記の通り誤りがございました。お詫びして訂正を致します。

頁	行	誤	→	正
例言		「救護施設旭寮新築工事」	→	「救護施設旭寮**建築**工事」
例言		平成 27 年度　平成 28 年 1 月 14 日(34 日間)	→	平成 27 年度　平成 28 年 1 月 14 日**(36 日間)**
凡例		追加　**12　遺構図において、炉の被熱面を淡いトーン、炉縁石および石材を濃いトーンで示す。**		
目次	２７行	図７　試掘調査土層柱状図（１/40）	→	図７　試掘調査土層柱状図**（１/20）**
２頁	21、22 行	12 月 16 日から(略)1 月 14 日までの 31 日間	→	12 月 **14 日**から(略)1 月 14 日までの **32 日間**
３頁		図２（H28、29 年調査）	→	（H**27、28** 年調査）　図３スケール　４００ｍ	→	**１００m**
４頁		図５　調査地周辺古字名	→	図５　調査地周辺字名
６頁		図７　試掘調査土層柱状図（１/40）	→	図７　試掘調査土層柱状図**（１/20）**
１０頁	１２行	湯福川扇頂地の被覆により	→	湯福川**扇状地**の被覆により
１１頁	３５行	人々が広範囲に渡る交流	→	人々が広範囲に**亘る**交流　P13L3、L17　P14L14　P29L１
１２頁	３行	囲郭する溝	→	**囲繞**する溝　図９スケール　１km	→	**５００m**
１４頁	10・15・16 行	弥生時代前期末～中期初頭	→	弥生時代前期末～**中期前半**　写真　弥生時代前期末～**中期前半**
１５頁	２３行	土坑４０基	→	土坑**３９基**
２２頁		SK３４	→	**SK３９**
２３頁		SB２２　柱状片刃石斧	→	**扁平片刃石斧**　P34L38、P44L21、P87 図 59 番号 345SB22・24
２３頁		SB２４　隅丸長方形（3.8×1.5）	→	SB２４　隅丸長方形（3.8×**1.3**）
２３頁		SD３　ST3（P8）に重複、SD10 と重複	→	SD３　ST3（P8）**、SD10 に重複**
２３頁		SD10　SP40 が重複	→	SD10　**SP40 と重複**
２３頁		SK8　SB8 に重複	→	**SB8 と重複**
２９頁	２０行	出土遺物（図 41～43）	→	出土遺物（図 41～43**、61**）
３１頁	１行	（120）とがある。	→	（120）がある。
３１頁	32、36 行	【SB12】(図 25・59)　出土遺物	→	【SB12】**(図 25)**　出土遺物**（図 59）**
３３頁	３５行	口縁から頸部にかけての遺存する。	→	口縁から頸部にかけて遺存する。
３７頁	１９行	第４章に掲載している。	→	**第Ⅳ章**に掲載している。
３９頁	6、14 行	【SD９】　【SD10】	→	【SD９】**(図 34)**　【SD10】**(図 35)**
４０頁	１３行	土坑とし、40 基を検出した。	→	土坑とし、**39 基**を検出した。
４０頁	１８行	【SK12】	→	【SK12】**(図 11)**
４４頁	１２行	円盤形土製品（322～327）	→	**紡錘車**（322～327）
４４頁	１３行	円盤形土製品のうち	→	**紡錘車**のうち
４４頁	１５行	324 は紡錘車と考えられる。	→	324 は**土製品(土製紡錘車)である。**
４４頁	１６行	甕のミニチュア土製品と考えられる。	→	甕の**ミニチュア土器**と考えられる。
４５頁	９行	径１㎜前後の細形を呈するもの	→	径１㎜前後の**細型**を呈するもの
５１頁	７行	（青木 1996・1998）	→	**(青木 1998)**
５１頁	８行	（千野 1991）	→	**(千野 1989)**
５１頁	１１行	SK２４、SK３０が該当する。	→	**SK２４が該当する。**
５１頁	２２行	口縁部にかけて弓上に立ち上がって	→	口縁部にかけて**弓状**に立ち上がって

５１頁　３７行　弥生時代後期土器群は、第３期５段階（青木 1998）　→　弥生時代後期土器群は、**青木編年弥生後期５段階**（青木 1998）

５３頁　２０行　−千曲川流域の研究と今後の課題−　→　−**千曲川中流域**の研究と今後の課題−

５３頁　３２行　「下条・灰塚遺跡」　→　「下条・灰塚」

５３頁　３４行　「青谷上寺地遺跡３－本文編－」→**「鳥取県教育文化財団調査報告書 72　青谷上寺地遺跡 37」**

５４頁　3行　「石川条理遺跡」　→　「石川**条里**遺跡」

５４頁　4行　古墳出現前夜における越後の土器様相　→　**古墳出現前後**における越後の土器様相

５４頁　7行　『信濃考古』27　→　『信濃考古』27　**長野県考古学会**

５４頁　9行　笹沢浩　1996　「日本土器辞典」　→　**笹沢浩ほか**　1996　「日本土器辞典」

５４頁　１２行　松本平平野部　長野県考古学協会　→　**松本平東部　長野県考古学会**

５４頁　17、20、23 行　田島明人→**田嶋明人**　古墳確立土器の区域編年→**古墳確立期土器**の区域編年　2010→**2009**

５４頁　２６行　千野　浩 1992　弥生後期式土器の変遷　→　千野　浩 **1989**　**後期弥生式土器**の変遷

５４頁　２７行　－長野盆地北部の古墳出現前夜−　→　－**善光寺平**北部の古墳出現前夜−

５４頁　３０行　「武器と弥生社会」大阪大学出版　→　「武器と弥生社会」大阪大学出版**会**

５４頁　３１行　「駒沢考古」３７　→　**「駒澤考古」**３７

５４頁　３８行　長野市誌編さん委員会　2000　→　長野市誌編さん委員会　**2003**

８２頁　SB15　P3　器高（12.5）　→　SB15　P3　器高（**17.3**）

８３頁　50 図 158　SB22・24　→　50 図 **161**　SB22・24

８３頁　50 図 159　SB22・24　→　50 図 **158**　SB22・24

８３頁　50 図 160　覆土下層　1/2　(7.2)　ミガキ　ハケ　→　50 図 160　**覆土　1/1　(6.3)ハケ→ミガキ　ハケ→板状工具ナデ**

８３頁　図 161　覆土　1/１　(6.3)ハケ→ミガキ　板状工具ナデ　→　**図 159　覆土下層　1/２　(7.2)ミガキ　ハケ**

８５頁　55 図 240　底径 7.5　→　55 図 240　底径 **5.4**　55 図 243　口径 14.0　→　55 図 243　口径 **17.0**

８６頁　56 図 273　SD１　覆土上層　縄文　深鉢　→　56 図 273　SD１　覆土上層　**弥生　壺**

８７頁　59 図 346　SB4　覆土上層　磨製石斧　→　59 図 346　SB4　覆土上層　**扁平片刃石斧**

８７頁　60 図 353　谷状地形　石鎚　→　60 図 353　谷状地形　**石槌**

８７頁　60 図 354　SB9　283ｇ・石英斑岩　→　60 図 354　SB9　**121,26ｇ**・石英斑岩

９３頁　68　（拓本 S＝1/2）　→　68　（拓本 S＝**1/4**）

９４頁　SB９－②（79～90）　→　SB９－②（**77**～90）

１０８頁　スケール　S＝１/2　０　10 cm　→　スケール　S＝１/2　０　**5** cm

１０８頁　332～341：S＝1/2　342～344：S＝1/3　→　332～**340**：S＝1/2　**341**～344：S＝1/3

１０９頁　石器②・石製品①(354～360)(352～353)　→　石器②・石製品①**(352～354・360)(355～359)**

１１０頁　石製品②(361)　→　**石器③**(361)

１１０頁　スケール　S＝１/１　０　2.5 cm　→　スケール　**S＝１/２**　０　**5** cm

１１０頁　(362～368　S＝１/１)　→　(362～368　S＝**１/2**)

１１６頁　SB２２完掘(南東から)　→　**SB２５**完掘(南東から)

報告書抄録　旭寮新築工事に伴う発掘調査報告書　→　旭寮**建築**工事に伴う**埋蔵文化財**発掘調査報告書

報告書抄録　弥生時代後期～古墳時代前期　主な遺構　土坑 3 基　→　弥生時代後期～古墳時代前期　主な遺構　土坑**４**基

報告書抄録　時期不明　主な遺構　土坑 37 基　→　時期不明　主な遺構　土坑**３５**基

報告書抄録　要約　弥生時代後期から古墳時代初頭　→　要約　弥生時代後期から古墳時代**前期**

長野市の埋蔵文化財第149集

長野遺跡群

新諏訪町遺跡

救護施設旭寮建築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１８年３月

長野市教育委員会

調査地周辺　航空写真（北西から）

調査地周辺　航空写真（南西から）

SB 8 遺物出土状況

SB18出土磨製石剣（表面）

SB18出土磨製石剣（裏面）

序

彩り豊かな山並みを仰ぎ、千曲川・犀川の大河に抱かれた長野市では、悠久の歴史の中で、多様な人々の生活が営まれてきました。各地に残る伝統行事や歴史的建造物などの文化財は、郷土の成り立ちや文化を理解する上で欠くことのできないものです。中でも土地に埋蔵されている遺跡やそこに存在する遺構・遺物は、私たちの祖先の知恵と文化の集積であるとともに、当時の人々の暮らしぶりを現在に伝えてくれる貴重な財産です。

ここに長野市の埋蔵文化財第149集として刊行いたします本書には、社会福祉施設の建築工事に先立ち、記録保存を目的とした発掘調査によって得られた成果を、長野遺跡群に属する「新諏訪町遺跡」として詳しくまとめてあります。発掘調査では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落跡や、古墳時代中期の古墳の一部が確認されました。また、集落跡からは多数の土器が出土し、石剣、銅鏃等の特殊な遺物も見つかっています。この成果が地域の歴史解明そして文化財保護に広くご活用いただければ幸いであります。

最後に、埋蔵文化財保護に対する深いご理解とご協力をいただいた事業者や地域の皆様、また、発掘作業に携わっていただいた皆様に感謝申し上げます。

平成30年３月

長野市教育委員会
教育長　近藤　守

例　言

1　本書は、民間開発事業「救護施設旭寮新築工事」に伴い、平成27・28年度に実施した埋蔵文化財緊急発掘調査の報告書である。

2　発掘調査は、事業主体者である社会福祉法人信濃福祉施設協会理事長 西村晴彦と、長野市長 加藤久雄との埋蔵文化財発掘調査委託契約書に基づき、長野市教育委員会が直轄事業として実施した。なお、調査は長野市埋蔵文化財センターが担当した。

3　発掘調査地は、長野県長野市新諏訪一丁目908番地外に所在する。

4　埋蔵文化財の保護対象面積は開発事業予定の6,957.29㎡である。このうち発掘調査対象面積は2,750㎡、実質調査面積は2,829㎡である。

5　現地における発掘調査の詳細は以下の表の通りである。なお、整理調査は平成29年度に実施した。

年度	調査期間	調査面積
平成27年度	平成27年11月16日～平成28年１月14日（34日間） （中断期間：平成27年11月20日～12月13日）	393㎡
平成28年度	平成28年４月12日～７月19日（99日間） 平成28年10月５日（防火水槽埋設に伴う立会い調査）	2,436㎡

6　本報告書では、新諏訪町遺跡の昭和42年及び43年調査地点を長野西高校調査地点、平成27年及び28年調査地点を社会福祉施設建設地点と呼称する。

7　現場における発掘調査は飯島哲也の指導の下、篠井ちひろ、柳生俊樹、鈴木時夫が担当した。報告書の編集は篠井と鈴木が行った。なお、執筆分担は以下の通りである。

第Ⅰ章　第１節　飯島

第Ⅰ章　第４節、第Ⅱ章　第３節　鈴木

第Ⅲ章　第３節　篠井・鈴木

第Ⅳ章　パリノ・サーヴェイ株式会社

上記以外　篠井

8　調査によって得られた諸資料は、長野市教育委員会（長野市埋蔵文化財センター所管）で保管している。なお、出土遺物の注記記号は、アルファベットで「NSSA」と表記してある。

9　発掘調査の実施に際し、事業委託者である社会福祉法人信濃福祉施設協会におかれては、埋蔵文化財の保護に対して深いご理解をいただき絶大な協力を賜った。また、保護協議、現場および整理作業において下記の方々より多大なご指導・ご助言をいただいた。深甚なる謝意を表し以下に列記する。（順不同・敬省略）

笹澤浩　町田勝則　綿田弘実　鶴田典昭　長谷川桂子　小池公雄（新諏訪町区長）　西山克己　白沢勝彦
千野浩　青木一男　笹澤正史　石川日出志　馬場伸一郎　寺前直人　長野市立博物館　長野県立歴史館
長野県埋蔵文化財センター

凡　例

本書では、調査によって確認された遺構・遺物を中心に、その基本的資料を提示することに主眼を置いた。資料掲載の要領は下記のとおりである。

1　資料は、検出したものの中から時期が明確に把握できるものを中心に掲載した。ただし、特殊なものはこの限りではない。また、すべての遺構・遺物については資料化の義務を果たせなかったため、本書に掲載していない。これらに関しては、出来得る限り追認できるよう、基礎データはそのまま保管してある。

2　地図等に記載した方位は真北、また実測図等に掲載した方位は、全て座標北を表している。

3　基準点測量および遺構測量は、平面直角座標系（国家座標）の第Ⅷ系（東経138°30′00″、北緯36°00′00″）の座標値（日本測地系2011）と日本水準原点の標高を基準とし、株式会社写真測図研究所の開発した遺跡調査支援システム「ATS」のうち、光派測距儀を用いた「コーディック・システム」を援用するため同所に委託した。

4　検出した遺構には、全て通し番号を付した。なお、本書における遺構番号等は、調査時に用いたものをそのまま使用している。

5　遺構には略記号を用いている。遺構の略記号は以下の通りである。

竪穴住居跡：SB　掘立柱建物跡：ST　溝跡：SD　墳墓周溝：SZ　土坑：SK　小穴：SP

性格不明遺構：SX

6　遺構図は、全体図を１/500、遺構分布図を１/200、遺構実測図を１/80縮尺に統一してあるが、微細図その他については適宜縮尺を提示した。また、遺構実測図における「•250」等の点は、遺物の出土位置を示す。

7　遺物に関しては、調査員により原寸にて実測図を作成し、基本的に土器実測図１/４、土器拓影１/３、石器・石製品１/３、小型品１/２等に統一してある。しかし、遺物の種類によってはこの限りではないため、縮尺を各図に明示してある。

8　土器実測図において、赤色塗彩の範囲を朱塗りで表現した。また、種類別では実測図断面に表示し、白抜きのものは弥生土器および土師器、黒塗りのものは須恵器を表す。

9　挿入した遺構写真および遺物写真の縮尺は任意である。

10　実測図番号と遺物写真番号は一致する。

11　遺構一覧表および遺物観察表の凡例に関しては、各表に記載した。

目　次

巻頭写真
序
例　言
凡　例
目　次
第Ⅰ章　調査の経緯……1
　第１節　調査に至る経緯と事務的経過……1
　第２節　試掘調査……5
　第３節　調査体制……7
　第４節　調査経過（調査日誌抄）……8
第Ⅱ章　遺跡周辺の環境……10
　第１節　地理的環境……10
　第２節　考古学的環境……11
　第３節　新諏訪町遺跡の過去調査……14
第Ⅲ章　調査成果……15
　第１節　調査の概要……15
　第２節　石積みの調査……16
　第３節　遺構と遺物……26
　　1　竪穴住居跡……26
　　2　掘立柱建物跡……36
　　3　溝跡……36
　　4　土坑……40
　　5　小穴……41
　　6　古墳……41
　　7　谷状地形……42
　第４節　遺物各説……44
第Ⅳ章　自然科学分析……46
第Ⅴ章　総括……51
抄　録
奥　付

挿図・図版目次

図１　調査地位置図（１/50,000）……1
図２　調査地位置図（１/5,000）……3
図３　保護対象範囲及び調査範囲（１/2,500）3
図４　調査区設定図（１/1,500）……4
図５　調査地周辺字名（１/5,000）……4
図６　試掘調査位置図（１/1,500）……5
図７　試掘調査土層柱状図（１/40）……6
図８　調査地周辺の地形（１/6,000）……11
図９　調査地周辺の遺跡（１/25,000）……12
図10　調査区全体図（１/500）……17・18
図11　遺構分布図１（１/200）……19
図12　遺構分布図２（１/200）……20
図13　遺構分布図３（１/200）……21
図14　遺構分布図４（１/200）……22
図15　谷状地形実測図……43
図16　遺構実測図１（SB１・２）……56
図17　遺構実測図２（SB３）……57
図18　遺構実測図３（SB４・５）……58
図19　遺構実測図４（SB６）……59
図20　遺構実測図５（SB７・８）……60
図21　遺構実測図６（SB８遺物出土状況）……61
図22　遺構実測図７（SB９）……62
図23　遺構実測図８（SB９遺物出土状況）……63
図24　遺構実測図９（SB10）……64
図25　遺構実測図10（SB11・12・13）……65
図26　遺構実測図11（SB14・15）……66
図27　遺構実測図12（SB16・17）……67
図28　遺構実測図13（SB18・19・20）……68
図29　遺構実測図14（SB21・22・24）……69
図30　遺構実測図15（SB23・25・27）……70

図31　遺構実測図16（ST１・２）……71
図32　遺構実測図17（ST３）……72
図33　遺構実測図18（SD１）……73
図34　遺構実測図19（SD２・９）……74
図35　遺構実測図20（SD３・10）……75
図36　遺構実測図21（SD５）……76
図37　遺構実測図22（SD６・７・８・11・12・13・14）……77
図38　遺構実測図23（SZ１、SK24・26、SP７）78
図39　遺物実測図１（SB１・２・３・４・５）88
図40　遺物実測図２（SB６）……89
図41　遺物実測図３（SB８－①）……90
図42　遺物実測図４（SB８－②）……91
図43　遺物実測図５（SB８－③）……92
図44　遺物実測図６（SB９－①）……93
図45　遺物実測図７（SB９－②）……94
図46　遺物実測図８（SB９－③）……95
図47　遺物実測図９（SB９－④、SB10）……96
図48　遺物実測図10（SB11・14・15・16・17）97
図49　遺物実測図11（SB19・20・21）……98
図50　遺物実測図12（SB22・24・25－①）……99
図51　遺物実測図13（SB25－②・SB26・27、SX１、SD１）……100
図52　遺物実測図14（SD３）……101
図53　遺物実測図15（SD７・９・10・13、SK７・12・18・20・24・26、SP７・30）…102
図54　遺物実測図16（SZ１）…… 103
図55　遺物実測図17（谷状地形－①）…… 104
図56　遺物実測図18（谷状地形－②、包含層・検出面、拓本－①）…… 105
図57　遺物実測図19（拓本－②）…… 106
図58　遺物実測図20（土製品、ミニチュア土器）107
図59　遺物実測図21（石器・石製品－①）……108
図60　遺物実測図22（石器・石製品－②）……109
図61　遺物実測図23（石器・石製品－③、玉類、金属製品）……110

表目次

表１　調査地周辺の遺跡一覧表……13
表２　遺構一覧表……23
表３　出土土器観察表……79
表４　破片資料観察表……86
表５　出土土製品・石器・石製品・金属製品等観察表……87

写真図版

遺構写真図版１……111
遺構写真図版２……112
遺構写真図版３……113
遺構写真図版４……114
遺構写真図版５……115
遺構写真図版６……116
遺構写真図版７……117
遺構写真図版８……118
遺物写真図版１……119
遺物写真図版２……120
遺物写真図版３……121
遺物写真図版４……122
遺物写真図版５……123
遺物写真図版６……124
遺物写真図版７……125
遺物写真図版８……126
遺物写真図版９……127
遺物写真図版10……128
遺物写真図版11……129

第Ⅰ章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯と事務的経過

調査地のある長野市新諏訪町は、1889年（明治22）の町村制施行で合併成立した長野町に属しており、行政単位としては第一地区に含まれる。裾花川が形成した河岸段丘としては第２段に位置する南東向きの緩斜面で、西山山系と長野市市街地平坦部との境付近に位置しており、古くから宅地化が進む閑静な住宅街となっている。その中で一部残っていた果樹園を主とする土地に、民間の社会福祉施設建設工事が計画され、長野市教育委員会（以下、市教委）が把握したのは平成27年２月13日に遡る。開発事業者から提出された、長野市開発行為指導要綱第６の規定に基づく事前協議書が長野市役所建設部建築指導課から合議され、長野市埋蔵文化財センター（以下、センター）として周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であること、試掘調査の必要があること等を回答している。

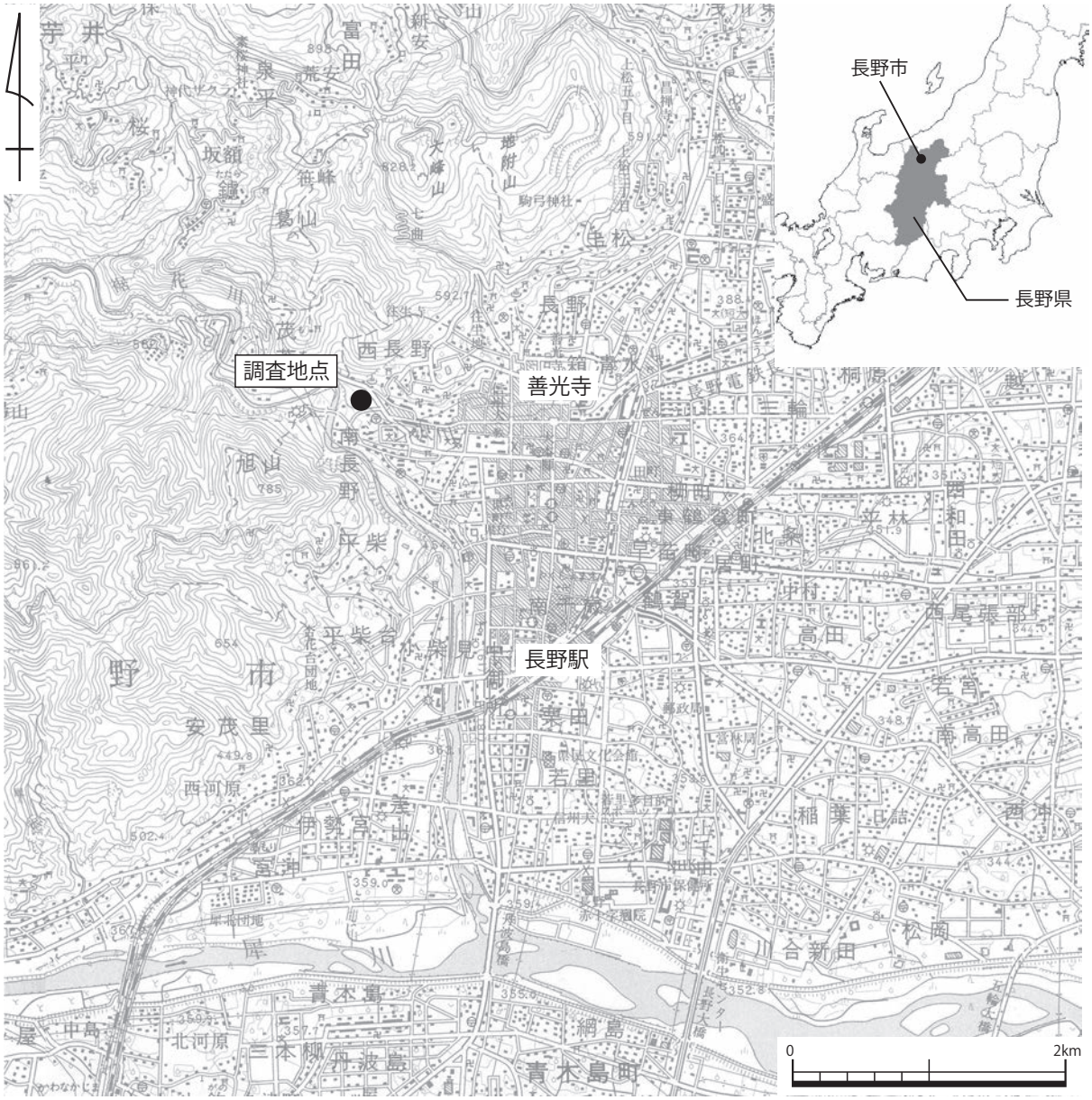


図１　調査地位置図（1/50,000）

その後、平成27年４月17日付けで文化財保護法（以下、法）第93条第１項の規定に基づく届出が、事業主体者である社会福祉法人信濃福祉施設協会から提出され、同月23日付27埋第２－14号にて市教委から発掘調査（試掘調査）の保護措置を指示している。同年６月８日付の試掘調査依頼書と土地所有者承諾書の提出を受けて、当センターは同月25日に掘削を伴う試掘調査を実施した。その結果良好な埋蔵文化財の包蔵を確認し、同年７月17日付27埋第５－８号にて開発事業者にその旨報告している。その後、開発事業者から委託を受けたコンサルティング会社の担当者との間で、当時の地表下約20～90cm に存在する遺物包含層を保護する方策について協議を重ね、開発事業による埋蔵文化財への影響が排除できない箇所が存在することが判明し、記録保存を目的とした発掘調査を実施することとなったのである。同年９月７日受付で開発事業者から発掘調査依頼書を受領した。

埋蔵文化財の保護に関する協定書については、開発区域全体6,957.29㎡を保護対象区域とし、開発事業者と市教委教育長との間で平成27年10月20日に締結した。保護措置としては、新築建物部分と付替道路部分については埋蔵文化財への影響に関係なく記録保存とし、切土造成・雨水貯留槽・防火水槽・駐車場等の範囲については影響のある部分については記録保存、その他を現状保存としている。また、上下水道の埋設やＬ型擁壁等の狭長な掘削箇所については工事立会いの措置とした。

記録保存を目的とした発掘調査は、付替道路部分をＡ区、新築建物・雨水貯留槽部分をＢ・Ｃ区、防火水槽部分をＤ区として調査区を設定し（図４）、工事工程に合わせてＡ区、Ｃ区、Ｂ区の順で実施した。なお、Ｄ区は掘削範囲が狭小かつ深く、また交通量の激しい道路に面しており、起因となる本体工事の工事車両の出入りも激しいため、安全を考慮して工事立会いによる調査を行った。また、既存マンションとの境に存在する石積みについても、未知の積石塚古墳の一部である可能性が疑われたため、同年11月16日から19日までの４日間確認調査を行ったが、古墳及び遺構ではないことが判明した。

平成27年度分の発掘調査の実施にあたり、埋蔵文化財発掘調査委託契約書を開発事業者と長野市長との間で、協定書と同日付で締結した。発掘調査はＡ区から開始し、条件の厳しい冬季間ではあったが同年12月16日から平成28年１月14日までの31日間実施した。３月24日付で調査費用の減額を主とする変更委託契約書を締結し、同月25日付27埋第262号にて平成27年度分の発掘調査委託業務実績報告書を提出した。

平成28年度分は、同年４月12日付で委託契約書を締結し、Ｂ・Ｃ区の発掘調査とＤ区の工事立会いを行った。発掘調査は同月12日より着手し、７月19日までの99日間実施した。調査中、Ｃ区西側にある既存道路が拡幅されることが判明したため、拡幅工事の際に埋蔵文化財が影響を受ける範囲に関しても急遽発掘調査を行った。Ｄ区の調査は、防火水槽埋設工事に合わせ同年10月５日に工事立会いを実施した。平成29年３月10日付で変更委託契約を締結し、同月28日付28埋第242号にて実績報告書を提出した。

平成29年度の整理作業については、協定書に基づき平成29年４月25日付で委託契約を締結した。整理調査は当センターにて実施し、平成30年３月23日付で発掘調査報告書として本書を刊行した。同日付で変更契約を締結し、同日付で実績報告書を提出して、当該開発事業におけるすべての保護措置を終了した。

本発掘調査の実施に際しては、発掘作業員の募集に関する労や、公民館報への紹介記事掲載など、地元新諏訪町地区からは多大な協力を賜った。特に、平成29年11月19日には新諏訪町80周年記念式典の関連行事として講演会とミニ展示会を開催していただき、当センターから講師の派遣と遺物展示を協力させていただいた。こうした関係が、埋蔵文化財の保護に関する理解を深めていただく第一歩であることを再確認する好事例となった。

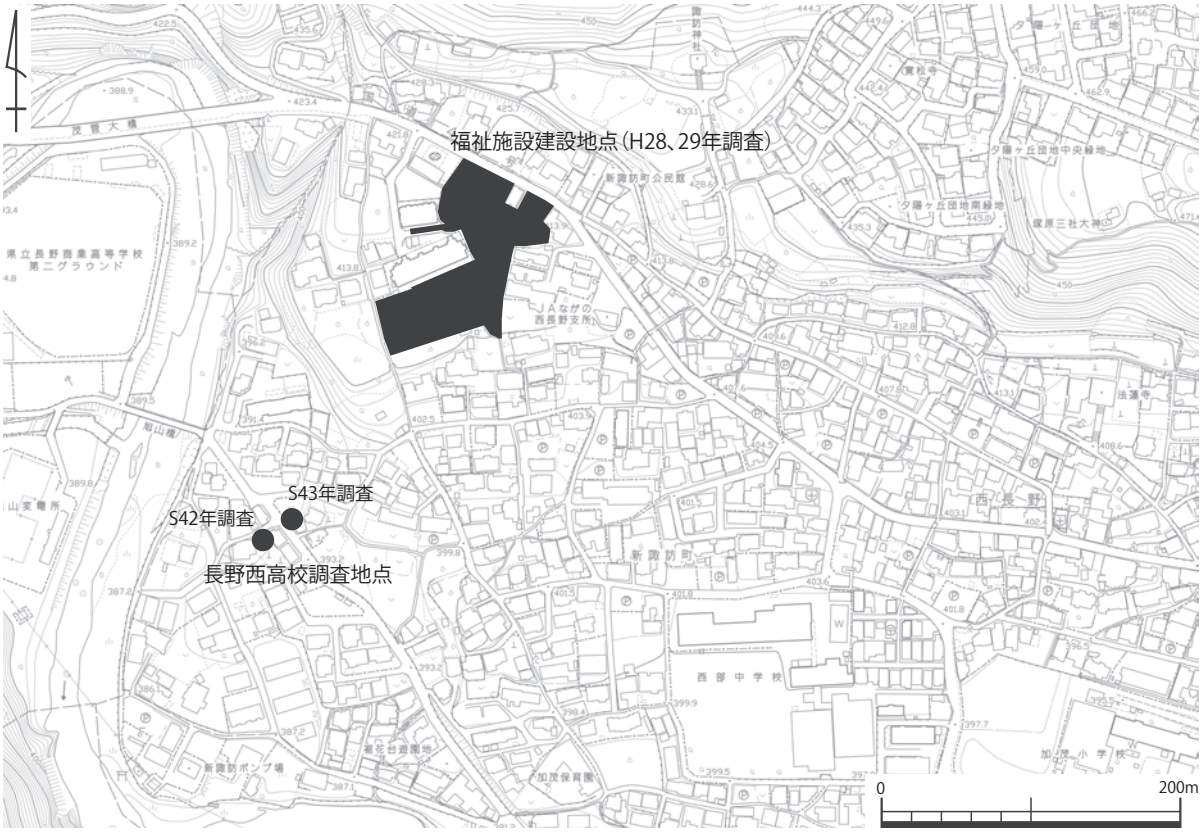


図２　調査地位置図（1/5,000）

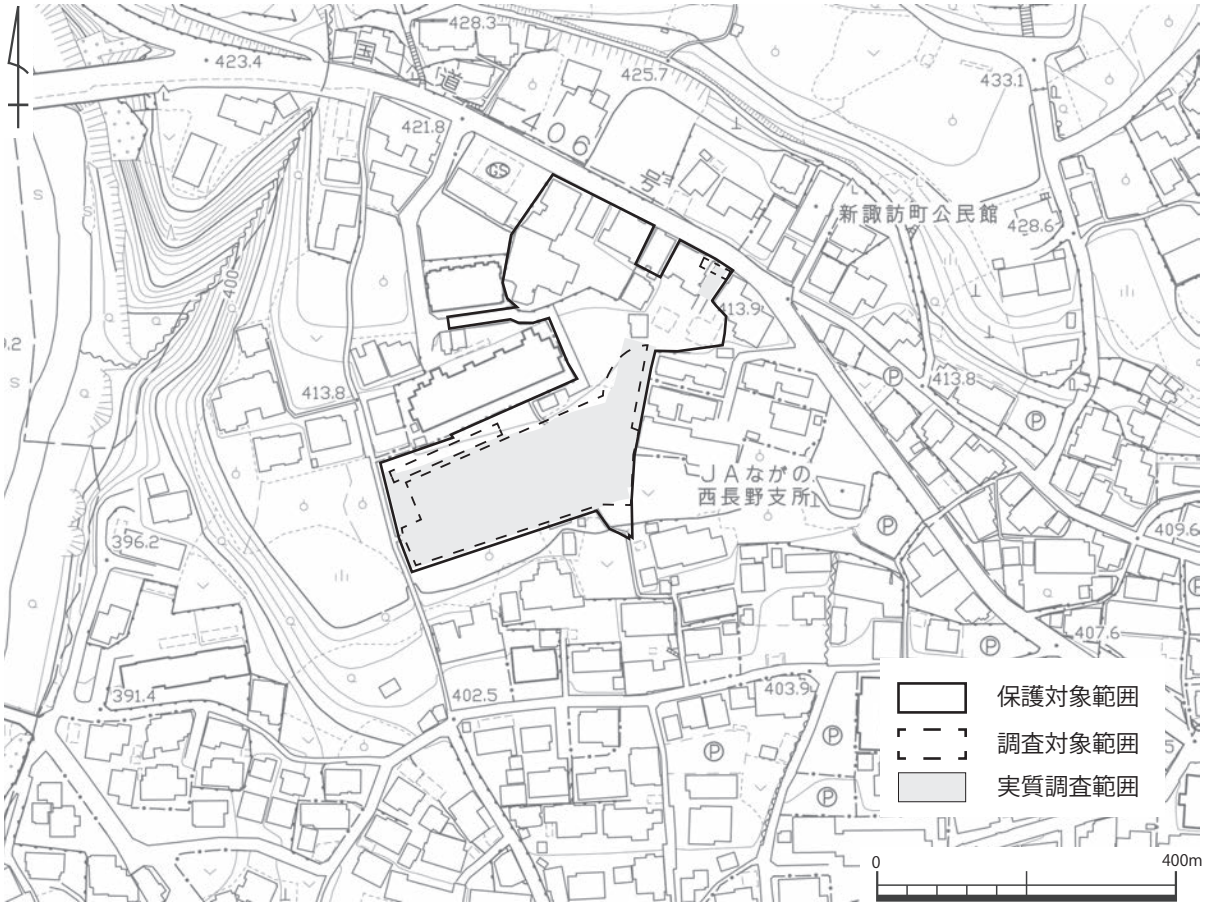


図３　保護対象範囲及び調査範囲（1/2,500）

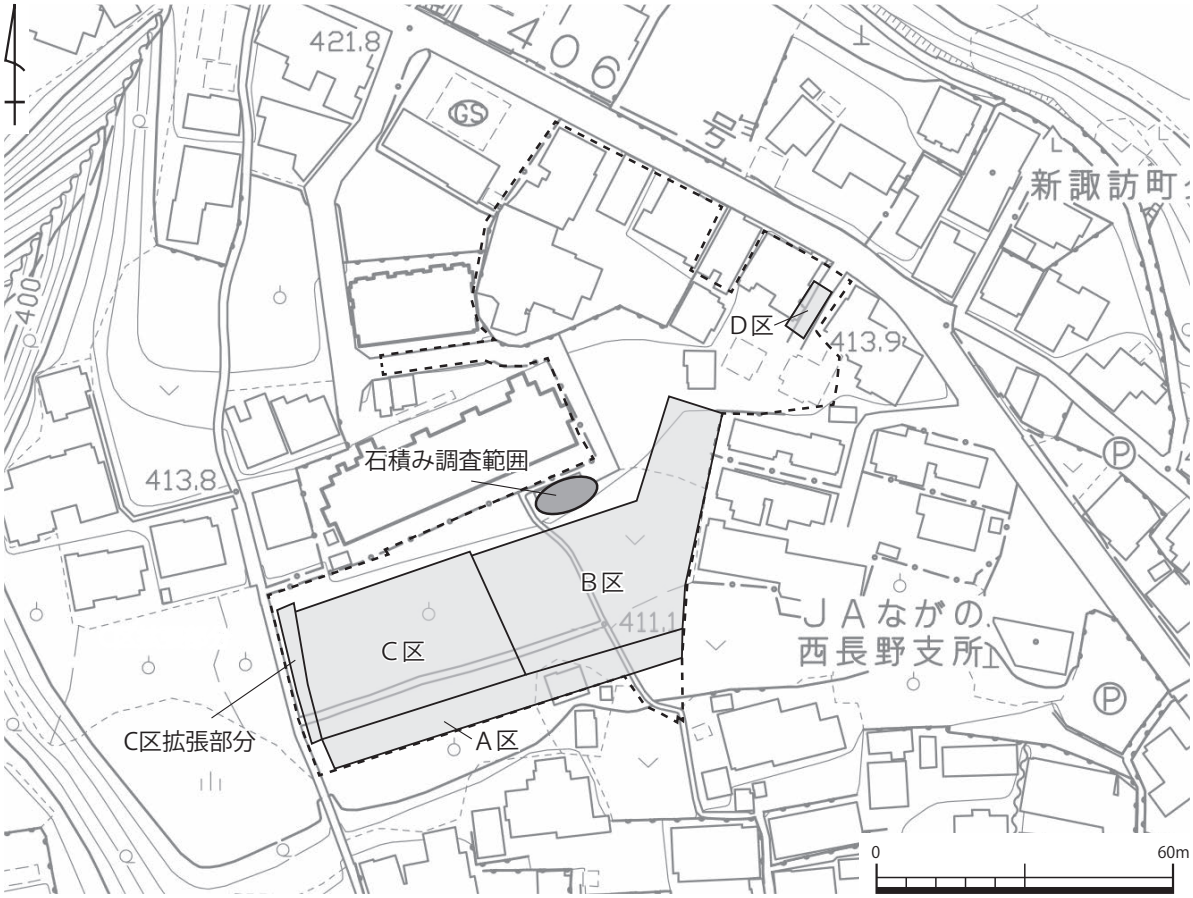


図４　調査区設定図（1/1,500）

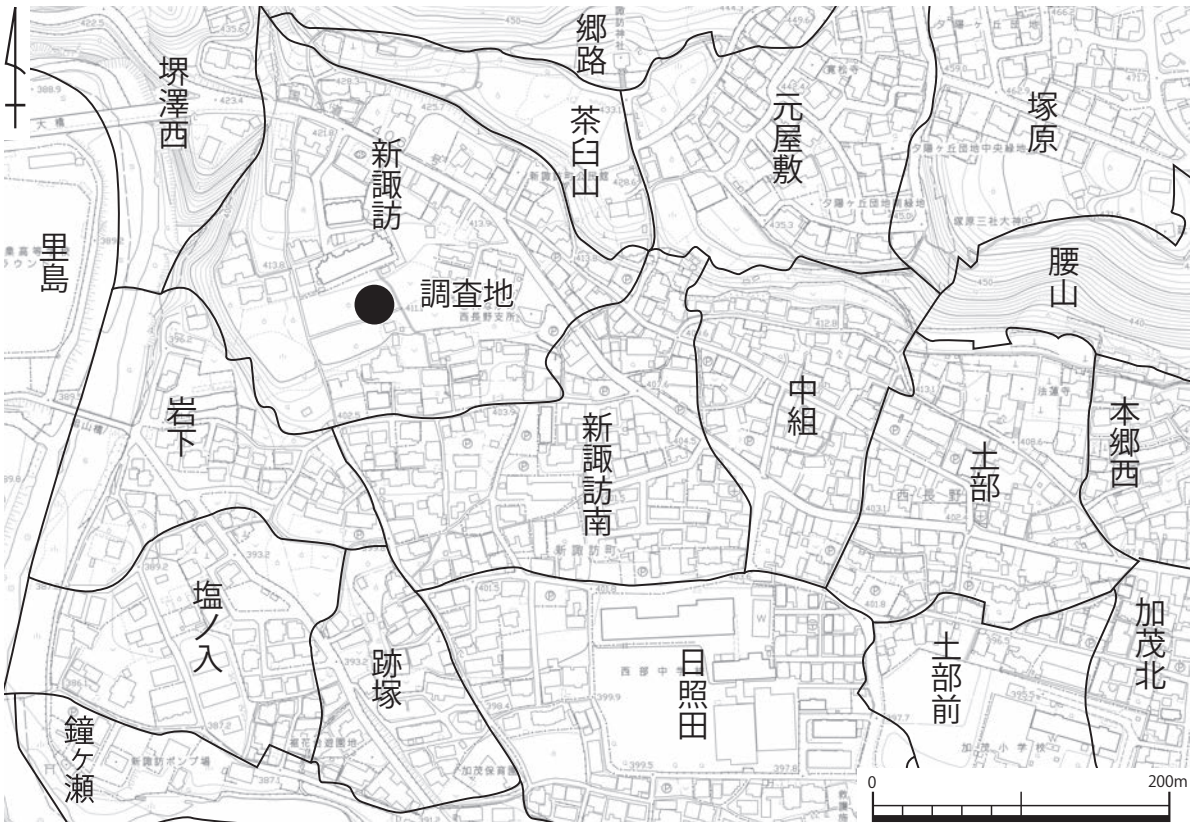


図５　調査地周辺古字名（1/5,000）

第２節　試掘調査

調査に先立ち、開発区域内における遺物包含層の有無及び深さを確認することを目的として、試掘調査を実施した。本節では試掘調査に関して詳細を述べる。

試掘調査では、バックホウにより試掘坑を掘削し、試掘坑壁面の土層堆積状況の観察を行った。試掘坑は、開発区域内の任意の５地点に設定した（図６）。試掘調査時には、試掘坑 A、B、C は畑地、試掘坑 D、E は宅地範囲であった。試掘調査の結果、全ての試掘坑で黒褐色から暗褐色を呈す土層の堆積が認められた。試掘坑 C を除く４箇所では同層から土器が出土したため、この黒褐色から暗褐色を呈す土層を遺物包含層と判断した。

試掘坑 A と試掘坑 B では、地表面下20～25cm で遺物包含層上面に達する。遺構は検出されなかったが、遺物包含層内からは弥生時代後期を中心とした土器が多量に出土している。試掘坑 C では地表面下38cm で遺物包含層上面に達する。遺構、遺物は検出されなかった。また、約70cm の地点で湧水が認められた。試掘坑 D では地表面下70cm で遺物包含層上面に達する。遺物包含層である黒褐色土は、試掘坑 A~C で確認された黒褐色土に比べ砂利が多く含まれていた。また、遺物包含層直上には約50㎝の盛土層があり、これは宅地造成時のものと推定される。試掘坑 E では地表面下90cm で遺物包含層上面に達する。試掘坑 D と同様に砂利を多く含む暗褐色土層で、土器片および遺構と推定される落ち込みが検出された。遺物包含層直上は砂利層で、造成に伴う盛土と考えられる。

試掘調査の結果から、開発区域内では地表下20～90cm の範囲において、遺物包含層が良好な状態で残存していることが認められた。

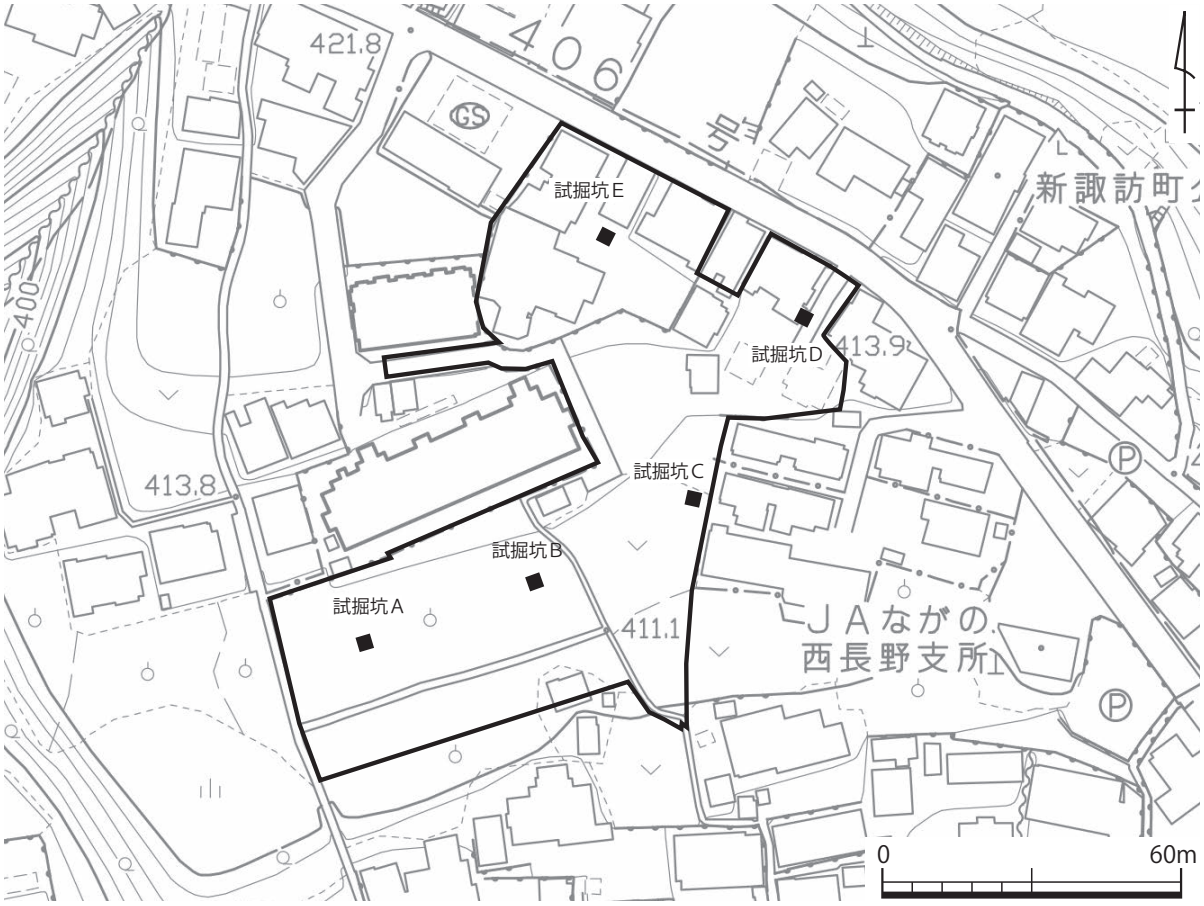


図６　試掘調査位置図（1/1,500）

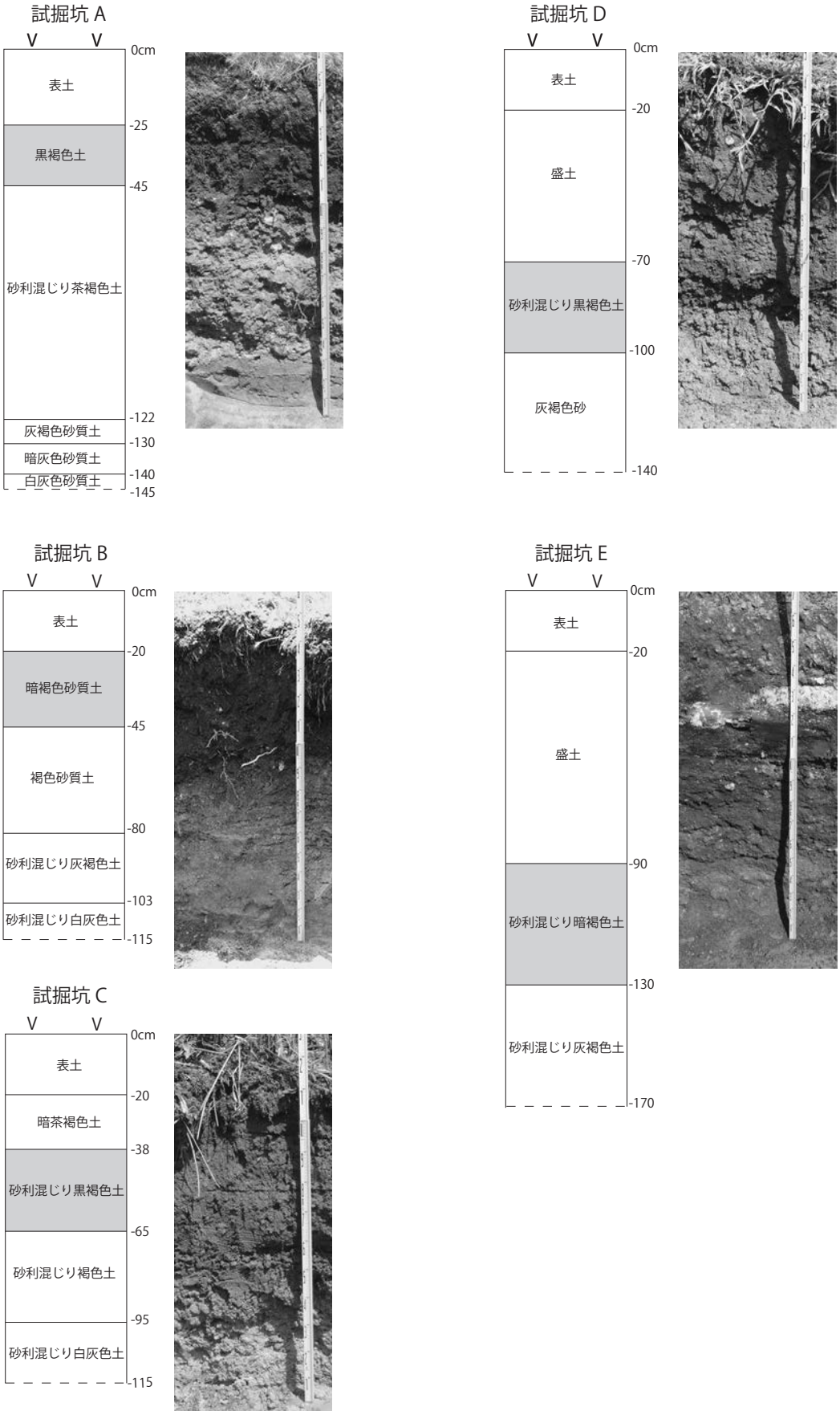


図７　試掘調査土層柱状図（1/40）

第３節　調査体制

本調査は、長野市教育委員会の直轄事業として、長野市埋蔵文化財センターが実施した。その組織は以下の通りである。

調査主体者　長野市教育委員会　教育長　近藤　守
統括責任者　長野市教育委員会　教育次長　藤沢孝司（H27）、松本孝生（H28～）
統括管理者　長野市教育委員会文化財課　課　長　青木和明
調査責任者　長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センター　局主幹兼所長　小山敏夫（H27）
主幹兼所長　森山正美（H28）、石田正路（H29）
調査担当者　長野市教育委員会（埋蔵文化財センター担当）　課長補佐　飯島哲也（H28～）
調査機関　長野市埋蔵文化財センター
庶務担当　係　長　竹下今朝光（～H28）、小林晴和（H29）
事務職員　大竹千春（H27）、宮崎千鶴子（H28～）
調査担当　係長（学芸員）　飯島哲也（H27年調査担当）、風間栄一
主事（学芸員）　小林和子
専門員（H27・H28～研究員）　柳生俊樹（H27主任調査員）、篠井ちひろ（H27調査員、H28～主任調査員）、鈴木時夫（H28～調査員）、髙田亜紀子（H27）、田中暁穂、遠藤恵実子、清水竜太、日下恵一、髙津希望（H28～）

発掘作業員　（平成27年度）　大谷守孝、金子ポンティプ、北沢梅子、小林紀代美、駒澤一雄、駒村文雄、サムアットサリン、塩入洋子、鈴木友江、竹内徳治、龍野冴子、田原次郎、塚田義郎、徳重昌志、峯山真由美、宮下厚、村田治雄
（平成28年度）　内山博之、大谷守孝、北沢梅子、倉澤貞夫、小林紀代美、駒澤一雄、駒村文雄、酒井たまき、塩入洋子、鈴木友江、龍野冴子、田原次郎、塚田義郎、徳重昌志、徳武正久、西澤尚紘、峯山真由美、宮下厚、村田治雄、上原律江、内田正征、岡沢貴子、岡宮純子、杉本千代、月岡純一、峯村茂治、山口勝己、山本光洋
調査員（整理）　青木善子、鳥羽徳子、武藤信子、向山純子
調査補助員　市川ちず子（H29）、窪田順（H29）
整理作業員　清水さゆり、関崎文子、西尾千枝、待井かおる、三好明子
遺構測量委託　株式会社写真測図研究所　代表取締役　湯本和幸（H27・28）
重機等賃貸借　有限会社原田全建　代表取締役　原田隆幸（H27・28）
土壌分析・応急的保存処理委託　パリノ・サーヴェイ株式会社　代表取締役　遠藤和郎（H28・29）
調査指導・土器鑑定指導　前長野市地方文化財保護審議会　会長　笹澤浩
X線写真撮影協力　長野県立歴史館　館長　笹本正治（H29）
石器・石製品指導　長野県埋蔵文化財センター　調査第２課長　町田勝則（H28）
地質学的指導・石材鑑定　長野市立博物館分館信州新町博物館　係長（学芸員）　畠山幸司（H28・29）

第４節　調査経過（調査日誌抄）

【平成27年度】

11月16日（月）　石積み調査、作業員雇用開始。
11月17日（火）　除草作業終了。清掃・写真撮影。トレンチ掘削開始。
11月18日（水）　降雨により終日作業休止。
11月19日（木）　トレンチ掘り下げ続き。写真撮影。石積みの確認調査終了。
11月20日～12月13日　現場作業中断。
12月14日（月）　Ａ区重機による表土剥ぎ開始。
12月15日（火）　作業員雇用開始。遺構検出作業。
12月16日（水）　遺構掘り下げに着手。
12月17日（木）　午後、降雨により作業休止。
12月18日（金）　遺構掘り下げ継続。Ａ区東端の表土剥ぎ。
12月21日（月）　遺構掘り下げ継続。午後、降雨により作業休止。
12月22日（火）　Ａ区谷状地形部分の掘り下げ開始。SD３検出。
12月24日（木）　Ａ区西側写真撮影。
12月25日（金）　作業員休み。SD２遺物取り上げ。
12月26日～１月６日　年末年始休暇。
１月７日（木）　降雨により終日作業休止。
１月８日（金）　SD３およびＡ区谷状地形の掘り下げ継続。
１月12日（火）　遺構写真撮影。
１月13日（水）　遺構測量。
１月14日（木）　遺構図結線。Ａ区調査終了。

【平成28年度】

４月12日（火）　Ｃ区重機による表土除去作業開始（～４月15日）。
４月14日（木）　作業員雇用開始。Ｃ区遺構検出。掘り下げ開始。
４月21日（木）　午後、降雨により作業休止。
４月28日（木）　降雨により終日作業休止。
５月９日（月）　Ａ区道路拡幅に伴う工事立ち合い。
５月10日（火）　Ｃ区遺構測量。
５月11日（水）　降雨により作業休止。
５月12日（木）　Ｃ区遺構図結線。
５月17日（火）　午前、降雨により作業休止。Ｃ区遺構測量。
５月18日（水）　Ｃ区遺構図結線。
５月20日（金）　SD５重機による掘削。
５月24日（火）　Ｃ区空撮。全景写真撮影。遺構測量。
５月25日（水）　Ｃ区遺構図結線。
５月27日（金）　笹澤浩先生指導。SB９銅鏃出土。
６月２日（木）　Ｃ区遺構測量。
６月３日（金）　Ｃ区遺構図結線。
６月６日（月）　Ｃ区調査終了。埋め戻し開始（～６月７日）。
６月７日（火）　Ｃ区西側道路工事立会い。
６月８日（水）　Ｂ区の重機による表土除去作業開始（～６月15日）。
６月９日（木）　Ｂ区遺構検出開始。
６月10日（金）　Ｂ区遺構掘り下げ開始。

Ａ区作業風景写真

Ｃ区作業風景写真

6月13日(月)　降雨により作業休止。
6月14日(火)　C区西側道路工事部分の遺構検出掘り下げ開始。B区谷状地形掘り下げ開始。
6月16日(木)　C区西側道路工事部分の遺構測量。
6月17日(金)　C区西側道路工事部分の遺構図結線。
6月20日(月)　SB18検出面から石剣出土。
6月22日(水)　B区遺構測量。
6月23日(木)　市立長野高校発掘体験。
B区遺構図結線。
6月24日(金)　15時から雨天により作業休止。
6月28日(火)　降雨により終日作業休止。
7月1日(金)　定例会のため作業15時まで。
7月4日(月)　午前、降雨により作業休止。
7月6日(水)　B区空撮。遺構測量。
7月7日(木)　B区遺構図結線。
7月8日(金)　B区遺構測量（谷状地形断面）。
7月11日(月)　B区遺構図測量。B区北東部分（駐車場）表土除去（～7月12日）。
7月13日(水)　降雨により終日作業休止。
7月14日(木)　B区埋め戻し開始。SZ1覆土埴輪片・須恵器片出土。
7月15日(金)　B区北東部分遺構測量。全景写真。
7月19日(火)　B区遺構図結線。B区調査終了。
機材撤収。現場作業終了。

10月5日(水)　D区防火水槽部分の工事立会い。

C区西側道路工事部分調査写真

B区谷状地形調査写真

市立長野高校発掘体験

D区調査風景写真

作業員集合写真

第Ⅱ章　遺跡周辺の環境

第１節　地理的環境

調査地が所在する新諏訪地区は、長野市の北西部に位置する。犀川支流の裾花川が形成した裾花川扇状地の扇頂部にあたり、谷壁の緩やかな峡谷から盆地平野部へと至る場所である。

本調査地を含む新諏訪地区一帯は、裾花川扇状地の扇頂に形成された河岸段丘地形となっている。裾花川扇状地は旭山北麓の里島地籍を扇頂とする扇状地である。南から南東方向に向かって長野市街地をのせ、扇端は南側で犀川扇状地に、南東側で千曲川氾濫原に接している。扇頂部の河岸段丘は、この裾花川扇状地の旧扇状地面が裾花川に浸食されて形成されたものである。調査地周辺では、往生地および対岸の平柴を最上段として、数段の段丘面が認められる。第２段丘以下の下流方向への追跡は、西長野・南長野地籍まで可能だが、これ以東は善光寺北側の湯福神社を扇頂とする湯福川扇頂地の被覆により、段丘の識別が困難となる。

調査地は河岸段丘の第２段丘面上に立地する。同段丘の河床からの比高は10～15m を測り、調査地の標高は約412m である。比較的小規模な段丘で、段丘面上は南東向きの緩斜面地となっている。調査地西側には背後の郷路山からの沢によって谷筋が形成される。また、近隣には瓜割清水など湧水の名所が点在する。調査地にも複数の井戸跡が認められることから、調査地一帯が湧水の豊富な地域であることが窺える。

調査地周辺航空写真（平成27年撮影・長野市）

図 8　調査地周辺の地形（1 /6, 000）

第 2 節　考古学的環境

長野市内では地理的な環境条件を勘案し、複数遺跡を包括する遺跡群が設定されている。新諏訪町遺跡が属する「長野遺跡群」は、長野地区における裾花川河岸段丘と湯福川扇状地の複合地形上に立地する諸遺跡を包括する遺跡群で、新諏訪町遺跡は遺跡群内の西端に位置している（図 9）。本節では、新諏訪町遺跡周辺の考古学的環境について、長野遺跡群諸遺跡の調査成果を中心に記述する。なお、長野遺跡群と近隣の諸遺跡に関して図 9 に掲載した。

【縄文時代】長野遺跡群内で最初に集落が認められるのは縄文時代中期である。旭町遺跡（図 9 － 9）では竪穴住居跡 2 軒と埋甕が検出された。出土遺物には、東北地方や関東地方の土器、タカラガイ形土製品等があり、当時の人々が広範囲に渡る交流を行っていたことが窺える。西町遺跡（7）でも、同じく中期の竪穴住居跡が検出された。

【弥生時代】弥生時代では中期から生活の痕跡が見られる。新諏訪町遺跡長野西高校調査地点（2）では、中期初頭の土器を伴う配石遺構が検出され、長野盆地における稲作初源期の遺跡として注目される。なお、同地点の

調査に関しては本章の第３節に詳細を記載した。中期後半の栗林式期の集落跡は、東町遺跡（６）、西町遺跡、県町遺跡（８－１～３）等、複数の遺跡で確認されている。県町遺跡では集落縁辺部に幅約５ｍの大溝を検出しており、集落を囲郭する溝と考えられる。続く後期箱清水式期の集落は、箱清水遺跡（３）で見つかっている。千曲川流域を中心に分布する箱清水式土器の標式遺跡で、明治34年の長野高等女学校（現長野西高校）敷地造成工事の際に発見・報告がされた。遺跡範囲は造成地の南半分にあたる校舎棟から前庭にかけてと推定される。また、時期の詳細は不明だが古墳時代の竪穴住居跡の存在が指摘されていることから、弥生時代後期と古墳時代に集落が形成されたと考えられる。

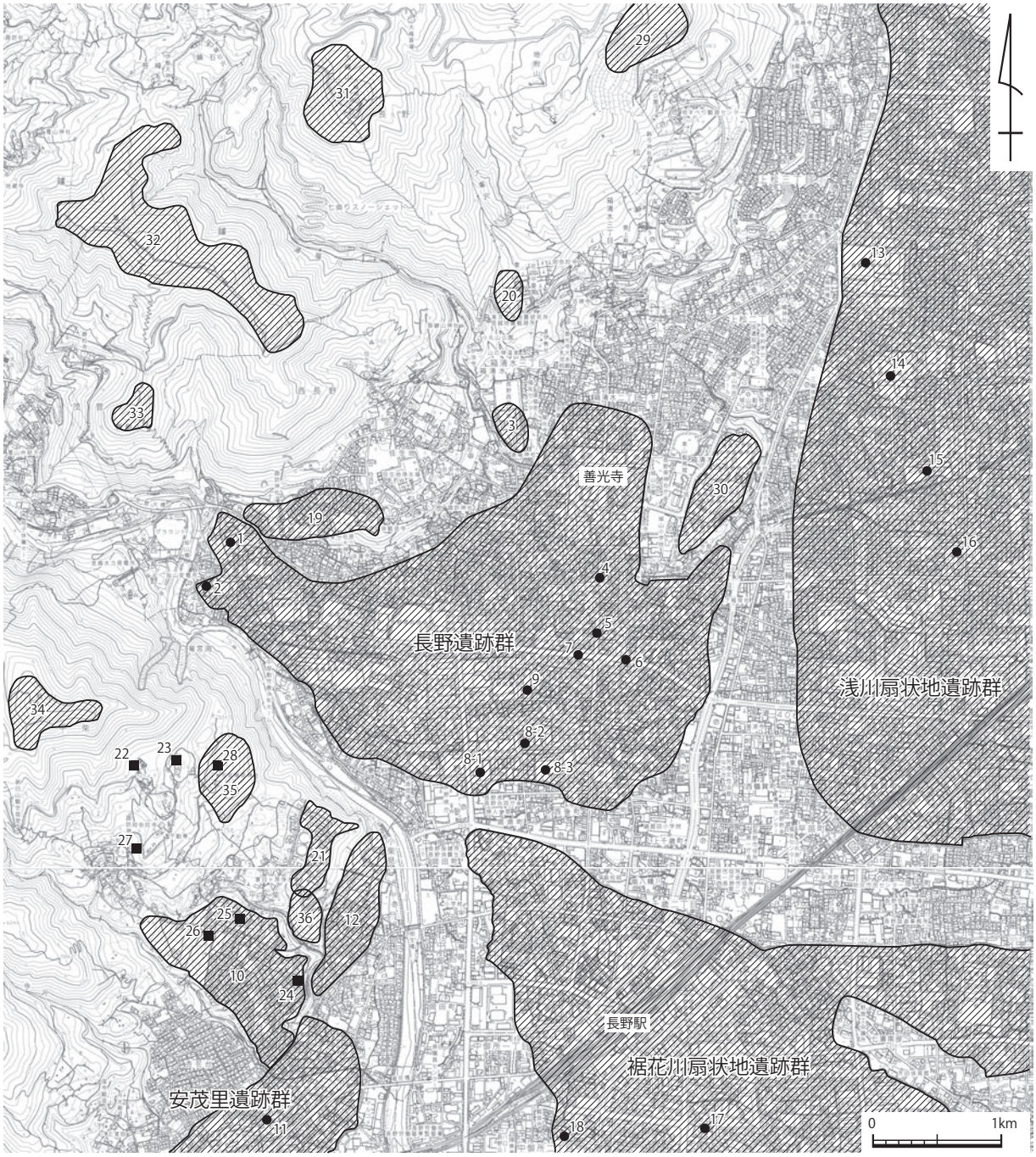


図９　調査地周辺の遺跡（１/25,000）

【古墳時代】東町遺跡、西町遺跡、県町遺跡で集落が検出された。長野遺跡群内では、古墳時代前・中期に比べ後期に遺構数が増加する傾向があり、集落規模の拡大が推察される。また、西町遺跡では前期前半と中期前半、後期後半の竪穴住居跡が検出された。複数の時期に渡って居住域として利用された地域だが、集落に時間的な継続性が見られないことから単一集落が形成されたと考えられる。県町遺跡国際会館地点（８－１）では、古墳時代中期後半から後期にかけての集落跡が見つかった。調査面積約300㎡の中で、焼失住居３軒を含む14軒の竪穴住居跡が確認されている。この他、県町遺跡後町小学校跡地地点（８－３）でも、古墳時代後期の竪穴住居跡１軒を検出している。長野遺跡群の周辺では、本村東沖遺跡（13）や御所遺跡（18）で古墳時代集落が検出された。本村東沖遺跡は古墳時代中期を中心とする集落遺跡で、地附山山麓に築造された地附山古墳群（29）の築造に関わる集落として注目される。墓は、前述の地附山古墳群や安茂里地籍の王塚古墳（22）、双子塚古墳（23）、遠藤塚古墳（24）といった中後期古墳の分布がみられる。なお、調査地に近接する西長野古墳群は３基の古墳の存在が指摘されているが、未調査のため墳丘の規模や構築時期は不明である。

【奈良時代・平安時代】東町遺跡、西町遺跡、県町遺跡で集落が検出された。県町遺跡では、竪穴住居跡のほか、片廂建物跡を含む複数の掘立柱建物跡が検出された。出土遺物には蹄脚硯、円面硯、須恵器双耳杯、稜椀、「厨」の文字が書かれた墨書土器等があり、水内郡衙と郡衙を取り巻く集落が形成されていた可能性が高い。このほか、元善町遺跡（４）では発掘調査を実施した２地点から2,200点を超える古代瓦が出土した。

【中世】善光寺参道沿いに門前町が発達し、西町遺跡、元善町遺跡、善光寺門前町跡（５）等から当時の様相を窺うことができる。出土遺物は、カワラケや内耳鍋、古瀬戸、珠洲焼、輸入陶磁器等多岐に渡る。渡来銭も数多く出土しており、門前町の賑わいを示す資料となった。また、善光寺周辺の丘陵や山頂には南北朝時代から戦国時代にかけて山城が築造され、横山城跡（30）や大峰山城跡（31）、葛山城跡（32）等にその痕跡を見ることができる。

表１　調査地周辺の遺跡一覧表（●は検出遺構の時期を示す）

番号	遺跡名	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世
1	新諏訪町遺跡（調査地）		●	●				
2	新諏訪町遺跡（長野西高校調査地点）		●	●				
3	箱清水遺跡		●					
4	元善町遺跡			●			●	●
5	善光寺門前町跡			●			●	●
6	東町遺跡		●	●	●	●	●	●
7	西町遺跡	●	●	●	●	●	●	●
８－１	県町遺跡（国際会館地点）			●	●	●		
８－２	県町遺跡（マンション建設地点）		●		●	●		
８－３	県町遺跡（後町小学校地点）		●		●	●		
9	旭町遺跡	●		●				
10	平柴平遺跡	●	●	●		●		
11	差出遺跡		●	●				
13	本村東沖遺跡		●	●				
14	本村南沖遺跡		●					
15	三輪小学校遺跡		●			●		
16	本郷前遺跡		●					
12	小柴見遺跡							
17	西番場遺跡					●	●	
18	御所遺跡			●	●	●	●	

番号	遺跡名	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世
19	西長野古墳群			●				
20	花岡平古墳群			●				
21	北原古墳群			●				
22	王塚古墳			●				
23	双子塚古墳			●				
24	遠藤塚古墳			●				
25	中塚古墳			●				
26	きょう塚古墳			●				
27	弥勒寺古墳			●				
28	大黒山古墳			●				
29	地附山古墳群			●				
30	横山城跡						●	
31	大峰山城跡						●	
32	葛山城跡						●	
33	頼朝山城跡						●	
34	旭山城跡						●	
35	大黒山城跡						●	
36	小柴見城跡						●	

第３節　新諏訪町遺跡の過去調査

新諏訪町遺跡では、昭和42年と43年に、長野西高等学校教諭であった笹澤浩氏と同校郷土班、および長野吉田高等学校地歴班の生徒により発掘調査が実施された。調査地は、新諏訪町遺跡社会福祉施設建設地点から約20～30m 低い裾花川河岸段丘の６段目の段丘面上で、標高は約390m を測る。

第１次調査は畑地内で行われた。調査は南北方向に長いトレンチを設定し、遺構検出状況に応じてトレンチを拡張する方法がとられた。最終的な調査面積は68㎡である。第２次調査は、第１次調査地の北側に隣接する旧善白鉄道の跡地内で行われた。鉄道敷地内のため遺物包含層等がかなりの破壊を受けていると予想されたが、トレンチを掘削したところ、遺物包含層が良好に残存していたことが報告されている。また、両調査地点で確認された遺物包含層は、後述する弥生時代前期末～中期初頭の土器を多量に含む上層と、縄文時代晩期の土器を微量に含む下層が識別されている。

調査の結果、第１次調査では、弥生時代前期末～中期初頭の集石遺構１基および配石遺構３基と、古墳時代前期の集石遺構３基を検出した。続く第２次調査では、弥生時代前期末～中期初頭の集石遺構１基を検出した。２回に渡る調査で検出した遺構のうち、配石遺構に関しては再葬墓との関わりが指摘されている。

遺物は弥生時代前期末～中期初頭の土器および石器を主体とし、この他古墳時代前期の土師器高杯破片と中世以降のものと見られる刀子等が出土した。出土した弥生時代前期末～中期初頭の土器は、遺跡名を冠して新諏訪町式土器と名付けられ、笹澤浩氏の型式的検討によってⅠ・Ⅱ・Ⅲ式に細分された。東海地方の条痕文系土器と、関東・東北地方系土器の影響が見られる土器群であり、ⅠおよびⅡ式段階では少量の遠賀川系土器が含まれる。善光寺平への弥生文化の進出から定着に至る経過を示す土器群であり、新諏訪町遺跡長野西高校調査地点は、長野盆地における弥生時代初期の様相を示す重要な遺跡として理解されている。

長野西高校調査地点から出土した弥生時代前期末～中期初頭の土器

第Ⅲ章　調査成果

第１節　調査の概要

現地における発掘調査は、工事工程に合わせてＡ区、Ｃ区、Ｂ区の順で進めた。Ｄ区に関しては防火水槽埋設工事時に工事立会いを実施した。

調査区内の土層堆積状況は、基本的に上層から第１層－表土層、第２層－耕作土層、第３層－黒褐色土層（遺物包含層）、第４層－暗褐色土層（地山層）である。第４層以下の土層は、場所によって堆積状況に違いが認められた。調査区北側のトレンチ７（Tr７）では第４層下に明褐色砂質土が堆積するのに対し、調査区南側のトレンチ１（Tr１）では径50cm 以上の礫を主とした礫混じり褐色土が堆積している。また、トレンチ12（Tr12）とトレンチ６（Tr６）では第４層直下に砂利混じりの褐灰色土の堆積が観察されたが、これは谷地形堆積土の一部と判断した。Ｂ区北東部分およびＤ区は、第２層が削平され、過去の造成に伴う盛土層となっている。遺物包含層である第３層も造成に伴う影響を部分的に受けているが、調査範囲内においては掘削が遺構検出面まで及ぶ箇所はわずかである。

地表面から遺構検出面までの深さは、調査区北辺では約0.5～1.6m、調査区南辺では約0.3～0.6m で、調査区南側ほど浅くなっている。Ａ区にあたる調査区南端部が最も浅く、概ね地表下30cm 程度で遺構検出面に達した。北辺はＢ区北東部分が最も深く、地表下約２m を測るが、これは駐車場造成に伴い盛土されているためである。遺構検出面は現地表面と同様に南下がりに傾斜しており、旧地表面も緩斜面地であったことが推察される。また、Ｂ区にあたる調査区東側では、重機掘削時から湧水があり、水が全く出なかったＡ区とは対照的な様相であった。調査区東側では近現代に構築された井戸や暗渠の跡等を検出しており、水がでる場所として認識されていたようである。調査中、この範囲では地形の落ち込みが認められ、調査区が位置する緩斜面地を南北に縦断して谷状の地形が形成されていたことが判明した。

調査では竪穴住居跡27軒、掘立柱建物跡３棟、溝跡13条、土坑40基、小穴58基、古墳周溝１条、性格不明遺構１基、および谷地形を検出した。遺構の時期は弥生時代後期から古墳時代前期と古墳時代中期が認められた。竪穴住居跡の時期は全て弥生時代後期から古墳時代前期である。竪穴住居跡は重複するものが多数認められ、他時期の住居跡が見られないことから、該期に継続して営まれた集落跡と考えられる。古墳時代中期の遺構は古墳周溝で、覆土内から埴輪破片が出土した。遺構は調査区全体に分布が認められるが、特に調査区西側と北東部分で密度が高い。調査区外へ延長する遺構も複数あることから、調査対象範囲以北においても遺構が多く分布していることが予想される。

【Ｄ区工事立会いについて】

防火水槽埋設工事に伴い、該当範囲において工事立会いを実施した。調査面積は約40㎡である。造成時の盛土のため、遺構検出面までの深さは最大1.2m を測る。盛土層は南側に向かって薄くなっていき、調査区南側は遺構検出面までの深さが１m と、北端に比べて浅くなる。当該範囲の遺物包含層の堆積は約10cm と全体的に薄く、数か所で遺構検出面に達する攪乱が見られるが、いずれも部分的なものであり、遺物包含層以下の地層は良好に残存していた。なお、Ｄ区内では大きな地形的変化は見られず、旧地形は概ね平坦な地形であったと考えられる。

検出した遺構は竪穴住居跡１軒（SB27）である。この他、調査区東壁の壁面１か所でほぼ水平に堆積する硬く締まった土層を検出した。同層直上まで攪乱が及んでいるため、立ち上がりは確認できず、平面プランも検出できなかったが、竪穴住居跡床面の貼床部分の一部である可能性がある。

第２節　石積みの調査

既存マンションとの境界付近に当たる調査区北東部分に、墳丘状の高まりと石積みが存在し、未発見の積石塚古墳である可能性が浮上した。このため、Ａ区発掘調査に先立ち、石積み周囲の除草とトレンチ掘削による確認調査を実施した。

除草作業及び清掃により、石積みは東西約13m、南北約８ｍの規模となることが判明した。表層は、径30cm以上の大型の礫と共に、砕石やコンクリート破片が散乱している状態であった。

トレンチは石積みの中央部分に、南北方向を長軸として設定した。トレンチ内において、土層は下層から明茶褐色土、黒褐色土（遺物包含層）、円礫混じり暗茶褐色土、礫（石積み）の順に堆積する。黒褐色土および明茶褐色土は、試掘調査時に確認された遺物包含層とその下層であり、開発区域内の基本層序と一致する。黒褐色土（遺物包含層）の直上に堆積する円礫混じりの暗茶褐色土は、石積み範囲の南から北に向かって堆積が厚くなっており、これが墳丘状の高まりを形成している。同層中にはレンガ片や陶器片などの現代遺物が含まれていたことから、墳丘状の盛土および石積みは近代以降に盛土・構築されたものと判断した。

石積み 写真１　調査前状況（南西から）

石積み 写真２清掃後（南から）

石積み 写真３　清掃後（西から）

石積み 写真４　トレンチ断面（東から）

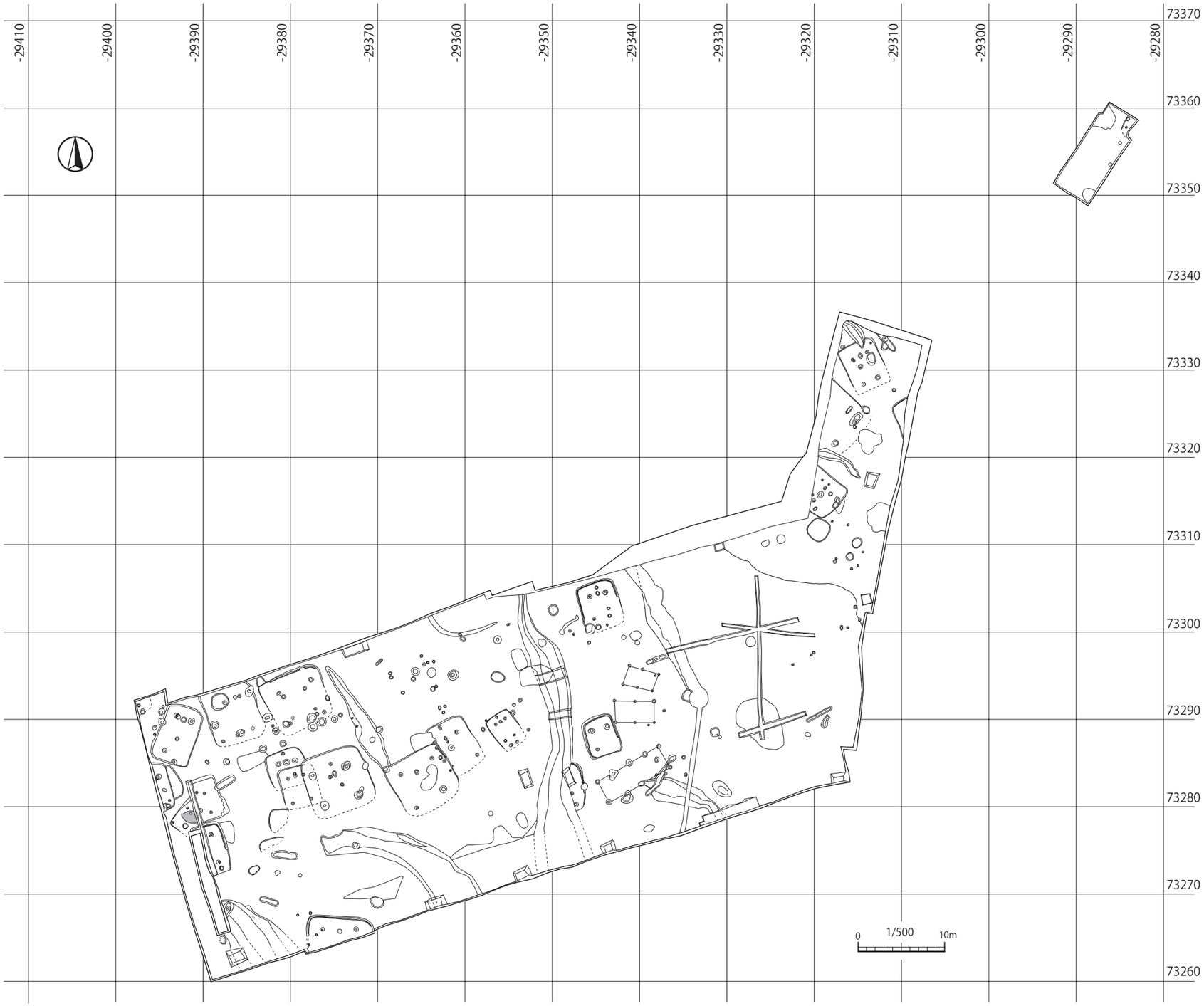


図10 調査区全体図(1/500)

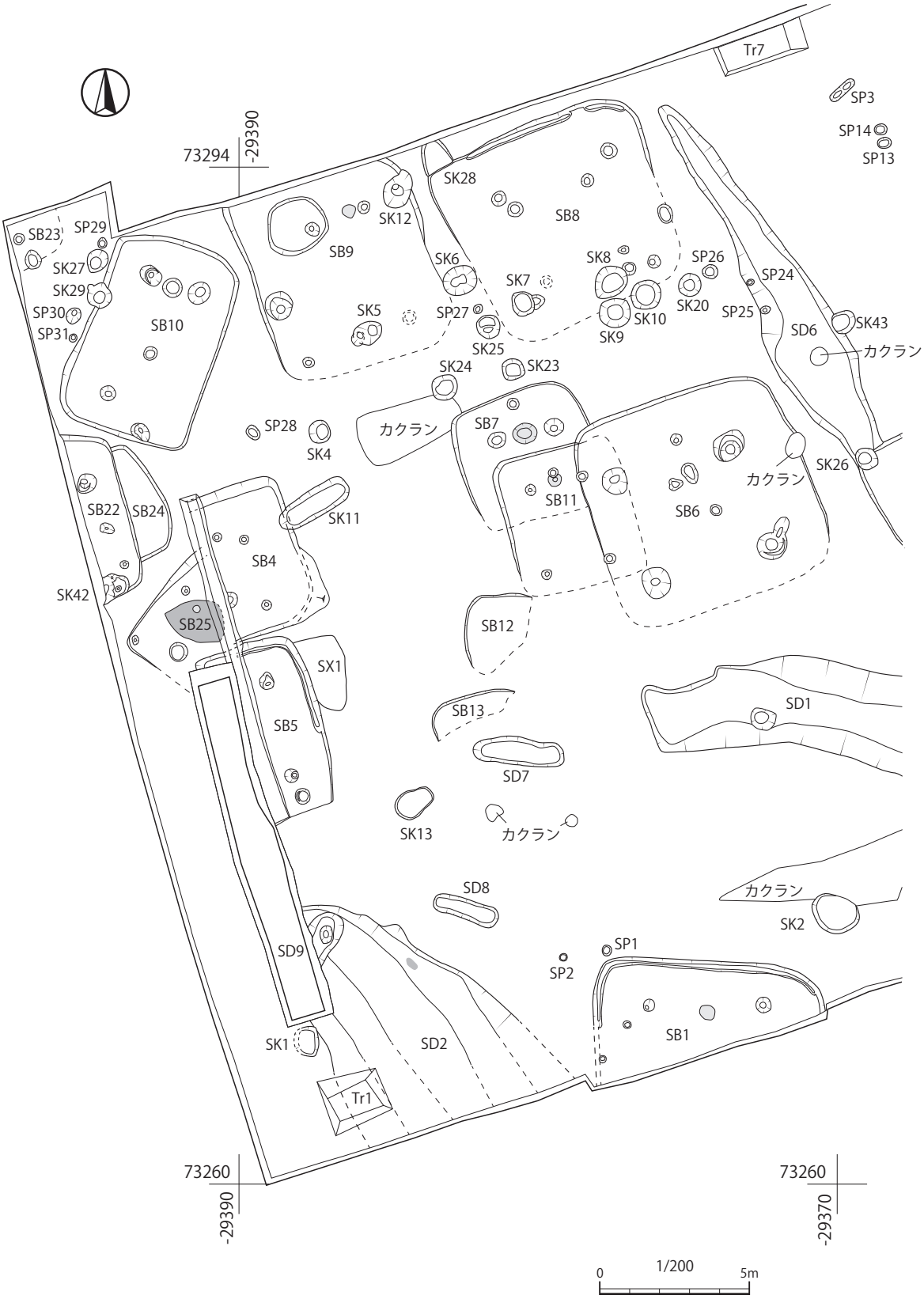


図11 遺構分布図１(1/200)

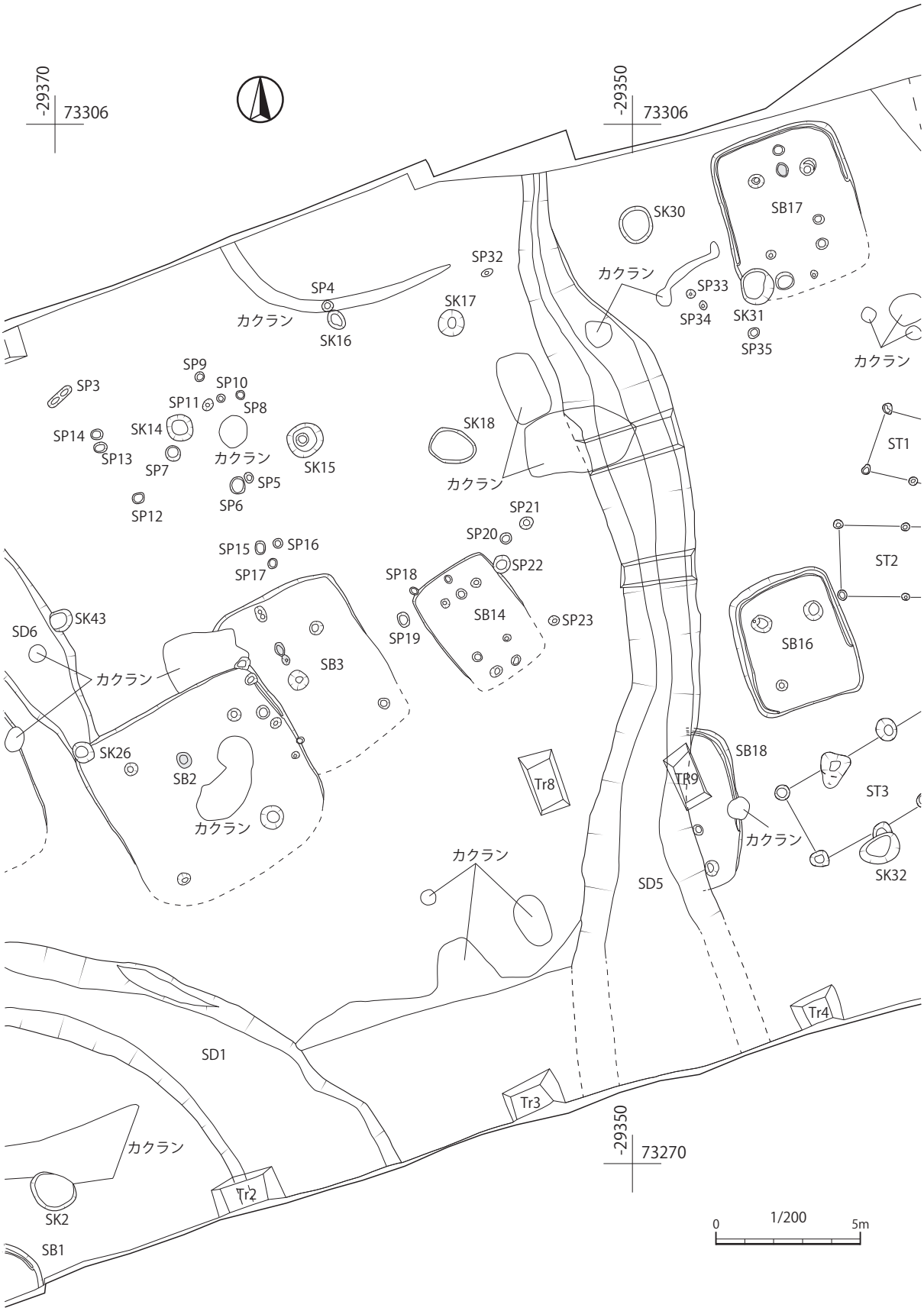


図12 遺構分布図２(1/200)

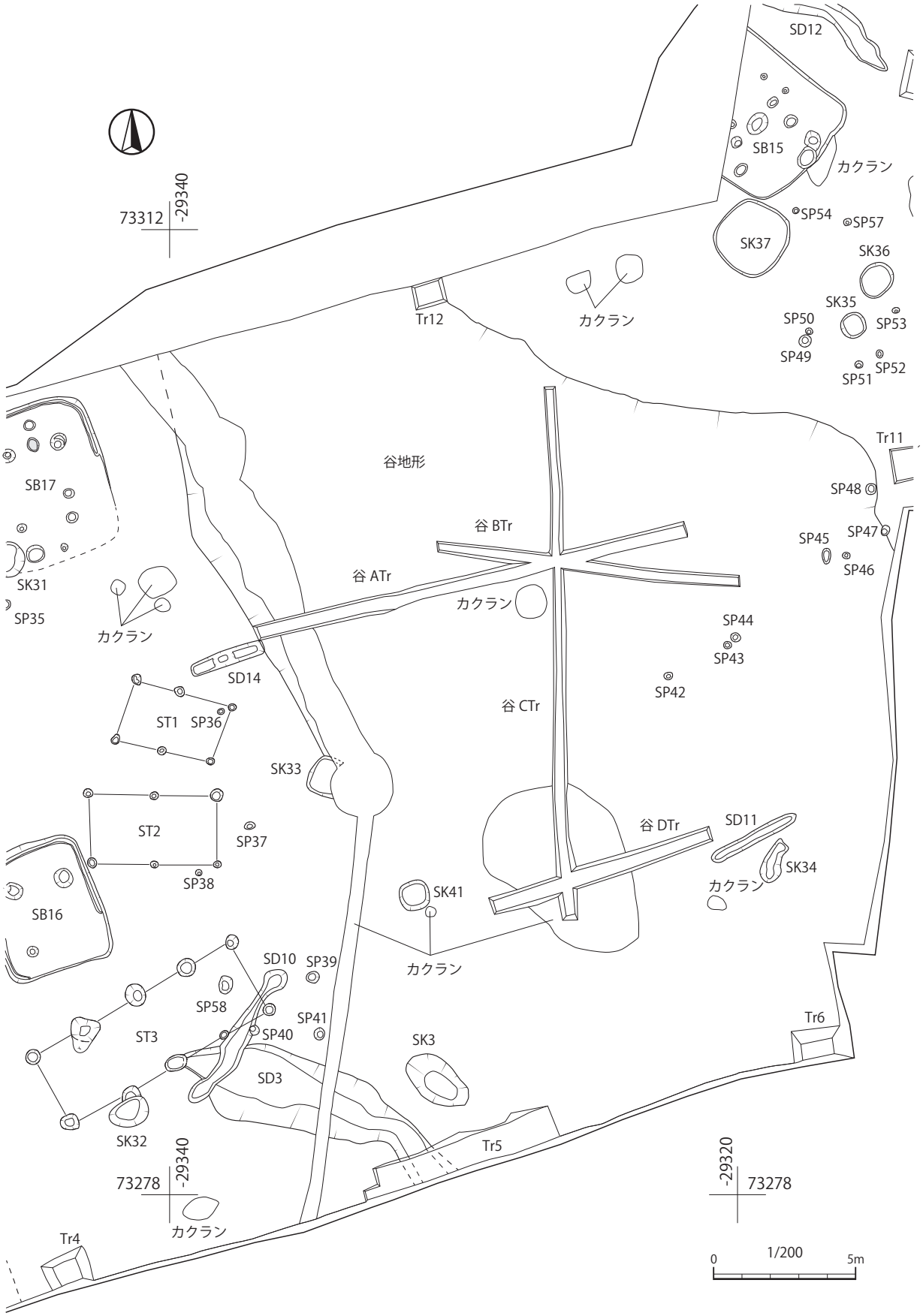


図13 遺構分布図３（1/200）

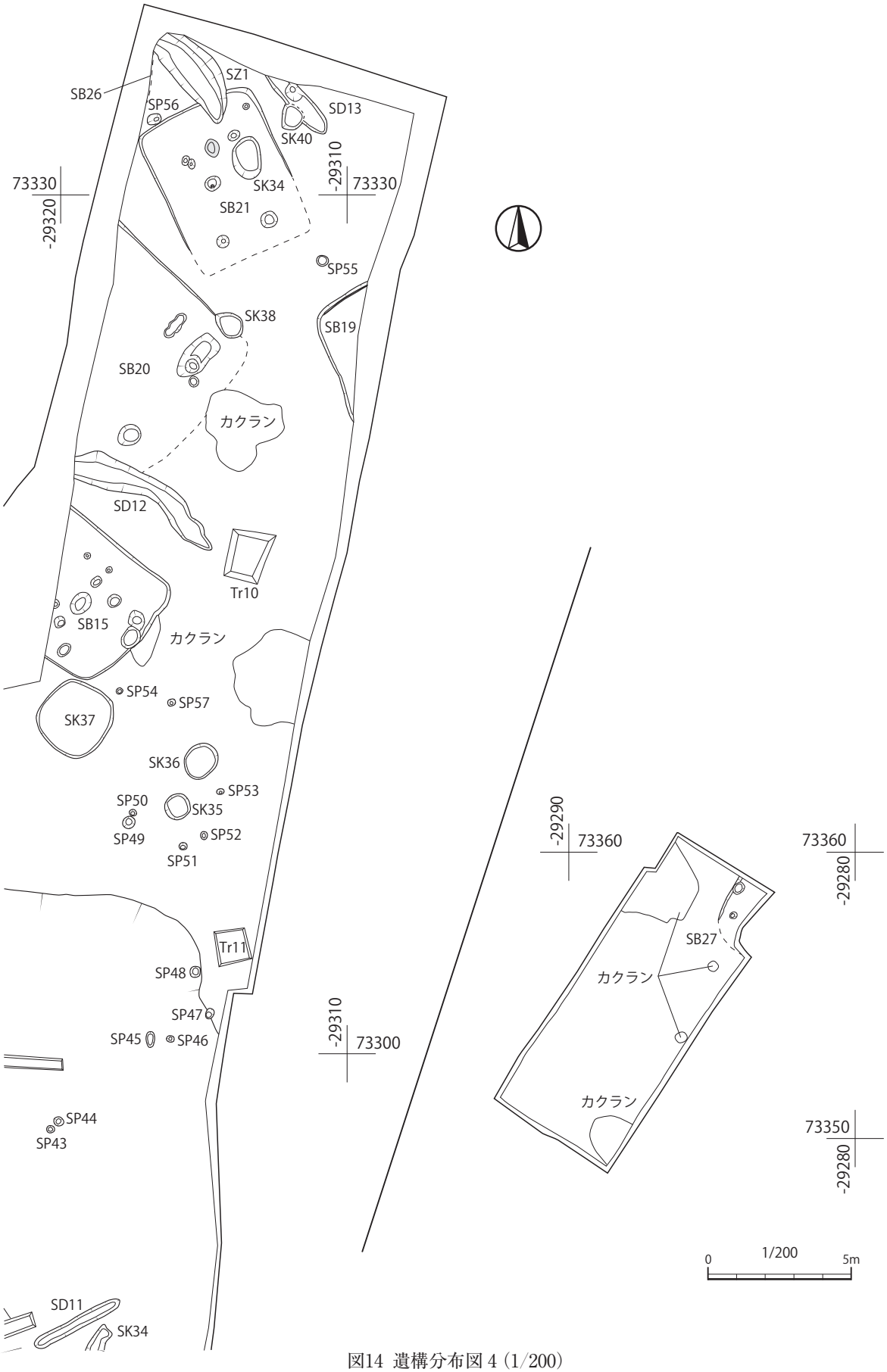


図14 遺構分布図４(1/200)

表２　遺構一覧表

・形態、規模欄の（　　）内数値は、確認できた範囲の規模を示す。
・平面形が不整形を呈する遺構に関しては、遺構の長軸値を記載した。

地区	遺構名	時期	遺構		出土土器		その他出土遺物 備考
			形態・規模（m）	重複関係・備考	総量（g）	報告数	
A	SB１	古墳時代前期	隅丸方形　(4.0)×7.7		5,446	4	
C	SB２	古墳時代初頭	隅丸方形　(6.9)×7.2	SB３・SD６に重複、SK26が重複	12,558.7	4	紡錘車・砥石・打製石鏃
C	SB３	弥生時代後期	隅丸長方形　(6.4)×(4.7)	SB２が重複	4,393	2	ガラス玉
C	SB４	古墳時代初頭	隅丸方形　5.1×(3.1)	SB25に重複、SK11が重複	6,414	1	ミニチュア・磨製石斧
C	SB５	古墳時代初頭	隅丸方形　5.9×(3.6)	SB25・SX１に重複	7,495	3	
C	SB６	古墳時代初頭	隅丸方形　(7.2)×7.4	SB７・11に重複	28,659	21	石包丁・打製石鏃
C	SB７	弥生時代後期	隅丸方形　(4.4)×4.6	SB６が重複、SB11に重複	1,455	0	管玉
C	SB８	古墳時代初頭	隅丸方形　6.7×6.7	SK７～10と重複、SK28が重複	32,405.2	28	曲刃鎌
C	SB９	弥生時代後期	隅丸長方形　6.4×5.9	SK６・12が重複	64,495	65	紡錘車・ミニチュア・管玉・敲石・銅鏃
C	SB10	弥生時代後期	隅丸長方形　6.9×4.5	SK29が重複	12,725	9	
C	SB11	弥生時代後期	隅丸長方形　(4.8)×(4.2)	SB６・７が重複	4,667	4	
C	SB12	不明	不明　(2.7)×(2.2)		186	0	磨製石斧
C	SB13	不明	不明　(3.0)×(1.1)		88	0	
C	SB14	弥生時代後期	隅丸長方形　(4.4)×3.2	SP18・22が重複	1,573	2	
B	SB15	弥生時代後期	隅丸長方形　(5.0)×4.7		3,102	3	
B	SB16	弥生時代後期	隅丸長方形　4.5×3.7		3,507	1	石匙
B	SB17	弥生時代後期	隅丸長方形　5.6×4.7	SK31が重複	4,297	3	
B	SB18	弥生時代後期	隅丸長方形　5.4×？	SD５が重複	1,766	0	石剣・石包丁・打製石鏃２点
B	SB19	弥生時代後期	隅丸長方形　(3.8)×(2.0)		720	1	
B	SB20	弥生時代後期	隅丸長方形　(7.0)×(7.0)	SD12・SK38が重複	4,435	2	
B	SB21	弥生時代後期	隅丸長方形　5.7×4.4	SZ１が重複、SK39に重複	4,744	1	
C	SB22	弥生時代後期	隅丸長方形　(5.9)×(1.6)	SB24と重複、SK42が重複	8,299.5	8	柱状片刃石斧・SB24の遺物を含む
C	SB23	不明	隅丸方形　(1.7)×(1.7)	一部床面のみ残存	339	0	
C	SB24	弥生時代後期	隅丸長方形　(3.8)×(1.5)	SB22と重複	0	0	SB22の遺物に含まれる
C	SB25	弥生時代後期	隅丸長方形　(2.0)×(4.0)	SB４・５が重複	8,061	15	
B	SB26	古墳時代初頭	不明	調査区壁のみで確認	1,413	3	
D	SB27	弥生時代後期	隅丸長方形　(2.3)×(1.6)		1,390	1	
B	ST１	古墳時代初頭	1×2間　2.2×3.5		21	0	
B	ST２	古墳時代初頭	1×2間　2.5×4.5		13	0	
B	ST３	古墳時代初頭	1×4間　2.8×8.0	SD３・10・SK32が重複	192	0	
A･C	SD１	古墳時代前期	長さ18.7、幅～5.3		18,266	4	打製石鏃・不明鉄製品
A･C	SD２	不明	長さ8.5、幅～5.4	SD９が重複、SK１と重複	2,681	1	
A･B	SD３	古墳時代中期	長さ9.8、幅～3.0	ST３（P８）に重複、SD10と重複	14,862	13	
A	SD４	欠番・谷地形の一部と判断					
B･C	SD５	不明	長さ34.0、幅～4.8	SB18に重複	4,686	1	凹石
C	SD６	古墳時代初頭以前	長さ13.6、幅～2.6	SB２・SK26・43が重複、SP24・25と重複	184	0	
C	SD７	不明	長さ3.0、幅～0.9		1,632	1	
C	SD８	不明	長さ2.2、幅～0.7		560	0	
C	SD９	不明	長さ1.6、幅～1.3	SD２に重複	814	1	
B	SD10	古墳時代前期	長さ5.6、幅～0.7	ST３（P７）に重複、SD３と重複、SP40が重複	3,256	1	SD３の遺物を含む可能性あり
B	SD11	不明	長さ3.3、幅～0.4		84	0	
B	SD12	弥生時代後期以降	長さ5.8、幅～1.2	SB20に重複	467	0	
B	SD13	弥生時代後期頃	長さ2.9、幅～0.8	SK40が重複	266	1	
B	SD14	不明	長さ2.7、幅～0.5		0	0	
B	SZ１	古墳中期	長さ3.6、幅～1.5	SB21に重複	5,232	3	埴輪、須恵器
A	SK１	不明	楕円形　1.0×(0.6)	SD２と重複	48	0	
A	SK２	不明	楕円形　1.6×1.2		121	0	
A	SK３	不明	楕円形　2.5×1.4		137	0	
C	SK４	不明	円形　径0.8		0	0	
C	SK５	弥生時代後期	楕円形　1.0×0.8	SB９内の施設	3,164	0	
C	SK６	不明	円形　径1.1	SB９に重複	85	0	
C	SK７	不明	円形　径0.9	SB８と重複	796	1	
C	SK８	不明	円形　径1.2	SB８に重複	276	0	

地区	遺構名	時期	遺構		出土土器		その他出土遺物 備考
			形態・規模（m）	重複関係・備考	総量（g）	報告数	
C	SK９	不明	円形　径1.0	SB８と重複	204	0	
C	SK10	不明	円形　径1.0	SB８と重複	151	0	
C	SK11	不明	楕円形　2.6×0.9	SB４に重複	741	0	
C	SK12	弥生時代後期	楕円形　1.3×0.9	SB９に重複	1,538	1	扁平片刃石斧・鉄鏃
C	SK13	不明	楕円形　1.3×0.9		8	0	
C	SK14	不明	円形　径1.0		432	0	
C	SK15	不明	円形　径1.2		19	0	
C	SK16	不明	楕円形　0.7×0.5		74	0	
C	SK17	不明	円形　径0.9		101	0	
C	SK18	不明	楕円形　1.6×1.2		423	1	
C	SK19	欠番					
C	SK20	不明	円形　径0.8		186	1	
C	SK21	欠番					
C	SK22	欠番					
C	SK23	不明	円形　径0.7		433	0	
C	SK24	弥生時代後期	円形　径0.8		2,538	3	土器棺？
C	SK25	不明	円形　径0.8		433	0	
C	SK26	古墳時代前期	円形　径0.7	SB２、SD６に重複	547	1	敲石
C	SK27	不明	円形　径0.8		17	0	
C	SK28	不明	楕円形　(1.0)×1.0	SB８に重複	282	0	
C	SK29	不明	不整形　0.9	SB10に重複	67	0	
B	SK30	不明	円形　径1.3		1,014	0	太型蛤刃石斧
B	SK31	不明	円形　径1.2	SB17に重複	529	0	
B	SK32	不明	楕円形　1.4×1.0	ST３（P９）に重複	0	0	
B	SK33	不明	隅丸方形　1.4		189	0	
B	SK34	不明	不整形　1.6×0.7		275	0	
B	SK35	不明	円形　径0.9		0	0	
B	SK36	不明	円形　径1.3		0	0	
B	SK37	不明	円形　径2.8		317	0	
B	SK38	不明	楕円形　1.1×0.8	SB20に重複	0	0	
B	SK39	弥生時代後期	楕円形　1.5×1.0	SB21が重複	81	0	
B	SK40	不明	円形　径0.9	SD13に重複	0	0	
B	SK41	不明	円形　径1.1		138	0	
C	SK42	不明	不整形　径1.0	SB22と重複	372	0	
C	SK43	不明	円形　径0.8	SD６に重複	0	0	
A	SP１	不明	円形　径0.4		3	0	
A	SP２	不明	円形　径0.3		0	0	
C	SP３	不明	楕円形　1.0×0.3		0	0	
C	SP４	不明	円形　径0.4		0	0	
C	SP５	不明	円形　径0.4		72	0	
C	SP６	不明	円形　径0.6		34	0	
C	SP７	古墳時代初頭	円形　径0.5		617	1	
C	SP８	不明	円形　径0.3		79	0	
C	SP９	不明	円形　径0.3		119	0	
C	SP10	不明	円形　径0.3		35	0	
C	SP11	不明	円形　径0.4		0	0	
C	SP12	不明	円形　径0.4		0	0	
C	SP13	不明	円形　径0.4		0	0	
C	SP14	不明	円形　径0.4		0	0	
C	SP15	不明	楕円形　0.5×0.3		0	0	
C	SP16	不明	円形　径0.3		0	0	
C	SP17	不明	円形　径0.4		0	0	
C	SP18	不明	円形　径0.3	SB14に重複	0	0	
C	SP19	不明	円形　径0.5		0	0	
C	SP20	不明	円形　径0.4		0	0	
C	SP21	不明	円形　径0.5		0	0	
C	SP22	不明	円形　径0.6	SB14に重複	0	0	
C	SP23	不明	円形　径0.4		0	0	
C	SP24	不明	楕円形　0.3×0.2	SD６と重複	0	0	
C	SP25	不明	楕円形　0.3×0.2	SD６と重複	0	0	
C	SP26	不明	円形　径0.5		0	0	
C	SP27	不明	円形　径0.3		0	0	

地区	遺構名	時期	遺構		出土土器		その他出土遺物 備考
			形態・規模（m）	重複関係・備考	総量（g）	報告数	
C	SP28	不明	円形　径0.5		0	0	
C	SP29	不明	円形　径0.4		0	0	
C	SP30	古墳時代初頭	円形　径0.6		424	2	
C	SP31	不明	円形　径0.3		0	0	
B	SP32	不明	楕円形　0.4×0.2		0	0	
B	SP33	不明	円形　径0.3		22	0	
B	SP34	不明	円形　径0.3		23	0	
B	SP35	不明	円形　径0.4		0	0	
B	SP36	不明	円形　径0.2		0	0	
B	SP37	不明	楕円形　0.4×0.2		4	0	
B	SP38	不明	円形　径0.2		0	0	
B	SP39	不明	円形　径0.5		89	0	
B	SP40	不明	円形　径0.4	SD10に重複	0	0	
B	SP41	不明	円形　径0.4		0	0	
B	SP42	不明	円形　径0.3		0	0	
B	SP43	不明	円形　径0.3		31	0	
B	SP44	不明	円形　径0.4		0	0	
B	SP45	不明	楕円形　0.6×0.3		0	0	
B	SP46	不明	円形　径0.3		0	0	
B	SP47	不明	円形　径0.4		0	0	
B	SP48	不明	円形　径0.4		0	0	
B	SP49	不明	円形　径0.4		109	0	
B	SP50	不明	円形　径0.2		0	0	
B	SP51	不明	円形　径0.3		0	0	
B	SP52	不明	円形　径0.3		0	0	
B	SP53	不明	円形　径0.3		0	0	
B	SP54	不明	円形　径0.2		0	0	
B	SP55	不明	円形　径0.4		0	0	
B	SP56	不明	円形　径0.5		0	0	
B	SP57	不明	円形　径0.3		61	0	
B	SP58	不明	円形　径0.6		0	0	
B	SX 1	弥生時代後期	不整形　2.6？×1.4？	SB 5 が重複、SB25の一部である可能性あり	355	2	
A·B	谷状地形	－			250,801	82	土偶・紡錘車・ミニチュア・円盤・凹石・打製石斧・管玉・石槌・石包丁・打製石鏃・刀子
				検出面及び包含層等出土土器	53,952	8	紡錘車・打製石斧・打製石鏃
				総合計	600,415.4	310	

第３節　遺構と遺物

調査で検出した遺構に関して、基礎情報を遺構一覧表（表２）にまとめ、竪穴住居跡と掘立柱建物跡を中心に、主要な遺構について個別遺構図を掲載した。

出土した遺物は、土器、土製品、石器、石製品、玉類、金属製品である。土器総量は600,415g を測る。土器は種類ごとに分類したのち、遺物の口縁、底部あるいは器種の特定が可能な部分が１／２以上残存する個体を抽出し、263点を図化した。なお、遺構の時期決定に関わるものや、外来系土器などは、残存率が１／２以下でも可能な限り抽出、図化を実施した。土製品、石器、石製品、金属製品については、図化し得るものを中心に抽出、図化している。実測図には通し番号を付し、観察所見を観察表（表３～５）にまとめた。以下、遺構ごとに詳細を記述する。

１　竪穴住居跡

【SB１】（図16）

調査区南西で検出した。遺構の南側約１／３が調査区外となる。検出範囲における遺構の規模は、4.0m×7.7m である。平面形は隅丸方形を呈すと推定される。遺構検出面から床面までの深さは、最大0.31m である。貼床はなく、炉の周辺を中心に硬化面が認められた。付属施設は、炉、小穴、壁溝である。炉は地床炉で、Ｐ１とＰ２のほぼ中間に設けられる。炉床は全体的に被熱の程度は弱く、被熱による硬化は部分的である。炉の周辺からは少量の炭化物を検出した。また、炉の南縁で長さ30cm ほどの礫を１点検出した。床面に設置した状態で検出され、炉の縁石と考えられる。小穴は４基検出した。Ｐ１、Ｐ２が柱穴と考えられる。壁溝は幅約0.3m で、検出範囲内では壁際を全周している。出土遺物の様相から、遺構の時期は古墳時代前期と考えられる。本調査で検出された竪穴住居跡の中では最も新しい。

出土遺物（図39）

出土土器の総量は5,446g である。このうち、小型丸底土器（１～３）を図化した。３点とも、床面からほぼ完形の状態で出土した。１、２は内外面に丁寧なミガキ調整が施される。２は胴部の屈曲部が不明瞭である。また、１、２ともに底部は平底である。３は外面にハケおよびケズリの調整痕を残す。底部は、他の２点に比べて丸みを帯びているが、整形は平底を意識したものと考えられる。このほか、床面から外面赤彩の壺の破片が複数点出土した。接合するものが少なく全形を復元できなかったが、遺存部位から球胴形を呈すと推定される。

【SB２】（図16）

調査区中央で検出した。SB３、SD６、SK26と重複し、中央部分は攪乱によって掘り込まれている。SB３、SD６より新しく、SK26よりも古い。遺構南側は床面直上が遺構検出面となったため、住居の南壁と床面の一部を重機で削平している。遺構の規模は6.9m×7.2m で、平面形は隅丸方形である。遺構検出面から床面までの深さは最大0.29m である。貼床はなく、住居中央部に硬化範囲が認められた。付属施設は、炉および小穴である。炉は地床炉で、Ｐ１とＰ２の間のややＰ１寄りに設けられている。炉の南縁には礫が１点配されており、縁石と考えられる。小穴は４基検出し、４基とも柱穴と判断した。Ｐ３のみ他の３基に比べて規模が大きい。出土遺物の様相から、遺構の時期は古墳時代初頭と考えられる。

出土遺物（図39、58、59、60）

出土土器の総量は12,558.7g である。このうち、高杯（４、６）、器台（５）、鉢（７）を図化した。このほか

に紡錘車（図58－324)、打製石鏃（図59－332)、砥石（図60－360）が出土した。４、６は精製の高杯で、床直上～床面で出土した。６は外面全体と杯部内面を箱清水式高杯と同様なヘラミガキ赤彩手法を施す。脚部にはそれぞれ透かし穴が開けられる。４は三角形、６は円形である。５は小破片の資料だが、遺存部位から装飾器台の受け部分と考えられる。同一個体と考えられる小破片が複数点出土しているが、接合したものは一部のみであった。このため、全形を特定することは困難であるが、受け部が突出して鍔状に広がる形態となることが予想される。北陸地方系の土器にみられる形態だが、胎土の様相から在地で製作されたものと考えられる。７は鉢で、内外面にミガキ調整が行われる。外面には一次調整のハケ痕が認められた。

【SB３】（図17）

調査区中央で検出した。SB２と重複し、SB２よりも古い。遺構の西壁をカクランによって掘りこまれている。また、遺構南側は床面直上が遺構検出面となったため、住居の南壁と床面の一部を重機で削平している。遺構の規模は6.4m×4.7m で、平面形は隅丸長方形を呈する。遺構検出面から床面までの深さは最大0.09m と浅い。貼床や硬化範囲は認められなかった。付属施設は、炉および小穴である。炉は土器埋設炉である（炉詳細図)。Ｐ１とＰ２のほぼ中間に設けられ、壺（図39－９）が逆位の状態で埋設されていた。小穴は10基検出した。Ｐ１からＰ４が柱穴と考えられる。また、Ｐ９は支柱穴の可能性がある。遺構の重複状況および出土遺物の様相から、遺構の時期は弥生時代後期と考えられる。

出土遺物（図39、図61）

出土土器の総量は4,393g である。このうち、壺（８、９）を図化した。このほかにガラス小玉（図61－368）が出土した。８、９は弥生土器の壺である。８は口縁部のみの遺存である。内外面ともミガキ調整で外面には淡い赤彩が認められる。９は炉に埋設されていたもので、頸部から胴部の遺存である。外面をミガキ調整するが、遺存部位には赤彩はみられない。

【SB４】（図18）

調査区西側中央で検出した。SB25、SK11と重複する。SB25より新しく、SK11よりも古い。既存道路拡幅工事の際に、遺構西側の検出を試みたが、平面プランを確認することができなかった。このため、検出できたのは遺構全体の約１／２である。検出範囲における遺構の規模は5.1m×3.1m である。平面形は隅丸方形を呈すと推定される。遺構検出面からの深さは最大0.36m である。貼床や硬化範囲は認められなかった。床面は全体的に締まりが弱い印象である。付属施設は小穴４基である。位置関係から、Ｐ２とＰ３が柱穴と考えられる。炉は検出されなかった。遺構の重複関係と出土遺物の様相から、遺構の時期は古墳時代初頭頃と考えられる。

出土遺物（図39、図58、図59）

出土土器の総量は6,416g である。このうち、高杯（10）を図化した。このほかにミニチュア土器（図58－328、329)、扁平片刃石斧（図59－346）が出土した。10は高杯の脚部である。外面を赤彩し、円形の透かし孔が４か所認められる。328、329はいずれも底部のみの遺存で、全形は不明である。手づくねによる成形とみられ、328の底部内面には指圧痕が認められた。

【SB５】（図18）

調査区西側中央で検出した。SB25、SX１と重複する。重複する遺構の中で最も新しい。遺構南側は床面直上が遺構検出面となったため、遺構南壁の一部を重機で削平している。また、遺構の西側約２／３が調査区外とな

る。検出範囲における遺構の規模は、5.9m×3.6mである。平面形は隅丸方形を呈すとみられる。遺構検出面から床面までの深さは最大0.39mである。貼床はなく、部分的に硬化範囲が認められる。付属施設は小穴および壁溝である。小穴は3基検出した。P1とP2が柱穴と考えられる。また、P3の底部からは河原石が4点検出された。全て安山岩で、長さ約17cm、重量1～1.5kgを測る。敲打等の使用痕や加工痕は認められない。サイズが揃っており、ピット底部に敷き詰められた状態で検出されたことから人為的なものと考えられる。用途は不明だが、ピットの位置から出入口施設または支柱穴の可能性がある。壁溝は住居北壁から東壁にかけて掘削される。炉は検出されなかった。遺構の重複関係と出土遺物の様相から、遺構の時期は古墳時代初頭と考えられる。

出土遺物（図39）

出土土器の総量は7,495gである。このうち、甕（11）、鉢（12）、高杯（13）を図化した。11はハケ調整くの字甕で外面のほか、口縁部内面にもハケによる調整痕が認められる。13は高杯の脚部である。円形の透かし孔を4か所にあけ、外面は赤彩する。12は鉢で、内外面ともミガキ調整が行われる。底部のみ、ケズリのちナデ調整によって仕上げられる。

【SB6】（図19）

調査区西側中央で検出した。SB7、SB11に重複する。重複する遺構の中では最も新しい。遺構南側は床面直上が遺構検出面となったため、遺構南壁と床面の一部を重機で削平している。遺構の規模は7.2m×7.4mで、平面形は隅丸方形を呈する。遺構検出面から床面までの深さは最大0.2mである。貼床はないが、遺構の中央部分に硬化範囲が認められた。付属施設は小穴8基である。柱穴はP1からP4である。炉、壁溝等は検出されなかった。SB6の遺構覆土は、黒色粘質土層（上層）と暗褐色粘質土層（下層）の2層を確認した。黒色粘質土層内からは残存状態が良好な遺物が複数出土した。また、遺物とともに径30cm前後の礫が多く出土しており、遺物とともに投棄されたと考えられる。出土遺物の様相から、遺構の時期は古墳時代初頭と考えられる。

出土遺物（図40・59）

出土土器の総量は28,659gである。このうち、壺（14・18・20・21・28）、甕（15～17・19・22・23）、台付甕（24・25）、底部穿孔土器（26・27）、高杯（29～31）、器台（32～34）を図化した。このほかに、打製石鏃（図59－333）と石包丁（349）が出土した。14は箱清水式系の壺である。胴中部が最大径となる球胴形を呈する。外面は全体をミガキ調整し、赤彩を行う。胴下部にケズリ調整痕が認められる。20は器高が概ね10cm前後となる小型の壺である。20はP3の覆土内から出土した。口縁部から胴部の遺存で、内外面を赤彩している。15～17、19はハケ調整くの字甕である。このうち、17は口縁端部をつまみあげ状に面取りをし、受口状をなすもので、面とり下端外面に刺突列点文を施す。口縁部内外面を赤彩する。19は箱清水式の系譜をひく。24～25は台付甕の台部と考えられる。26～27は底部穿孔土器で、いずれも焼成前穿孔が施されている。28は有段口縁壺の破片と推定される。なだらかな段をなし、段上と裾端部に円形文を連続して施文する。外面は赤彩を行う。29、30は外来系の有稜高杯で、ていねいなヘラミガキを施す精製土器である。32はほぼ完形の状態で出土した。口縁端部を摘み上げるような形状となり、脚部には円形孔が3か所認められる。赤彩は行わない。

【SB7】（図20）

調査区西側中央で検出した。SB6、SB11と重複する。SB6よりも古く、SB11よりも新しい。遺構の東側を一部SB6によって掘り込まれている。また、遺構の南側は床面直上が遺構検出面となったため、遺構南壁と床面の一部を重機で削平している。遺構の規模は4.4m×4.6mで、平面形は隅丸方形を呈す。遺構検出面から床面ま

での深さは最大0.06mである。床面は全面に渡って締まりが弱く、貼床や硬化範囲は認められなかった。付属施設は炉および小穴である。炉は地床炉で、P1とP2の中間に設けられる。小穴は4基検出した。位置関係から、P1、P2、P4が主柱穴、P3が支柱穴と考えられる。重複関係と出土遺物から、遺構の時期は弥生時代後期と考えられる。

出土遺物（図61）

出土土器の総量は1,455gである。全て小破片で、赤彩や櫛描文による施文が認められるものが大半を占めるが、実測が可能な個体がない。このほかに、管玉（図61－362、364）が出土した。

【SB8】（図20・21）

調査区西側北で検出した。SK7～10、SK28と重複し、SK28よりも古い。SK7～10との新旧関係は明らかにできなかった。遺構南側は床面直上が遺構検出面となったため、遺構の南壁と床面の約1/2を重機により削平している。遺構の規模および平面形は、検出範囲から一辺6.7mの隅丸方形を呈すと考えられる。なお、遺構実測図では床面の推定範囲を破線で図示した。遺構検出面から床面までの深さは、最大0.32mである。貼床はなく、遺構の中央部分にわずかに硬化した範囲が認められた。付属施設は小穴と壁溝である。小穴は10基検出した。P1からP4とP5からP8が主柱穴と考えられる。P5からP8のやや外側にP1からP4が配置されており、住居の建て替えが行われた可能性がある。壁溝は遺構北壁に掘削される。床面精査の際に、P5とP6の中間付近で少量の炭化物を検出したが、被熱痕や焼土など炉跡と推定できる痕跡は確認できなかった。遺物の出土量はSB9に次いで多く、特に覆土下層から床面にかけて遺存状態の良好な遺物が出土した。出土遺物の様相から、遺構の時期は古墳時代初頭と考えられる。

出土遺物（図41～43）

出土した土器の総量は32,405.2gである。このうち、壺（35・36・38～41・52）、甕（37・42～51）、鉢（53～55）、高杯（56～59）、小型高杯（60）、小型器台（61・62）を図化した。このほかに、鉄製鎌（図61－373）が出土した。壺類は全体が遺存する個体がないが、胴下部の屈曲部や頸部の櫛描T字文から弥生時代後期の箱清水式土器の伝統を残していると考えられる。しかし、壺類にみられる赤彩が無く、頸部の屈折化傾向および胴部の球胴化傾向が認められるなど、弥生時代の末期的な様相が強く窺われる。35～36・38～41の壺は、外面はハケ調整のちミガキ調整によって仕上げる。内面はハケまたは板状工具によるナデ調整が行われる。赤彩は見られなかった。全体が遺存する個体はないが、遺存部位から胴下部に屈曲部を持つものが散見された。また、41は接合しないが胎土や調整の様相から同一個体と判断した。頸部や口縁部の状況から二重口縁壺と思われる。甕類は、口縁部がくの字状成形の「ハケ調整くの字甕」が主体となる。ハケ調整を施し、古墳時代的な様相と捉えられる。最大径を胴中位に持ち底部に向かって小さく窄まる球胴形を呈すもの（46）と最大径を胴上位にもつもの（44・45）とがある。後者のプロポーションは箱清水式甕の系譜上にあるものと考えられる。胴外面下半や口縁部～胴部内面にミガキを施す点も箱清水式甕の系譜を窺うことができる。この中で、50は外面に波状文が施文され、箱清水式土器の様相が認められる個体である。頸部内外面に明瞭な稜をもち、胴部と口縁部が区分できる。頸部の簾状文はみられない。53は口径52.6cmを測る大型の鉢で、内外面ともにミガキ調整する。56～59は高杯、60は小型高杯である。56は脚部の4か所に三角形の透かし孔をあけ、外面と杯部の内面を赤彩する。58、60は床面に接地した状態で出土した。58は有稜高杯で、脚部端部は内湾傾向を示す。箱清水型のていねいなヘラミガキ赤彩手法を施す。60は杯部が有稜の小型高杯で精製土器である。脚部3か所、60は同4か所に円形の透かし孔が認められる。また、2点とも正位置で出土しており、埋没時の原位置を留めている可能性がある。61～62は、2点と

も脚部４か所に円形の透かし孔が認められ、外面はミガキ調整によって仕上げられている。61に関しては、杯部の内面もミガキ調整である。

【SB９】（図22・23）

調査区西側北で検出した。SK６、12と重複し、重複する遺構の中では最も古い。なお、SK５は当初SB９に重複する単独遺構として調査を行ったが、遺物の接合状況等からSB９の付随遺構と判断した。遺構の北側が調査区外となるほか、遺構東壁の一部をSK12によって掘り込まれている。また、遺構南側は床面直上が遺構検出面となったため、遺構南壁を重機によって削平している。検出範囲における遺構の規模は6.4m×5.9mで、平面形は隅丸長方形を呈すると考えられる。遺構検出面から床面までの深さは、最大0.4mである。貼床はないが、壁際や削平部分を除く床面全体が硬化していた。付属施設は炉、土坑および小穴である。炉は地床炉で、Ｐ１とＰ２間のＰ１寄りに設けられる。直径約50cmの範囲に焼土が堆積しており、周辺からは少量の炭化物が検出された。小穴は６基検出した。Ｐ１からＰ４が柱穴と考えられる。SB９の覆土は６層に分層される。遺物は黒褐色粘性土層から床面で多く出土した。出土遺物量は検出遺構の中で最も多い。また、同層からは径30cm前後の礫が多量に検出された。SB６に類似した様相であり、遺物とともに埋没したと考えられる。出土遺物の様相から、遺構の時期は弥生時代後期と考えられる。

出土遺物（図44～47・58・60・61）

出土土器の総量は64,495gである。このうち、壺（63～76）、甕（77～107）、蓋（108）、台付甕（109～111）、鉢（112～115）、高杯（116～127）を図化した。このほかに、紡錘車（図58－322）、ミニチュア土器（331）、敲石（図60－354）、管玉（図61－363）、銅鏃（369）が出土した。土器には、在地の箱清水式土器と外来の北陸系土器の二種が認められる。箱清水式土器は壺、甕、鉢、高杯が認められる。壺は、胴下部に屈曲部を持つ無花果形を呈し、頸部は屈曲面をもたずに弓状に立ち上がり、口縁部が大きく外反する。器面は赤彩される。在来の箱清水式甕は頸部が屈曲面をもたずに弓状に立ち上がり、口縁部が大きく外反する。一部に頸部の簾状文が施されない個体もみられるが、外面に波状文および簾状文が施文されるものが主体となる。

北陸系土器は壺、甕、高杯、蓋が認められる。壺のうち、68～73は、箱清水式土器に系譜が求められない外来系譜の壺である。68は細頸壺の頸部から肩部にかけての破片と考えられる。遺存部の大きさから小型の細頸壺と推察され、器台上に置いて使用する壺の可能性がある。内外面ともにヘラ状工具によるミガキ調整を行い、外面を赤彩する。胎土には長石が多く含まれるほか、黒色粒と赤鉄鉱粒もみられた。また、外面には幅１cm程度の突帯が貼り付けられている。突帯内には内部を凸線で充填した三角形のスタンプ文が施文される。管見では県内で同様の資料は確認できていない。このほか、装飾壺（69）が１点出土した。破片資料だが遺存部位から扁平な球形を呈すと考えられる。胴中部に幅1.9cmの帯状突帯を付け、外面全体を赤彩する。72、73は胴下半部の２段階成形を行わず、口縁端部に面取りを施す。甕は頸部がくの字状に強く屈折し、口縁部が短く外反するもの（87・88・90～104）が主体となり、箱清水式甕と明瞭に区別できる。内外面をハケ調整し、ミガキ手法を施さない。口縁部の形状は、a受口状の有段口縁をなすもの（87）、b有段口縁のつまみあげが短いもの（103）、c口唇端部を面取りするもの（95）がある。受口状を呈するものが主体である。口縁端部に強いナデ調整を行ない受口状の有段部を形成し、外面に擬凹線文を施文する（96）。100、101および105は口縁部または肩部に板状工具による刺突文が認められる。器形、施文の様相と胎土に少量だが雲母が含まれる点から、搬入品の可能性がある。高杯は遺存状態が比較的良好である。127は有段の裾を持つ。脚部裾のみの遺存だが、円柱状の脚部となると推察される。北陸系の高杯が主体となる。116～118は鉢形高杯である。ほかに、杯部が鉢形をなさない有稜高杯

（120）とがある。脚部は、稜がなくスカート状に広がるもの（116・124）と、脚部裾に有段部があり筒状にたちあがるもの（122・126）がある。

【SB10】（図24）

調査区北西で検出した。SK29と重複し、SK29よりも古い。遺構の西壁を一部SK29によって掘り込まれる。C区調査時に遺構の東側１／２を、既存道路の拡幅工事に伴い遺構の西側１／２をそれぞれ確認した。遺構の規模は6.9m×4.5mで、平面形は隅丸長方形を呈す。遺構検出面から床面までの深さは、最大0.47mである。貼床はないが、壁際を除き床面全体が硬く締まる。付属施設は小穴６基である。Ｐ１からＰ３が柱穴と考えられる。また、Ｐ４はＰ１とＰ２の中間にあり、位置関係から炉の可能性があったが、炭化物や焼土等は検出されなかった。出土遺物の様相から、遺構の時期は弥生時代後期と考えられる。

出土遺物（図47）

出土土器の総量は12,725gである。このうち、壺（128）、甕（129・131）、鉢（130・132～134）、高杯（135）、台付甕（136）を図化した。129は箱清水式の甕で、頸部に屈曲面をもたずに口縁部が弓状に大きく外反する。正位置で床面上から出土した。口縁端部と胴下半を欠損する。130は完形で出土した。底部を除き、外面全体を赤彩する。また、口縁端部には一対となる２孔が認められる。133、134は口縁部が受口状を呈し、形態から北陸系の有段鉢と考えられる。

【SB11】（図25）

調査区西側中央で検出した。SB６、SB７と重複し、この中では最も古い。遺構の南側は床面直上が遺構検出面となったため、遺構南壁と床面の一部を重機で削平している。遺構の規模は4.8m×4.2mで、平面形は隅丸長方形を呈す。遺構検出面から床面までの深さは、最大0.17mである。貼床や床面の硬化範囲は認められなかった。付属施設は炉および小穴である。炉は土器埋設炉で、Ｐ１とＰ２の中間に位置する。重複するSB７のＰ４によって、炉の東側が一部掘り込まれている。炉の内部には壺の胴下半が正位置で埋設されていた（SB11炉詳細図）。壺（138）の底部は抜かれており、これを塞ぐような状態で別個体の壺（137）破片が重なっていた。小穴は４基検出し、いずれも柱穴と考えられる。遺構の重複関係と出土遺物の様相から、遺構の時期は弥生時代後期と考えられる。

出土遺物（図48）

出土土器の総量は4,667gである。このうち、壺（137・138）、甕（139）、蓋（140）を図化した。137および138は炉に埋設されていた壺で、いずれも二段階成形のくびれをもつ無花果形の箱清水式の壺である。139は底部外面にアジロ痕が認められる。底部のみの遺存で、甕の底部と推察され、弥生時代中期前半と考えられる。

【SB12】（図25・59）

調査区西側中央で検出した。検出部分の形状と、床面に類似した平坦な硬化面が認められたことから、竪穴住居の一部として調査を行った。遺構検出面から床面までの深さは最大５cmである。ピットや炉、壁溝等の内部施設は確認できなかった。遺構の時期は不明である。

出土遺物

出土土器の総量は186gである。赤彩をするものや波状文を施文するものが認められるが、いずれも小破片で図化し得るものはない。このほかに、磨製石斧（図59－348）が出土した。

【SB13】（図25）

調査区西側中央で検出した。検出し得たのは遺構の一部のみと見られるが、SB12と同じく、竪穴住居跡として調査を行った。遺構検出面から床面までの深さは最大４cm である。ピットや炉、壁溝等の内部施設は確認できなかった。遺構の時期は不明である。

出土遺物

出土土器の総量は88g と少なく、いずれも小破片で図示し得るものはない。

【SB14】（図26）

調査区中央で検出した。SP18、SP22が重複する。遺構の南側は床面直上が遺構検出面となったため、遺構南壁の一部を重機で削平している。遺構の規模は4.4m×3.2m で、平面形は隅丸長方形を呈す。遺構検出面から床面までの深さは、最大0.11m である。貼床や床面の硬化範囲は認められなかった。付属施設は小穴９基である。Ｐ１からＰ４が主柱穴、Ｐ９が支柱穴と考えられる。また、Ｐ５およびＰ６は位置関係から出入口施設と推定される。炉は明確でないが、Ｐ８から少量の炭化物と焼土が検出されており、炉の可能性がある。出土遺物の様相から、遺構の時期は弥生時代後期と考えられる。

出土遺物（図48）

出土土器の総量は1,573g である。このうち、壺（141）、鉢（142）を図化した。141は口縁部から頸部の遺存で、内外面を赤彩する。142は底部のみの遺存だが、内外面に赤彩がみられることから、鉢と推定される。

【SB15】（図26）

調査区北東で検出した。遺構の北西側約１／２が調査区外となる。検出範囲における遺構の規模は5.0m×4.7m である。平面形は隅丸長方形を呈すと考えられる。遺構検出面から床面までの深さは、最大0.12cm である。貼床や床面の硬化範囲は認められなかった。付属施設は小穴10基である。いずれも浅く、柱痕もみられないが、位置関係からＰ１、Ｐ２またはＰ６、Ｐ８が柱穴となる可能性がある。出土遺物の様相から、遺構の時期は弥生時代後期と考えられる。

出土遺物（図48）

出土土器の総量は3,102g である。このうち、甕（143）、高杯（144）、台付甕（145）を図化した。143はＰ３の覆土内から出土した。甕口縁部から頸部にかけての遺存で、口径44.5cm を測る。144および145はいずれも脚部のみの遺存である。144は外面に赤彩が認められることから高杯と判断した。145は台付甕の台部分の可能性がある。

【SB16】（図27）

調査区中央で検出した。遺構の規模は4.5m×3.7m で、平面形は隅丸長方形を呈する。遺構検出面から床面までの深さは、最大0.24m である。貼床はなく、遺構の中央から北側にかけて硬化範囲が認められた。付属施設は小穴と壁溝である。小穴は３基検出し、いずれも柱穴と考えられる。壁溝は幅約0.3m で遺構の南東側を除いて掘削されている。出土遺物の様相から、遺構の時期は弥生時代後期と考えられる。

出土遺物（図48・59）

出土土器の総量は3,507g である。大半は破片資料で、接合した個体は少ない。このうち、甕（146）を図化した。このほかに石匙（図59－341）が出土した。146は波状文および簾状文を施文する甕である。外面は摩耗が著

しい。胴中部が最大径となる形状を呈する。底部が遺存していないが、形状から台付甕となる可能性もある。

【SB17】（図27）

調査区中央北側で検出した。SK31が重複し、SK31よりも古い。遺構の南側は床面直上が遺構検出面となったため、遺構南壁と床面の一部を重機で削平している。このため、床面の推定範囲を破線で図示した。遺構の規模は5.6m×4.7m で、平面形は隅丸長方形を呈する。遺構検出面から床面までの深さは、最大0.25m である。貼床はないが、壁際を除く床面全体に硬化が認められた。付属施設は炉、小穴および壁溝である。炉は地床炉で、Ｐ１とＰ２の中間に設けられる。浅く掘り窪められており、内部は被熱によって変色していた。小穴は８基検出した。Ｐ１からＰ４が主柱穴、Ｐ７が支柱穴と考えられる。また、位置関係からＰ５およびＰ６は出入口施設とみられる。壁溝は遺構の北東から北西の壁際に掘削される。出土遺物の様相から、遺構の時期は弥生時代後期と考えられる。

出土遺物（図48）

出土土器の総量は4,297g である。このうち、壺（147）、甕（148）、鉢（149）を図化した。壺147、甕148は、頸部に屈曲面を持たずに口縁部から弓状に大きく外反する。149は床面から出土した。148は外面の摩耗が著しい。わずかに簾状文および波状文が遺存する。このほか、床面から人頭大の扁平な礫が２点出土した。平な面を上にして床面に接地する状態で検出された。このため、石器加工等の工作台の可能性が考えられたが、礫周辺や遺構覆土中からは工具や剥片、石材等の工作を裏付ける遺物は出土しなかった。

【SB18】（図28）

調査区中央南側で検出した。SD５と重複し、SD５よりも古い。遺構の大部分をSD５によって掘り込まれており、検出したのは全体の約１／３である。検出範囲における遺構の規模は一辺5.4m で、平面形は隅丸長方形を呈すると予想される。遺構検出面から床面までの深さは、最大0.24m である。貼床や床面の硬化範囲は認められなかった。付属施設は小穴と壁溝である。小穴は２基検出し、Ｐ１は柱穴の可能性がある。壁溝は遺構の北東壁際に掘削される。出土遺物の様相から、遺構の時期は弥生時代後期と考えられる。

出土遺物（図59・61）

出土土器の総量は1,766g である。いずれも小破片で接合するものは少なく、図化できるものはない。このほかに打製石鏃（図59－337、338）、石包丁（350）、石剣（図61－361）が出土した。

【SB19】（図28）

調査区北東で検出した。大部分が調査区外となり、検出できた範囲は3.8m×2.0m に留まる。平面形は隅丸長方形または方形を呈すると推定される。遺構検出面から床面までの深さは、最大0.14cm である。貼床や床面の硬化範囲は認められなかった。付属施設は壁溝である。遺構北壁際に掘削される。炉や小穴は検出されなかった。遺構の時期決定はし難いが、出土遺物の様相から弥生時代後期と考えられる。

出土遺物（図49）

出土土器の総量は720g である。このうち、壺（150）を図化した。口縁から頸部にかけての遺存する。内外面をハケ調整後、ミガキ調整を施す。精製壺であり器壁が薄い。赤彩はない。

【SB20】（図28）

調査区北東で検出した。SD12、SK38が重複し、重複する遺構の中では最も古い。遺構の北西側約１／２が調査区外となる。検出範囲における遺構の規模は１辺7.0m×7.0m で、平面形は隅丸長方形を呈すと推定される。遺構検出面から床面までの深さは、最大0.4m である。貼床はなく、床面は一部に硬化が認められた。付属施設は小穴４基である。Ｐ１、Ｐ２が柱穴と考えられる。出土遺物の様相から、遺構の時期は弥生時代後期と考えられる。

出土遺物（図49）

出土土器の総量は4,435g である。このうち、高杯（151、152）を図化した。151は杯部の下半、152は杯部から脚部の遺存である。

【SB21】（図29）

調査区北東端で検出した。SK39およびSZ１と重複する。SZ１よりも古く、SK39よりも新しい。遺構の南側は床面直上が遺構検出面となったため、遺構南壁と床面の一部を重機で削平している。遺構の規模は5.7m×4.4m で、平面形は隅丸長方形を呈する。遺構検出面から床面までの深さは、最大0.16m である。貼床や床面の硬化範囲は認められなかった。付属施設は炉と小穴である。炉は地床炉で、Ｐ１とＰ２の中間に設けられる。浅く掘り窪められており、内部には焼土と炭化物が堆積していた。また、底部は被熱により暗赤褐色に変色していた。小穴は７基検出した。Ｐ１からＰ４が柱穴と考えられる。出土遺物の様相から、遺構の時期は弥生時代後期と考えられる。

出土遺物（図49）

出土土器の総量は4,744g である。このうち、壺（153）を図化した。２段階成形のくびれ部をもつ無花果形の箱清水式の壺で、頸部に屈曲面をもたずに口縁部が弓状に大きく外反する。床面から出土し、検出時には小破片が散らばっている状態であった。153以外の土器はいずれも小破片で、接合する個体が少ない。赤彩される破片が多く、高杯の杯部あるいは脚部の一部とみられる破片が複数点出土している。

【SB22・24】（図29）

調査区北西の既存道路拡幅部分で検出した。当初、１軒の竪穴住居跡として調査を開始したが、覆土掘り下げ時に２軒の竪穴住居跡が重複していることが判明した。重複の前後関係が不明で、遺物も多くを一括で取り上げているため、SB22・24として報告する。

SB22は西側が調査区外となり、検出範囲は遺構全体の約１／４である。SK42が重複し、SK42よりも古い。検出範囲における遺構の規模は5.9m×1.6m である。平面形は隅丸長方形を呈す可能性がある。遺構検出面から床面までの深さは最大0.42m である。貼床はなく、部分的に床面の硬化が認められた。SB22に伴うと判断される小穴は３基検出した。位置関係からＰ１が柱穴と考えられる。

SB24の検出範囲における遺構の規模は、3.8m×1.3m である。検出できた範囲が少なく、平面形は特定し難いものの隅丸長方形または方形を呈すと推測される。遺構に伴う施設は検出されなかった。SB22、SB24ともに、遺構の時期は弥生時代後期と考えられる。

出土遺物（図50・59）

出土土器の総量は8,299.5g である。このうち、壺（155）、甕（154・160）、鉢（156）、高杯（157～159・161）を図化した。このほかに、柱状片刃石斧（図59－345）が出土した。甕154は、胎土色調が他と異なり黄白

色系である。外来系甕と考えられる。胴部中位の器壁が非常に薄い。壺155は覆土下層からの出土である。内外面は赤彩する。口縁部のみの遺存のため全形を判断し難いが、有段口縁小型壺の可能性がある。157は有段口縁の高杯である。有段部外面の稜が明瞭であり、口唇端部が面取り状につまみ出されている。161は高杯の脚部裾である。脚部は欠損しているが、遺存部から円柱状の脚が予想される。157と161は赤彩が淡く、同一個体で有段口縁柱状脚高杯となる可能性がある。

【SB23】（図30）

調査区北西の既存道路拡幅部分で検出した。床面のみの検出で、住居壁は残存していない。このため、床面の範囲を破線で図示した。遺構の規模や平面形は不明である。遺構の大半は調査区外となり、竪穴住居跡の南東隅を検出したものと考えられる。遺構に重複するピットを２基検出しており、SB23に伴うピットと推察される。

出土遺物は土器339g である。全て破片資料で、図示できるものはない。赤彩系の土器が全体の６割ほどを占めている。遺構の時期は不明である。

【SB25】（図30）

調査区北西の既存道路拡幅部分で検出した。SB４およびSB５が重複し、重複する遺構の中では最も古い。遺構の東側約２／３をSB４、SB５に掘り込まれる。検出範囲における遺構の規模は4.0m×2.0m で、平面形は隅丸長方形を呈する。遺構検出面から床面までの深さは、最大0.29m である。貼床や床面の硬化範囲は認められなかった。付属施設は炉と小穴である。炉は土器埋設炉で、遺構の中央北壁寄りに位置する。壺の胴下半（164）を正位置で埋設する。内部および周辺からは多量の炭化物が検出された。小穴は３基検出し、Ｐ２が柱穴と考えられる。また、遺構の北壁際から遺物がまとまって出土した（図30－土器集中箇所）。この範囲から出土した遺物は遺存状態が良好なものが多く、一括で投棄された可能性が高い。出土遺物の様相から、遺構の時期は弥生時代後期と考えられる。

出土遺物（図50・51）

出土土器の総量は8,061g である。このうち、壺（162～165）、甕（166～169）、高杯（170・171）、鉢（172～174・176）、有孔鉢（175）を図化した。壺は胴部２段階成形で無花果形を呈すると思われるもの（163・164）とともに、小型品では、胴部２段階成形を呈するもの（165）と分割成形せずに球胴形を呈するもの（162）の二者がみられる。壺はいずれも赤彩が認められる。甕は頸部がしまるもの（167・168）、しまりが弱いもの（166）があるが、いずれも口縁部は弓状に大きく外反する。164、169は炉、これ以外は遺物集中範囲から出土した。164は炉に埋設されていた土器である。出土土器は箱清水式土器が主体となるが、この中で169は口縁部が有段となる形態で、北陸系様相を呈する。また、171は杯部と脚部の境界に断面三角形の突帯が貼り付けられている。

【SB26】

SB21西側の調査区壁面から土器がまとまって出土した範囲があり、土層精査したところ貼床と見られる硬化した土層を検出した。ほぼ水平に堆積しており、SB21に重複する竪穴住居跡が存在した可能性が高いと判断した。調査区壁での確認のため、平面形態や規模は不明である。遺構の時期は特定し難いが、出土遺物の様相から古墳時代初頭の可能性が考えられる。

出土遺物（図51）

出土土器の総量は1,413g である。全て床面と判断した硬化面上から出土した。このうち、壺（177～179）を

図化した。177～179以外はいずれも土師器の小破片である。178は口縁に緩い段を有する壺である。179は肩部分に円形浮文を貼り付ける。口縁から胴上部までの残存だが、器形は球胴形を呈するものと予想される。178は北陸系の有段口縁壺、179は在来に定着した広口壺と考えられる。

【SB27】（図30）

工事立会いを実施したＤ区の北東隅で検出した。遺構南側は床面直上が検出面となり、住居南壁は削平されている。このため、個別遺構図には推定される床面の範囲を破線で図示した。遺構の大半は調査区外となるため、平面形は不明である。床面は硬く締まっていた。付属施設は小穴２基である。いずれも浅く、位置的にも柱穴の可能性は低いと考えられる。出土遺物の様相から、遺構の時期は弥生時代後期と考えられる。

出土遺物（図51）

出土土器の総量は1,390g である。壺（180）を図示した。２段階成形の箱清水式壺である。胴部と口縁部の境界、頸部屈折がやや明瞭である。口縁部は大きく外反する。櫛描文を施文せず全面に赤彩を施す。180は床面からの出土である。横位置で上から押しつぶされたような状態で検出され、埋没時にはほぼ完形だったと見られる。なお、180を取り上げたところ、下からＰ１を検出した。

２　掘立柱建物跡

【ST１】（図31）

南北１間、東西２間の建物である。柱間寸法は、南北方向が1.6m から1.8m、東西方向が1.1m から1.5m を測る。柱穴の深さは８cm から23cm で、いずれの柱穴からも柱痕は検出されなかった。

出土遺物　Ｐ４から出土した土器片21g のみで、図化し得るものはない。

【ST２】（図31）

南北１間、東西２間の建物である。柱間寸法は、南北方向が1.8m、東西方向が２m を測る。柱穴の深さは16cm から32cm である。いずれの柱穴からも柱痕は検出されなかった。

出土遺物　Ｐ４から出土した土器13g のみである。全て小破片で、図化し得るものはない。

【ST３】（図32）

南北１間、東西４軒の建物である。SD３、SD10、SK32が重複する。柱間寸法は、南北方向が２m から2.2m、東西方向が1.2m から1.6m を測る。柱穴の深さは13cm から51cm である。柱痕は検出されなかった。

出土遺物　Ｐ１、２、４、８から合計192g の土器が出土した。いずれも小破片で、図化し得るものはない。

３　溝跡

【SD１】（図33）

調査区中央南側で検出した。北西から南東方向へ向かって湾曲し、南東側端部は調査区外へと延長する。検出範囲での遺構規模は、長さ18.7m、最大幅5.3m である。遺構検出面からの深さは北西側0.56m、南東側0.1m で、西側から南東側へ向けて傾斜を有する。両側縁は緩やかに立ち上がるが、南西側の立ち上がりは北東側に比べてやや急な傾斜である。覆土は２層で、上層の黒褐色シルト層からは径約30cm 前後の礫がまとまって出土した。この礫は南西側の弧に沿う形で検出された。推測の域を出ないが、遺構南西側から覆土と共に流入した可能性が

ある。出土遺物の様相から、遺構の時期は古墳時代前期と考えられる。なお、SD 1 の平面形態から、南東端部が延長して SD 2 に接続し、円墳となる可能性がある。しかし、現地における調査では SD 1 と SD 2 が同一遺構であるという確証が得られず、墳丘も確認できなかったため、本報告では別遺構として各遺構の詳細を記述した。

出土遺物（図51・59・61）

出土土器の総量は18,266g である。このうち、小型丸底土器（183）、高杯（184、185）の 3 点を図示した。このほかに、打製石鏃（図59－335、336）、不明鉄製品（図61－371）が出土した。遺物は、遺構覆土の中層から下層にかけて多く出土している。器種は高杯や壺が認められたが、大半が小破片であり図化し得た個体は少ない。183は扁球形の体部と大きく外反する口縁部を持つ小型丸底鉢である。内外面共にハケメ痕を残す。底部を欠いているため、底部の形態は不明である。184、185は屈折脚高杯である。いずれも脚部のみの残存である。裾部分には強いナデ調整痕が認められる。

【SD 2 】（図34）

調査区南西端で検出した。SD 9 が重複し、SD 9 よりも古い。北西から南東方向に伸び、両端部は調査区外へと延長する。検出範囲における遺構の規模は、長さ8.5m、最大幅5.4m である。遺構検出面からの深さは、北西側で約0.5m を測る。遺構南東側は、溝底部近くが遺構検出面となったため、遺構の推定範囲を破線で図示した。両側縁は緩く立ち上がり、溝断面は浅い皿形を呈する。覆土掘削中に、溝内北側の傾斜部分から顔料と見られる赤色土を検出した。赤色土は20cm 四方に広がりが見られた。約 2 ～ 5 cm の厚みで堆積しており、溝底部に向かってやや厚く堆積する状況が認められた。赤色土内からは土器の小破片と極微量の炭化物を検出した。土壌分析の結果、赤色土はベンガラと判明した。土壌分析結果の詳細に関しては、第 4 章に掲載している。

遺構の時期は不明である。

出土遺物（図56）

出土土器の総量は2,681g である。赤彩するものや、櫛描による施文を行うものが認められるが、いずれも小破片で図化し得るものはない。この他、縄文時代中期の浅鉢（図56－266）が一点出土しているが、流入品と考えられる。

【SD 3 】（図35）

調査区南東で検出した。ST 3 、SD10に重複する。重複する遺構の中では最も新しい。南東端部は調査区外となる。検出範囲における遺構の規模は、長さ9.8m、最大幅 3 m である。遺構検出面からの深さは、西側で0.5m、南東側で0.32m である。遺構断面形は皿状を呈し、南西側の立ち上がりがやや急な傾斜となっている。遺構覆土は黒褐色土で、径 2 cm 程度の円礫が多く含まれる。遺構底部からは遺存状態が良好な遺物が多く出土した。出土遺物の様相から、遺構の時期は古墳時代中期と考えられる。

出土遺物（図52）

出土土器の総量は14,862g である。このうち、高杯（186～196）、甕（197）、甕（198）を図化した。高杯は全て外面をミガキ調整によって仕上げる。杯部の形状には、底部からの立ち上がりが明瞭なものや、口縁端部が外反するものなど、複数の形態がみられる。194は立ち上がりが直線的で、逆ハの字形を呈しており、他の杯部の形状とはやや異なる印象である。また、191は杯部の中ほどにナデによる稜が形成されている。杯部の口径も他の個体に比べて大きく、形態から須恵器を模倣して作成された可能性がある。全体が遺存するものでは、口径16～20cm、底径11～12cm、器高12～14cm を測る。杯部または脚部のみ遺存するものも、口径または底径はこの

範囲に収まっている。脚部の形態もほぼ同一で、規格性をもって製作されたと考えられる。197は土師器の甕である。外面全体をハケ調整したのち、ミガキ調整によって仕上げる。一部に黒斑が認められた。198は須恵器の瓶である。肩部内面に指オサエ痕がみられる。外面は頸部と胴中部に波状文が施文される。また、肩部に釉が認められ、降灰による自然釉と考えられる。

【SD 4】

調査区東側南で検出した。A 区調査時に検出した溝跡である。A 区調査時には、自然流路として調査を進めたが、B 区の調査を実施した際に後述する谷状地形の一部であったことが判明した。出土遺物は谷状地形内から出土した遺物として整理を行った。

【SD 5】（図36）

調査区中央で検出した。SB18に重複し、SB18よりも新しい。南北方向に伸び、両端部は調査区外へ延長する。検出範囲における遺構の規模は、長さ34. 0m、最大幅4. 8m である。遺構検出面からの深さは北側0. 2m、南側0. 4m を測り、溝断面は浅い皿型から不整形を呈する。SD 5 の性格については判然としないが、調査区の傾斜に沿って掘削されていることから流路として機能していた可能性がある。遺構の時期を判断し得る遺物が乏しいが、SB18との重複関係から、弥生時代後期以降に掘削されたと考えられるが遺構の時期は不明である。

出土遺物（図60）

出土土器の総量は4, 686g である。土器は全て破片資料で、図化できるものはない。縄文土器、土師器、須恵器の他、赤彩が見られるものや櫛描文を施文するものが認められる。このほかに凹石（図60－358）が出土した。

【SD 6】（図37）

調査区中央で検出した。SB 2 、SK26、SK43が重複し、この中では最も古い遺構と考えられる。南北方向に伸び、遺構の規模は長さ13. 6m、幅2. 6m である。遺構検出面からの深さは約0. 36cm を測る。遺構の時期を判断し得る遺物が乏しいが、重複する遺構の時期から、古墳時代初頭以前に掘削されたと考えられる。

出土遺物

出土土器の総量は184g である。いずれも小破片で図化し得るものはない。

【SD 7】（図37）

調査区西側で検出した。遺構の規模は長さ3. 0m、幅0. 9m で、遺構検出面からの深さは約0. 28m を測る。溝の断面形は U 字状を呈す。遺構の時期は不明である。

出土遺物（図53）

出土土器の総量は1, 632g である。このうち甕（199）を図示した。底部のみの残存で、内面および外面にハケ調整を行っている。また、外面一部に黒斑が認められた。

【SD 8】（図37）

調査区西側で検出した。SD 7 の南西側に位置する。遺構の規模は長さ2. 2m、幅0. 7m で、遺構検出面からの深さは0. 28m である。溝断面は U 字状を呈する。SD 7 および SD 8 は、位置関係から、周溝墓の周溝部分あるいは木棺墓の可能性が考慮された。このため、周辺を精査したが、墓壙と見られる掘り込み等は検出されなかっ

た。遺構の時期は不明である。

出土遺物

出土土器の総量は560g である。赤彩、櫛描文を施文するものが認められるが、いずれも小破片で図化し得るものはない。

【SD 9 】

調査区南西端で検出した。SD 2 に重複する。検出範囲における遺構の規模は、長さ1. 6m、最大幅1. 3m である。遺構の大部分が調査区外となり、検出し得たのは遺構の北東端部のみである。このため、土坑である可能性も否定できない。遺構の時期は不明である。

出土遺物（図53）

出土土器の総量は814g である。壺（200）を図示した。底部のみの残存で、外面をミガキ、内面をハケ調整する。残存範囲では赤彩痕は認められなかった。

【SD10】

調査区中央南側で検出した。SD 3 、ST 3 －P 7 に重複する。北東から南西方向へ伸び、遺構の規模は長さ5. 6 m、最大幅0. 7m である。遺構検出面からの深さは0. 24m を測る。出土遺物の様相から、古墳時代前期と考えられる。

出土遺物（図53）

出土土器の総量は3, 256g である。このうち、有孔土器（201）を図示した。201は胴下半から底部にかけての残存である。外面をハケ、内面をミガキ調整し、底部中央の一箇所に穿孔が認められる。また、脚部に円形孔を持つ器台の破片が 1 点検出されている。

【SD11】（図37）

調査区南東で検出した。北東から南西方向へ伸びる溝で、遺構の規模は長さ3. 3m、最大幅0. 4m である。遺構検出面からの深さは0. 16m を測る。遺構の時期は不明である。

出土遺物

出土土器の総量は84g である。いずれも小破片で図化し得るものはない。

【SD12】（図37）

調査区北東で検出した。SB20と重複し、SB20よりも新しい。西から南東方向へ緩く湾曲し、西側は調査区外へ延長する。検出範囲における遺構の規模は、長さ5. 8m、最大幅1. 2m である。遺構検出面からの深さは0. 26m を測る。遺構の時期を判断し得る遺物が乏しいが、重複関係から弥生時代後期以降に掘削されたものと考えられる。周囲の竪穴住居跡との関係も想定される。

出土遺物

出土遺物は土器467g である。いずれも小破片で図化し得るものはない。

【SD13】（図37）

調査区北端で検出した。SK40と重複する。南北方向に延びる溝で、北側は調査区外へ延長する。検出範囲に

おける遺構の規模は、長さ2.9m、最大幅0.8mである。遺構検出面からの深さは0.1mを測る。遺構の時期を判断し得る遺物が乏しいが、出土遺物の様相から弥生時代後期頃と推定され、周囲の竪穴住居址との関係も想定される。

出土遺物（図53）

出土土器の総量は266gである。このうち、壺（202）を図示した。箱清水式の土器である。胴下半部外面をミガキ、内面をハケ調整する。202以外は土師器の小破片のみで、図化できるものはない。

【SD14】（図37）

調査区中央で検出した。東西方向へ延びる溝で、遺構の規模は長さ2.7m、最大幅0.5mである。検出面からの深さは0.5mである。遺物は出土しなかった。遺構の時期は不明である。

4　土坑

本調査では、長軸が60cmを超えるものを土坑とし、40基を検出した。遺構平面形は円形または楕円形が主で、このほかに不整形や隅丸方形を呈するものが少数認められた。多くの土坑では覆土内から遺物が出土しているが、土器の小破片が主体で遺存も良好なものはわずかである。遺構の時期や性格を明確にできたものは少ない。以下、比較的遺存状態が良好な遺物が出土し、時期の推定が可能な土坑を中心に詳細を記述した。

【SK12】

調査区北西部で検出した。SB９に重複し、SB９よりも新しい。遺構の規模は1.3m×0.9mである。平面形は楕円形を呈する。遺構の規模は1.3m×0.9mで、平面形は楕円形を呈する。遺構断面形は台形状で、西側がやや緩やかな傾斜となる。遺構の重複関係および出土遺物の様相から、遺構の時期は弥生時代後期と考えられる。

出土遺物（図53・59・61）

出土土器の総量は1,538gである。このうち、甕（204）を図化した。胴内外面をハケ調整し、口縁部は短く外反し端部を面取り調整をする北陸甕である。遺構覆土の中層付近からの出土である。このほかに、扁平片刃石斧（図59－347）、鉄鏃（図61－370）が出土した。

【SK24】（図38）

調査区北西部で検出した。径0.8mの円形を呈する。遺構断面形は台形で、遺構検出面からの深さは最大0.84mである。遺構覆土は暗褐色粘質土（上層）と黒褐色粘質土（下層）である。黒褐色粘質土層内からは遺存状態が良好な土器がまとまって出土した（遺構写真図版８）。遺物の残存状態および出土状況から、壺208を棺身とする土器棺が想定される。遺構の時期は弥生時代後期と考えられる。

出土遺物（図53）

出土土器の総量は2,538gである。このうち、壺（208）、甕（209）、高杯（207）を図化した。208と209の一部が下になり、207がこの上に重なるような状態で出土した。208は胴部２段階成形をなす箱清水式の壺である。胴上～底部が遺存する。外面には黒斑が認められる。207は高杯の杯部で、全面に赤彩が認められた。209は箱清水式の甕で、廉状文を施す頸部に変換点が認められ、口縁部が大きく外反する。

【SK26】（図38）

調査区中央で検出した。SB２およびSD６と重複する。重複する遺構の中では最も新しい。径0.7mの円形を呈し、遺構検出面からの深さは最大0.75mである。遺構断面形は、西側が袋状に抉れている。底部からは長さ12～16cm程度の礫が４点検出された。底部に敷き詰めるような状態で検出（遺構写真図版８）されており、人為的に埋められたものと考えられるが、遺構の性格に関しては不明である。なお、SB５およびSK26の遺構底部で確認された礫について、出土遺物の様相から、遺構の時期は古墳時代前期と考えられる。

出土遺物（図53）

出土土器の総量は547gである。このうち、鉢（210）を図化した。このほかに、敲石（352）が１点出土した。210は完形で、口縁部を下にし、底部の河原石の上に伏せた状態で検出された。外面に指オサエ痕が見られる。また、口縁部内面には強いハケ痕が認められる。

５　小穴

長軸が60cmに満たない遺構を小穴とし、他の遺構に付属しないものを58基検出した。遺構平面形は円形または楕円形を呈する。遺物が出土したものは13基に留まる。この中で、SP７とSP30からは比較的遺存状態が良好な遺物が出土した。

【SP７】（図38）

調査区中央北で検出した。直径0.5mの円形を呈する。遺構断面形は台形状で、遺構底部は平坦となる。遺構検出面からの深さは0.5mである。遺構の性格は不明である。出土遺物から、遺構の時期は古墳時代初頭と考えられる。

出土遺物（図53）

出土土器の総量は617gである。このうち、壺（211）を図化した。口縁部から胴中部がほぼ完存する。遺構底部に接地し、正位置で出土した（遺構写真図版８）。胎土は小石を含まない黄白色系で、器壁を薄くしあげている。外面全体と内面の口縁部から頸部にかけてていねいなヘラミガキを施し、淡い赤彩が認められる精製壺である。

【SP30】（図11）

調査区北西の既存道路拡幅部分で検出した。直径0.6mの円形を呈する。遺構検出面からの深さは最大0.23mである。遺構の性格は不明である。出土遺物から、遺構の時期は古墳時代初頭と考えられる。

出土遺物（図53）

出土土器の総量は424gである。このうち、片口鉢（212）と台付甕（213）を図化した。212は内外面ともミガキ調整し、赤彩する。213は頸～底部の遺存である。覆土中から、遺存がほぼ完全な形で出土した（遺構写真図版８）。外面はハケ調整され、一部に黒斑が認められた。

６　古墳

【SZ１】（図38）

調査区北東部で検出した。円墳周溝の一部と考えられる。SB21に重複し、SB21よりも新しい。遺構北西端部は調査区外へ延長する。確認できた遺構の規模は、長さ3.6m、最大幅1.5mで、遺構検出面からの深さは最大

0.3m である。遺構の延長方向から、遺構北西側が墳丘部になると考えられる。調査区の壁面を精査したが、遺構検出面直上までが盛土層となっており、墳丘は確認できなかった。現況から、既存駐車場造成の際に墳丘部が削平されたと考えられる。遺構覆土は３層を確認した（図38）。覆土中から埴輪破片、須恵器等が出土した。出土遺物の様相から、遺構の時期は古墳時代中期後半頃と考えられる。

出土遺物（図54）

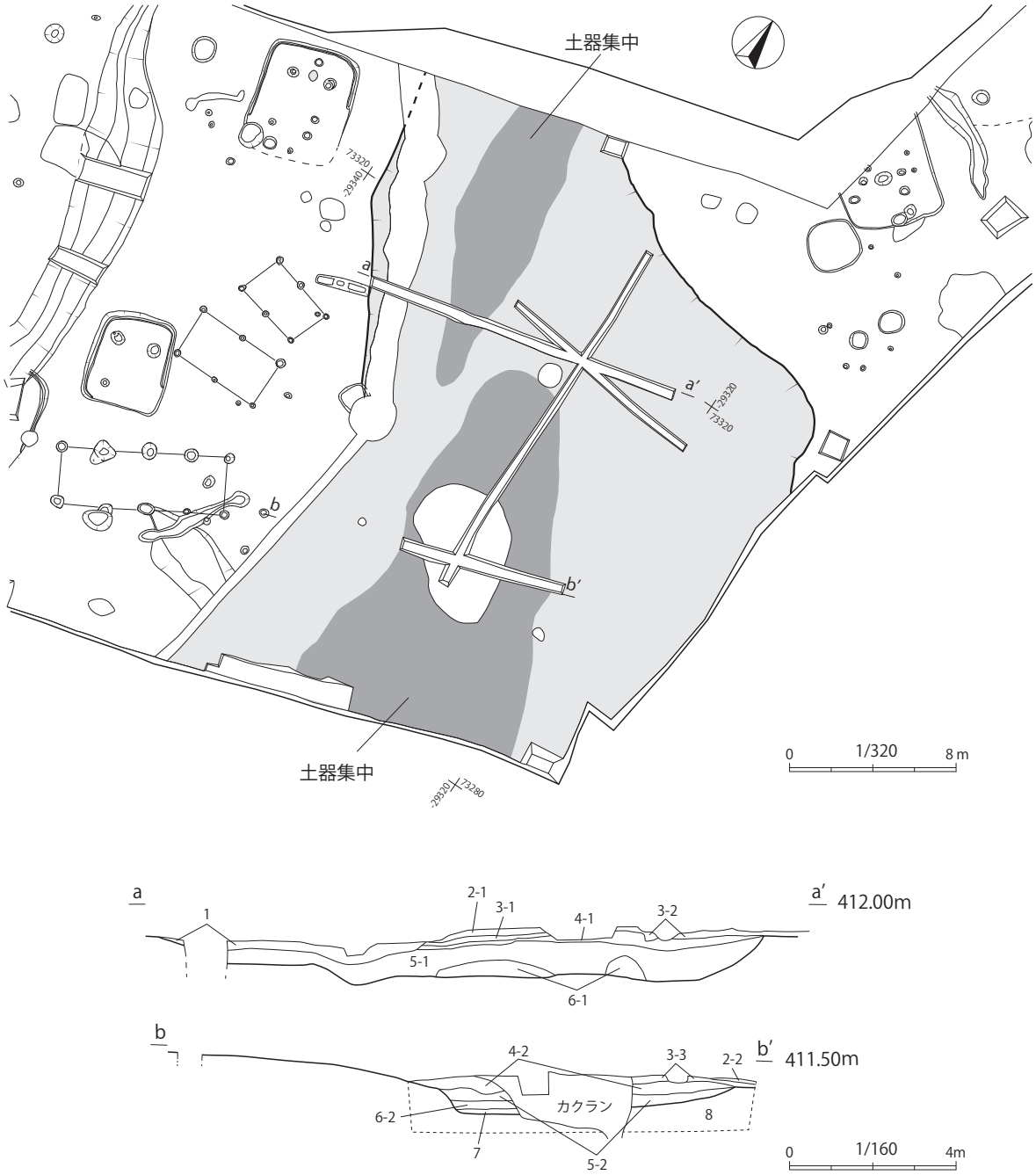
出土土器の総量は5,232g である。このうち、須恵器の瑳（214、216）と甕（215）を図化した。このほか、埴輪破片（217～226）が出土した。214は口縁部から頸部のみの遺存である。内外面ともロクロナデがみられ、施文はない。216は胴部の遺存である。内面一部に指オサエ痕が認められる。215は甕の口縁部と考えられる。遺存率がわずかで、口径値が計測できなかったため、断面および拓本資料を掲載した。外面に波状文が施文される。埴輪は計10点出土した。217～219は胴部の破片で、218、219は埴輪底部と考えられる。３点とも内面はハケ調整、外面はナデ調整が主体となる。また、218の内面には粘土紐の結合部が認められる。220～225は突帯の破片である。調整はナデ調整が主体である。226は棒状の破片で、他の９点と様相を異にする。全体を赤彩するとみられるが、端部の平坦面のみ赤彩がやや不明瞭である。このため、赤彩された別部位に接着されていた可能性も否定できない。SZ１出土の埴輪は複数個体が存在すると考えられる。226の存在から、円筒形埴輪と形象埴輪があった可能性があるが、出土した個体の中にはこれを裏付ける資料がなく、断定はできない。

７　谷状地形（図15）

調査区東側では、地形が谷状に落ち込んでいることが確認された（図15）。調査地の傾斜と同じく、北西から南東方向に下り、確認できた最大幅は約23m である。調査区内で確認した地形の落ち込み範囲と、土層堆積状況について、図15に示した。西側の端部は攪乱が重複するため、一部のみの確認である。落ち込みの端部は緩やかで、中央部付近でやや傾斜が急になる。サブトレンチで確認した土層は、１層から８層までである。１層から７層までが、谷状地形内の堆積土、８層が地山層と考えられる。なお、湧水のため谷状地形の最下部までは確認できなかった。谷状地形内からは、図15に示した土器集中範囲を中心に大量の遺物が出土した。遺物は４－１、４－２、５－１層を除く１層から５－２層で検出された。６－１層から７層では遺物が確認されず、６－１層の堆積以降、調査地周辺で居住が開始された可能性がある。

出土遺物（図55・56・58・59・60・61）

出土土器の総量は250.8kgである。図55・56－227～257を図化した。このほかに、土偶（図58－321）、紡錘車（323・325・326）、ミニチュア土器（330）、打製石鏃（図59－334・339）、打製石斧（342）、石包丁（351）、石槌（図60－353）、凹石（355～357）、管玉（図61－365～367）、刀子（372）が出土した。遺物の時期は縄文時代から平安時代前期までが認められる。土器は割れ口や器面が摩耗しているものが多数認められ、谷状地形内に流入したものと考えられる。量が最も多いものは弥生時代後期の土器で、資料の大半を占める。箱清水式土器が主体となるが、238（壺）、233・234（甕）、243・245（高杯）、244（器台）のように北陸地方系の様相がみられる土器も散見された。248～251は、箱清水式有段口縁高杯の脚部と想定される。比較的長脚の大形杯で、集落内に一定量保持されていたことがわかる。227（細頸壺）は、口縁部から頸部の遺存、口縁部と頸部に縄文、頸部にはさらに櫛描直線文を施文する。遺存部位の形態と施文の様相から、弥生時代前期末から中期初頭の遺物と考えられる。



1　黒褐色粗砂しまりなし粘性なし。5cm 以下の礫が少量混入。土器を多く含む。
2-1　暗褐色シルトしまり少しあり粘性なし。10cm 以下の礫がやや多く混入。
2-2　褐色細砂しまりなし粘性なし。
3-1　黒色粘質土しまりややあり粘性あり。土器を多く含む。
3-2　黒色粘質土しまりややあり粘性あり。5cm 以下の礫が少量混入。土器をわずかに含む。
3-3　黒色粘質土しまりわずかにあり粘性少しあり。3cm 以下の礫が多く混入。土器を多く含む。
4-1　黒褐色粗砂しまりなし粘性なし。10cm 以下の礫を少量混入。
4-2　黒褐色砂質土しまりなし粘性なし。5cm 以下の礫が多く混入。
5-1　褐色粗砂しまりなし粘性なし
5-2　暗褐色砂質土しまりなし粘性なし。土器を少量含む。
6-1　黒褐色粘土しまりあり粘性なし
6-2　黒色粘質土しまりあり粘性なし
7　黒褐色粗砂しまりなし粘性なし
8　地山

図15 谷状地形実測図

第４節　遺物各説

本節では、図56～61に掲載した遺物について取り上げる。掲載した遺物に関して、出土遺構・層位・その他観察事項を表４および表５にまとめた。

【縄文時代～弥生時代中期の土器】（図56・57）

本調査で出土した縄文時代から弥生時代中期（栗林式期）の遺物のうち、遺存率が少なく器形を復元できなかったものについて、図56・57－264～320を掲載した。縄文土器は図56－264～270で、縄文時代前期後葉から中期後半までの時期の土器が認められた。271～320は弥生時代中期前半から中期中葉の土器である。外面に櫛描文、ヘラ描沈線文、列点文等を施文するものが多数ある。器種や器形全体の把握が困難だが、施文の様相等から、271～297は弥生時代中期前半の土器と推察される。

【土製品】（図58）

土偶（図58－321）、円盤形土製品（322～327）、ミニチュア土器（328～331）が出土した。土偶（321）は頭部の破片である。細い粘土紐を貼り付けて両眼と鼻が作られる。背面はやや湾曲し、装飾等は見られない。円盤形土製品のうち、322～323、325～327は土器の破片を転用したものと考えられる。327は中央部の穿孔が未貫通で、製作途中である可能性がある。また、324は紡錘車と考えられる。断面形はレンズ状で、全体の約１/２を欠損する。ミニチュア土器のうち、328～330は底部のみの遺存で、器種の特定は困難である。331は完形で、甕のミニチュア土製品と考えられる。

【石製品】（図59～図61）

石器　打製石鏃（図59－332～340）、石匙（341）、打製石斧（342～343）、磨製石斧（344～348）、石包丁（349～351）、石槌（353）が出土した。打製石鏃は縄文時代のものが主体である。無茎鏃と有茎鏃が認められた。石材にはチャート、頁岩、黒曜石が使用される。磨製石斧には、太型蛤刃石斧、扁平片刃石斧、柱状片刃石斧が認められた。弥生時代のものが主だが、この中で348はネフライト製の磨製石斧で、時期は縄文時代と考えられる。石包丁は３点出土した。いずれも破片だが、直線的な刃部が確認できることから半月形を呈すると考えられる。349は片面穿孔による穿孔部がみられることから、在地製作とみられる。

敲石・凹石・砥石　敲石は２点出土した（図60－352、354）。352はSK26の底部から出土した礫のうちの一つで、先端部に敲打痕が認められる。凹石は４点出土した（355～358）。片面のみ使用痕があるものと両面に使用痕があるものがみられる。石材は安山岩が主だが、356のみ砂岩製である。

磨製石剣　磨製石剣は１点出土した（図61－361）。361については、調査当初は磨製石剣の未製品と判断したが、整理調査の段階で石戈の可能性が浮上した。本報告では磨製石剣および石戈の可能性を提示する。

361はSB18検出面からの出土である。完形品だが、検出時は中央よりやや刃部寄りの位置で二つに割れた状態であった。割れ口は表面に比べて風化の程度が少なく、土圧か重機による表土掘削時に破損したとみられる。寸法は長さ23.0cm、幅5.1cm、厚さ2.1cmである。長野盆地出土の磨製石剣で全長が判明するものは15cm前後のものが多数を占めており、比較して本資料は大型品と捉えることができる。石材は黒色頁岩で、表面は風化により黄白色に変色している。刃部は鋭く研ぎ出され、刃潰しは行われない。また、両面に鎬が作り出される。基部は刃部と同様に全面が研磨され、基部の端部は縦軸に対して斜めに整形されている。基部の片側１か所には未貫通の穿孔が認められた。刃部から基部にかけてはなだらかに接続し、関はつくられない。なお、出土位置はSB18内部だが、検出面からの出土のため遺構に伴わない可能性が高い。製作時期は弥生時代中期後半が想定される。

361の形態において、基部の作りが注目される。前述のように、本資料の基部は穿孔のある面からみて端部が

角度を持って作られている。端部は全面が研磨されていることから、破損によるものではなく、当初から角度をつけて製作されたと考えられる。その目的には柄の装着が想定され、本資料は形態と穿孔の位置や、他遺跡出土の磨製石剣と比較して目釘によって柄に固定される目釘式石戈である可能性が高い。

目釘孔と考えられる基部の穿孔は貫通していないため、本資料が製品か未製品かの判断は難しい。肉眼観察に留まるが、基部に装着痕などはみられなかった。形態、石材ともに外来的な様相が強くみられ、西日本との交流関係が窺われる。搬入品か在地製作によるものかは現段階では不明である。

【管玉】（図61）

管玉は６点出土した（図61－362～367）。石材は碧玉が主で、このほか鉄石英製（365）が１点認められた。362、364はSB７、363はSB９の床面直上より出土した。径１㎜前後の細形を呈するものが主体となる。この中で、364は径４㎜、長さ29㎜を測る大型品である。

【ガラス小玉】（図61）

ガラス小玉は１点出土した（図61－368）。SB３床面からの出土である。寸法は径５㎜で、全体の約１／２を欠損する。色調はスカイブルーを呈する。内部には円形状の気泡粒が観察された。出土位置周辺を精査したが、これ以外にガラス玉は検出されなかった。

【金属製品】（図61）

銅鏃（図61－369）、鉄鏃（370）、刀子（372）、曲刃鎌（373）、不明鉄製品（371）が出土した。369はSB９の覆土中から出土した。小型の柳葉式で、両面に鎬が認められ、両鎬作とみられる。鏃身部は破損が著しく、鏃茎部も折損している。X線の透過率が低く、純度の高い銅を使用したと考えられる。370はSK12の覆土中から出土した。無茎の圭頭鏃である。片方のカエリを折損する。373は鉄製の曲刃鎌である。SB８の覆土中から出土した。先端が欠損するが、ほぼ完形となる。端部に装着のための折り返しが認められる。371はSD１からの出土である。X線分析により枝状の罅割れがみられたことから鋳造製品と考えられるが、器種、用途ともに不明である。

第Ⅳ章　自然科学分析

新諏訪町遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

新諏訪町遺跡は長野県長野市新諏訪に所在する。これまでの調査により、弥生時代から古墳時代の集落跡が発見されている。本分析調査では、C区SD２において検出された赤色粉末を含有する埋土に含有される赤色顔料の材質調査を目的として、X線回折分析と電子顕微鏡観察を実施するとともに、埋土土壌についてリン・カルシウム分析及び全炭素、全窒素分析の理化学分析を実施し、埋葬の可能性を検討する。

１．試料

試料は、C区SD２赤色顔料サンプル１点である。試料は、全体的にやや赤みを帯びてはいるものの、土色に反映されるほどでもなく、土色は7.5YR２/２（黒褐）を呈する。含有される赤色顔料は肉眼では容易に確認することが難しい状況で、径１mmに満たない赤色顔料の濃集部が所々に散在して認められる程度である。

なお、赤色顔料の分析には濃集部を採取して供試試料としているが、赤色顔料のみ抽出することが困難であったため、顔料周縁の土壌鉱物が混じる状態にある。

２．分析方法

2.1. 赤色顔料の分析

（1）X線回折分析

散在する赤色顔料を可能な限り抽出した後、メノウ乳鉢で磨砕した試料を無反射試料板に充填し、リガク製X線回折装置（Ultima Ⅳ Protectus）によって表１の条件で測定を実施した。なお、物質の同定解析は、Materials Data, Inc.のX線回折パターン処理プログラムJADE9.6を用い、リファレンスデータベースはICDDのPDF２（Release 2013）を利用して該当する化合物または鉱物を検索した。

表１．X線回折測定条件

装置	Ultima Ⅳ Protectus
Target	Cu（Kα）
Monochrometer	Graphite 湾曲
Voltage	40kV
Current	40mA
Detector	SC
Calculation Mode	cps
Divergency Slit	1°
Scattering Slit	1°
Recieving Slit	0.3mm
Scanning Speed	2°/min
Scanning Mode	連続法
Sampling Range	0.02°
Scanning Range	３～61°

（2）電子顕微鏡観察

採取した赤色顔料を水平試料載台にカーボン両面テープで固定し、日本電子製可搬形走査電子顕微鏡JCM-5700により、加速電圧20kV，低真空モードで形状等の特徴を反射電子（BES）像により観察した。

2.2. 土壌理化学分析

全炭素、全窒素は乾式燃焼法、全リン酸は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法、カルシウム含量は硝酸・過塩素酸分解－原子吸光法でそれぞれ行った（土壌標準分析・測定法委員会，1986、土壌環境分析法編集委員会，1997）。以下に各項目の操作工程を示す。

（1）分析試料の調製

試料を風乾後、土塊を軽く崩して２mm の篩でふるい分けをする。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉砕し、0.5mm 篩を全通させ、粉砕土試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で４時間乾燥し、分析試料水分を求める。

（2）全炭素、全窒素

粉砕土試料を0.1000g～2.0000g を石英ボートに秤量し、乾式燃焼法により全炭素・全窒素含量を測定する。使用装置は、ヤナコ分析工業製 CN コーダーである。分析値及び加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの全炭素量・全窒素量を（T-C・T-N 乾土％）求める。さらに、全炭素量を全窒素量で除し、炭素率（C/N）を求める。

（3）リン酸、カルシウム含量

粉砕土試料1.00g をケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸（HNO_3）約10ml を加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（$HClO_4$）約10ml を加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100ml に定容し、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P_2O_5）濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P_2O_5mg/g）とカルシウム含量（CaOmg/g）を求める。

３．結果

3.1. 赤色顔料の分析

（1）X 線回折分析

X 線回折図を図１に示す。図中上段には試料の X 線回折図、下段には検出された鉱物の回折パターンを掲げている。なお、文中で（　）内に示したものは、X 線回折図で同定された鉱物名である。固溶体やポリタイプを有する鉱物については、X 線回折試験では正確な同定は困難であるため、最終的な検出鉱物名としては、それらを包括する大分類の鉱物名を使用している。

供試試料には、2.70Å，2.52Å，3.68Å などにおいて赤鉄鉱（hematite）に基づく尖度の高い明瞭な反射が確認されたほか、石英（quartz），斜長石（曹長石：albite），カリ長石（微斜長石：microcline），沸石鉱物（斜プチロル沸石：clinoptilolite），角閃石（苦土角閃石：magnesiohornblende）が認められた。

（2）電子顕微鏡観察

電子顕微鏡写真を図版１に示す。

直径約１μm 程度の円筒状の物質が密集して存在する状況が確認された。この特徴的な形状から、鉄バクテリアによって形成されたパイプ状構造を持つベンガラであることが指摘される。

3.2. 土壌理化学分析

土壌化学分析結果を表２に示す。

野外土性（ペドロジー学会編、1997）は、SL（砂壌土）であり、土色は7.5YR 2／2 黒褐である。全炭素は0.98％、全窒素は0.08％であり、土壌有機物に乏しい。全リン酸は0.90 P_2O_5mg/g、全カルシウムは7.27 CaOmg/g で、リン酸に乏しく、カルシウムがやや多く含まれる。

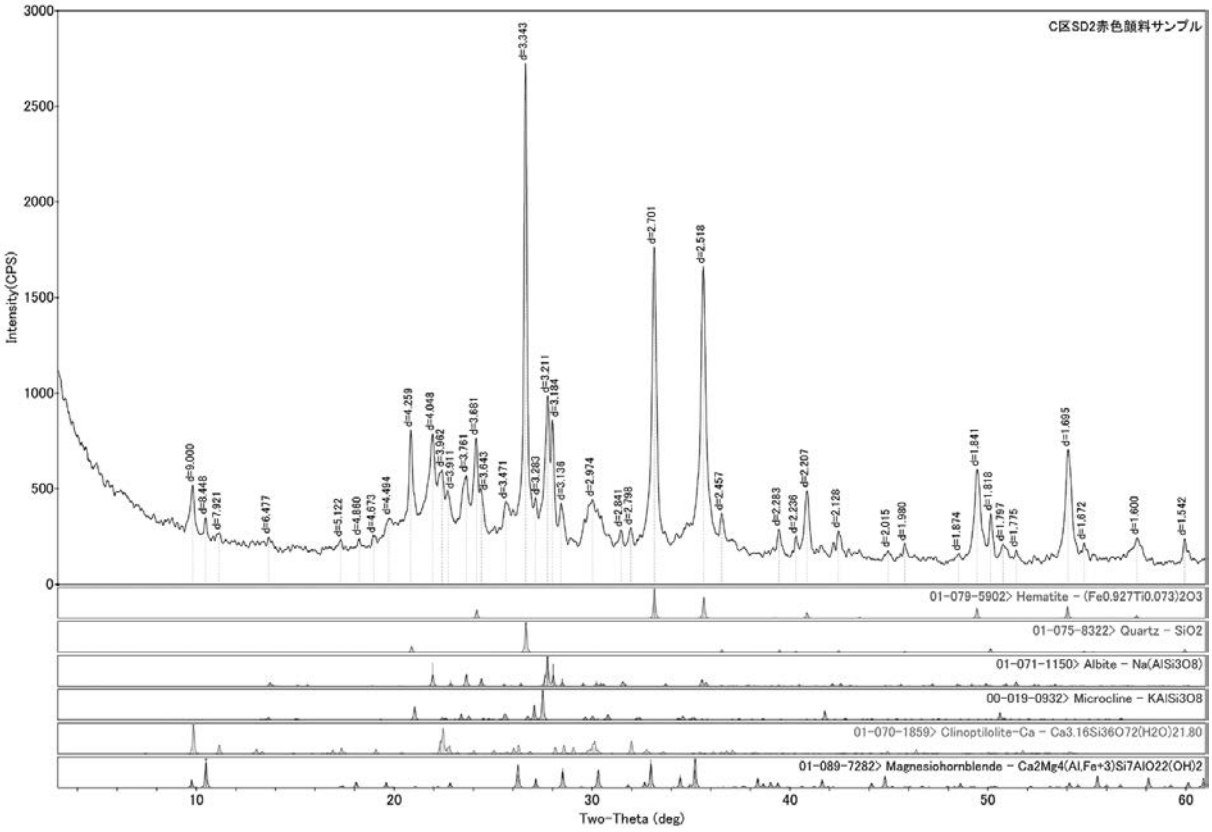


図１．Ｘ線回折図

表２．土壌理化学分析結果

試料名	土色	土性	全炭素（%）	全窒素（%）	C/N	全リン酸（mg/g）	全カルシウム（mg/g）
Ｃ区 SD2　赤色顔料サンプル	7.5YR2/2　黒褐	SL	0.98	0.08	12	0.90	7.27

注．(1) 土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。
(2) 土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジー学会編，1997）の野外土性による。
SL…砂壌土（粘土０～15%、シルト０～35%、砂65～85%）
(3) C/N：全炭素÷全窒素。

４．考察

4.1. 赤色顔料の材質

赤色を呈する代表的な顔料鉱物にはベンガラ（赤鉄鉱；hematite［α-Fe_2O_3］）のほか、水銀朱（辰砂；cinnabar［HgS］）、鉛丹（鉛丹；minium［Pb_3O_4］）などがあるが、供試試料においては赤鉄鉱（hematite）が確認されたことより、含有される赤色顔料はベンガラと判断される。

なお、ベンガラには天然の赤鉄鉱を利用する場合のほか、含水水酸化鉄を焼成して得られる赤鉄鉱を利用する場合がある。また、赤鉄鉱にはパイプ状構造をなすものと、非パイプ状（塊状、球状、不定形など）構造のものとがあり、本赤色顔料についてはパイプ状構造を有するベンガラであることが電子顕微鏡観察により確認されている。パイプ状構造を有するベンガラは、沼沢地などにおいて鉄バクテリアが生成する含水水酸化鉄を原材料としていることが明らかとされており（岡田，1997；織幡・沢田，1997）、本赤色顔料も同様に周囲の低地から入手された含水水酸化鉄が原材料となっている可能性がある。

4.2. 埋葬の可能性について

一般的に炭素含量は、主に植生繁茂の指標として用いられ、その炭素の集積量は主に植物遺体供給量に規定される。気候的要因による植生の繁茂状態が、炭素含量に大きく影響を与えているとされる。そして、リン酸の多くが植物に由来することが知られている。

リンは生物にとって主要な構成元素であり、動植物中に普遍的に含まれる元素であるが、特に人や動物の骨や歯には多量に含まれている。生物体内に蓄積されたリンはやがて土壌中に還元され、土壌有機物や土壌中の鉄やアルミニウムと難溶性の化合物を形成することがある。特に活性アルミニウムの多い火山灰土では、非火山性の土壌や沖積低地堆積物などに比べればリン酸の固定力が高いため、火山灰土に立地した遺跡での生物起源残留物の痕跡確認にリン酸含量は有効なことがある。

ところで、土壌中に普通に含まれるリン酸含量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例があるが（Bowen, 1983；Bolt・Bruggenwert, 1980；川崎ほか, 1991；天野ほか, 1991）、これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約3.0mg/g 程度である。また、人為的な影響（化学肥料の施用など）を受けた黒ボク土の既耕地では5.5mg/g（川崎ほか, 1991）という報告例があり、当社におけるこれまでの分析調査事例では骨片などの痕跡が認められる土壌では6.0mg/g を越える場合が多い。一方、カルシウムの天然賦存量は普通１～50 mg/g（藤貫, 1979）といわれ、含量幅がリン酸よりも大きい傾向にある。これは、リン酸に比べると土壌中に固定され難い性質による。

C 区 SD 2 赤色顔料サンプルについては、検出された全リン酸・全カルシウムの含量が、上述の天然賦存量を超えるほどの高い値ではない現状から、C 区 SD 2 が埋葬遺構である可能性を積極的に支持することは難しいと考える。なお、リン・カルシウム分析は遺体痕跡を確認する判断材料として重要ではあるが、天然賦存量以下だからといって埋葬の可能性を全て否定するものでもない。遺体が土壌中で分解した後、その成分が時間経過とともに徐々に系外へと流亡し、その結果として天然賦存量の範囲となってしまうことも考えられるためである。

引用文献

天野　洋司・太田　健・草場　敬・中井　信, 1991, 中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量.「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, 農林水産省農林水産技術会議事務局, 28－36.

岡田　文男, 1997, パイプ状ベンガラ粒子の復元. 日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集, 38－39.

織幡　順子・沢田　正昭, 1997, 酸化鉄系赤色顔料の基礎的研究. 日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集, 76－77.

川崎　弘・吉田　澪・井上　恒久, 1991, 九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量.「農林水産省土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, 農林水産技術会議事務局編, 23－27.

土壌環境分析法編集委員会編, 1997, 土壌環境分析法. 博友社, 427p.

土壌標準分析・測定法委員会編, 1986, 土壌標準分析・測定法. 博友社, 354p.

農林省農林水産技術会議事務局監修, 1967, 新版標準土色帖.

藤貫　正, 1979, カルシウム. 地質調査所化学分析法, 52, 57－61.

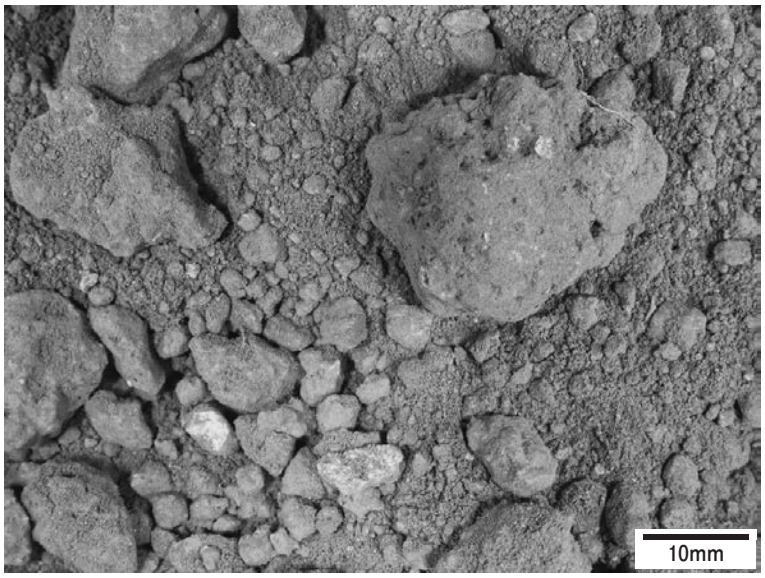
ペドロジー学会編, 1997, 土壌調査ハンドブック改訂版. 博友社, 169p

Bowen, H. J. M., 1983, 環境無機化学－元素の循環と生化学－. 浅見輝男・茅野充男訳, 博友社, 297p.

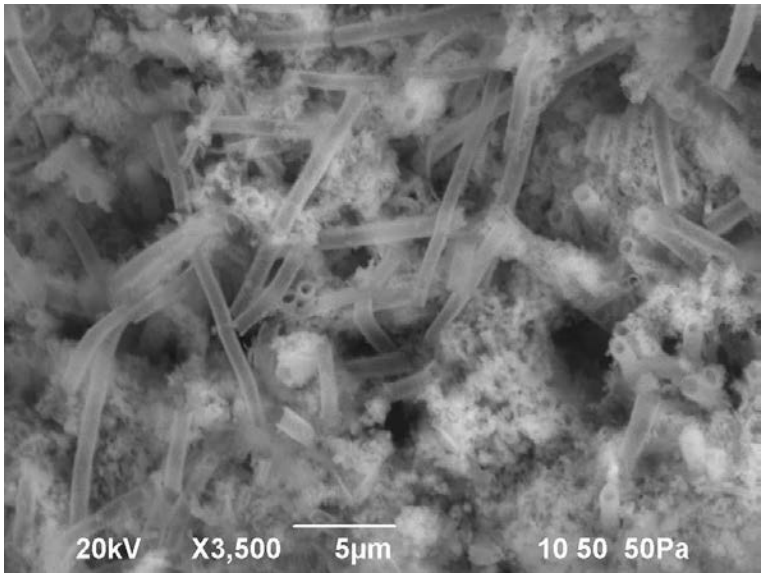
Bolt, G. H.・Bruggenwert, M. G. M, 1980, 土壌の化学. 岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽　捷行訳, 学会出版センター, 309p.

図版１　Ｃ区 SD２赤色顔料サンプル

試料全体



赤色顔料分布状況
（試料全体の赤枠拡大）



赤色顔料電子顕微鏡写真

第Ⅴ章　総括

本調査で検出された集落跡は、出土遺物の様相から、弥生時代後期段階から古墳時代前期段階にかけて継続した集落と考えられる。そこで、本章では検出遺構を弥生時代後期段階（第一段階）と古墳時代初頭段階（第二段階）に大別し、出土した在地系土器群である箱清水式土器群の変遷に関して若干の検討を試み、総括としたい。なお、長野盆地の弥生時代後期から古墳時代前期の土器編年は、多くの先行研究によって整理されている。本調査出土土器における編年的位置を示すにあたり、本章では、青木一男（青木1996・1998）、土屋積（土屋1998）、および千野浩（千野1991）の編年を参考とした。

【第一段階：弥生時代後期後半段階】

SB３、７、９～11、14～22、24、25、SK24、SK30が該当する。竪穴住居の平面形態は隅丸長方形を呈し、中央壁寄りに地床炉または土器埋設炉を設ける。谷状地形範囲を除き、調査区のほぼ全域に分布が認められた。調査区中央から西端にかけて、密度を高くする。SB９とSB25からは特に多くの遺物が出土しており、良好な一括資料を得ることができた。両遺構とも、出土した土器は在地系土器である箱清水系土器群と北陸系を主体とする外来系土器群によって構成されている。SB９からはまとまった量の北陸系土器が出土しており、箱清水式土器との共伴関係について検討する上で、良好な資料となろう。

SK24からは、壺・甕・高杯がまとまって出土し、３点のセット関係が注目される。その出土状況から土器棺墓の可能性もあるが、本調査では埋葬を裏付ける資料が得られなかったため、可能性を提示するにとどめておく。次に、SB９、25、SK24出土土器を中心に、本調査地出土の在地系弥生時代後期土器群である箱清水式土器に関して記述する。

本調査地から出土した当該期の箱清水式土器の器種には、壺、甕、高杯、鉢が認められた。

壺は、胴下部に最大径を持つ無花果形を呈し、最大径となる部分に二段階成形によるくびれが認められるもの（65、66、76）が主体である。頸部内部は屈曲点を持たず、口縁部にかけて弓上に立ち上がって大きく外反する（153）、箱清水式土器壺類の典型的なプロポーションを示す。調整は内面をハケ調整、外面をミガキ調整し、外面は赤彩を施す。赤彩は、外面全体のほか口縁部の内面まで行う個体も見られた。施文は櫛状工具による簾状文およびＴ字文（230）である。施文範囲が確認できるものに関しては、肩部上位から頸部の一部に幅広く施文される。調整や施文の簡略化は認められない。

甕は頸部内面に屈曲点を持たず、頸部から口縁部にかけて弓状に外反する形態（79、166、168）で、壺類と同様に箱清水式土器の典型的なプロポーションを示すものが主体である。胴下部の外面はヘラミガキ調整を行い、口縁部から胴最大径まで櫛状工具による波状文および簾状文を充填的に施文する（166）。この中で、SB９出土の77やSK24出土の209には、頸部内面に変化点がみられ、甕の成形技法に新たな要素が認められる。

高杯は出土点数が少ないが、杯部が椀形を呈すものと、屈曲部を持つ有段口縁形となるものが認められる。また、谷状地形から出土した高杯脚部（248～251）は、有段口縁長脚高杯の脚部と想定され、当該期の箱清水式土器の様相をよく示している。杯部内外面と脚部外面を丁寧にミガキ調整し、赤彩を行う。

鉢の形態は、逆ハの字状に開くもの（156）と口縁部が内湾するもの（112）が認められ、口唇部に紐孔を持つもの（172、173）や片口が付くもの（114）など、バリエーションに富む。多くは赤彩が認められるが、176など、赤彩を行わない個体も存在する。

これらの様相から、本遺跡出土の弥生時代後期土器群は、第３期５段階（青木1998）に相当すると考えられる。

当該期は、長野盆地において集落が拡散・増加する時期と考えられ、そうした集落の一つが新諏訪町遺跡にあったものと推察する。

また、本調査区では該期の遺構に重複関係がみられた。出土土器全体の変化は顕著ではないが、甕類の成形や施文に差異がみられ、SB９、SK24はSB25よりもやや新相に位置付けられる可能性がある。

本調査で最も多量の土器が出土したSB９は、本遺跡における弥生時代後期土器群の基準遺構のひとつであるが、箱清水式土器の他に多量の北陸系土器が共伴した点でも注目される。SB９から出土した北陸系土器には、小型壺、細頸壺、擬凹線文の有段口縁を持つハケ調整平底甕、高杯類があり、その様相から法仏式～月影式段階の土器群と判断する。本遺跡に近い、長野盆地北西部の浅川扇状地では、当該期の箱清水式土器に北陸北東部系の弥生土器が共伴する例が、本村東沖遺跡や檀田遺跡等で知られてきた。本遺跡出土の北陸系土器群に関しても、更なる検討が必要であり、今後の課題としたい。

なお、一括性の高いSB９出土土器群だが、その割合を見ると、外来系土器群を主体とすることが分かる。甕類と高杯にその傾向が強く、特に高杯は約８割が外来系で占められている。こうした組成から、SB９の出土状況はSB25にみられるような箱清水式土器の一括使用行為とは異なっていた可能性があり、今後の検討課題である。

【第二段階：古墳時代初頭段階】

SB２、SB５、SB６、SB８が該当する。竪穴住居の平面形態は隅丸方形へと変化する。炉は地床炉で、住居の中央壁寄りに設けられる。また、住居規模が前段階に比べて大きくなる。分布は、調査区中央から西側にかけてで、谷状地形以東には分布がみられなかった。SB６とSB８から、比較的多くの遺物が出土していることから、この２遺構の出土遺物を中心に本遺跡出土の古墳時代前期段階の土器に関して記述する。箱清水式土器の系譜を中心に整理を行うが、新出系の器種に関してもふれる。

出土した器種には、壺、甕、高杯、鉢、器台が認められる。

壺は、箱清水式土器から系譜が追えない新出系の広口壺（18）、二重口縁壺（41）が主体と考えられる。箱清水系の壺（14、35）は、胴下部に二段階成形による屈曲点をもち、胴中部が最大径となる球胴形を呈する。口縁部はくの字状に短く外反する形態となり、頸部にも屈曲点が見られた。そのプロポーションは新出系の広口壺に共鳴する。肩部には櫛状工具によるＴ字文が施文されるが、全体的に粗雑化しており、施文を行わない個体も認められる。また、外面のミガキ調整は共通するものの、赤彩を行わない個体が散見される。

甕は、胴中部～上位に最大径を持つ球胴形を持つものが主体である。頸部から口縁部にかけて、「くの字」状に屈曲し、胴部外面にはハケ調整が施される（ハケ調整くの字甕）。胴下部外面と口縁部～胴部内面にヘラミガキ調整が認められ、箱清水式土器の調整手法を受け継いでいるといえる。また、SB８出土の甕（50）は外面に櫛描波状文を充填するが、頸部に明確な屈折部を持ち、口縁部を面取りする等、「箱清水式の甕」と「ハケ調整くの字甕」双方の特徴を持つ資料である。前段階に比べて甕類は特に変化が顕著であり、在地の箱清水式土器甕は客体的な様相を呈している。

高杯および器台は、杯部全体と脚部外面を丁寧にミガキ調整した精製土器が主体となる。箱清水式土器の有段口縁長脚高杯（207）から、東海系の有稜高杯（29、30、58）に転換している。小型器台（32、61）、小型高杯（60）といった、小型精製土器群が定着しているものと思われる。SB８出土高杯および器台（60～62）のような、小型品もみられる。

鉢は、椀形で小型のものが主体である。底部はいずれも平底で、丸底のものはみられなかった。SB８出土の

53は、口径52.6cmを測る大型品で、内外面を丁寧にミガキ調整している。

これらの様相から当該期の土器群は、前段階に引き続き、在地系土器群と外来系土器群によって構成されるが、在地の箱清水式土器は大きく変容する段階と言えよう。主体を成すのは、ハケ調整くの字甕に代表される在地化した土器群で、内外面のミガキ調整や櫛描文に箱清水式の伝統を残すものの、新たな在地系式が定着しつつある段階と考えられる。時期は、弥生時代の最終末期から古墳時代初頭で、編年的位置付けでは第5期（青木1998・土屋1998）に相当すると判断する。

なお、SB1からは小型丸底土器3点が出土しており、遺構の時期としては更に一段階下って古墳時代前期に相当すると考えられる。今回の調査では該期の遺構はSB1のみだが、集落が古墳時代前期段階まで継続していた可能性を示すものである。

以上、本遺跡出土の弥生時代後期後半から古墳時代初頭の土器群の変遷に関して整理・検討を行った。本調査で検出された外来系土器群を含む良好な土器群は、長野盆地における該期の土器変化の様相を示すものとして注目される一括資料である。弥生時代後期後半の箱清水式期から北陸系土器の流入を経て、御屋敷期、東海系土器群の影響を受けた在地系土器群の成立期へと続く、一連の流れを示す良好な資料と言えよう。しかし、未だ検討課題は多く、今後も本調査成果をもとに長野盆地における箱清水式土器に共伴する北陸系土器のあり方や箱清水式土器から転換していく古墳時代の在来土器様式について等、検討を重ねていく必要がある。

引用・参考文献

青木一男　1989「土器にみる森将軍塚古墳出現の前後－千曲川流域の研究と今後の課題－」『長野県埋蔵文化財センター紀要3』

青木一男　1993「土器様相変化の素描」『長野県考古学会誌』69・70合併号　長野県考古学会

青木一男　1998「第4章　成果と課題　第1節　中部高地型櫛描文系土器群の理解　第2節　古墳時代前期の土器の理解」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5　松原遺跡　弥生・総論6』（財）長野県埋蔵文化財センター

飯島哲也　1991「長野市松原遺跡出土の石戈について」『長野県考古学会誌』63号　長野県考古学会

石川県立埋蔵文化財センター　1986「漆町遺跡Ⅰ」

石川県立埋蔵文化財センター　1988「漆町遺跡Ⅱ」

出雲市教育委員会　1997「白枝荒神遺跡」

臼居直之　1993「弥生時代終末から古墳時代前期の様相」『長野県考古学会誌』69・70合併号　長野県考古学会

岡本孝之　2014「吉石型石剣試論－いわゆる有孔石剣の再検討－」『神奈川考古』第50号　神奈川考古同人会

上山田町教育委員会　2002「御屋敷遺跡」

更埴市教育委員会　1971「下条・灰塚遺跡」『長野県更埴市の古代集落遺跡発掘調査報告』

小山岳夫　2008「中部高地における中期から後期の地域的動向」『「赤い土器のクニ」の考古学』　雄山閣

（財）鳥取県教育文化財団　2001「青谷上寺地遺跡3－本文編－」

（財）長野県埋蔵文化財センター　1994「栗林遺跡・七瀬遺跡」『県道中野豊野線バイパス　志賀中野有料道路埋蔵文化財発掘調査報告書』

（財）長野県埋蔵文化財センター　1998「牛出遺跡・韮山遺跡・風呂屋遺跡・対面所遺跡・飛山遺跡・大谷地遺

跡・八号堤遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書14』
（財）長野県埋蔵文化財センター　1999 「榎田遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書12』
（財）長野県埋蔵文化財センター　1990 「石川条理遺跡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書15』
坂井秀弥・川村浩司　1993 「古墳出現前夜における越後の土器様相－越後・会津・能登－」『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』「磐越地方における古墳文化形成過程の研究」研究者グループ
笹沢　浩　1969 「長野市新諏訪町遺跡」『信濃考古』27
笹沢　浩　1982 「新諏訪町遺跡」『長野県史　考古資料編主要遺跡（北・東信）』 長野県
笹沢　浩　1996 「日本土器辞典」 雄山閣出版（株）
笹沢　浩　2008 「箱清水式土器の文化圏と小地域－地域文化圏の動静－」『「赤い土器のクニ」の考古学』 雄山閣
関沢　聡　1994 「松本平平野部における弥生時代の石製武器について」『中部高地の考古学Ⅳ』長野県考古学協会
次山　淳　2016 「江代割遺跡出土の台付装飾壺と弥生時代後期の日本海交流」『とやまの弥生王権－神通川と日本海交流－』
富山市考古資料館
田島明人　2008 「古墳確立土器の広域編年－東日本を対象とした検討（その１）」『石川県埋蔵文化財情報』第20号
（財）石川県埋蔵文化財センター
田島明人　2009 「古墳確立土器の広域編年－東日本を対象とした検討（その２）」『石川県埋蔵文化財情報』第21号
（財）石川県埋蔵文化財センター
田島明人　2010 「古墳確立土器の広域編年－東日本を対象とした検討（その３）」『石川県埋蔵文化財情報』第22号
（財）石川県埋蔵文化財センター
千野　浩　1992 「千曲川水系における弥生後期式土器の変遷」『信濃　41－４』信濃史学会
土屋　積　1998 「第３章　牛出遺跡第２地点　第６節　成果と課題－長野盆地北部の古墳出現前夜－」『上信越自動車道　埋蔵文化財発掘調査報告書14　牛出遺跡・韮山遺跡・風呂屋遺跡・対面所遺跡・飛山遺跡・大谷地遺跡・八号堤遺跡』（財）長野県埋蔵文化財センター
寺前直人　2010 「武器と弥生社会」 大阪大学出版
寺前直人　2012 「着柄時に目釘を用いた石器」『駒沢考古』37　駒沢大学考古学研究室
長野県長野西高等学校郷土班　1967 「新諏訪町遺跡の研究」『郷土研究 No５』
長野市教育委員会　1990 「篠ノ井遺跡群Ⅲ」『長野市の埋蔵文化財』第37集
長野市教育委員会　1992 「篠ノ井遺跡群（４）」『長野市の埋蔵文化財』第46集
長野市教育委員会　1993 「本村東沖遺跡」『長野市の埋蔵文化財』第50集
長野市教育委員会　2013 「長野女子高校校庭遺跡」『長野市の埋蔵文化財』第134集
長野市誌編さん委員会　1997 『長野市誌』第１巻自然編
長野市誌編さん委員会　2000 『長野市誌』第２巻歴史編　原始・古代・中世

長野市誌編さん委員会　2000 『長野市誌』第12巻資料編　原始・古代・中世
馬場伸一郎　2008 「武器形石製品と弥生中期栗林式文化」『「赤い土器のクニ」の考古学』 雄山閣
前島　卓　1993 「北陸系土器の動向」『長野県考古学会誌』69・70合併号　長野県考古学会

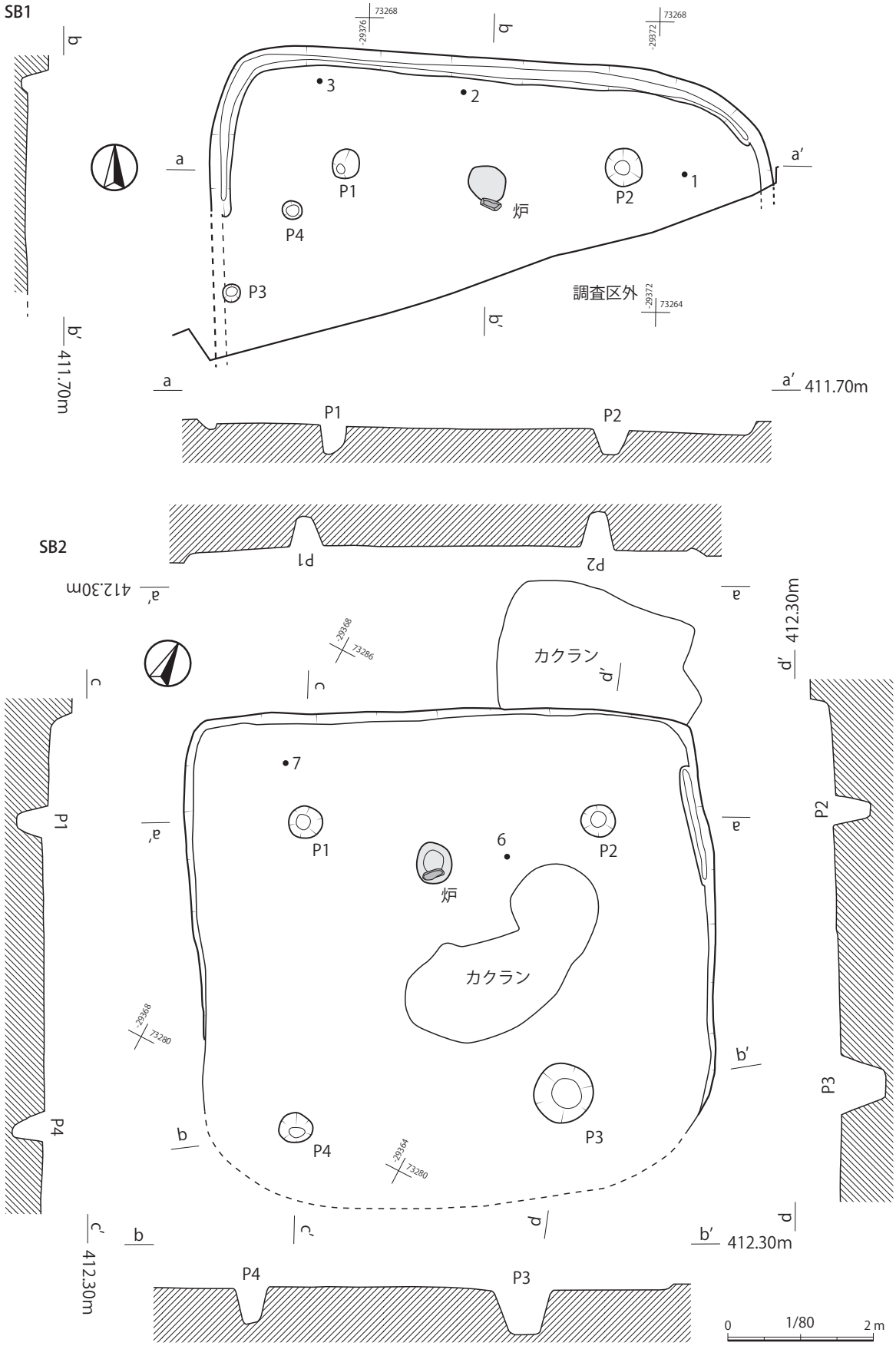
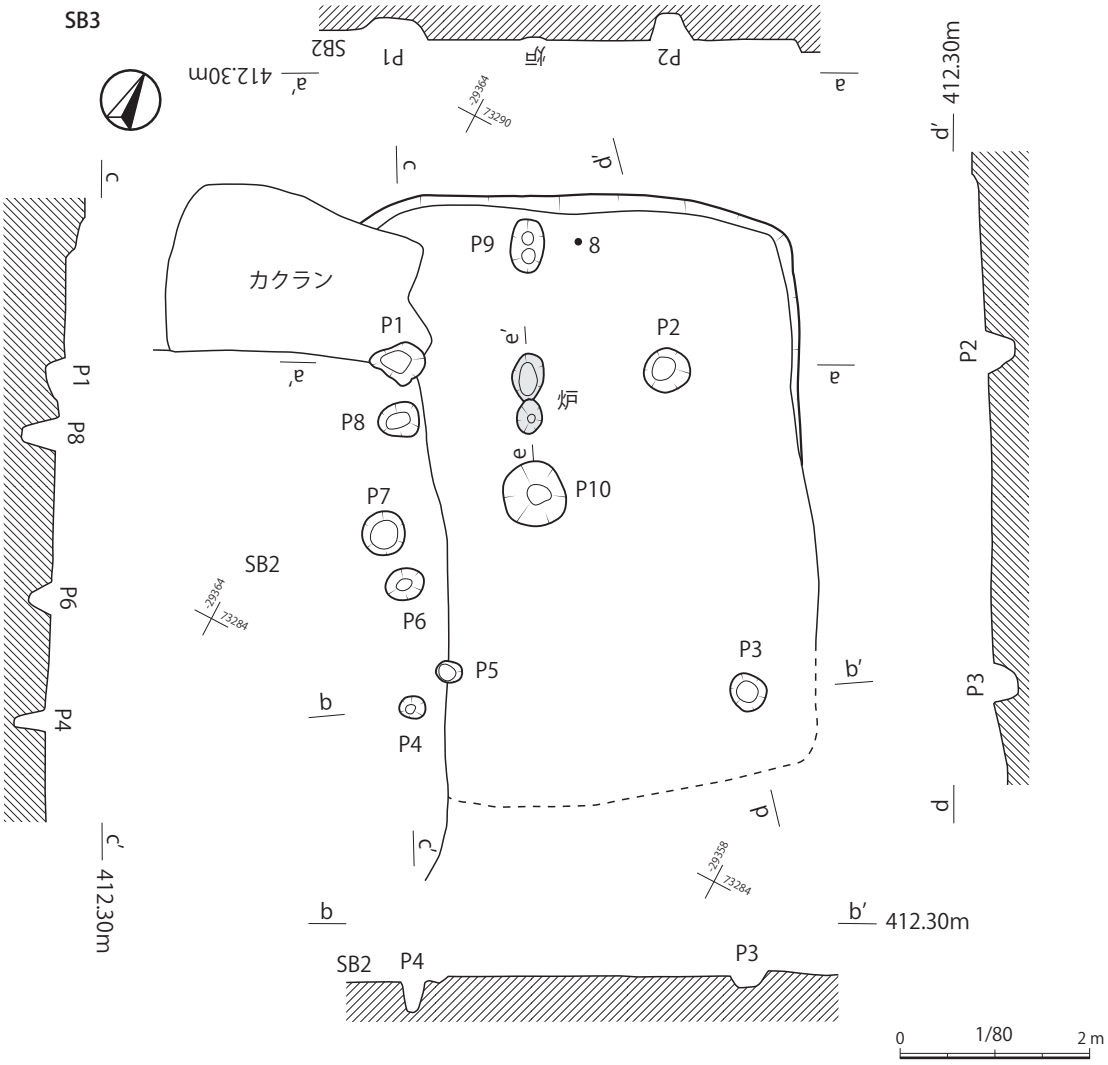
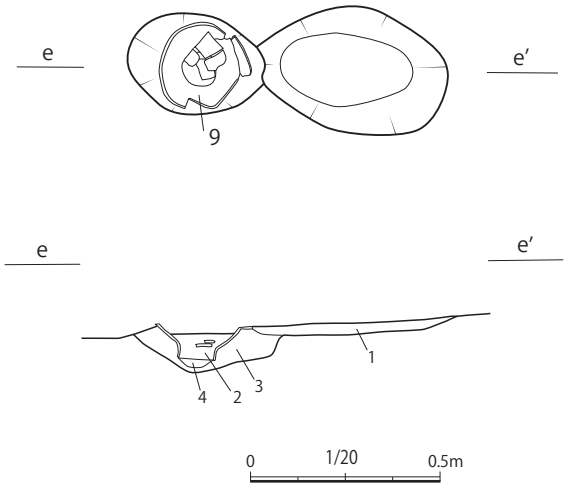


図16 遺構実測図１（SB１・２）

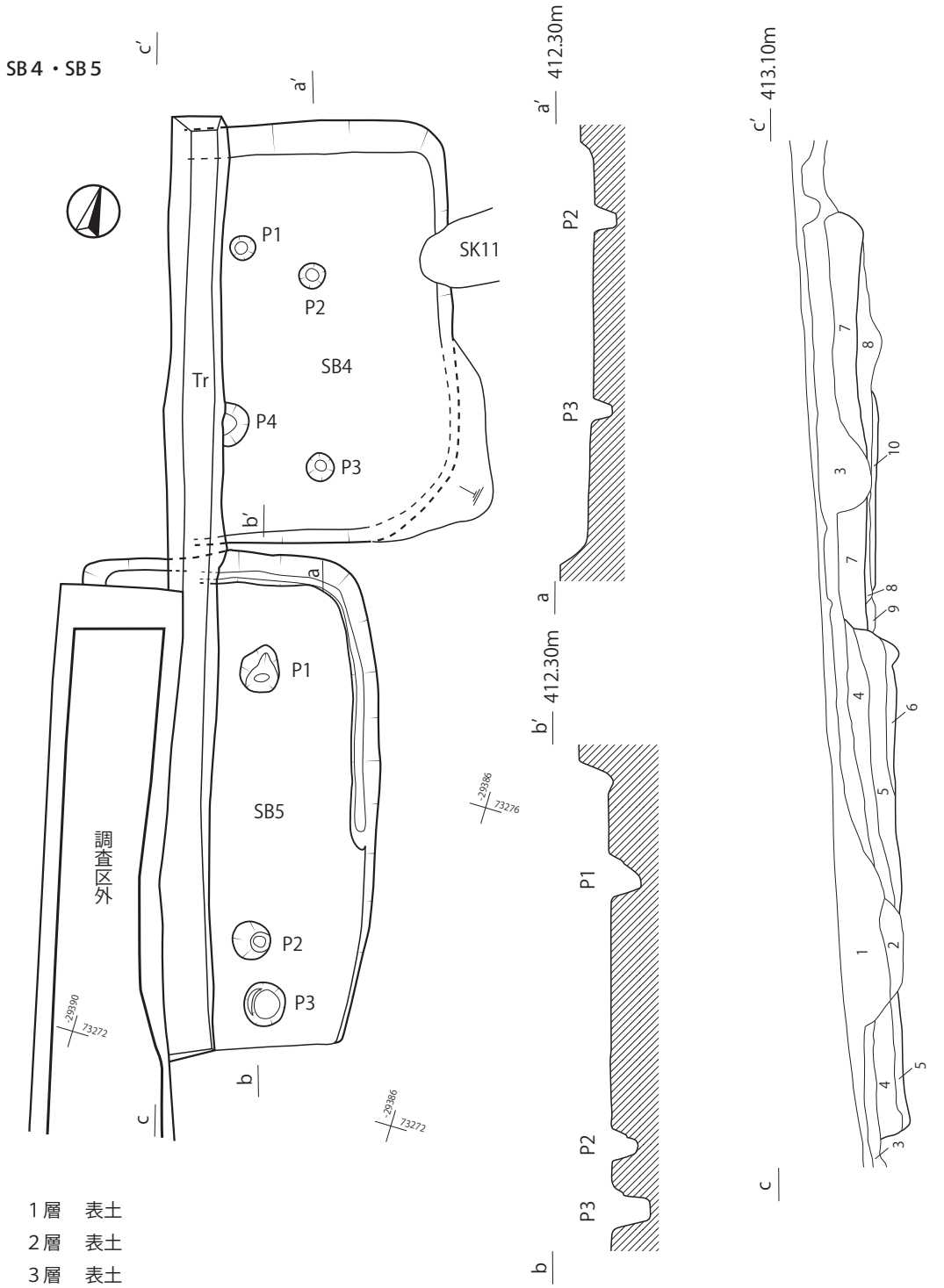


SB3 炉詳細図



1層　黒色シルトしまりややあり粘性なし。
　　5mm 以下の炭をやや多く含む。
2層　黒褐色シルトしまりなし粘性なし。
3層　黒色シルトしまりややあり。
　　1cm 以下のブロックで暗褐色砂質土を少量含む。
　　5mm 以下の炭を少量含む。
4層　灰層

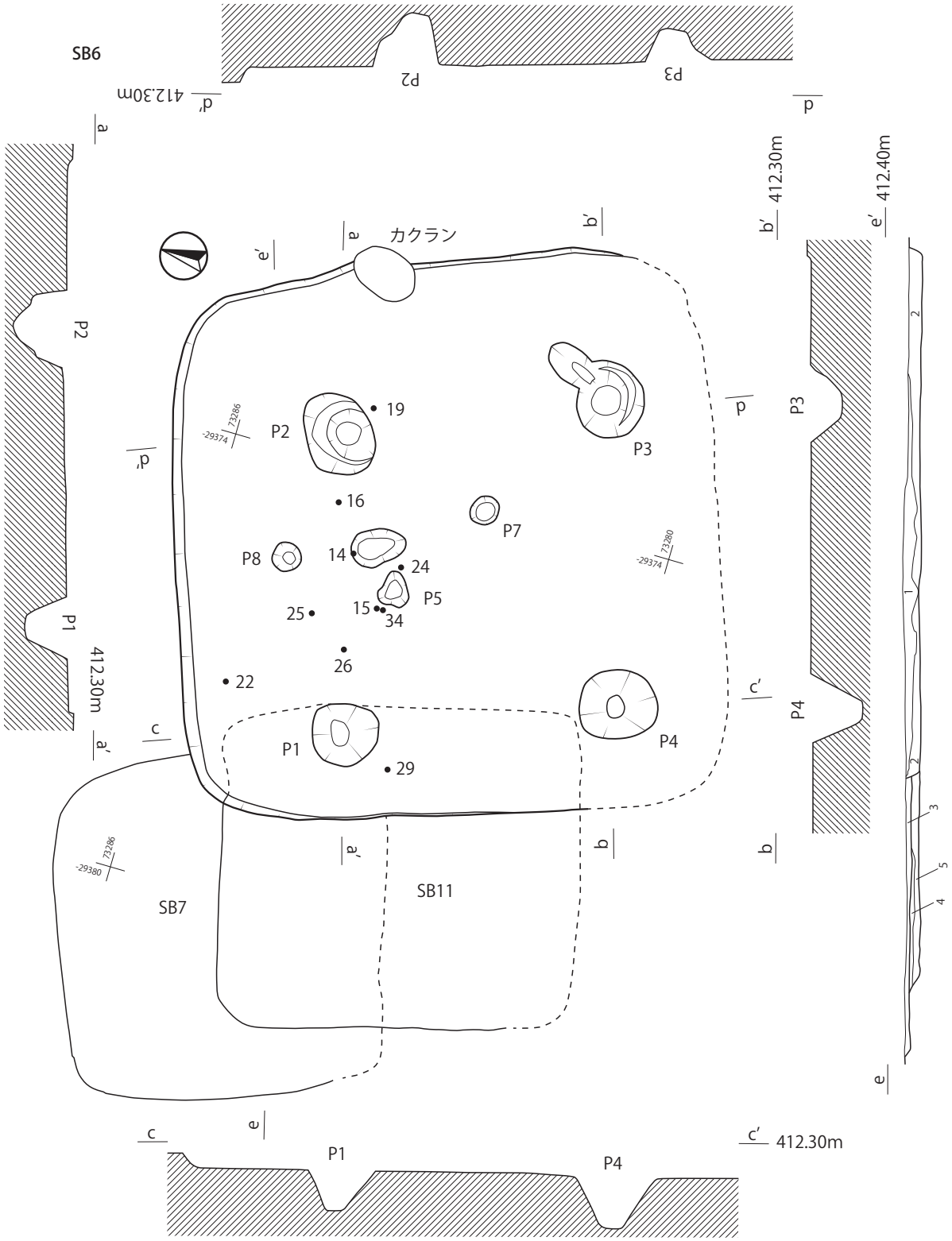
図17 遺構実測図２（SB３）



１層　表土
２層　表土
３層　表土
４層　暗褐色粘質土粘性弱い。ＳＢ５覆土
５層　黒褐色粘質土粘性弱い。３mm 程度の礫を含む。ＳＢ５覆土
６層　黒色粘質土粘性弱い。３mm 程度の礫を含む。ＳＢ５覆土
７層　暗褐色粘質土粘性弱い。ＳＢ４覆土
８層　灰褐色粘質土粘性弱い。ＳＢ４掘方埋土
９層　灰褐色粘質土粘性弱い。ＳＢ４掘方埋土
10 層　黒褐色粘質土粘性弱い。５mm 程度の礫を含む。炭化物を含む。ＳＢ25 覆土

0　1/80　2 m

図18 遺構実測図３（SB４・５）



1層　黒色粘質土しまりなし粘性弱い。30cm 以下の礫を多く含む。ＳＢ６覆土
2層　暗褐色粘質土しまりなし粘性弱い。10cm 以下の礫を少量含む。ＳＢ６覆土
3層　黒褐色砂質土しまりなし粘性なし。５cm 以下の礫をやや多く含む。ＳＢ７覆土
4層　褐色粗砂しまりあり粘性なし。３cm 以下の礫をやや多く含む。ＳＢ７掘方埋土
5層　黒褐色粘質土しまりややあり粘性弱い。３cm 以下の礫をやや多く含む。ＳＢ11 覆土

図19 遺構実測図４（SB６）

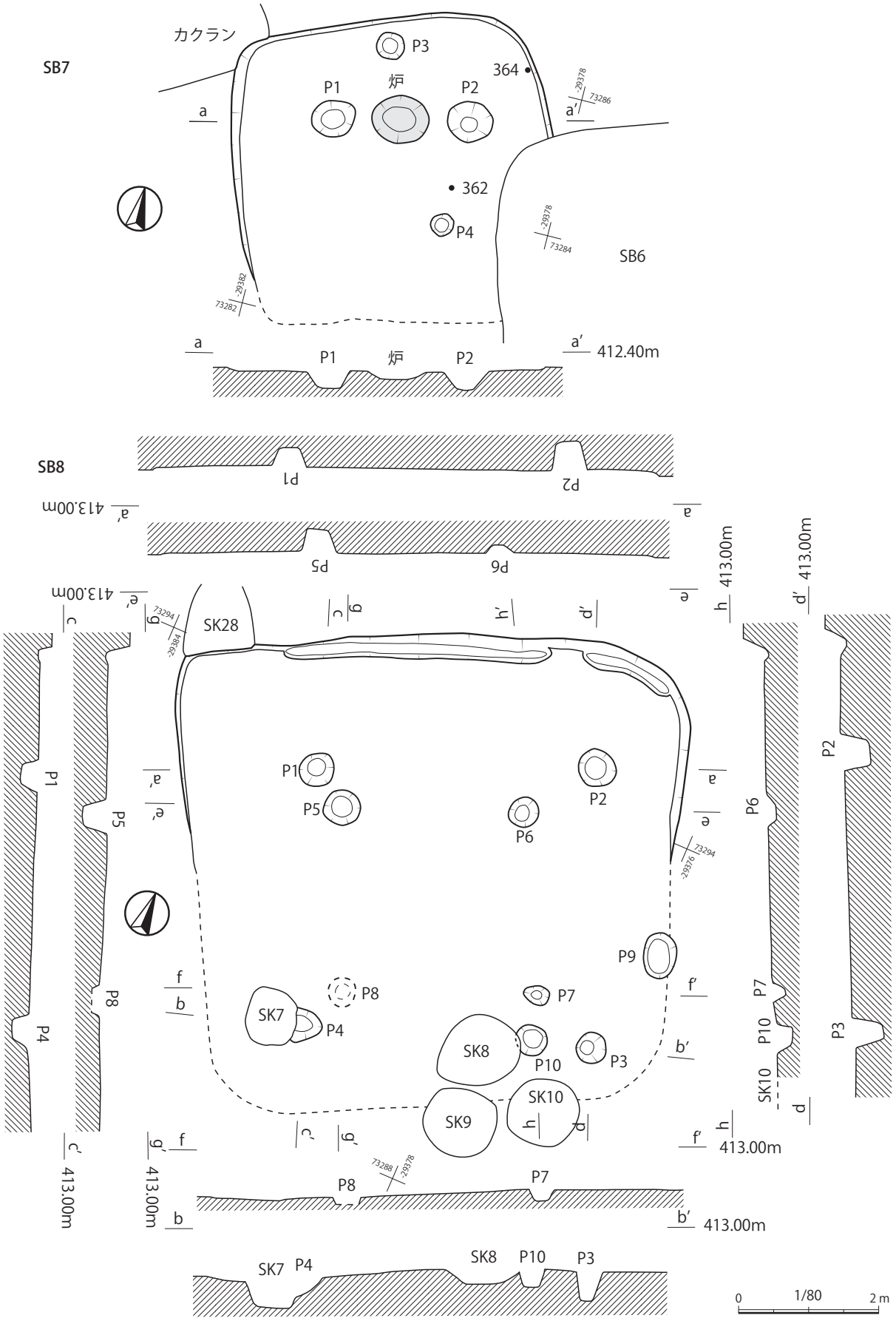


図20 遺構実測図５（SB７・８）

SB8 遺物出土状況

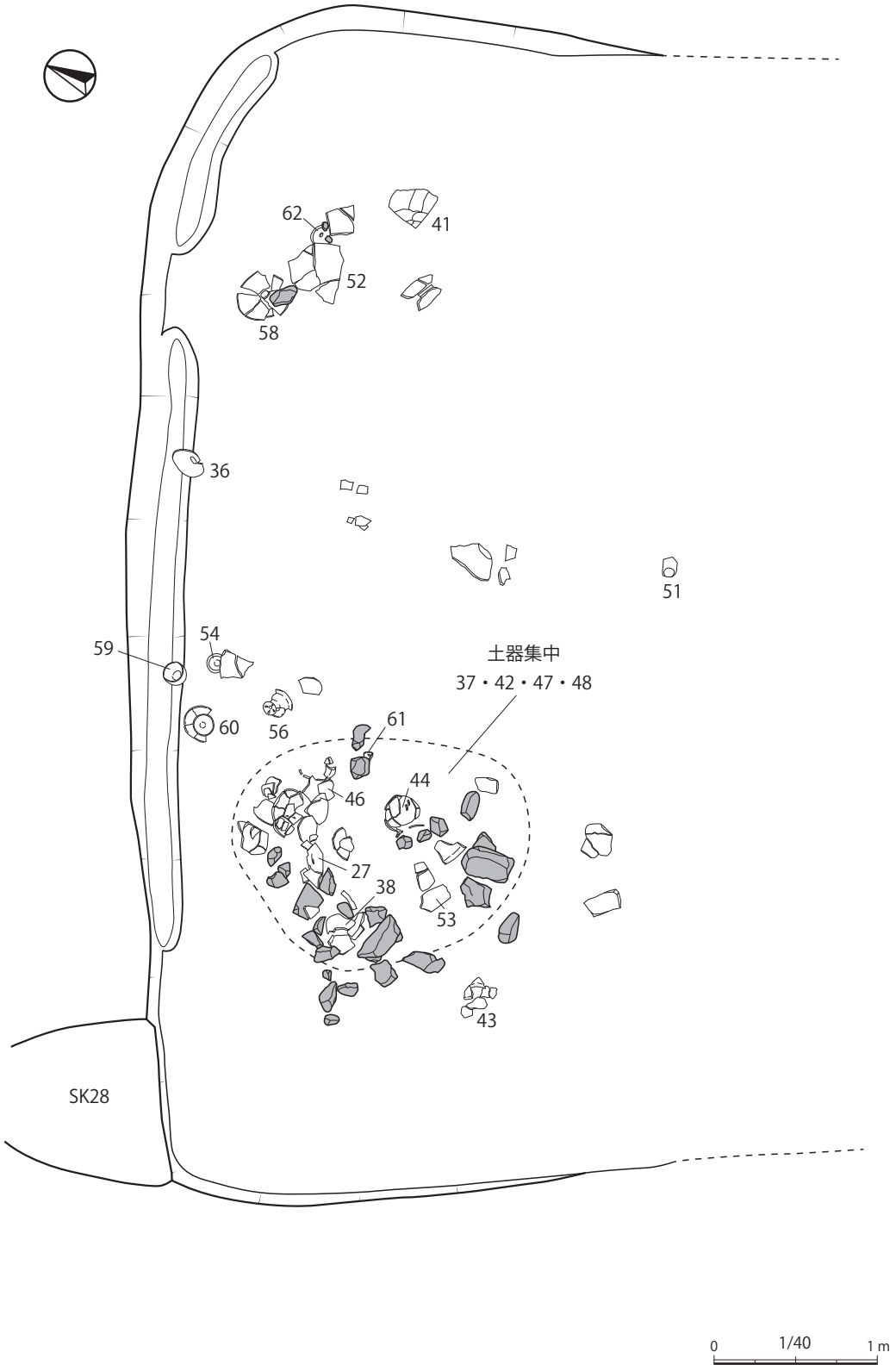
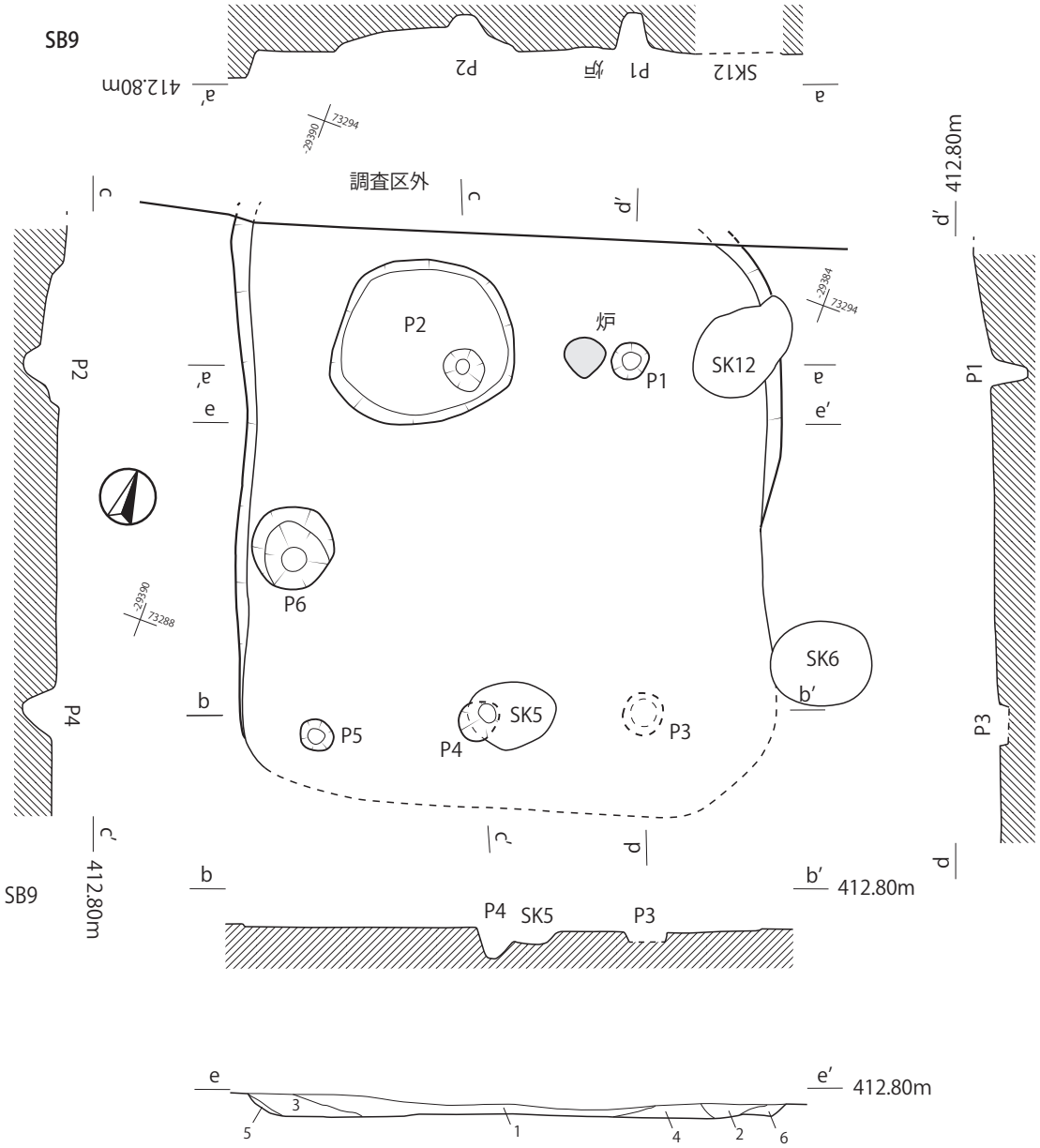


図21 遺構実測図 6 （SB 8 遺物出土状況）



1層　黒褐色粘質土粘性弱い。30cm 以下の角礫を多く含む。
2層　褐色弱粘質土粘性弱い。15cm 以下の円礫を含む。
3層　黒褐色粘質土粘性弱い。
4層　黄褐色粘質土粘性弱い。
5層　暗黄褐色粘質土粘質弱い。
6層　褐色粘質土粘質弱い。炭化物を少量含む。

0　1/80　2 m

図22 遺構実測図７（SB９）

SB9 遺物出土状況

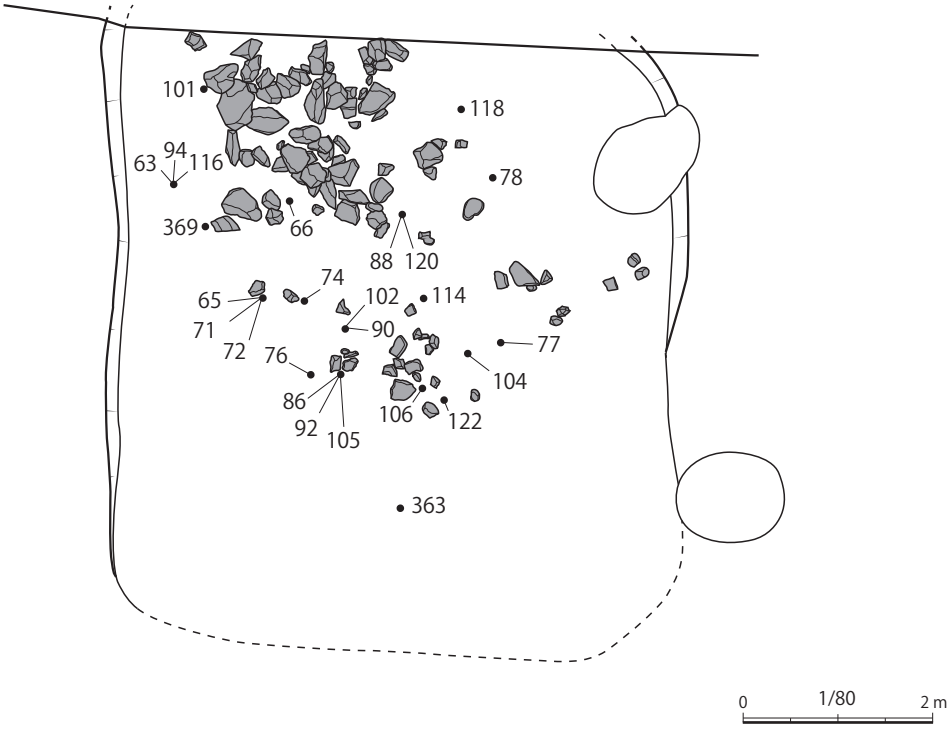


図23 遺構実測図８（SB９遺物出土状況）

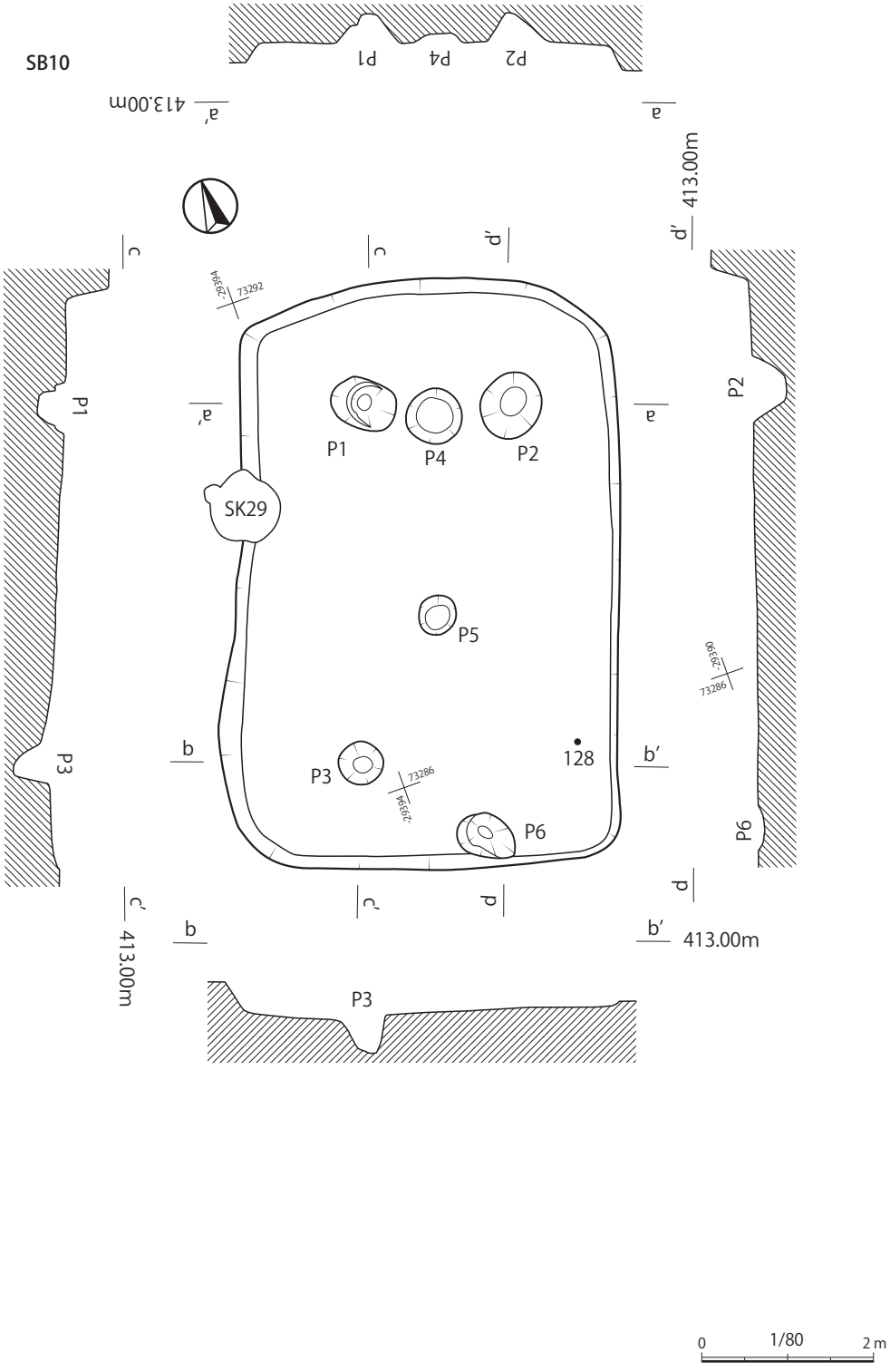
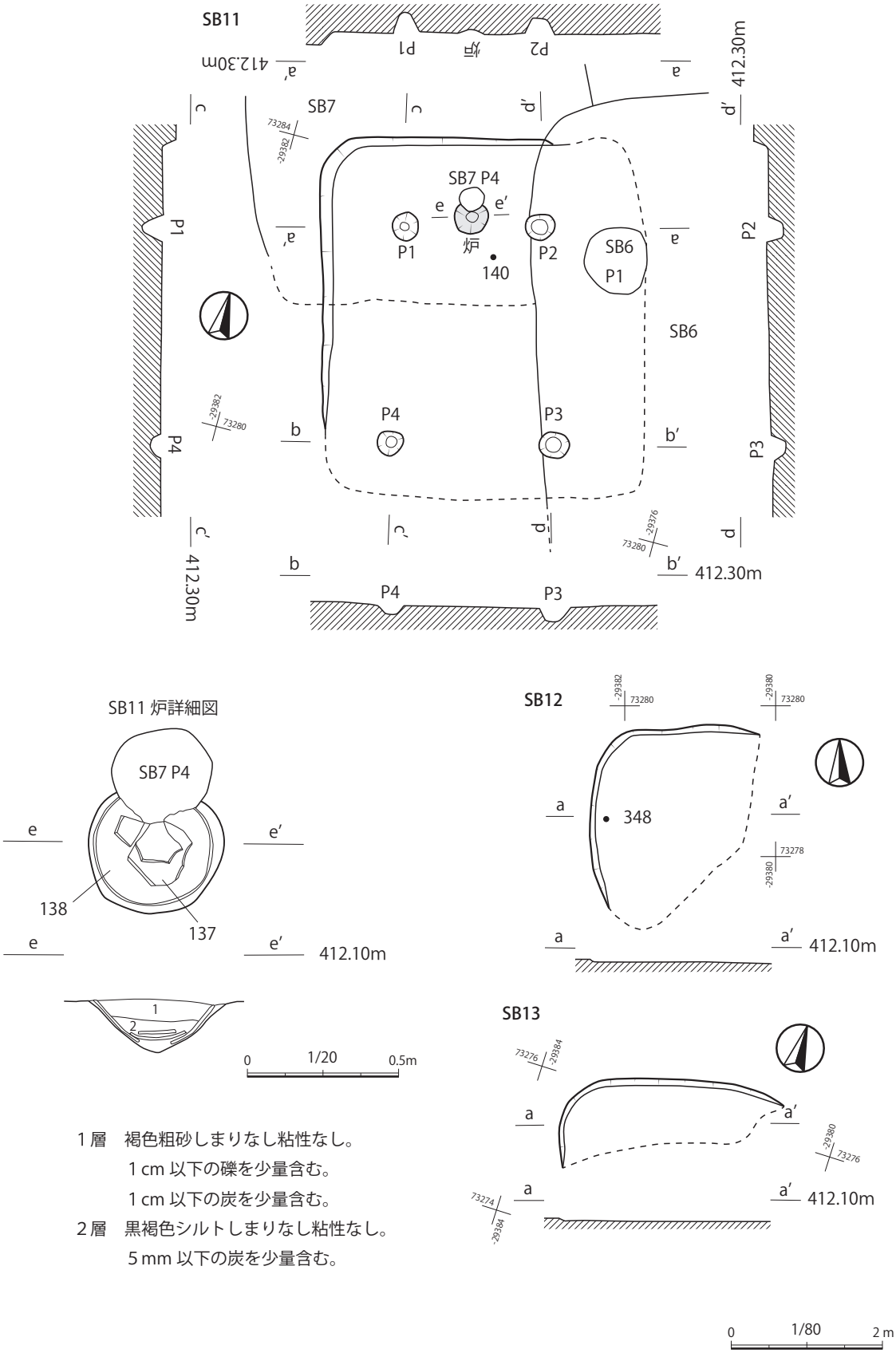


図24 遺構実測図９（SB10）



1 層　褐色粗砂しまりなし粘性なし。
　　1 cm 以下の礫を少量含む。
　　1 cm 以下の炭を少量含む。
2 層　黒褐色シルトしまりなし粘性なし。
　　5 mm 以下の炭を少量含む。

図25 遺構実測図10（SB11・12・13）

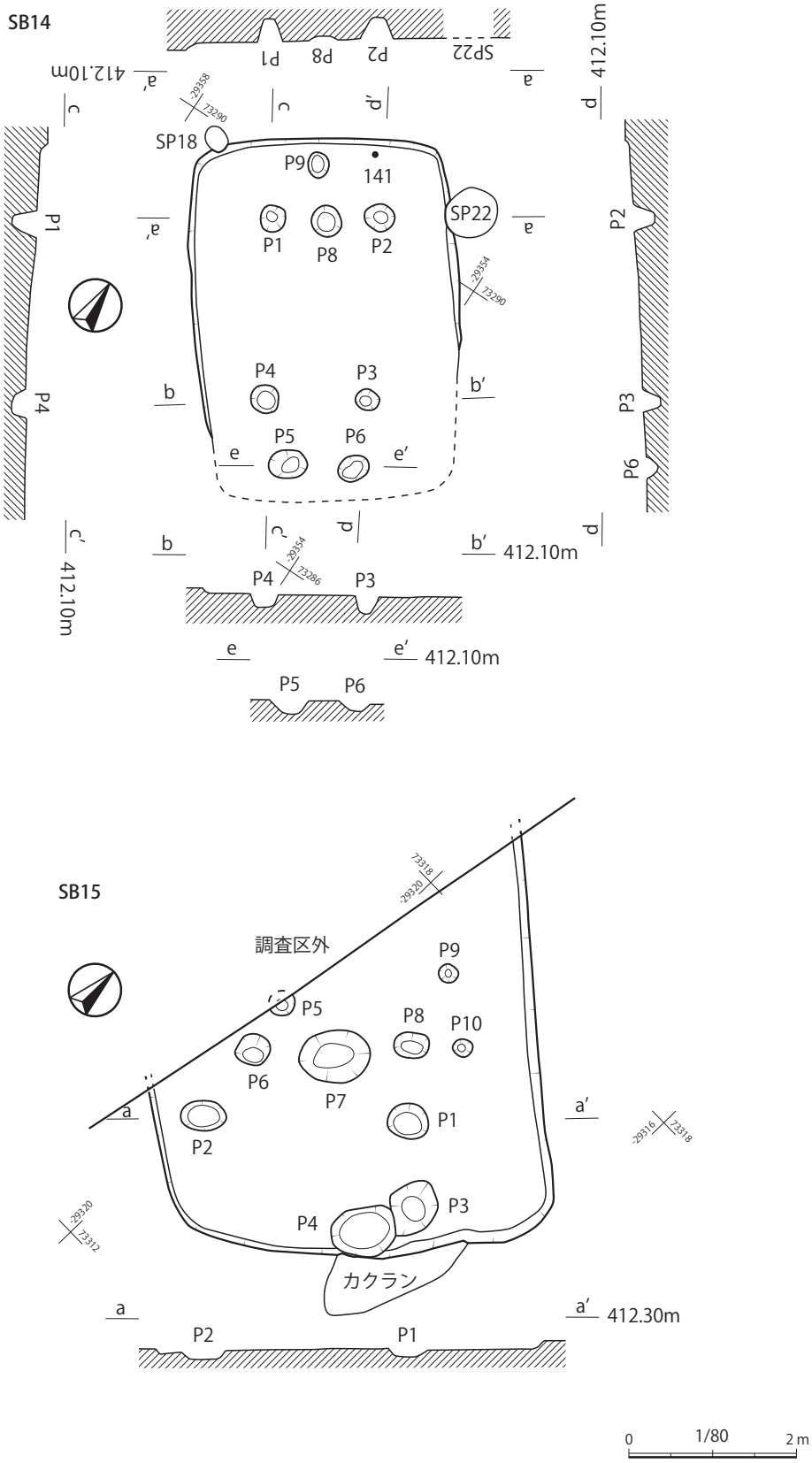


図26 遺構実測図11（SB14・15）

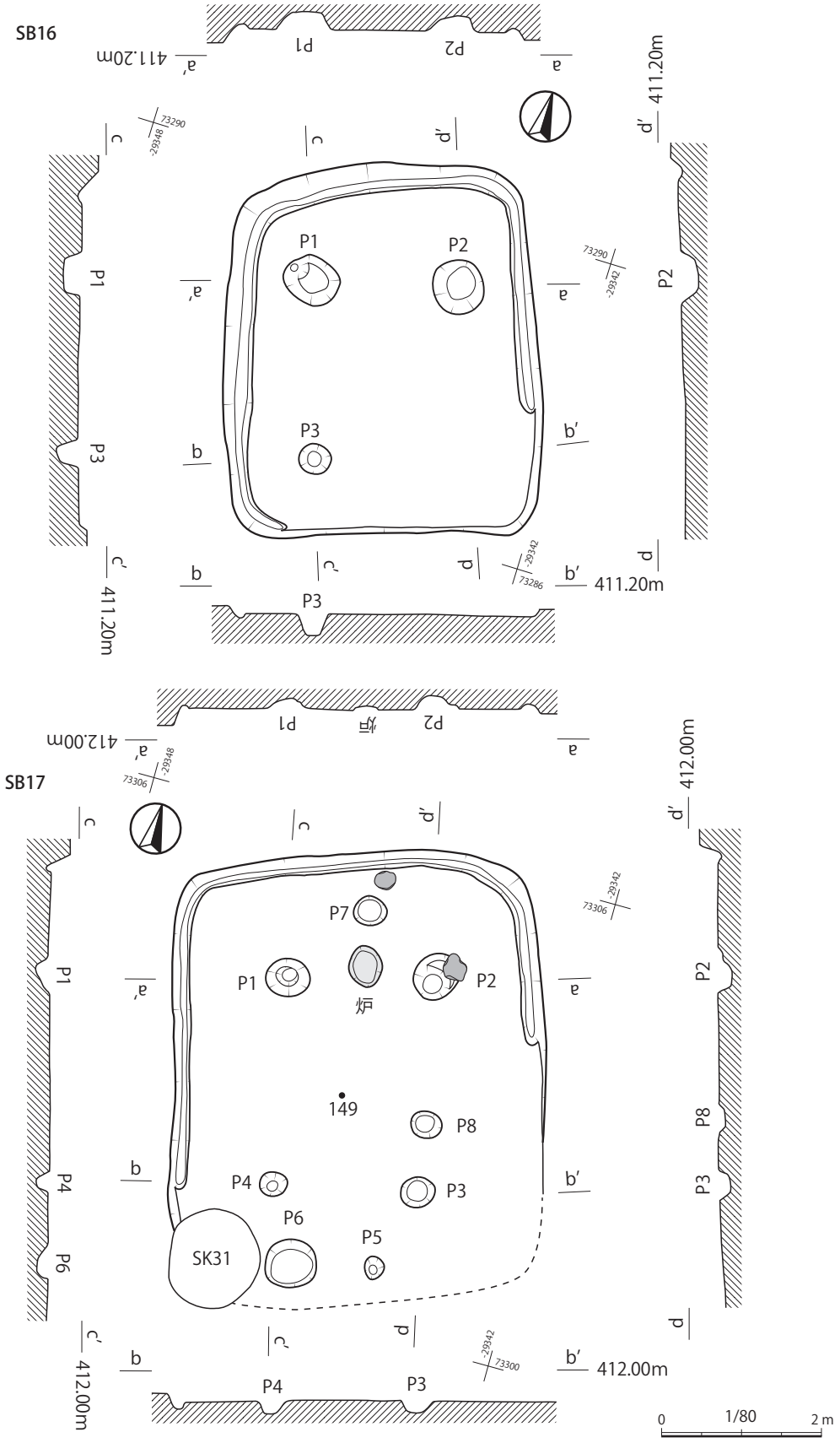


図27 遺構実測図12（SB16・17）

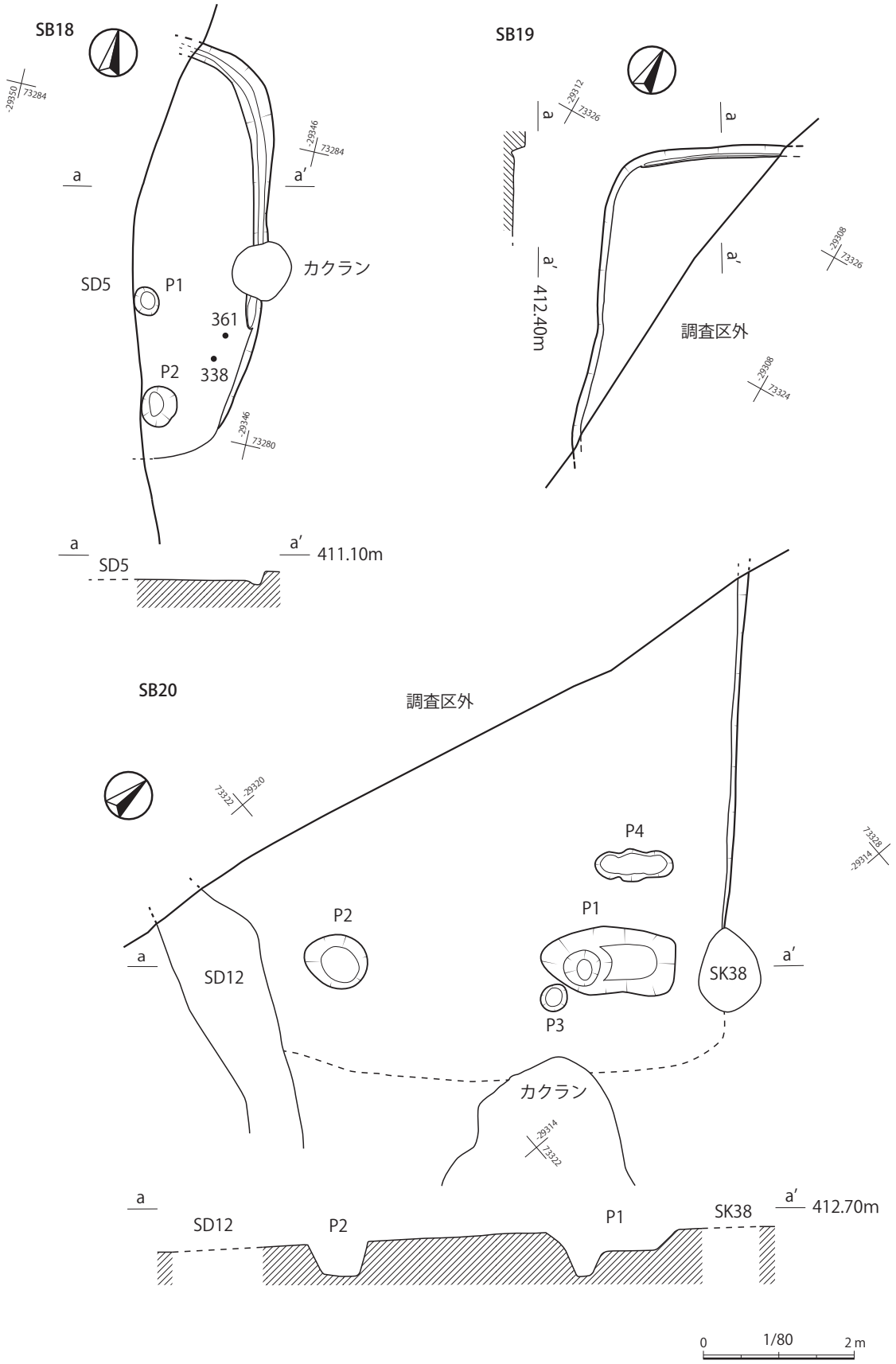


図28 遺構実測図13（SB18・19・20）

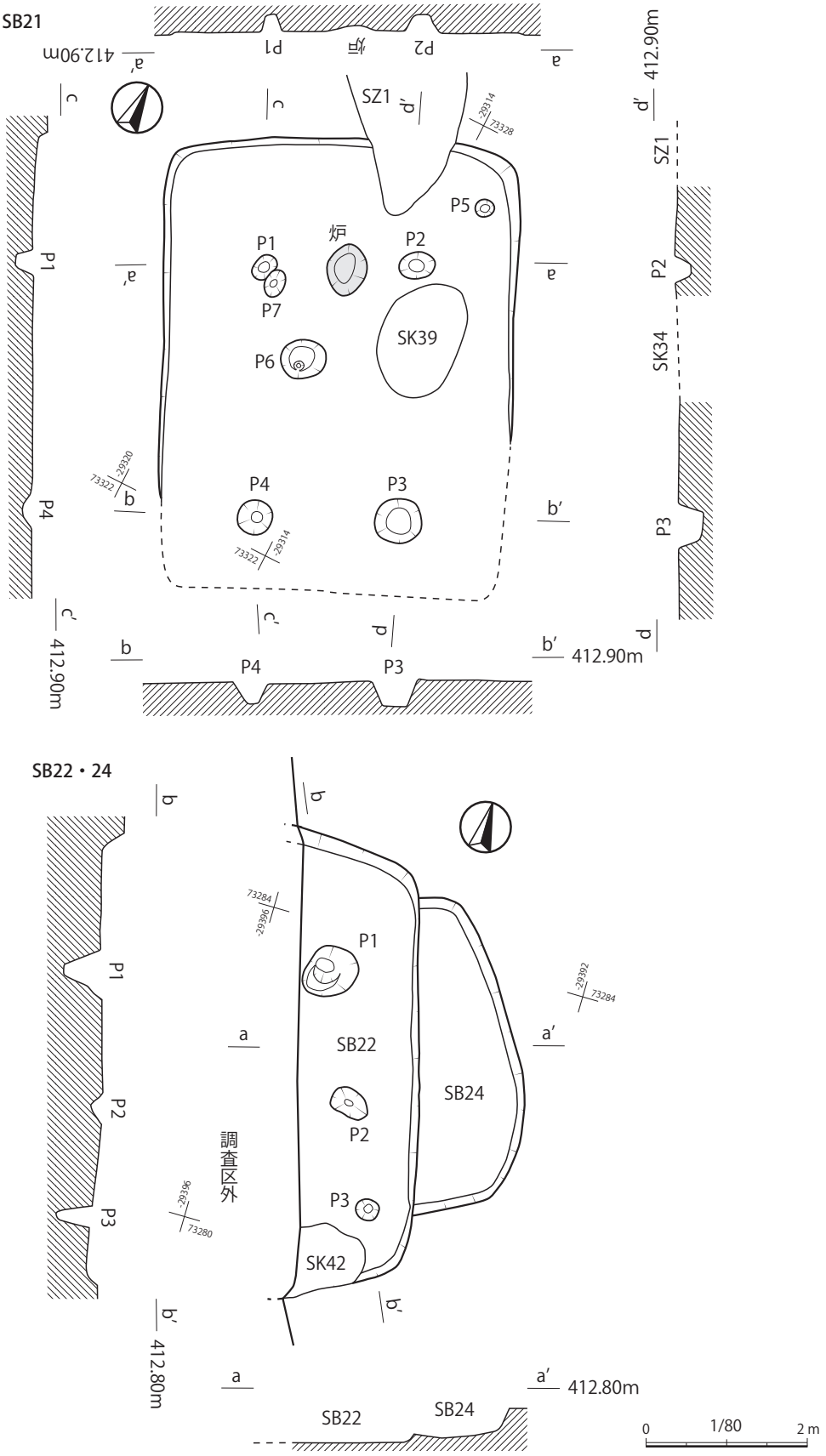


図29 遺構実測図14（SB21・22・24）

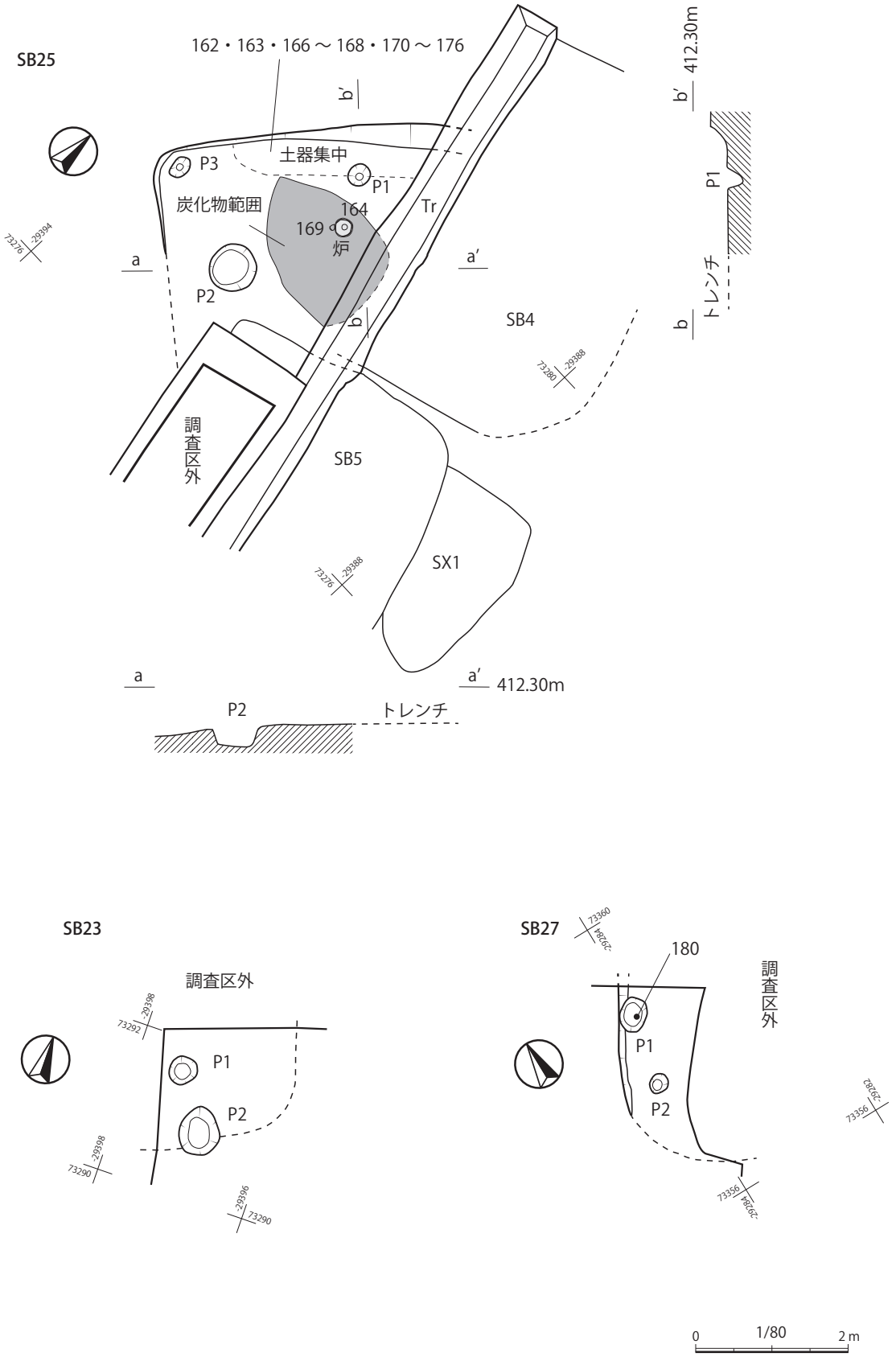


図30 遺構実測図15（SB23・25・27）

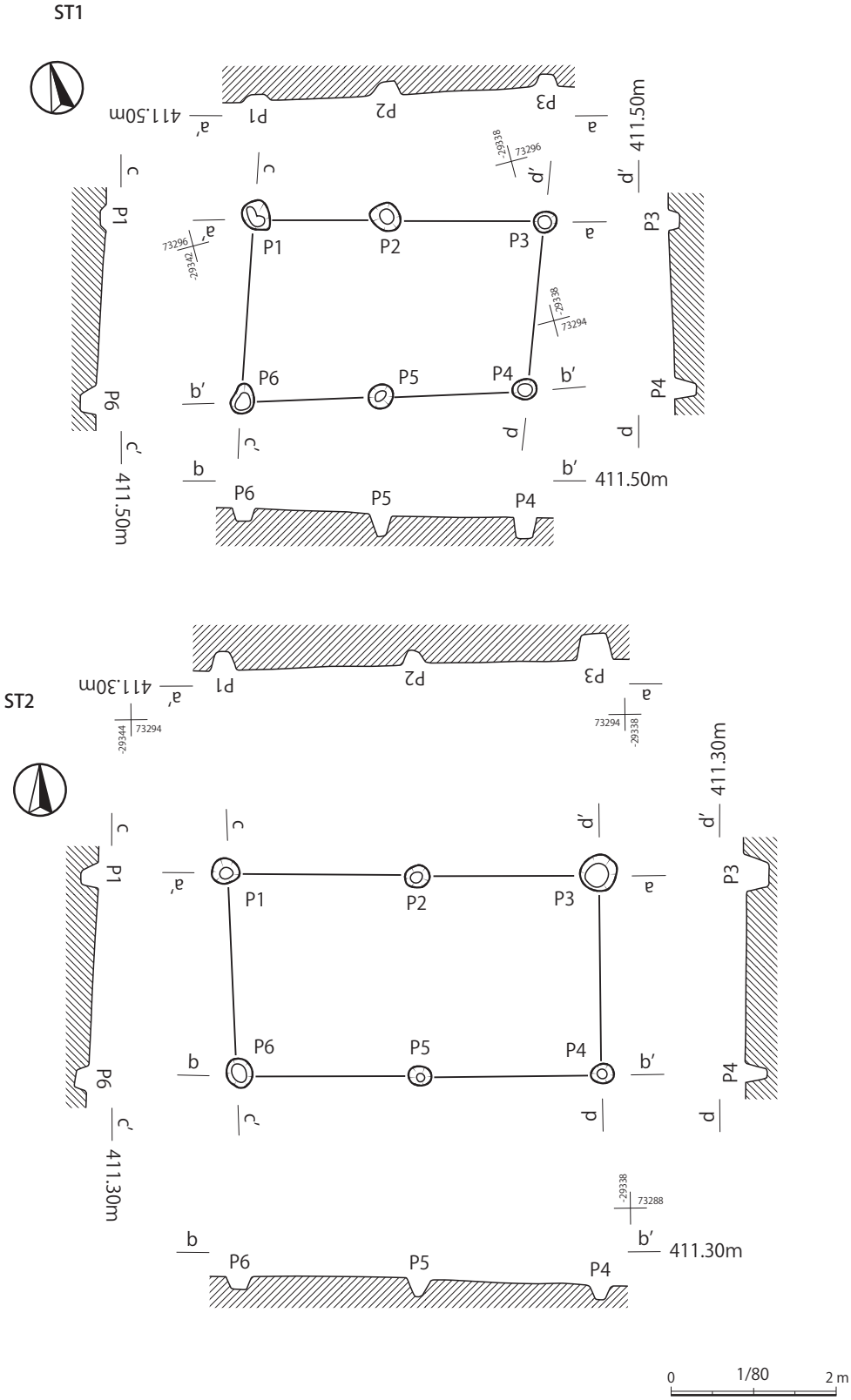


図31 遺構実測図16（ST１・２）

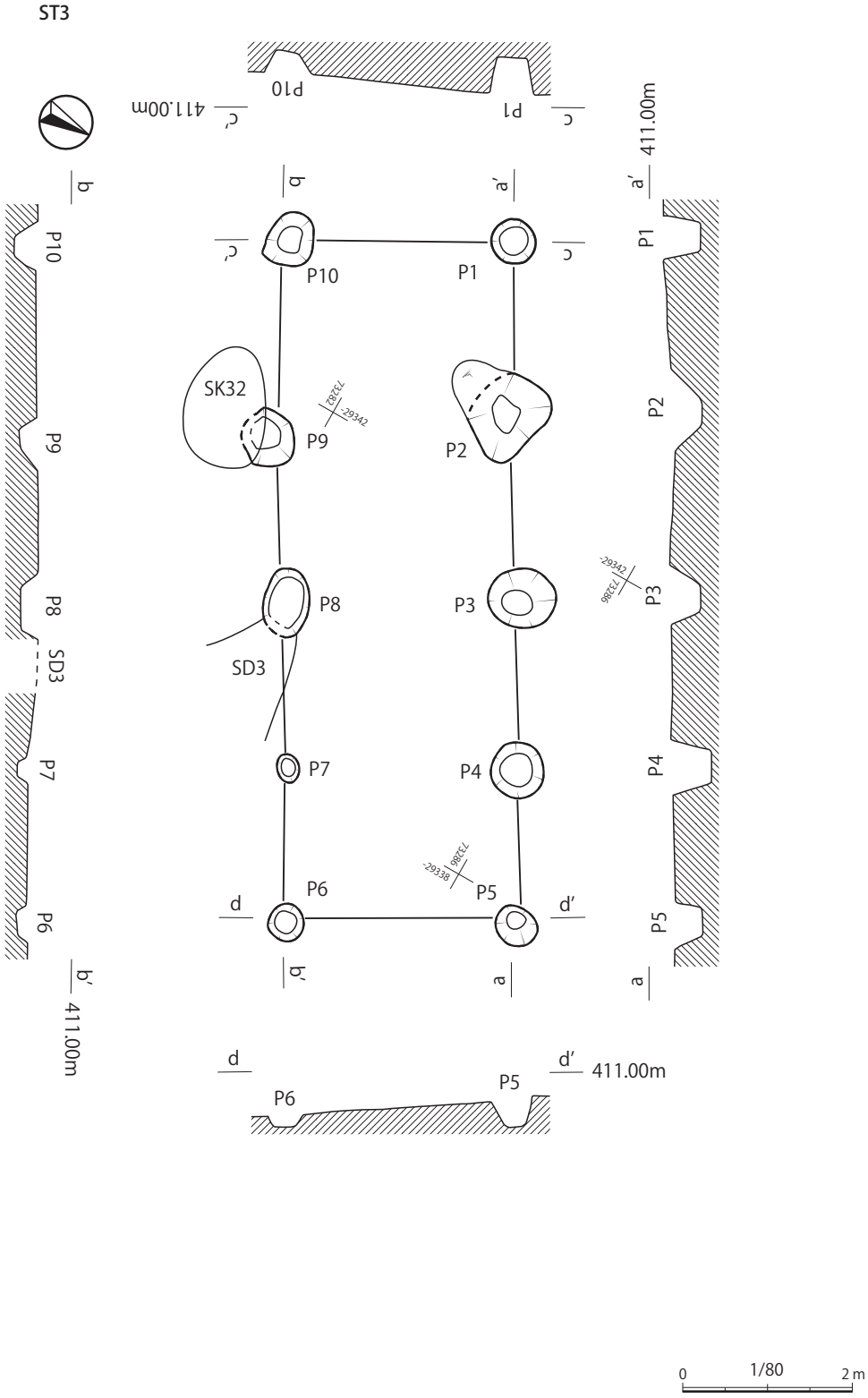
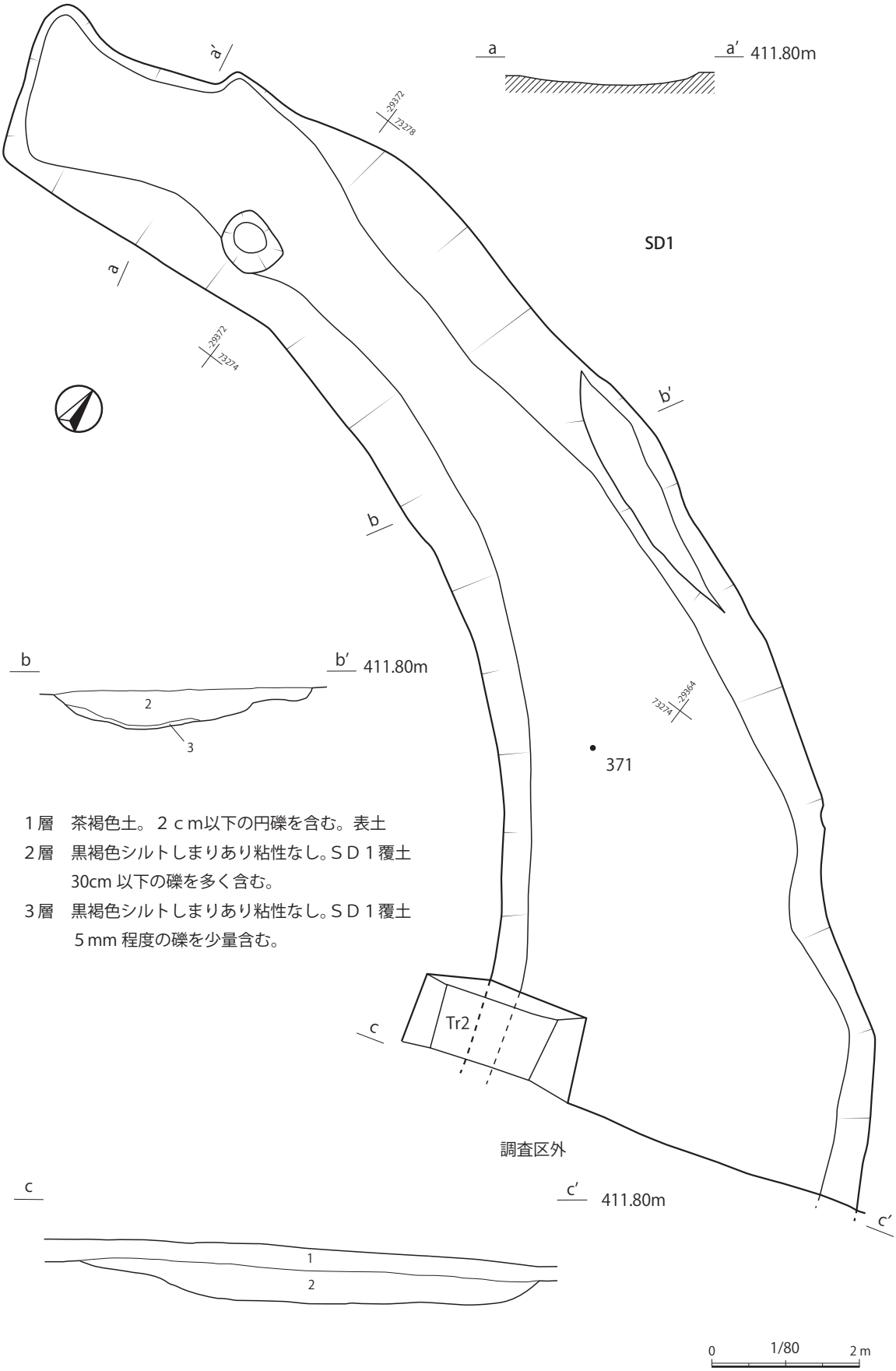


図32 遺構実測図17（ST 3 ）



1層　茶褐色土。２ｃm以下の円礫を含む。表土
2層　黒褐色シルトしまりあり粘性なし。ＳＤ１覆土
　　30cm 以下の礫を多く含む。
3層　黒褐色シルトしまりあり粘性なし。ＳＤ１覆土
　　５mm 程度の礫を少量含む。

図33 遺構実測図18（SD１）

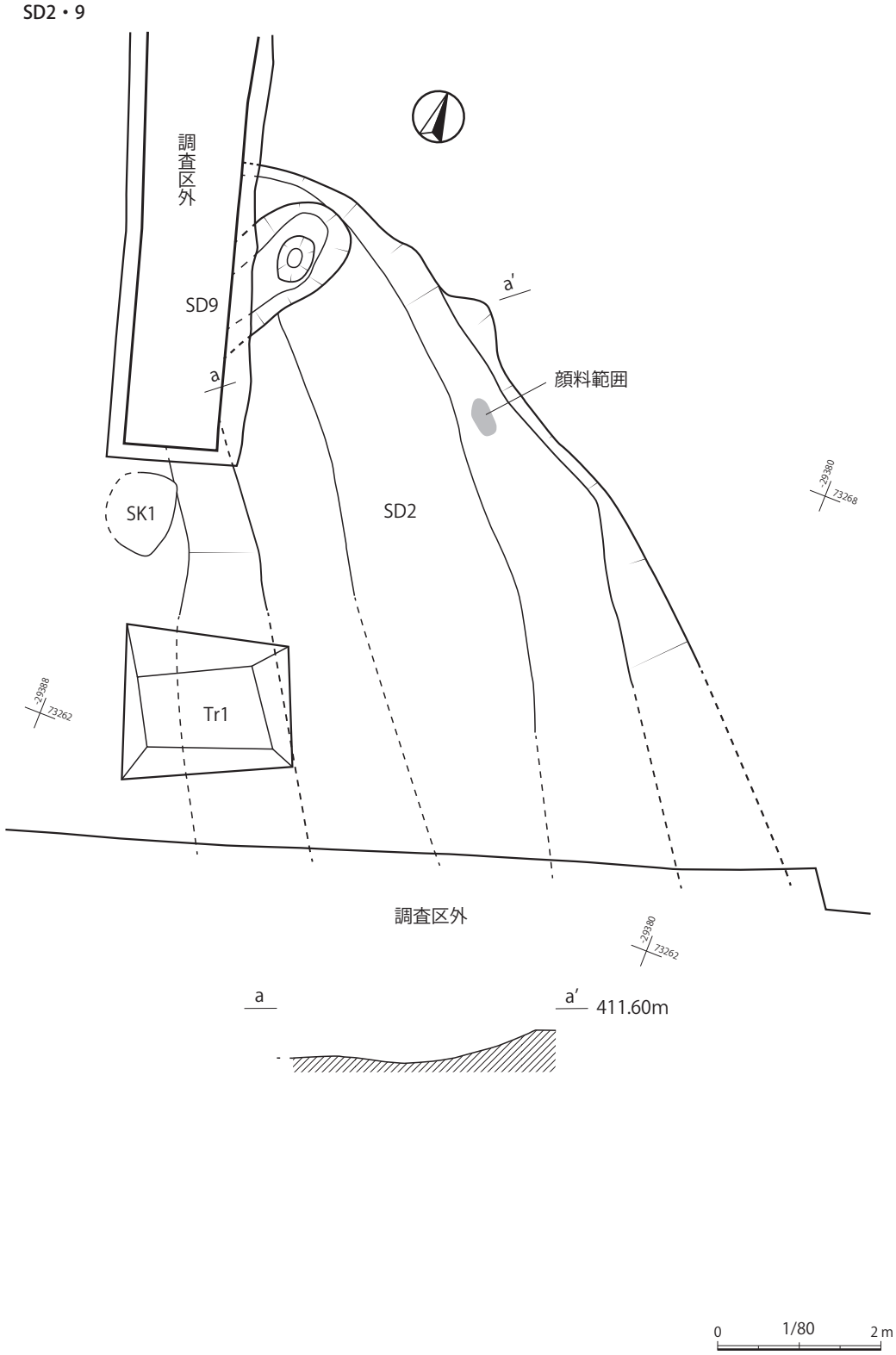


図34 遺構実測図19（SD２・９）

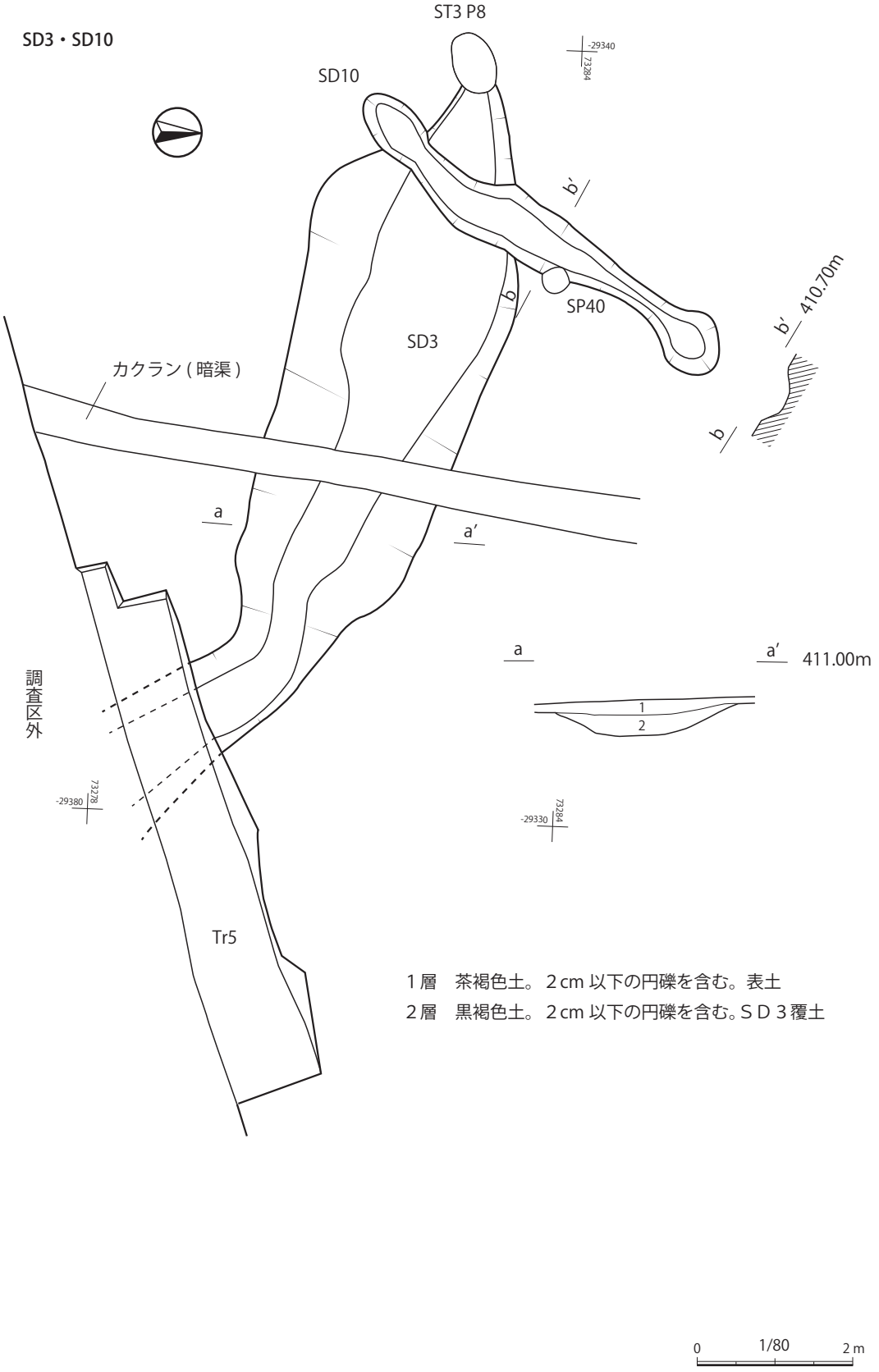


図35 遺構実測図20（SD 3 ・10）

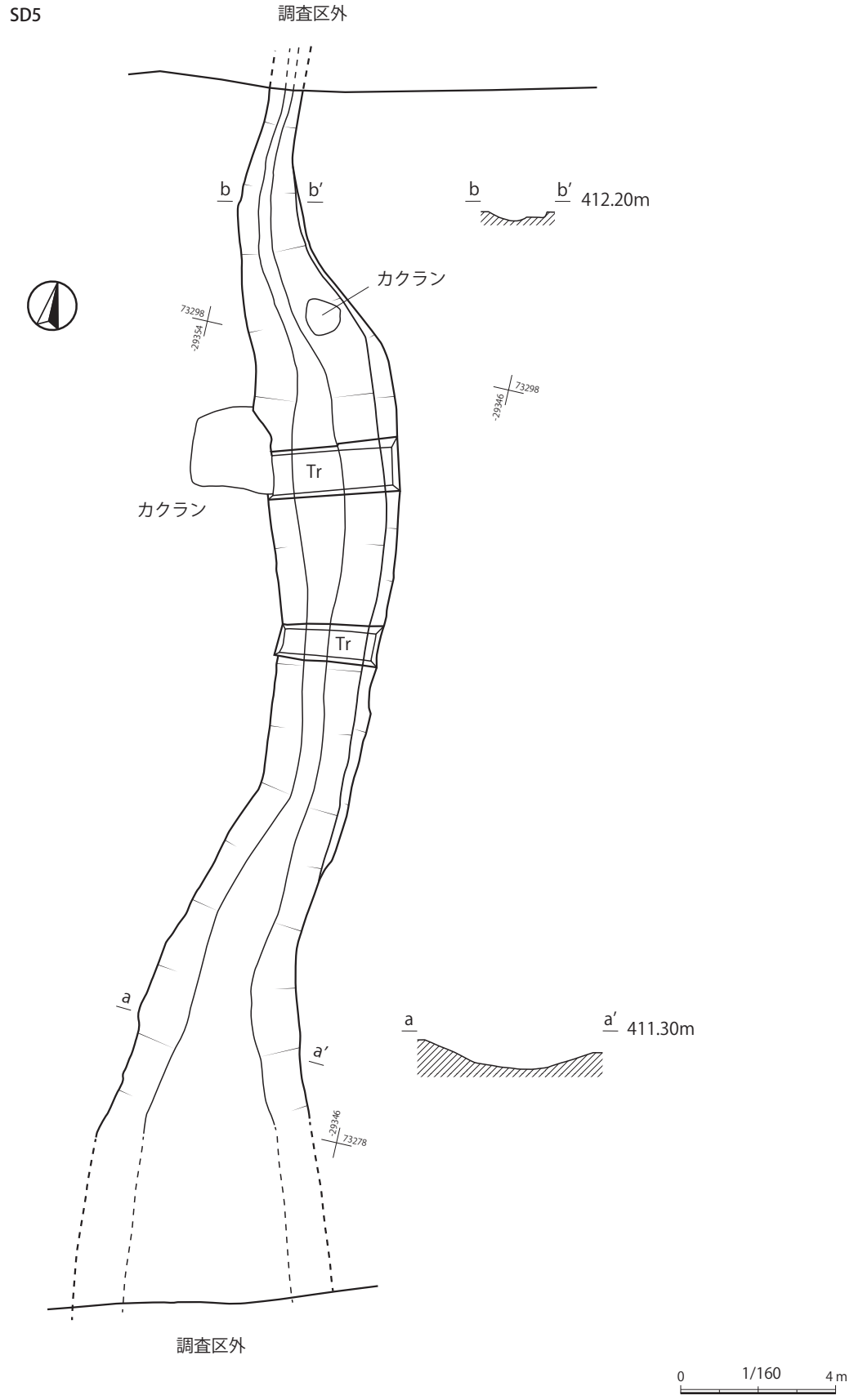
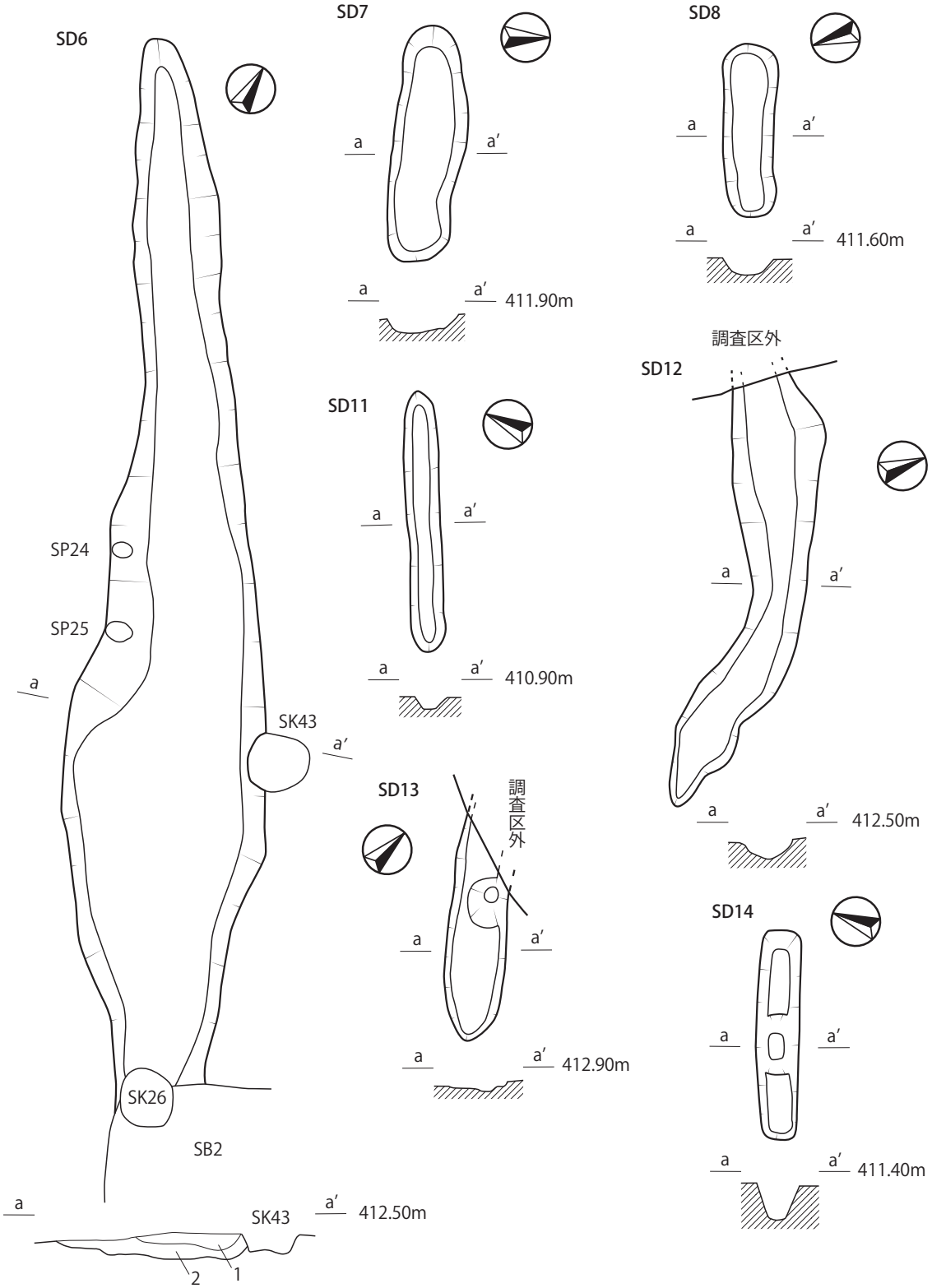


図36 遺構実測図21（SD５）



1層　暗褐色シルトしまりややあり粘性なし。1cm 以下の礫を少量含む。
2層　黒褐色砂質土しまりややあり粘性なし。4cm 以下の礫を少量含む。

0　1/80　2m

図37 遺構実測図22（SD 6 ・ 7 ・ 8 ・11・12・13・14）

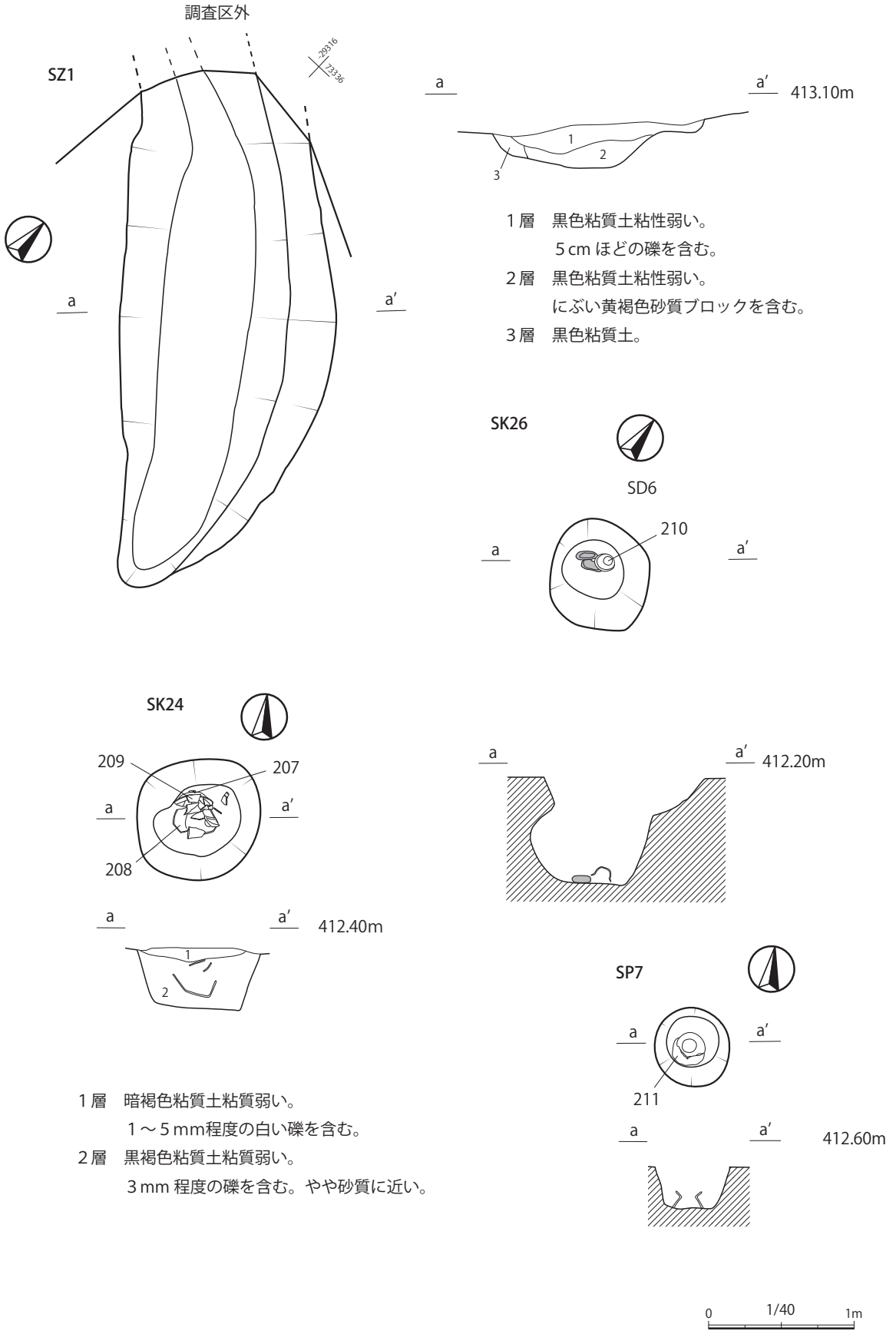


図38 遺構実測図23（SZ 1 、SK24・26、SP 7 ）

表３　出土土器観察表
※寸法欄における（　　）内の数値は、残存部の計測値を示す。また、施文・その他欄の櫛描文（　　）内数は工具の櫛数を示し、本数のわかるものに関して記載した。
※出土層位は、調査中に記録した層位を採用している。
※弥生時代末期から古墳時代初頭の土器の分類は、弥生土器と土師器で見解が分かれる。このため、本書では弥/土と表記した。
凡例　弥生：弥生土器　胴上：胴上部　ハケ　：ハケメ調整
口縁：口縁部　胴下：胴下部　ミガキ：ミガキ調整
頸　：頸　部　底　：底　部　ナデ　：ナデ調整
胴　：胴　部　ケズリ：ケズリ調整

図版		出土遺構		種別	器種	残存		寸法（cm）			成形・調整		施文・その他
図	番号	遺構名	位置			部位	遺存	口径	底径	器高	外面	内面	
39	1	SB1	床面	土師器	小型丸底	全形	1/1	10.1	2.2	6.4	ハケ→ミガキ/底：ナデ	ハケ→ミガキ	
	2	SB1	床面	土師器	小型丸底	全形	1/1	10.3	2.6	6.2	ハケ→ミガキ/底：ナデ	ミガキ	
	3	SB1	床面	土師器	小型丸底	全形	1/1	12.0	3.2	6.8	ハケ・ミガキ/底：ケズリ	ハケ→ミガキ	
	4	SB2	床直	弥/土	高杯	全形	1/1	11.8	10.6	10.6	ハケ→ミガキ	杯：ハケ→ミガキ/ 脚：ハケ→ナデ	三角形孔３ヶ・外面摩耗　精製土器
	5	SB2	覆土	弥/土	器台	杯	細片	—	—	(1.7)	ミガキ	ミガキ	赤彩
	6	SB2	床面	弥/土	高杯	杯～脚	1/2	—	—	(8.4)	ミガキ	杯：ミガキ/脚：ナデ・ハケ	赤彩・円形孔３ヶ
	7	SB2	覆土	弥/土	鉢	全形	1/1	14.1	5.4	6.4	ハケ→ミガキ/底：ミガキ	ミガキ	精製土器　口縁内弯
	8	SB3	覆土	弥生	壺	口縁	1/3	34.6		(10.1)	ミガキ	ミガキ	淡い赤彩
	9	SB3	炉	弥生	壺	頸～胴	1/2	—	—	(16.7)	ハケ→ミガキ	頸：ミガキ/胴：ハケ→ナデ？	Ｔ字文
	10	SB4	覆土上層	弥/土	高杯	脚	2/3	—	—	(4.9)	ミガキ	ナデ	赤彩・円形孔４ヶ
	11	SB5	覆土上層	弥/土	甕	口縁～頸	1/1	14.4		(4.1)	ハケ	ハケ/頸：板状工具ナデ	
	12	SB5	床直	弥/土	鉢	全形	1/2	15.0	4.0	4.7	ハケ→ミガキ/底：ケズリ→ナデ	ミガキ	
	13	SB5	床直	弥/土	高杯	脚	1/4	—	11.7	(6.3)	ミガキ	ケズリ→ミガキ	赤彩・円形孔４ヶ
40	14	SB6	覆土	弥/土	壺	全形	4/5	14.6	6.3	28.7	口縁：横ナデ・ミガキ/胴：ミガキ・ケズリ/底：ナデ	口縁：横ナデ/胴：工具ナデ/内底：指ナデ　口縁端部に段をもつ	Ｔ字文（７）・赤彩（淡い赤彩）・黒斑
	15	SB6	床直	弥/土	甕	口縁～胴	1/2	17.4	—	(21.5)	口縁：横ナデ/ハケ	口縁：横ナデ/ハケ→板状工具ナデ	黒斑
	16	SB6	床直	弥/土	甕	胴～底	2/3	—	7.1	(14.2)	ハケ→ナデ/底：ナデ	板状工具ナデ・ハケ/内底：指ナデ	黒斑
	17	SB6	覆土	弥/土	甕	口縁～胴	1/4	26.0	—	(11.0)	口縁：横ナデ/胴：横ナデ・ハケ	口縁：ミガキ？/胴：ハケ→工具ナデ	櫛刺穿文・赤彩・黒斑　口縁端部つまみ上げ状の面取り　刺突列点文
	18	SB6	床直	弥/土	壺	口縁	1/2	16.0	—	(7.3)	ナデ	ナデ	
	19	SB6	床直	弥/土	甕	口縁～胴	1/2	14.5	—	(13.0)	口縁：横ナデ/ハケ	ハケ→ミガキ	黒斑　箱清水系甕
	20	SB6	Ｐ３	弥/土	壺	口縁～胴	2/3	9.1	—	(7.1)	ハケ→ミガキ	ミガキ	赤彩
	21	SB6	覆土	弥/土	壺	胴～底	1/3	—	3.7	(5.6)	ハケ？→ナデ	ナデ/底：指ナデ	底部あげ底
	22	SB6	床直	弥/土	甕	全形	9/10	8.3	3.6	9.6	ハケ→ミガキ/底：ナデ	ミガキ/底：ナデ	簾状文（５）・波状文（６）
	23	SB6	床直	弥/土	甕	全形	3/4	11.7	丸底	9.0	口縁：横ナデ/ハケ→ナデ	口縁：横ナデ/指ナデ	口唇：櫛描直線（１）・黒斑
	24	SB6	床直	弥/土	台付甕	台	1/1	—	6.4	(4.3)	ハケ/裾：横ナデ	ナデ	
	25	SB6	床直	弥/土	台付甕	台	1/1	—	9.1	(4.8)	横ナデ→ミガキ？	横ナデ	黒斑
	26	SB6	床直	弥/土	底部穿孔土器	底	1/1	—	5.6	(2.2)	ナデ	ハケ	焼成前穿孔
	27	SB6	覆土	弥/土	底部穿孔土器	底	1/1	—	6.0	(3.3)	ハケ→ミガキ/底：ナデ	工具ナデ/底：指ナデ	焼成前穿孔
	28	SB6	覆土	弥/土	壺	壺	細片	—	—	—	ミガキ	ミガキ	円形文・赤彩　精製土器
	29	SB6	床直	弥/土	高杯	全形	2/3	32.1	16.2	16.5	ミガキ	杯：ミガキ/脚裾：ナデ	円形孔３ヶ
	30	SB6	覆土	弥/土	高杯	杯	4/5	23.0	—	(8.0)	ミガキ	ミガキ	黒斑
	31	SB6	覆土	弥/土	高杯	脚	1/3	—	15.1	(5.7)	ハケ→ミガキ	ナデ/裾：ハケ	黒斑・円形孔３ヶ
	32	SB6	覆土	弥/土	器台	全形	4/5	10.5	9.0	9.2	杯：横ナデ/脚：ナデ	杯：横ナデ/脚：ナデ	円形孔３ヶ　口唇端部面取り

図版		出土遺構		種別	器種	残存		寸法（cm）			成形・調整		施文・その他
図	番号	遺構名	位置			部位	遺存	口径	底径	器高	外面	内面	
	33	SB6	覆土	弥/土	器台	杯	1/3	9.6	—	(2.4)	ハケ→ミガキ	ミガキ	
	34	SB6	床直	弥/土	器台	杯	3/4	16.1	—	(5.7)	ハケ→ミガキ	ハケ→ミガキ	黒斑・外面摩耗
41	35	SB8	床直	弥/土	壺	胴	2/3	—	—	(19.0)	ハケ→ミガキ	ハケ・工具ナデ	T字文（7）
	36	SB8	床面	弥/土	壺	胴～底	1/2	—	6.8	(10.1)	ハケ→ミガキ/底：ナデ	ハケ/内底：ナデ	
	37	SB8	覆土	弥/土	甕	底	1/1	—	6.7	(5.5)	ハケ→ミガキ	ハケ→ミガキ	
	38	SB8	覆土	弥/土	壺	底	1/1	—	6.6	(5.5)	ミガキ/底：ナデ	ハケ→ナデ	黒斑
	39	SB8	覆土	弥/土	壺	胴～底	1/2	—	5.3	(12.0)	ハケ？→ミガキ/底：ケズリ	板状工具ナデ	
	40	SB8	覆土	弥/土	壺？	底	3/4	—	9.9	(1.6)	強いナデ	ハケ/底：ナデ	
	41	SB8	床直	弥/土	壺	頸～底	1/2	—	13.2	(16.5)/(37.7)	ハケ→ミガキ/胴：ハケ・強いナデ？	ハケ/頸：ハケ→ミガキ	黒斑　二重口縁壺
42	42	SB8	覆土	弥/土	甕	全形	2/3	13.1	4.2	12.2	口縁：横ナデ/胴：ハケ底：ナデ	ミガキ	黒斑　器壁が薄い
	43	SB8	覆土	弥/土	甕	全形	3/4	15.5	4.7	14.3	口縁：ハケ→横ナデ/胴：ハケ→ケズリ/底：ナデ	口縁：ハケ→ミガキ/胴：ハケ/底：ナデ？	口縁端部面取り
	44	SB8	床面	弥/土	甕	全形	1/1	16.6	6.2	20.3	口縁：ハケ→横ナデ/胴：ハケ・ハケ→ミガキ・ケズリ→ミガキ	口縁：ハケ→ミガキ/胴ミガキ/底：ハケ	黒斑　〃
	45	SB8	覆土	弥/土	甕	全形	2/3	21.2	6.5	26.1	口縁：横ナデ/胴：ハケ・ケズリ・ケズリ→ミガキ	口縁：ミガキ/胴：板状工具ナデ下半ミガキ	〃
	46	SB8	覆土	弥/土	甕	全形	5/6	21.8	5.7	28.5	口縁：横ナデ→ハケ/胴：ハケ・ハケ→ミガキ	口縁：横ナデ→ミガキ/胴：ミガキ/内底：ナデ？	〃
	47	SB8	覆土	弥/土	甕	口縁～胴	2/3	12.4	—	(10.6)	ハケ→ミガキ	ハケ→ミガキ？	
	48	SB8	覆土	弥/土	甕	口縁	1/1	16.4	—	(10.3)	ハケ/口唇：横ナデ	口縁：横ナデ→ミガキ/胴：工具ナデ→指ナデ？	黒斑　口縁端部面取り
	49	SB8	覆土	弥/土	甕	口縁～頸	2/3	17.3	—	(7.2)	口縁：ハケ→横ナデ/頸：ハケ	口縁：ハケ→ナデ/頸：ナデ→ケズリ	〃　器壁が薄い
	50	SB8	覆土	弥/土	甕	口縁	1/1	22.0	—	(9.0)	口唇：横ナデ	口縁：ハケ→ミガキ/胴：ミガキ	〃　中部高地型櫛描波状文
	51	SB8	床面	弥/土	甕	底	1/1	—	5.1	(7.4)	ハケ→ミガキ/底：ナデ	ミガキ/底：ナデ	
43	52	SB8	覆土	弥/土	壺	胴～底	1/5	—	17.4	(22.8)	ハケ/底：ナデ	ハケ	黒斑
	53	SB8	床面	弥/土	鉢	口縁～胴	1/5	52.6	—	(27.4)	ハケ→ミガキ	ミガキ	黒斑
	54	SB8	床面	弥/土	鉢	全形	1/1	12.3	4.2	4.6	ハケ→ミガキ/底：ナデ		黒斑
	55	SB8	覆土	弥/土	鉢	全形	1/3	18.6	5.3	7.5	ハケ/底：ナデ	板状工具ナデ	黒斑
	56	SB8	覆土	弥/土	高杯	全形	5/6	14.7	10.6	11.4	ミガキ	杯：ミガキ/脚：ナデ	赤彩・三角形孔４ヶ
	57	SB8	覆土	弥/土	高杯	全形	2/3	12.4	12.4	杯(3.9)・脚(6.6)	ハケ→ミガキ	杯：ミガキ/脚：ハケ/裾：横ナデ	精製土器
	58	SB8	覆土	弥/土	高杯	全形	1/1	27.7	14.4	17.2	ハケ→ミガキ	杯：ハケ→ミガキ/脚：ハケ/裾：横ナデ	赤彩・円形孔３ヶ　脚端部内湾
	59	SB8	床面	弥/土	高杯	杯	1/1	14.6	—	(9.5)	ハケ→ミガキ	ハケ？→ミガキ	赤彩
	60	SB8	床面	弥/土	小型高杯	全形	4/5	13.1	19.2	12.1	ハケ→ミガキ	杯：ミガキ/脚：ナデ・ハケ	黒斑・円形孔４ヶ　精製土器
	61	SB8	覆土	弥/土	器台	全形	1/1	9.6	10.8	9.6	ハケ→ミガキ	杯：ミガキ/脚：ハケ→ナデ	円形孔４ヶ　〃
	62	SB8	覆土	弥/土	器台	脚	1/1	—	11.7	(8.1)	ミガキ	ハケ/裾：横ナデ	赤彩・円形孔３ヶ
44	63	SB9	SK5覆土	弥生	壺	口縁	2/3	28.6	—	(12.0)	口縁：横ナデ→ミガキ/ハケ→ミガキ	ハケ→ミガキ	赤彩・黒斑
	64	SB9	覆土	弥生	壺	口縁～頸	1/2	21.0	—	(9.9)	横ミガキ・ハケ→縦ミガキ	横ミガキ	T字文・赤彩
	65	SB9	覆土	弥生	壺	頸～胴	1/2	—	—	(20.2)	ミガキ	ミガキ・ナデ・ハケ	T字文・赤彩・黒斑
	66	SB9	覆土	弥生	壺	胴中～底	1/2	—	7.3	(11.0)	ミガキ/底：ナデ→ミガキ	ハケ	赤彩・黒斑
	67	SB9	SK5覆土	弥生	壺	口縁	1/10	32.0	—	(7.2)	ミガキ	ミガキ	赤彩・図44－66と同一個体の可能性あり
	68	SB9	覆土	弥生	壺	胴上	細片	—	—	(3.1)	ミガキ	ナデ	貼付突帯・スタンプ文・赤彩　有段細頸壺？
	69	SB9	覆土上層	弥生	壺	胴	1/6	—	—	(4.6)	ミガキ	ナデ	赤彩　装飾壺
	70	SB9	覆土	弥生	壺	口縁～胴上	1/4	13.2	—	(6.5)	ミガキ	ミガキ	赤彩　有段小型壺

図版		出土遺構		種別	器種	残存		寸法（cm）			成形・調整		施文・その他
図	番号	遺構名	位置			部位	遺存	口径	底径	器高	外面	内面	
44	71	SB9	床直	弥生	壺	頸～底	1/2	—	2.8	(10.3)	ナデ→ミガキ	頸：ミガキ/胴上：板状工具ナデ/胴下：ハケ	赤彩　器壁が薄い　有段小型壺
	72	SB9	床面	弥生	壺	口縁～胴	4/5	15.5	—	(21.7)	ハケ→ミガキ	口縁～頸：ミガキ/胴：ケズリ・ナデ	口縁端部面取り
	73	SB9	床面	弥生	壺	胴	1/2	—	—	(17.9)	ナデ→ヘラミガキ	ハケ	
	74	SB9	床面	弥生	壺	胴～底	1/3	—	5.6	(7.6)	ミガキ/底：ナデ	ナデ	赤彩
	75	SB9	P 3	弥生	壺	胴～底	1/3	—	5.8	(9.3)	ナデ？→横ミガキ/底：ナデ	ナデ	赤彩
	76	SB9	床面	弥生	壺	胴～底	1/2	—	10.6	(29.7)	ミガキ/底：ナデ	ハケ・ナデ	赤彩
45	77	SB9	床直	弥生	甕	全形	5/6	12.2	5.4	12.8	胴下：ミガキ/底：ナデ	口縁：横ナデ→ミガキ/胴：ナデ→ミガキ	簾状文・波状文
	78	SB9	覆土	弥生	甕	頸	1/2	—	—	(7.6)	ナデ	ナデ	簾状文・波状文
	79	SB9	覆土	弥生	甕	口縁～胴	1/2	16.0	—	(13.2)		横ナデ→ミガキ	簾状文・波状文
	80	SB9	床面	弥生	甕	口縁～頸	3/4	21.4	—	(12.3)	ナデ	ハケナデ・強いハケナデ	波状文（11）
	81	SB9	床直	弥生	甕	胴～底	1/2	—	6.3	(11.8)	ナデ？	ナデ→ミガキ	波状文
	82	SB9	覆土	弥生	甕	胴～底	1/2	—	6.4	(16.9)	胴下：ナデ→ミガキ/底：ナデ	ナデ→縦・横ミガキ	簾状文・波状文
	83	SB9	覆土上層	弥生	甕	口縁～胴	1/3	17.2	—	(12.0)	ナデ	口縁：横ナデ→ミガキ/胴：板状工具ナデ→ミガキ	波状文（５？）
	84	SB9	覆土	弥生	甕	胴～底	1/2	—	6.9	(12.7)	ナデ	ナデ	波状文
	85	SB9	覆土	弥生	甕	胴	2/3	—	—	(12.5)	胴中：ナデ/胴下：ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	波状文
	86	SB9	床面	弥生	甕	全形	2/3	15.0	6.1	19.4	口縁：ナデ/胴：ハケ・ナデ/底：工具痕	口縁：ナデ/胴：ハケ→ナデ/胴下：ナデ	ハケ甕　黒斑
	87	SB9	床直	弥生	甕	全形	9/10	17.9	6.0	25.0	口縁：横ナデ/胴：ハケ/底：ナデ	口縁：横ナデ/胴：ハケ・ナデ	〃
	88	SB9	床直	弥生	甕	全形	2/3	17.0	6.0	24.4	口縁：ナデ/胴：ハケ・ヘラ状工具ナデ/底：ナデ	口縁：ナデ/胴：ヘラ状工具・ハケ	〃
	89	SK5	覆土上層	弥生	甕	全形	2/5	18.0	7.2	28.0	口縁：横ナデ/ハケ/底：ナデ	口縁：横ナデ/ハケ	〃　黒斑
	90	SB9	床面	弥生	甕	全形	2/3	(10.6)	5.4	8.7	口縁：横ナデ/胴：ナデ	口縁：横ナデ/胴：ナデ	〃
46	91	SB9	覆土	弥生	甕	口縁～胴	2/3	16.8	—	(20.4)	ハケ→ナデ	ナデ→ミガキ？	〃
	92	SB9	床面	弥生	甕	口縁～胴	1/3	17.6	—	(15.5)	口縁：ナデ/胴：ケズリ/胴下：ハケ→ミガキ	口縁：ナデ/胴ケズリ/胴下：ハケ→ミガキ	〃　黒斑
	93	SB9	P 3	弥生	甕	口縁～胴上	1/2	13.2	—	(7.7)	口縁：横ナデ/頸：ナデ/胴上：ハケ	口縁：横ナデ/胴上：ナデ	〃　器壁が薄い
	94	SB9	覆土	弥生	甕	口縁～頸	1/4	15.8	—	(5.0)	口縁：横ナデ/頚：ハケ	口縁 横ナデ/頸：ナデ	〃
	95	SB9	P 3	弥生	甕	口縁～胴上	1/2	15.6	—	(4.6)	口縁～頸：横ナデ/胴上：ナデ	口縁：横ナデ/頸：ナデ	〃
	96	SB9	覆土上層	弥生	甕	口縁～頸	1/6	18.8	—	(6.7)	口縁：横ナデ/頸：ハケ	口縁：横ナデ/頸：ハケ	〃　器壁が薄い
	97	SB9	覆土	弥生	甕	口縁～頸	1/8	20.6	—	(4.0)	横ナデ	口縁：横ナデ/頸：ナデ	〃
	98	SB9	覆土上層	弥生	甕	口縁	1/6	21.0	—	(3.8)	横ナデ	横ナデ→ミガキ	〃
	99	SB9	覆土上層	弥生	甕	口縁～頸	1/8	21.6	—	(3.4)	横ナデ	ナデ	〃
	100	SB9	床直	弥生	甕	口縁～頸	1/4	18.4	—	(4.0)	口縁：横ナデ/頸：ナデ	横ナデ→横ヘラミガキ	〃　刺突文
	101	SB9	床直	弥生	甕	口縁～胴上	1/2	—	17.2	(8.2)	口縁：横ナデ/胴上：ハケ	口縁：横ナデ→ミガキ？/胴上：ナデ	〃　刺突文
	102	SB9	床面	弥生	甕	口縁～胴上	1/2	17.0	—	(6.8)	口縁～頸：横ナデ/胴上：ハケ	口縁～頸：横ナデ/胴上：ハケ	〃
	103	SB9	P 3	弥生	甕	口縁～胴上	1/4	(20.3)	—	(8.5)	口縁：横ナデ/頸～胴上：ハケ	口縁：横ナデ/頸～胴上：ナデ	〃
	104	SB9	床面	弥生	甕	口縁～胴上	2/3	16.2	—	(9.3)	口縁：ナデ/横ナデ→ミガキ/胴上：ハケ	口縁：横ナデ/胴上：ケズリ→ナデ	〃　赤彩　器壁が薄い
	105	SB9	床面	弥生	甕	口縁～胴中	3/4	(14.8)	—	(13.1)	口縁～頸：横ナデ/胴中：ハケ→ナデ	口縁：横ナデ/頸～胴中：ナデ？	〃　刺突文　〃
	106	SB9	床面	弥生	甕	底	1/1	—	6.9	(6.7)	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	〃
	107	SB9	覆土	弥生	甕	胴～底	1/3	—	4.8	(10.3)	ハケ	ハケ	〃
	108	SB9	床直	弥生	蓋	ツマミ	1/1	—	—	(3.4)	ナデ？	ハケ	
	109	SB9	覆土	弥生	台付甕	脚	1/2	—	—	(7.4)	ナデ	ミガキ	赤彩
	110	SB9	覆土	弥生	台付甕	口縁~胴・台	1/6	14.4	8.4	(8.9)・(3.2)	口縁：横ナデ/胴～台：ナデ	口縁：横ナデ/胴ナデ？/台：ナデ	

図版		出土遺構		種別	器種	残存		寸法（cm）			成形・調整		施文・その他
図	番号	遺構名	位置			部位	遺存	口径	底径	器高	外面	内面	
	111	SB9	SK5覆土上層	弥生	台付甕	全形	1/1	12.1	6.7	13.8	口縁：横ナデ/胴：横ナデ？→ミガキ/台：ハケ→ミガキ	ハケ→ミガキ/内底：工具ナデ/台：工具ナデ/裾：ハケ	黒斑・淡い赤彩
	112	SB9	P1	弥生	鉢	全形	2/3	12.0	5.3	6.6	ナデ→ミガキ/底：ナデ	ナデ→ミガキ	淡い赤彩
	113	SB9	P1	弥生	鉢	全形	2/3	13.9	5.3	8.8	ハケ→ミガキ/底：ナデ	ナデ→ミガキ・ハケ→ミガキ	赤彩
	114	SB9	床面	弥生	片口鉢	全形	9/10	8.7	5.6	10.1	ナデ→ミガキ/底：ナデ	ナデ→ミガキ	赤彩　片口
	115	SB9	床面	弥生	鉢	全形	3/4	20.4	5.8	10.8	ナデ？→縦・横ミガキ	ナデ→ミガキ	赤彩
47	116	SB9	覆土	弥生	高杯	全形	1/2	19.1	13.8	18.7	ナデ→横・縦ヘラミガキ	ナデ→横・縦ヘラミガキ	赤彩　脚部端部面取り
	117	SB9	P4	弥生	高杯	杯	1/4	21.4	—	(6.5)	口縁：横ナデ→ミガキ/ナデ→ミガキ	口縁：横ナデ→ミガキ/ナデ→ミガキ	赤彩
	118	SB9	床面	弥生	高杯	杯	1/5	26.0	—	(8.7)	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	
	119	SB9	覆土	弥生	高杯	全形	1/2	13.0	—	(11.3)	ミガキ/底：ナデ	ミガキ	赤彩
	120	SB9	床直	弥生	高杯	杯	1/3	—	—	(4.1)	ミガキ	ミガキ	赤彩
	121	SB9	床直	弥生	高杯	杯	4/5	16.1	—	(10.6)	ハケ→ミガキ	ハケ→ミガキ	赤彩
	122	SB9	床面	弥生	高杯	脚	3/4	—	—	(10.5)	横ナデ→ミガキ	ヘラナデ	刺突文・赤彩
	123	SB9	覆土	弥生	高杯	脚	1/1	—	7.4	(4.7)	ミガキ	脚：ナデ→ミガキ？	赤彩
	124	SB9	床面	弥生	高杯	脚	1/10	—	15.8	(2.9)	ミガキ	横ナデ	赤彩・円形孔
	125	SB9	覆土上層	弥生	高杯	脚	1/6	—	14.0	(1.3)	横ナデ→ミガキ	横ナデ	赤彩
	126	SB9	P3	弥生	高杯	脚下	4/5	—	20.3	(5.3)	ミガキ	ナデ・横ナデ	赤彩
	127	SB9	覆土	弥生	高杯	脚	細片	—	—	—	ミガキ	ナデ→ミガキ	赤彩
	128	SB10	覆土下層	弥生	壺	底	1/1	—	13.4	(6.1)	ミガキ/底：ケズリ？	ハケ/内底：工具ナデ	赤彩・黒斑
	129	SB10	床直	弥生	甕	頸～胴	1/2	—	—	(14.6)	ナデ？	ハケ→ミガキ	簾状文（11）・波状文（9）・黒斑
	130	SB10	床面	弥生	鉢	全形	1/3	10.0	4.5	12.1	ミガキ/底：ナデ、赤彩なし	ミガキ　淡い赤彩	赤彩・穿孔2ヶ1ヵ所
	131	SB10	覆土	弥生	甕	底	1/1	—	5.8	(2.8)	ハケ/底：ナデ	ハケ	黒斑・焼成後穿孔底部1孔
	132	SB10	P6	弥生	鉢	全形	3/4	13.4	4.6	7.8	ハケ→ミガキ/底：ケズリ→ミガキ	ハケ→ミガキ	赤彩・黒斑
	133	SB10	覆土下層	弥生	鉢	全形	1/2	17.4	5.8	8.7	ミガキ/底：工具ナデ、赤彩なし	強いミガキ	赤彩
	134	SB10	覆土下層	弥生	鉢	全形	1/2	22.0	4.2	7.1	ミガキ	ミガキ	赤彩・黒斑
	135	SB10	覆土上層	弥生	高杯	脚	2/3	—	—	(5.4)	ミガキ	ナデ/裾：ミガキ	赤彩
	136	SB10	覆土	弥生	台付甕	台	2/3	—	7.6	(5.9)	ミガキ	工具ナデ	淡い赤彩
48	137	SB11	炉	弥生	壺	頸～胴	1/4	—	—	(21.4)	ミガキ	ハケ・ハケ→ナデ	T字文（5）・赤彩
	138	SB11	炉	弥生	壺	胴	4/5	—	—	(19.5)	ミガキ	ハケ・ハケ→ナデ	赤彩
	139	SB11	覆土	弥生	壺 or 甕	底	1/2	—	10.0	(1.4)	底：アジロ痕	指ナデ	弥生時代中期前半
	140	SB11	覆土	弥生	蓋	全形	3/4	—	—	(8.1)	ハケ→ミガキ	ハケ→ミガキ・ナデ	黒斑　1孔
	141	SB14	床直	弥生	壺	口縁	1/1	21.0	—	(8.1)	ミガキ	ミガキ	赤彩
	142	SB14	覆土	弥生	鉢	底	2/3	—	5.5	(2.4)	ミガキ/底：ケズリ→ナデ	ハケ→ミガキ	赤彩・黒斑
	143	SB15	P3	弥生	甕	口縁	1/4	44.5	—	(12.5)	ミガキ	ハケ	波状文
	144	SB15	P4	弥生	高杯	脚	4/5	—	11.5	(5.3)	ミガキ	横ハケ	赤彩
	145	SB15	P3	弥生	台付甕	台	1/1	—	8.7	(5.8)	ミガキ	ハケ	
	146	SB16	覆土	弥生	甕	口縁～胴	1/4	12.4	—	(10.8)	ミガキ？	摩耗不明	簾状文（7）・波状文（4）
	147	SB17	覆土上層	弥生	壺	頸	1/2	—	—	(12.5)	ミガキ	口縁：ミガキ/胴：ハケ	T字文（4）・赤彩
	148	SB17	覆土上層	弥生	甕	口縁～胴	1/2	11.6	—	(8.3)	剥離不明	ハケ→ミガキ	簾状文・波状文（3）
	149	SB17	床面	弥生	鉢	胴～底	1/3	—	4.7	(8.3)	ミガキ	ナデ・指ナデ	赤彩
49	150	SB19	床面	弥生	壺	口縁	4/5	18.7	—	7.9	ハケ→ミガキ	ハケ→ミガキ	精製壺・器壁が薄い
	151	SB20	覆土	弥生	高杯	杯	1/2	—	—	(6.0)	ミガキ	ミガキ	赤彩
	152	SB20	覆土	弥生	高杯	杯～脚	1/2	—	—	(10.2)	ミガキ	ミガキ？摩耗不鮮明	赤彩・内面淡い赤彩
	153	SB21	床直	弥生	壺	全形	9/10	29.4	11.4	(19.2)/(39.4)	ハケ→ミガキ	口縁～頸：ミガキ/胴：ハケ→ナデ/内底：指ナデ	T字文（8）・赤彩

図版		出土遺構		種別	器種	残存		寸法（cm）			成形・調整		施文・その他
図	番号	遺構名	位置			部位	遺存	口径	底径	器高	外面	内面	
50	154	SB22･24	覆土下層	弥生	甕	口縁～胴	1/2	17.5	—	(11.2)	ミガキ	摩耗不明	胴部器壁薄い
	155	SB22･24	覆土下層	弥生	壺	口縁	1/5	13.2	—	(3.0)	ミガキ	ミガキ	赤彩
	156	SB22･24	覆土	弥生	鉢	全形	2/3	14.7	5.0	7.1	ミガキ	ハケ→ミガキ	赤彩
	157	SB22･24	覆土	弥生	高杯	杯	1/2	24.0	—	(9.4)	ミガキ	ハケ→ミガキ	淡い赤彩
	158	SB22･24	覆土	弥生	高杯	脚	1/3	—	19.2	(4.8)	ミガキ	ハケ→ナデ/裾：横ナデ	赤彩・黒斑
	159	SB22･24	覆土	弥生	高杯	脚	1/2	—	—	(4.0)	ミガキ	横ナデ	赤彩
	160	SB22･24	覆土下層	弥生	台付甕	脚	1/2	—	10.4	(7.2)	ミガキ	ハケ	淡い赤彩
	161	SB22･24	覆土	弥生	高杯	脚	1/1	—	19.2	(6.3)	ハケ→ミガキ	板状工具ナデ	淡い赤彩
	162	SB25	覆土	弥生	壺	全形	4/5	10.2	4.3	13.5	横ミガキ・ケズリ・ミガキ/底：ナデ	ハケ・板状工具ナデ	赤彩
	163	SB25	覆土	弥生	壺	胴	1/4	—	—	(12.6)	ミガキ/底：ハケ	ハケ	T字文・赤彩
	164	SB25	炉	弥生	壺	胴～底	1/3	—	7.6	(10.5)	ミガキ/底：ナデ	ミガキ？/底：ナデ	赤彩
	165	SB25	覆土	弥生	壺	全形	1/1	12.8	5.8	20.9	ミガキ/底：ナデ	ハケ	赤彩・黒斑
	166	SB25	床直	弥生	甕	全形	3/4	13.6	6.1	16.4	ハケ→ミガキ/底：ナデ	ミガキ	簾状文（4）・波状文（4）
	167	SB25	覆土	弥生	甕	口縁～胴	1/3	13.0	—	(10.1)	ナデ？	ミガキ	簾状文（3）・波状文（3）
	168	SB25	覆土	弥生	甕	口縁～胴	2/3	16.0	—	(11.9)	ナデ？	ハケ→ミガキ	簾状文・波状文（9）
	169	SB25	炉	弥生	甕	口縁～頸	1/4	(12.6)	—	(5.3)	ハケ	ハケ・頸：ナデ	
51	170	SB25	床直	弥生	高杯	全形	5/6	15.9	10.0	12.1	ミガキ	ミガキ/脚：ハケ	赤彩
	171	SB25	覆土	弥生	高杯	杯	1/1	18.4	—	(12.3)	ミガキ　突帯	ミガキ	赤彩
	172	SB25	覆土	弥生	鉢	全形	1/1	11.6	4.0	5.7	ハケ・ミガキ	ミガキ	赤彩・２孔１ヵ所穿孔
	173	SB25	床直	弥生	鉢	全形	1/1	7.5	3.6	7.4	ミガキ	ミガキ	赤彩・２孔２ヵ所穿孔（１孔未貫通）
	174	SB25	覆土	弥生	鉢	全形	2/3	9.2	5.2	9.0	ミガキ・ケズリ/底：ナデ	ナデ・ミガキ	赤彩
	175	SB25	覆土	弥生	有孔鉢	全形	3/4	13.2	4.8	8.6	ハケ・ミガキ/底：ナデ	ミガキ/内底：ナデ	赤彩　焼成前底部穿孔１孔
	176	SB25	覆土	弥生	片口鉢	全形	9/10	10.6	5.7	12.4	ミガキ/底：ナデ	ハケ→ミガキ/底：ヘラナデ	片口
	177	SB26	覆土	弥生	小壺	頸～底	1/1	—	4.5	(7.3)	ハケ？→ミガキ/底：ナデ	口縁：ミガキ赤彩/胴：工具ナデ	赤彩
	178	SB26	床直	弥生	壺	口縁～胴	3/4	14.2	—	(12.2)	ミガキ・ナデ	口縁：ミガキ赤彩/胴：ハケ？	赤彩
	179	SB26	床直	弥生	壺	口縁～胴	2/3	18.4	—	(12.7)	ハケ→ミガキ	ミガキ・ハケ	円形浮文４ヶ？　器壁が薄い
	180	SB27	P２	弥生	壺	頸～底	1/1	—	5.4	(25.0)	ミガキ	ミガキ/胴：ナデ/内底：指ナデ	赤彩
	181	SX1	覆土	弥生	台付甕	台	1/1	—	7.7	(4.5)	ナデ	ナデ？	
	182	SX1	覆土	弥生	高杯	脚	3/4	—	9.9	(6.3)	ミガキ/底：ナデ	板状工具ナデ→指ナデ	赤彩・三角形孔３ヶ
	183	SD1	覆土下層	土師器	小型丸底	口縁～胴	1/3	10.4	—	(5.3)	ハケ→ミガキ	口縁：ハケ→ミガキ/胴：ナデ	黒斑
	184	SD1	覆土下層	土師器	高杯	脚	1/2	—	—	(9.8)	ケズリ→ハケ→ミガキ	指ナデ/裾：横ナデ	
	185	SD1	覆土下層	土師器	高杯	脚	1/2	—	14.3	(8.7)	ケズリ→ハケ→ミガキ	指ナデ/裾：ハケ→ナデ？	
52	186	SD3	覆土	土師器	高杯	全形	1/2	18.0	12.4	13.2	ハケ→ミガキ	杯：ハケ→ミガキ/脚：指ナデ/裾：横ナデ	
	187	SD3	覆土	土師器	高杯	全形	1/2	17.0	12.7	12.2	ハケ→ミガキ	杯：ハケ→ミガキ/脚：指ナデ/裾：横ナデ	
	188	SD3	覆土下層	土師器	高杯	全形	4/5	16.4	11.5	13.1	ハケ→ミガキ	杯：ハケ→ミガキ/脚：指ナデ/裾：横ナデ	黒斑
	189	SD3	覆土下層	土師器	高杯	全形	1/1	16.3	11.1	12.6	ハケ→ミガキ	杯：ハケ→ミガキ/脚：指ナデ/裾：板状工具ナデ→横ナデ	
	190	SD3	覆土	土師器	高杯	全形	1/2	17.0	12.3	13.1	ハケ→ミガキ	杯：ハケ→ミガキ/脚：指ナデ/裾：横ナデ	
	191	SD3	覆土下層	土師器	高杯	全形	3/4	19.4	11.8	14.2	ハケ→ミガキ	杯：ハケ→ミガキ/脚：指ナデ/裾：横ナデ	
	192	SD3	覆土下層	土師器	高杯	全形	3/4	16.0	11.8	12.5	ハケ→ミガキ	杯：ハケ→ミガキ/脚：指ナデ/裾：横ナデ	黒斑
	193	SD3	覆土	土師器	高杯	杯	1/4	16.4	—	(4.5)	ハケ→ミガキ	ハケ→ミガキ	黒斑
	194	SD3	覆土	土師器	高杯	杯	1/2	20.1	—	(5.9)	ハケ→ミガキ	ハケ→ミガキ	
	195	SD3	覆土下層	土師器	高杯	脚	1/2		11.6	(9.1)	ハケ→ミガキ	脚：指ナデ/裾：横ナデ	黒斑
	196	SD3	覆土下層	土師器	高杯	脚	2/3		11.8	(6.5)	ハケ？→ミガキ	脚：指ナデ/裾：横ナデ	黒斑
	197	SD3	覆土	土師器	甕	全形	1/3	11.7	5.0	17.1	口縁：横ナデ/ハケ→ミガキ	口縁：横ナデ/胴：工具ナデ/内底：ハケ	黒斑

図版		出土遺構		種別	器種	残存		寸法（cm）			成形・調整		施文・その他
図	番号	遺構名	位置			部位	遺存	口径	底径	器高	外面	内面	
	198	SD3	覆土	須恵器	甕	全形	4/5	12.9	—	17.7	横ナデ/底：ナデ	横ナデ/肩：指ナデ・指オサエ/内底：指ナデ	波状文・降灰
53	199	SD7	覆土	弥/土	甕	底	1/1	—	5.3	(3.8)	ハケ/底：ナデ	ハケ	黒斑
	200	SD9	覆土	弥/土	壺	底	1/1	—	9.4	(4.3)	ミガキ/裾：ケズリ？→ミガキ	ハケ/内底：ナデ	
	201	SD10	覆土	弥/土	有孔土器	胴～底	2/3	—	4.1	(8.0)	ハケ/底：ナデ	ミガキ	焼成前穿孔１孔
	202	SD13	覆土	弥生	壺	胴～底	2/3	—	6.4	(6.0)	ミガキ・底：ナデ	ハケ・ナデ	
	203	SK7	覆土	土師器	台付甕	脚	1/2	—	8.6	(6.7)	ハケ	ナデ	
	204	SK12	覆土	土師器	甕	口縁～胴	1/2	13.6	—	(8.8)	口縁：横ナデ/胴：ハケ	ハケ	
	205	SK18	覆土	弥生	壺	口縁～頸	1/1	9.1	—	(9.5)	摩耗不明	ナデ	縄文・横直線文・短斜線文（７）・黒斑
	206	SK20	覆土	土師器	鉢	底	1/1	—	3.0	(1.9)	ミガキ/底：ナデ	ミガキ	
	207	SK24	覆土	弥生	高杯	杯	3/4	26.4	—	(9.4)	ミガキ	ミガキ	赤彩
	208	SK24	覆土	弥生	壺	胴～底	3/5	—	7.7	(23.7)	ミガキ/底：ナデ	ハケ	土器棺
	209	SK24	覆土	弥生	甕	口縁～胴	1/4	23.4	—	(12.0)	ハケ	ハケ→ミガキ	簾状文（９）・波状文・黒斑
	210	SK26	覆土	弥/古	鉢	全形	1/1	14.1	6.4	8.6	口縁：指オサエ/ハケ/底：ナデ	口縁：ハケ/ナデ	黒斑
	211	SP7	覆土	弥/古	壺	口縁～胴	2/3	18.3	—	(12.3)	ハケ→ミガキ	口縁～頸：ハケ→ミガキ/胴：ハケ→ナデ	淡い赤彩・黒斑　器壁が薄い精製
	212	SP30	覆土	弥/古	片口杯	全形	1/2	12.5	4.7	5.3	ミガキ/底：ナデ	ミガキ	赤彩・黒斑
	213	SP30	覆土	弥/古	台付甕	頸～底	3/4	—	9.5	(11.1)	ハケ	甕：ミガキ/台：指ナデ・工具ナデ・横ナデ	黒斑
54	214	SZ1	覆土	須恵器	甕	口縁～頸	1/3	8.8	—	(3.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	降灰
	215	SZ1	覆土	須恵器	甕	口縁	1/5	—	—	(5.7)	口縁：ロクロナデ	口縁 ロクロナデ	波状文・降灰
	216	SZ1	覆土	須恵器	甕	頸～胴	1/3	—	—	(7.0)	ロクロナデ/胴：ロクロナデ→ナデ	ロクロナデ/胴：ロクロナデ→指オサエ	自然釉
	217	SZ1	覆土	埴輪	不明	胴	—	—	—	—	ナデ	ナデ	赤彩
	218	SZ1	覆土	埴輪	不明	底	—	—	—	—	ナデ	ハケ	
	219	SZ1	覆土	埴輪	不明	底	—	—	—	—	ナデ・指ナデ	ハケ	
	220	SZ1	覆土	埴輪	不明	突帯	—	—	—	—	ナデ	ー	
	221	SZ1	覆土	埴輪	不明	突帯	—	—	—	—	ナデ	ー	
	222	SZ1	覆土	埴輪	不明	突帯	—	—	—	—	ナデ	ー	赤彩
	223	SZ1	覆土	埴輪	不明	突帯	—	—	—	—	ナデ	ー	赤彩
	224	SZ1	覆土	埴輪	不明	突帯	—	—	—	—	ナデ	ー	赤彩
	225	SZ1	覆土	埴輪	不明	突帯	—	—	—	—	ナデ	ー	
	226	SZ1	覆土	埴輪	不明	不明	—	—	—	—	ナデ	ー	赤彩・形象埴輪の一部か？
55	227	谷状地形		弥生中期	壺	口縁～頸	1/1	5.0	—	(8.7)	ミガキ・ナデ	指ナデ・ハケナデ	縄文・櫛描文・沈線文
	228	谷状地形		弥生	壺	全形	4/5	5.0	4.1	9.1	ハケ→ナデ・ケズリ	ナデ	黒斑
	229	谷状地形		弥生	壺	頸～底	1/2	—	6.5	(14.0)	ミガキ/底：ミガキ　無彩	頸：ミガキ/胴：器面荒れ不明瞭	赤彩
	230	谷状地形		弥生	壺	頸～胴	2/3	—	—	(17.6)	ハケ→ミガキ	頸：ミガキ・ナデ/胴：ハケ	Ｔ字文（13？）・赤彩
	231	谷状地形		弥生	甕	口縁～頸	1/3	18.8	—	(11.0)	ミガキ	ハケ→ミガキ	簾状文（４）
	232	谷状地形		弥生	壺	口縁～頸	1/3	15.8	—	(9.3)	ミガキ	ミガキ	簾状文（９）・赤彩
	233	谷状地形		弥生	甕	口縁～胴上	1/3	16.2	—	(6.0)	口縁：横ナデ/胴：ハケ	口縁：横ナデ？/胴：板状工具ナデ	刺穿文・234と同一個体か
	234	谷状地形		弥生	甕	胴下～底	1/2	—	7.0	(8.0)	ハケ/底：ナデ	工具ナデ/底：強いハケ	233と同一個体か
	235	谷状地形		弥生	甕	口縁	2/3	17.0	—	(12.0)	ミガキ	ミガキ	簾状文（５）・波状文
	236	谷状地形		弥生	甕？	底	1/1	—	5.6	(5.4)	ハケ→ナデ	ハケ	
	237	谷状地形		弥生	甕	胴～底	2/3	—	4.0	(6.1)	ミガキ	ミガキ/底：指ナデ	波状文
	238	谷状地形		弥生	壺	胴～底	3/4	—	7.0	(11.1)	ハケ→ミガキ	ハケ	
	239	谷状地形		弥生	鉢	全形	1/3	13.8	5.0	(7.7)	ミガキ	ミガキ	赤彩

図版		出土遺構		種別	器種	残存		寸法（cm）			成形・調整		施文・その他
図	番号	遺構名	位置			部位	遺存	口径	底径	器高	外面	内面	
55	240	谷状地形		弥生	鉢	全形	1/3	16.4	7.5	7.5	ミガキ	ミガキ	赤彩
	241	谷状地形		弥/古？	底部穿孔土器	底部	1/2	—	5.8	(3.0)	ケズリ/底：ナデ	ハケ	
	242	谷状地形		弥生	鉢	底	1/1	—	5.2	(1.9)	ミガキ？	摩耗不明	赤彩・底部穿孔（1）
	243	谷状地形		弥生	高杯	杯	1/2	14.0	—	(6.0)	ミガキ	ミガキ	赤彩
	244	谷状地形		弥生	器台	口縁	1/4	23.6	—	(4.7)	工具ナデ・ミガキ	ミガキ	赤彩・黒斑・円形孔２ヶ
	245	谷状地形		弥生	高杯	脚	1/2	—	—	(7.2)	ハケ→ミガキ	ナデ	赤彩
	246	谷状地形		弥生	高杯	脚	1/2	—	—	(7.5)	ハケ→ミガキ	ナデ・ハケ→ナデ・横ナデ？	赤彩
	247	谷状地形		弥生	高杯	脚	2/3	—	—	(8.4)	ミガキ	ハケ？	赤彩
	248	谷状地形		弥生	高杯	脚	4/5	—	15.2	(15.1)	ハケ→ミガキ	指ナデ・縦ナデ・横ナデ	赤彩
	249	谷状地形		弥生	高杯	脚	1/1	—	16.3	(16.2)	ミガキ	ハケ	赤彩
	250	谷状地形		弥生	高杯	脚	2/3	—	16.7	(15.9)	ミガキ	工具ハケ→横ナデ	赤彩
	251	谷状地形		弥生	高杯	脚	2/3	—	16.8	(18.2)	ミガキ	ハケ・ナデ	赤彩
56	252	谷状地形		弥生	蓋	脚	2/3	—	11.8	(8.0)	ハケ	ハケ/裾：横ナデ	赤彩
	253	谷状地形		弥生	高杯	脚	2/3	—	—	(12.0)	ミガキ	ナデ	赤彩
	254	谷状地形		須恵器	蓋	全形	1/2	10.2	—	(2.0)	ロクロナデ・ロクロナデ→回転ケズリ	ロクロナデ	
	255	谷状地形		須恵器	蓋	全形	1/3	13.2	—	3.2	ロクロナデ・ロクロナデ→回転ケズリ	ロクロナデ・ロクロナデ→ハケ	降灰・つまみ径2.9cm
	256	谷状地形		須恵器	高台付杯	全形	1/3	9.8	5.4	4.6	ロクロナデ/底：回転ナデ	ロクロナデ	
	257	谷状地形		須恵器	杯	全形	2/3	14.4	(5.4)	(4.3)	ロクロナデ/底：ヘラ切	ロクロナデ・ロクロナデ→ハケ	
	258		検出面	弥生中期	鉢	全形	1/4	13.2	5.0	7.0	口唇：縄文/口縁：横ナデ/胴下：ハケ→ミガキ	ミガキ	縄文・直線文・連弧文・押引列点文・ボタン状貼付文
	259		検出面	弥生中期	甕？	底	1/3	—	9.6	(4.2)	ナデ	工具ナデ/内底：指ナデ	底：アジロ痕
	260		検出面	弥生	蓋	ツマミ	1/2	—	—	(4.9)	ミガキ	ミガキ	赤彩・つまみ：穿孔１ヶ・つまみ径5.1cm
	261		検出面	弥生	甕	口縁～胴上	1/1	17.2	—	(9.8)		ハケ→ミガキ	簾状文（12？）・波状文（４？）
	262		検出面	土師器	甕	底	3/4	—	6.2	(5.2)	ハケ→ミガキ？・ケズリ	ハケ？/内底：指ナデ	
	263		検出面	土師器	台付甕	台	4/5	—	8.5	(3.3)	ハケ	裾：ナデ	

表４　破片資料観察表

図版		出土遺構		種別	器種	残存部位	時期・備考
図	番号	遺構名	層位				
56	264	SD5	覆土	縄文	深鉢	口縁	拓本・縄文前期後葉
	265	調査区壁	包含層	縄文	浅鉢	口縁	拓本・縄文中期後半
	266	SD2	覆土	縄文	浅鉢	口縁	拓本・縄文中期後半
	267	谷状地形		縄文	深鉢	口縁	拓本・縄文後期前葉
	268	谷状地形		縄文	深鉢	口縁	拓本・縄文後期前葉
	269	谷状地形		縄文	不明	胴？	拓本・縄文中期後半
	270	谷状地形		縄文	不明	胴？	拓本・縄文中期後半
	271	谷状地形		弥生	壺	口縁	拓本・弥生中期
	272	谷状地形		弥生	壺	口縁	拓本・弥生中期
	273	SD1	覆土上層	縄文	深鉢	口縁	拓本・弥生中期
	274	谷状地形		弥生	壺	頸	拓本・弥生中期
	275	谷状地形		弥生	壺	頸	拓本・弥生中期
	276	谷状地形		弥生	壺	頸	拓本・弥生中期
	277	谷状地形		弥生	壺	胴	拓本・弥生中期
	278	谷状地形		弥生	壺	胴	拓本・弥生中期
	279	谷状地形		弥生	壺	胴上	拓本・弥生中期
	280	谷状地形		弥生	壺	胴	拓本・弥生中期
	281	谷状地形		弥生	壺	胴	拓本・弥生中期
57	282	谷状地形		弥生	壺	胴	拓本・弥生中期
	283	谷状地形		弥生	壺又は甕	胴上	拓本・弥生中期
	284	SB1	覆土下層	弥生	甕	胴	拓本・弥生中期
	285	谷状地形		弥生	壺	胴	拓本・弥生中期
	286	谷状地形		弥生	壺又は甕	胴	拓本・弥生中期
	287	谷状地形		弥生	壺又は甕	底	拓本・弥生中期
	288	谷状地形		弥生	壺又は甕	胴	拓本・弥生中期
	289	谷状地形		弥生	壺	胴	拓本・弥生中期
	290	谷状地形		弥生	甕	胴	拓本・弥生中期
	291	谷状地形		弥生	甕	胴	拓本・弥生中期
	292	谷状地形		弥生	壺	胴上	拓本・弥生中期
	293	谷状地形		弥生	不明	胴？	拓本・弥生中期
	294	谷状地形		弥生	不明	胴？	拓本・弥生中期
	295	谷状地形		弥生	不明	胴？	拓本・弥生中期
	296	谷状地形		弥生	壺	胴	拓本・弥生中期
	297	谷状地形		弥生	壺	胴	弥生中期
	298	谷状地形		弥生	壺	口縁	拓本・弥生中期
	299	谷状地形		弥生	甕	口縁	拓本・弥生中期
	300	谷状地形		弥生	甕	口縁	拓本・弥生中期
	301	谷状地形		弥生	甕	口縁	拓本・弥生中期
	302	谷状地形		弥生	壺又は甕	口縁	拓本・弥生中期
	303	谷状地形		弥生	壺	胴	拓本・弥生中期
	304	谷状地形		弥生	壺	胴	拓本・弥生中期
	305	谷状地形		弥生	壺	胴	拓本・弥生中期
	306	谷状地形		弥生	壺	胴上	拓本・弥生中期
	307	谷状地形		弥生	壺	胴上	拓本・弥生中期
57	308	谷状地形		弥生	壺	胴	拓本・弥生中期
	309	谷状地形		弥生	壺	胴	拓本・弥生中期
	310	谷状地形		弥生	壺	胴	拓本・弥生中期
	311	谷状地形		弥生	壺	胴	拓本・弥生中期
	312	谷状地形		弥生	壺	胴	拓本・弥生中期
	313	谷状地形		弥生	壺	胴	拓本・弥生中期
	314		検出面	弥生	甕	胴	拓本・弥生中期
	315	谷状地形		弥生	甕	胴	拓本・弥生中期
	316	谷状地形		弥生	甕	胴	拓本・弥生中期
	317	谷状地形		弥生	甕	胴	拓本・弥生中期
	318	谷状地形		弥生	甕	胴	拓本・弥生中期
	319	谷状地形		弥生	甕	胴	拓本・弥生中期
	320	谷状地形		弥生	甕	胴	拓本・弥生中期

表５　出土土製品・石器・石製品・金属製品等観察表

図版		出土遺構		種別	器種（遺存）	備考
図	番号	遺構名	層位			
58	321	谷状地形		土製品	土偶	縄文
	322	SB9	覆土上層	土製品	紡錘車（3/4）	
	323	谷状地形		土製品	紡錘車（1/2）	径3.4cm
	324	SB2	覆土	土製品	紡錘車（2/3）	径5.4cm
	325	谷状地形		土製品	円盤（1/1）	径5.1cm・土器の二次利用
	326	谷状地形		土製品	紡錘車（4/5）	径3.5cm
	327		検出面	土製品	紡錘車	径（5.2）cm・未貫通
	328	SB4	覆土上層	土製品	ミニチュア（底：1/1）	底径3.5・器高（1.4）cm
	329	SB4	覆土上層	土製品	ミニチュア（底：1/1）	底径3.4・器高（0.7）cm
	330	谷状地形		土製品	ミニチュア（底：1/2）	底径3.3・器高（2.5）cm
	331	SB9	覆土	土製品	ミニチュア（全形：4/5）	口縁7.3・底径2.3・器高6.3cm
59	332	SB2	覆土	石器	打製石鏃	1.08g・頁岩
	333	SB6	覆土	石器	打製石鏃	0.74g・黒曜石
	334	谷状地形		石器	打製石鏃	0.75g・頁岩
	335	SD1	覆土	石器	打製石鏃	0.62g・チャート
	336	SD1	覆土	石器	打製石鏃	1.97g・頁岩
	337	SB18	覆土	石器	打製石鏃	1.21g・チャート
	338	SB18	検出面	石器	打製石鏃	3.01g・頁岩
	339	谷状地形		石器	打製石鏃	1.73g・黒曜石
	340	調査区外		石器	打製石鏃	3.35g・頁岩
	341	SB16	覆土下層	石器	石匙	11.2g・チャート
	342	谷状地形		石器	打製石斧	61.45g・頁岩
	343		検出面	石器	打製石斧	58.3g・頁岩
	344	SK30	覆土	石器	太型蛤刃石斧	65.78g・硬砂岩
	345	SB22･24	床直	石器	柱状片刃石斧	4.93g・緑色凝灰岩
	346	SB4	覆土上層	石器	磨製石斧	8.97g・蛇紋岩
	347	SK12	覆土	石器	扁平片刃石斧	5.78g・頁岩
	348	SB12	床直	石器	磨製石斧	12.61g・ネフライト
	349	SB6	P４	石器	石包丁	55.7g・安山岩
	350	SB18	覆土上層	石器	石包丁	38.8g・頁岩
	351	谷状地形		石器	石包丁	32.4g・頁岩
60	352	SK26	覆土	石器	敲石	640g・安山岩
	353	谷状地形		石器	石鎚	859.45g・緑色凝灰岩
	354	SB9	床直	石器	敲石（又は石錘）	283g・石英斑岩

図版		出土遺構		種別	器種（遺存）	備考
図	番号	遺構名	層位			
60	355	谷状地形		石製品	凹石	552.8g・安山岩
	356	谷状地形		石製品	凹石	365.74g・砂岩
	357	谷状地形		石製品	凹石	696.74g・安山岩
	358	SD5	覆土	石製品	凹石	705.6g・安山岩
	359		検出面	石製品	不明	６g・頁岩
	360	SB2	床面	石器	砥石	60.5g・泥岩
61	361	SB18	検出	石器	石剣	326.55g・黒色頁岩
	362	SB7	床直	石製品	管玉	0.16g・全長10.0mm・碧玉
	363	SB9	床直	石製品	管玉	0.27g・全長12.0mm・碧玉
	364	SB7	床直	石製品	管玉	2.81g・全長29.0mm・碧玉
	365	谷状地形		石製品	管玉	0.16g・全長10.5mm・鉄石英
	366	谷状地形		石製品	管玉	0.17g・全長14.0mm・碧玉
	367	谷状地形		石製品	管玉	0.26g・全長16.5mm・碧玉
	368	SB3	床面	ガラス製品	ガラス小玉（1/2）	0.07g・全長5.0mm
	369	SB9	覆土	銅製品	銅鏃	2.22g
	370	SK12	覆土	鉄製品	鉄鏃	7.43g
	371	SD1	覆土	鉄製品	不明	42.92g
	372	谷状地形		鉄製品	刀子	15.13g
	373	SB8	覆土	鉄製品	曲刃鎌	46.92g

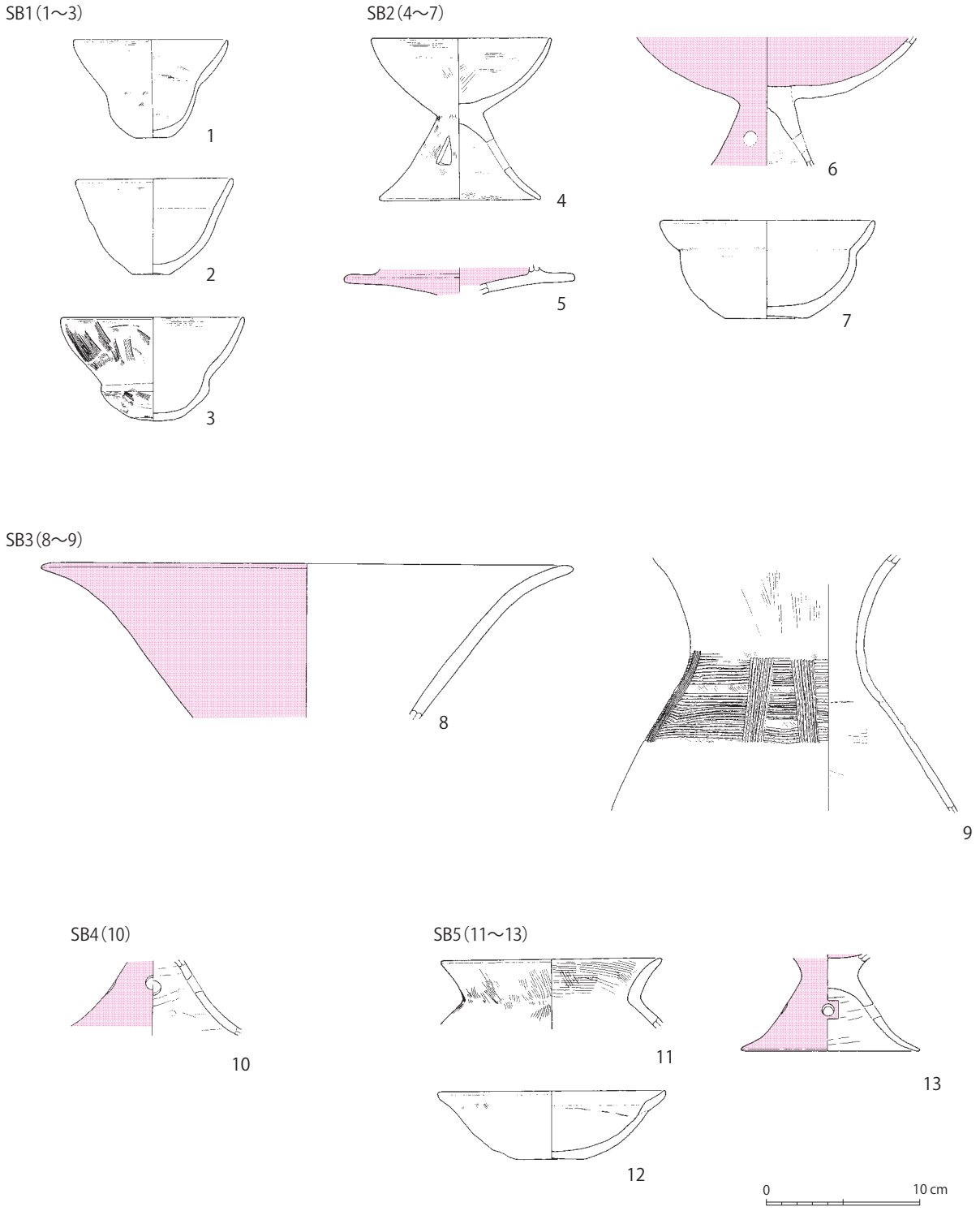


図39 遺物実測図１（SB１・２・３・４・５）

SB6（14～34）

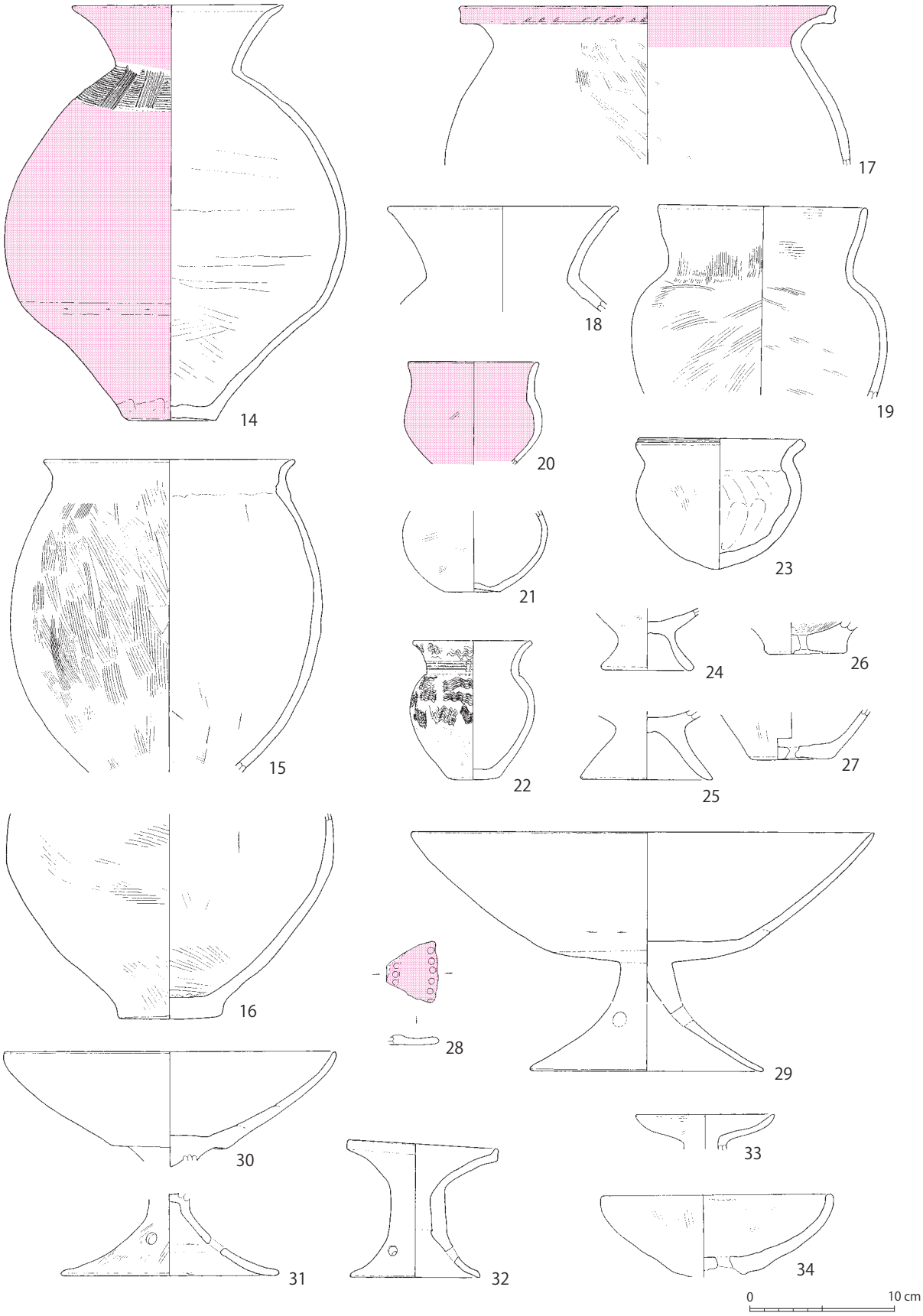


図40 遺物実測図２（SB６）

SB8-①(35～41)

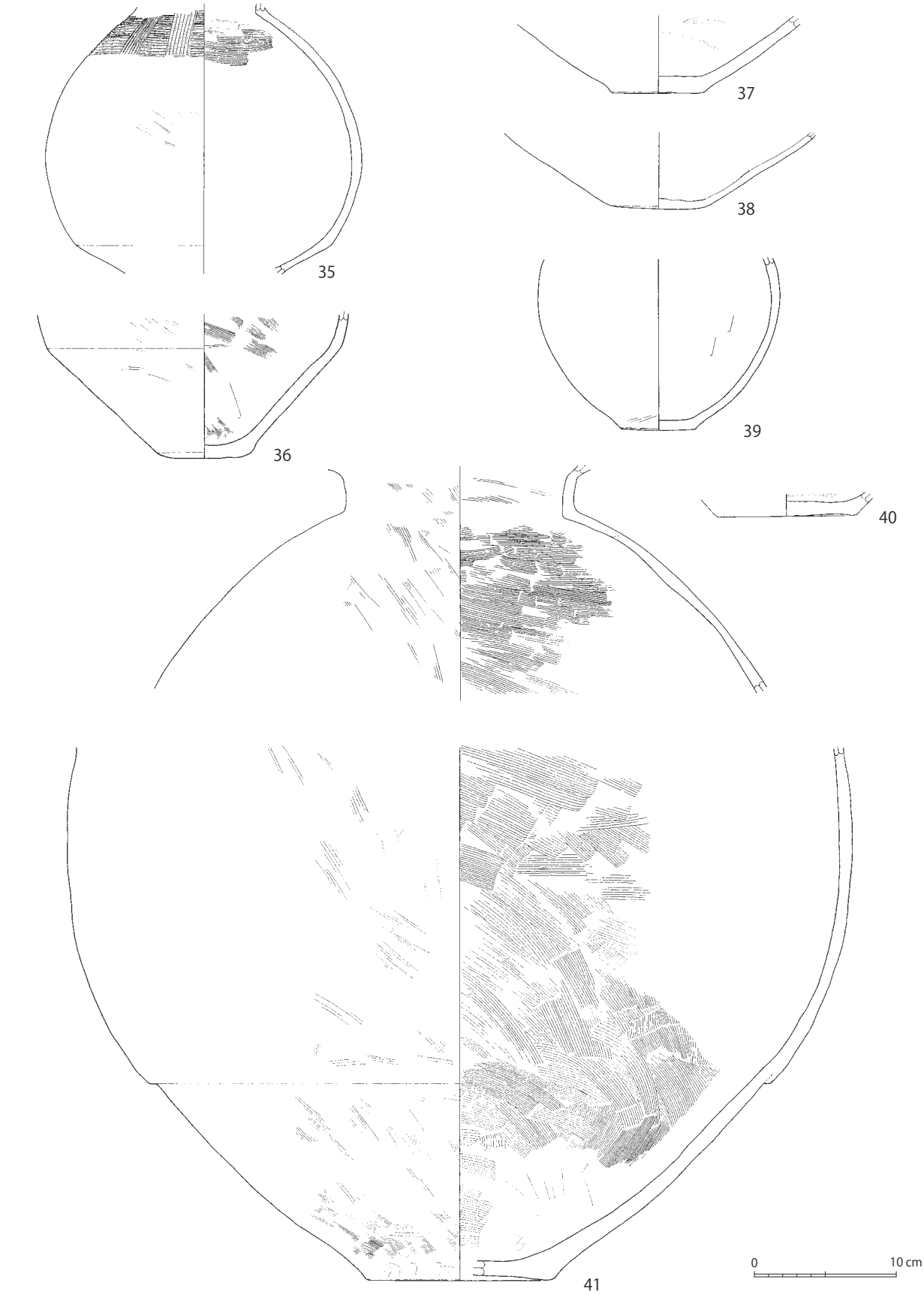


図41 遺物実測図３（SB８－①）

SB8-②(42～51)

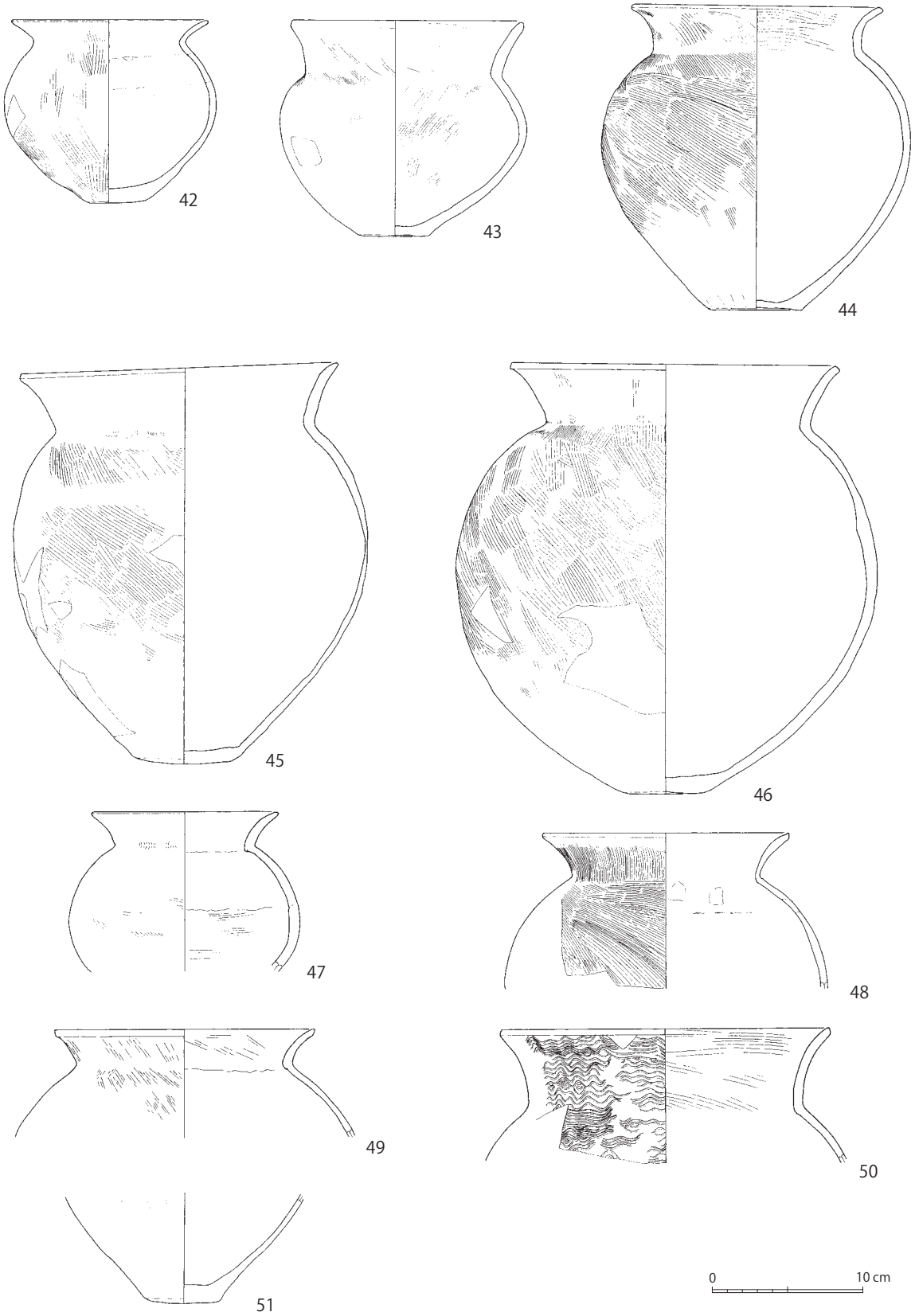


図42 遺物実測図４（SB８－②）

SB8-③(52～62)

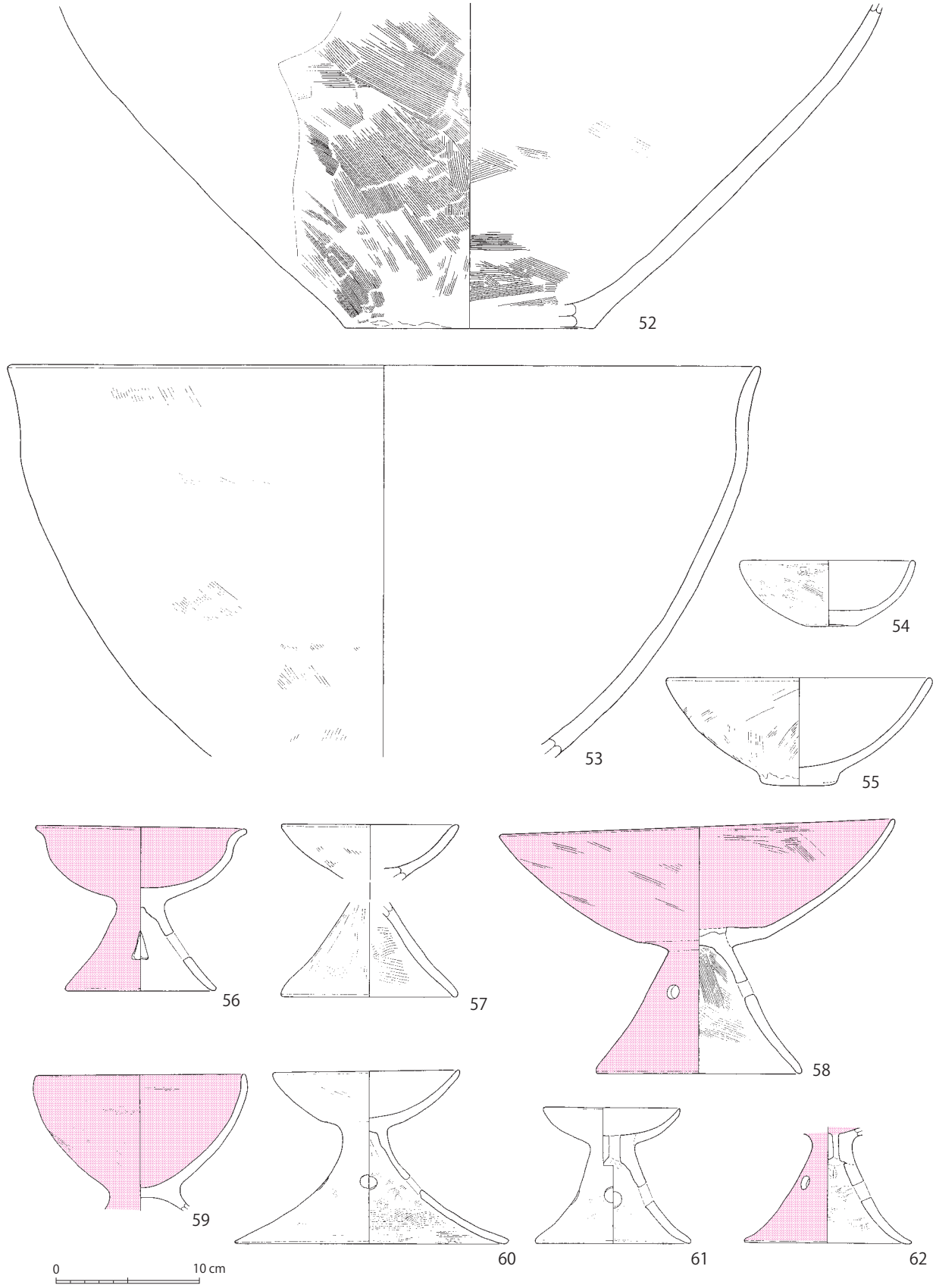


図43 遺物実測図５（SB８－③）

SB9-①(63〜76)

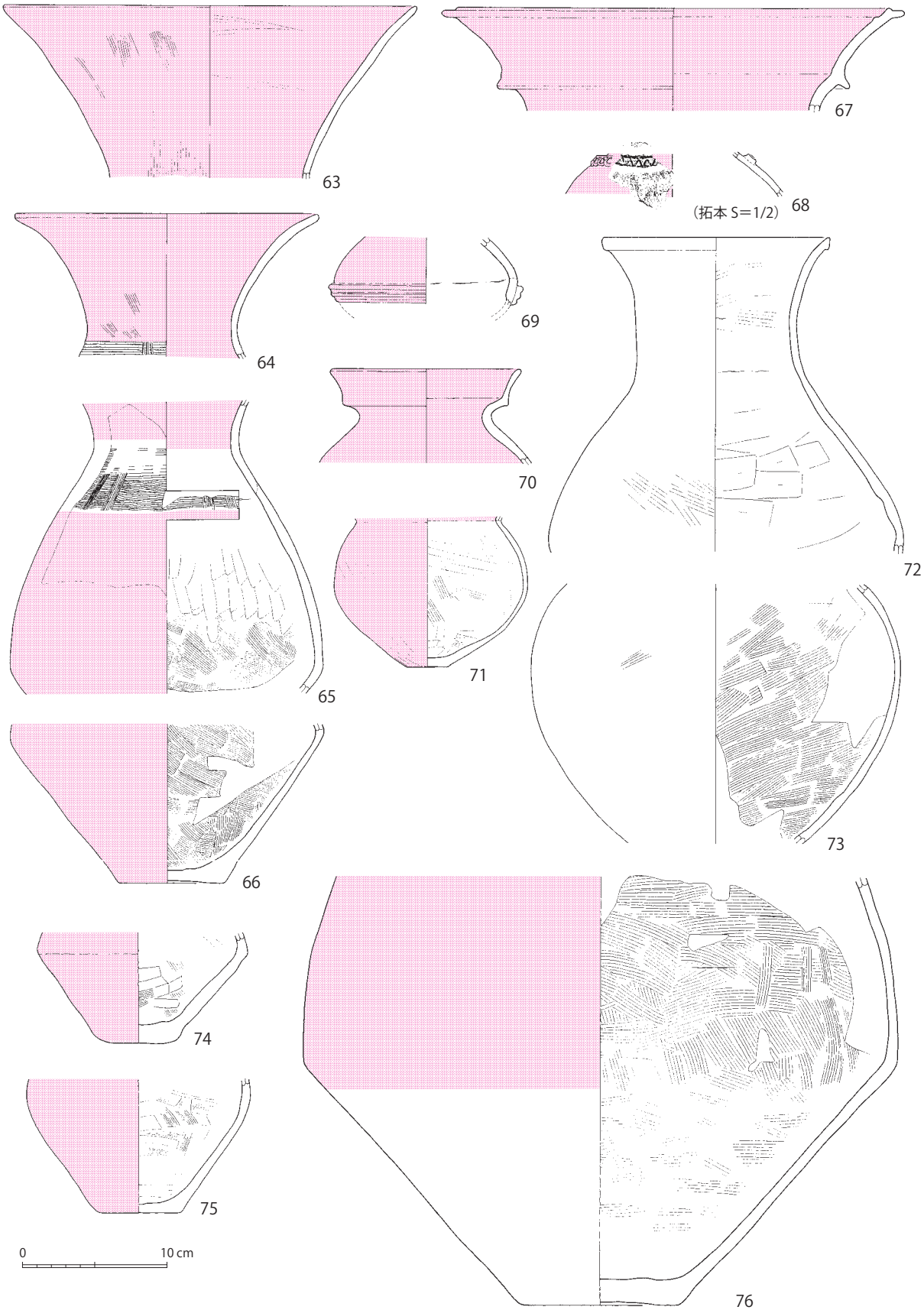


図44 遺物実測図 6 (SB 9 − ①)

SB9-②(79～90)

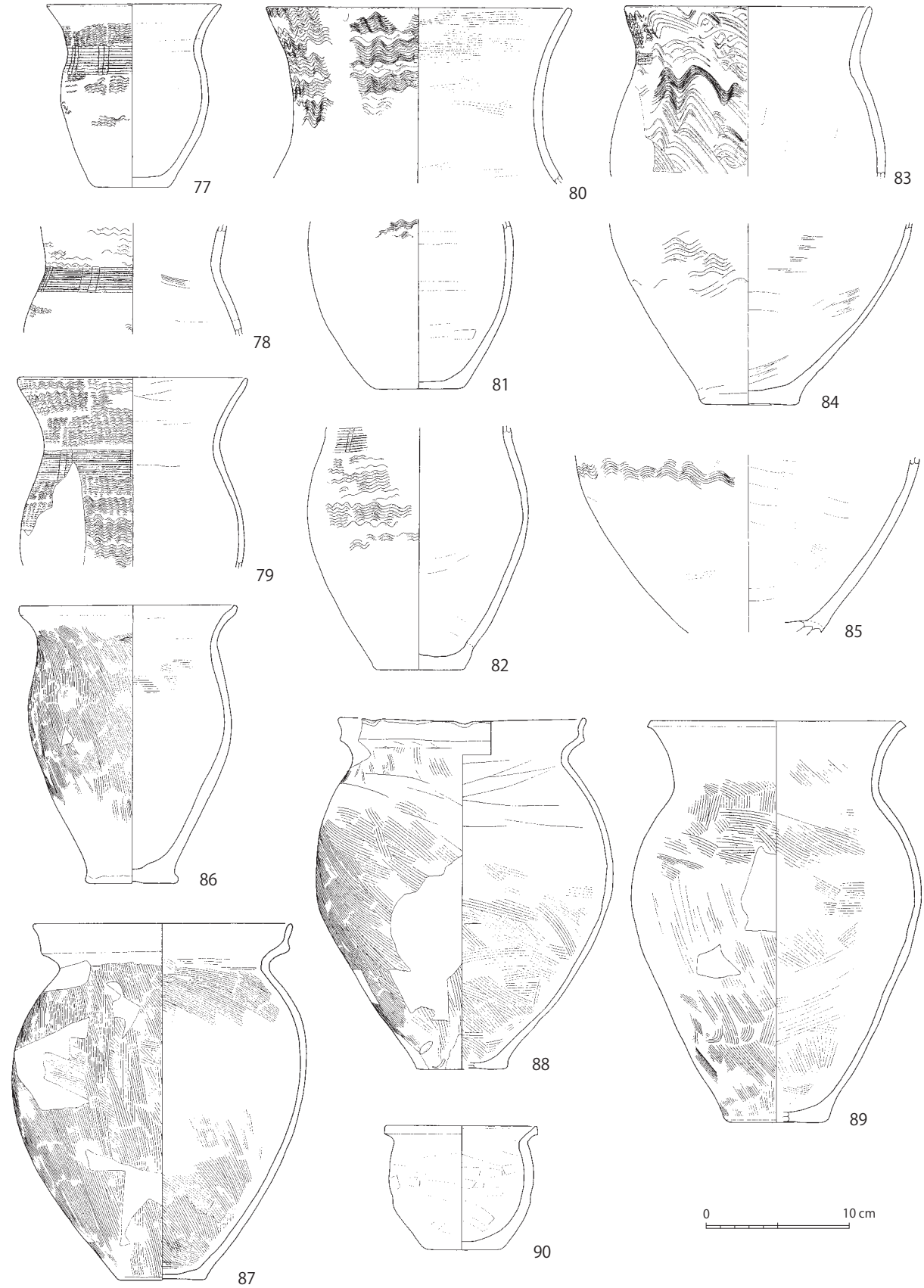


図45 遺物実測図７（SB９－②）

SB9-③(91～115)

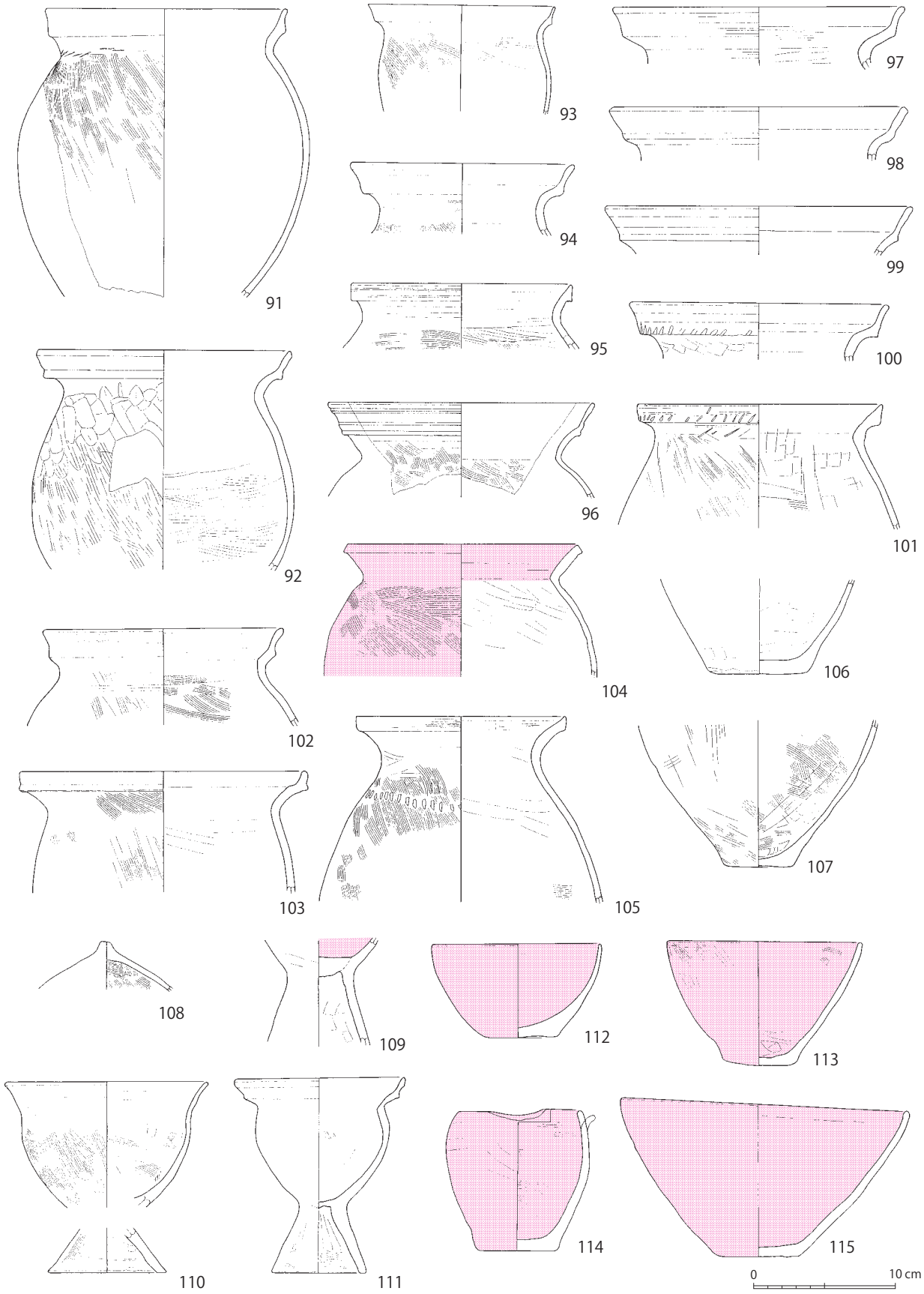
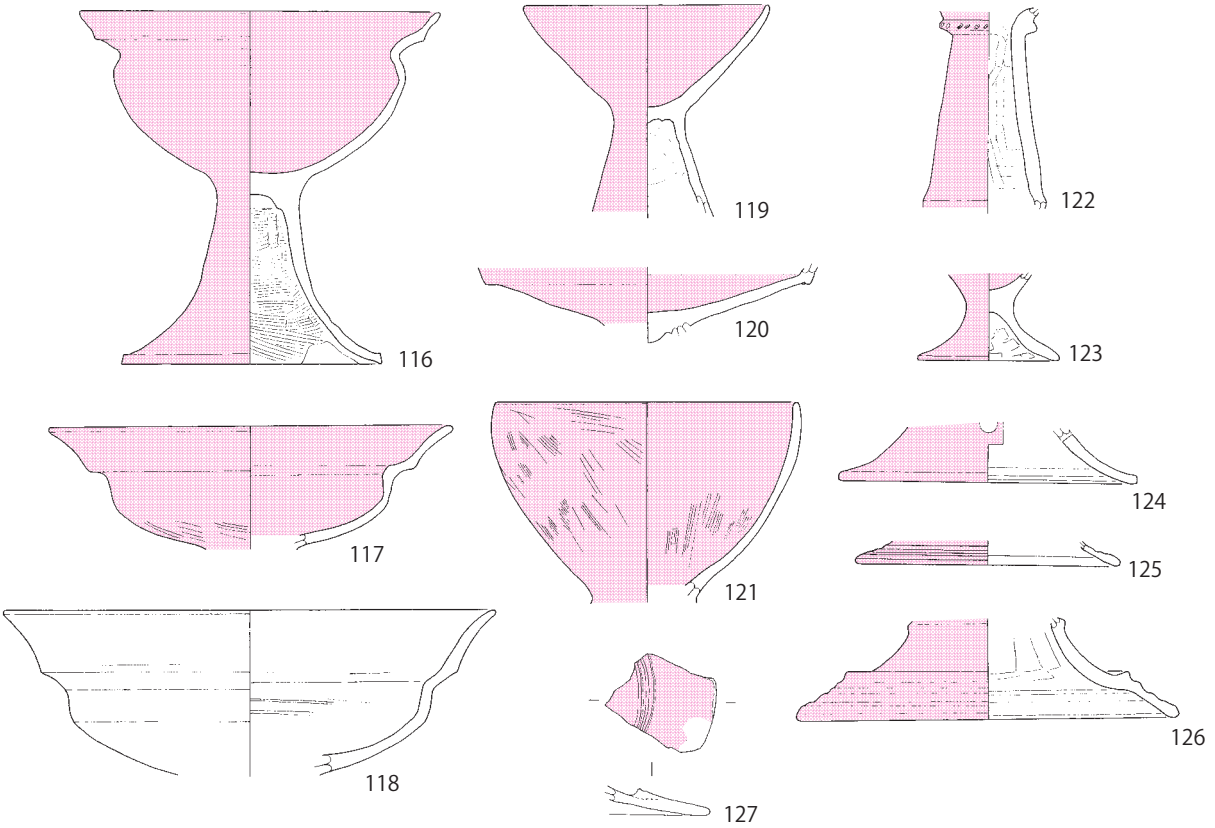


図46 遺物実測図８（SB９－③）

SB9-④（116～127）



SB10（128～136）

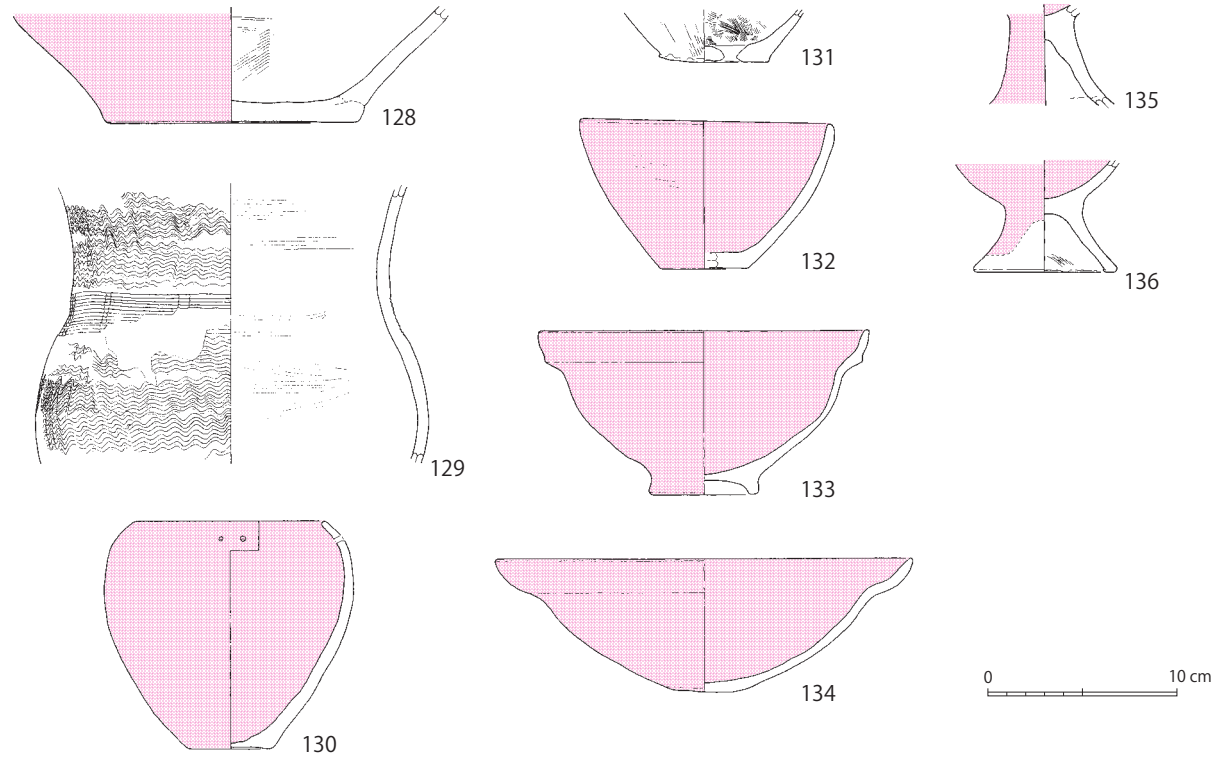


図47 遺物実測図９（SB９－④、SB10）

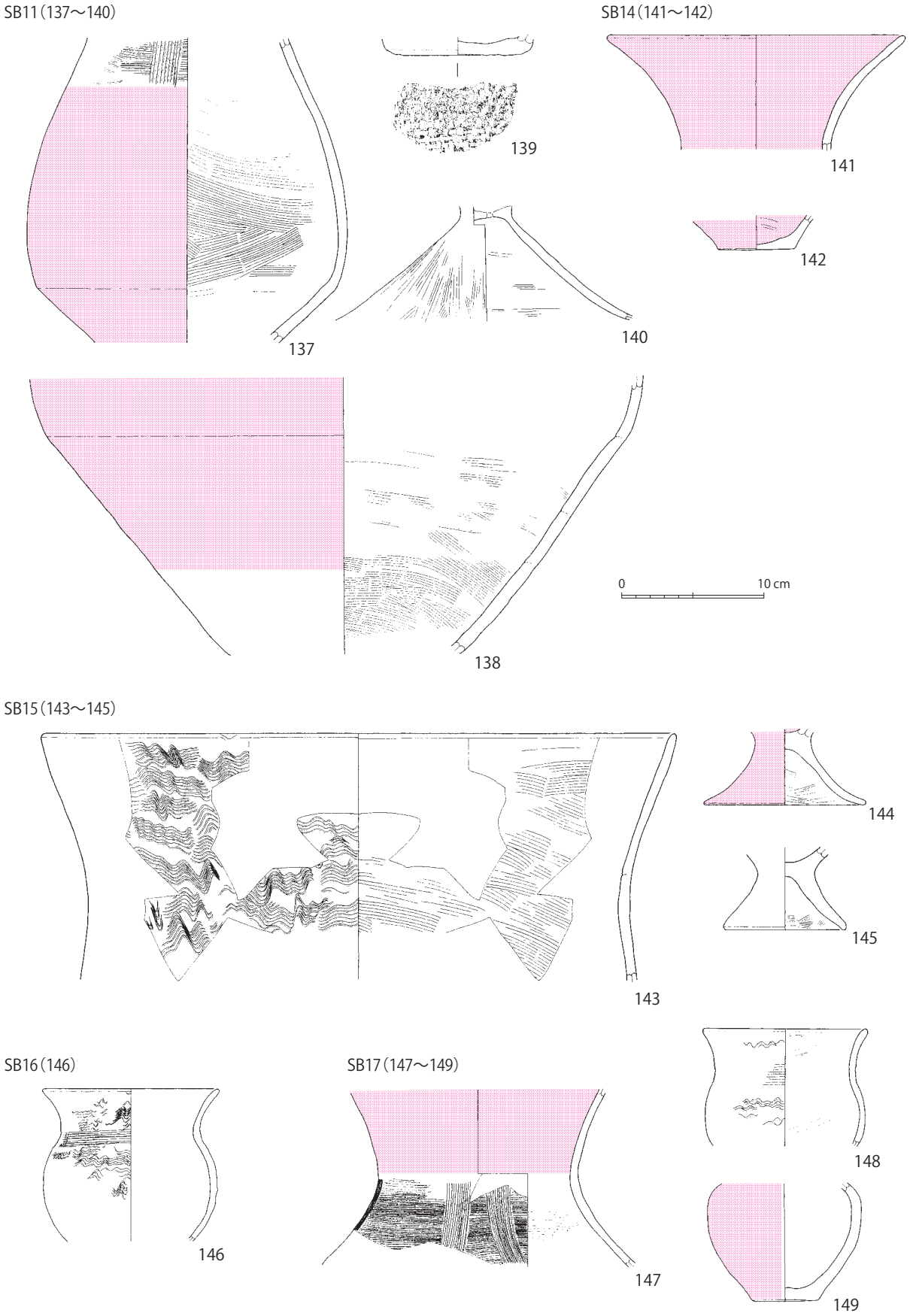
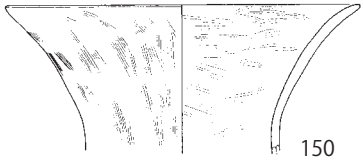
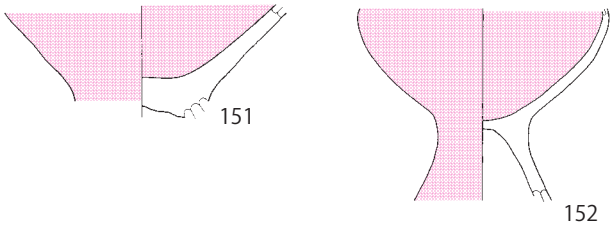


図48 遺物実測図10（SB11・14・15・16・17）

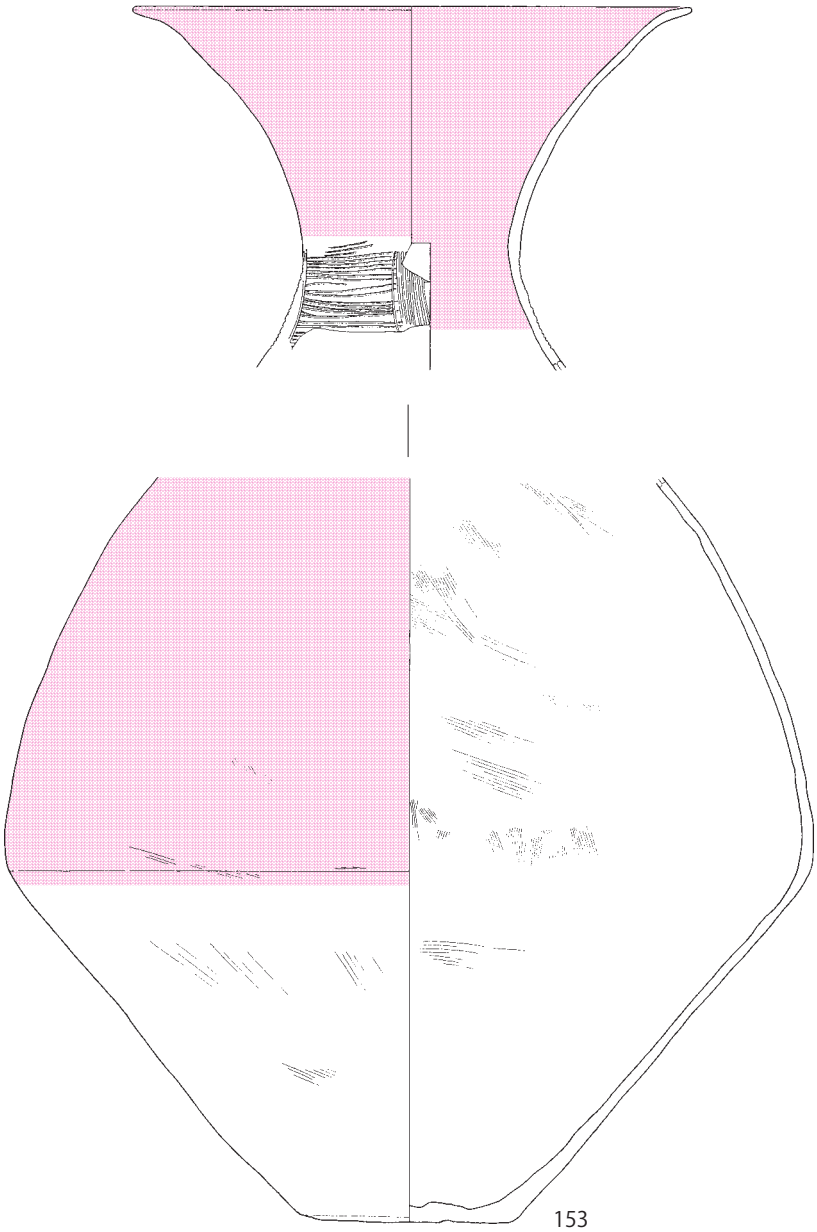
SB19（150）



SB20（151～152）



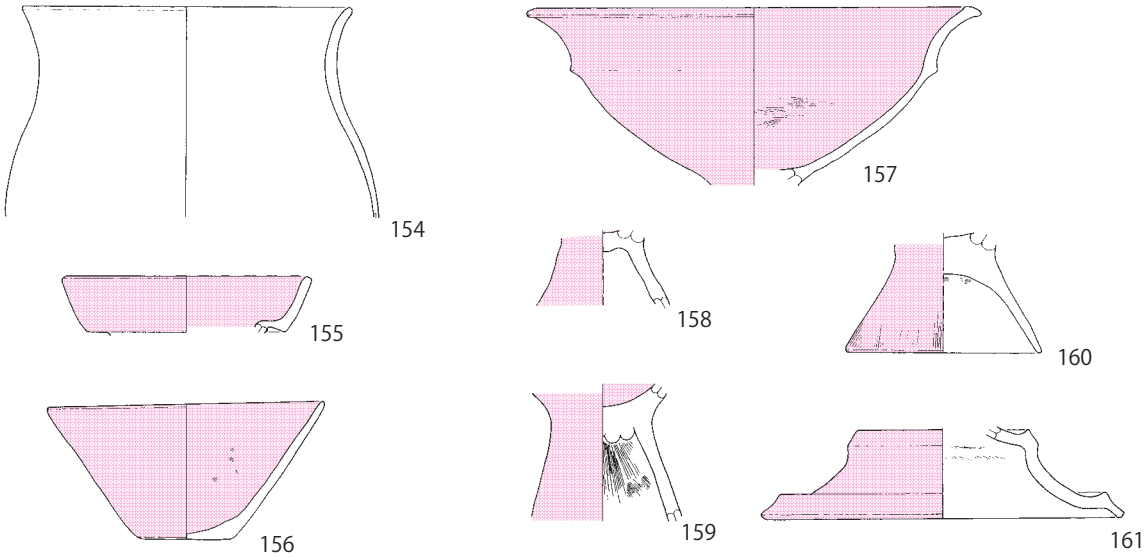
SB21（153）



0　10 cm

図49 遺物実測図11（SB19・20・21）

SB22・24（154～161）



SB25-①（162～169）

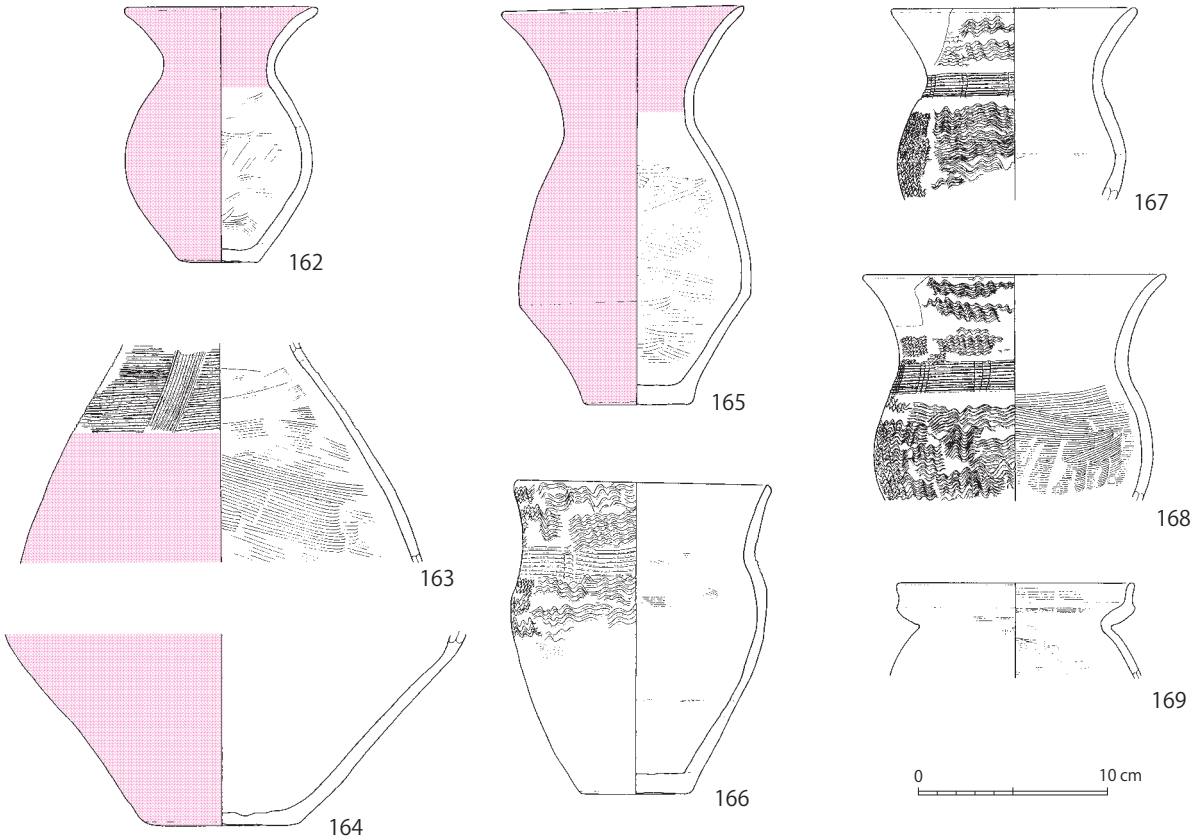
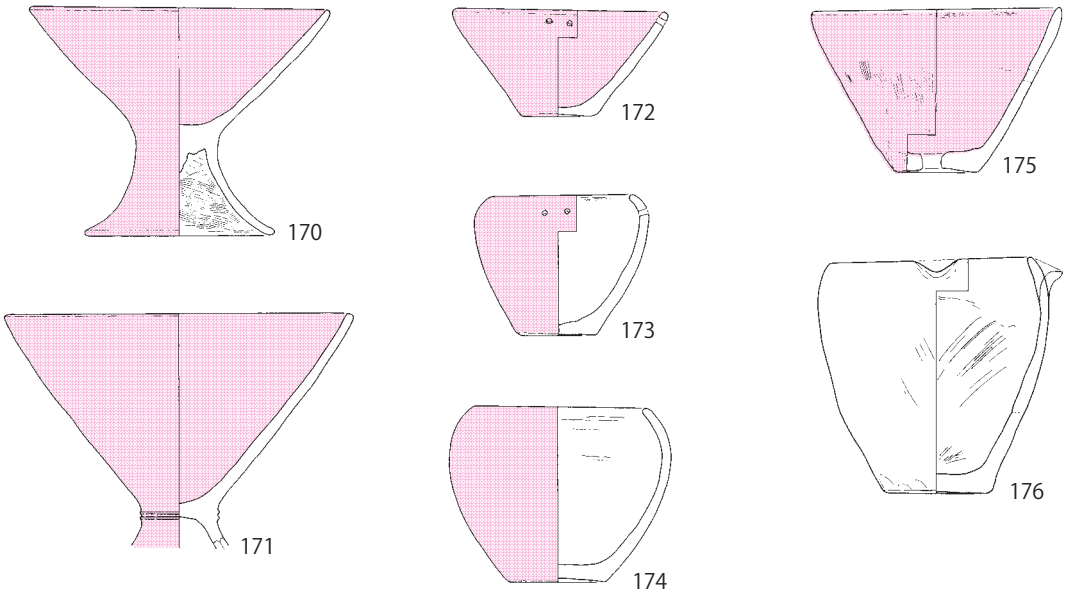
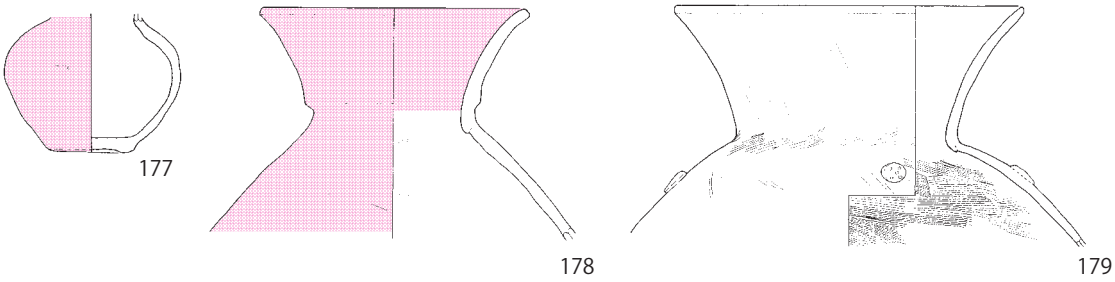


図50 遺物実測図12（SB22・24・25－①）

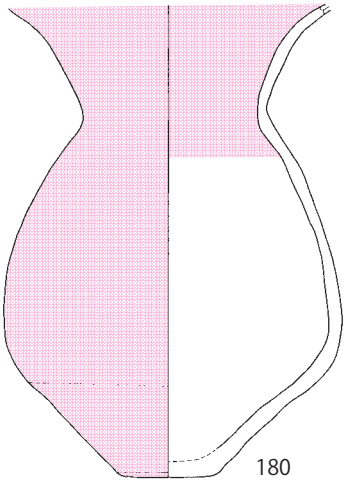
SB25-②（170～176）



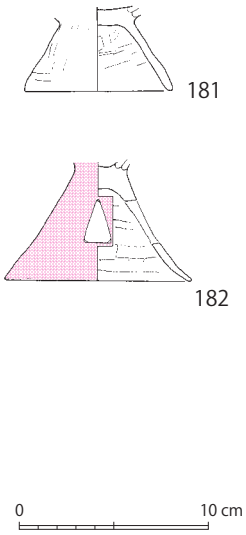
SB26（177～179）



SB27（180）



SX1（181～182）



SD1（183～185）

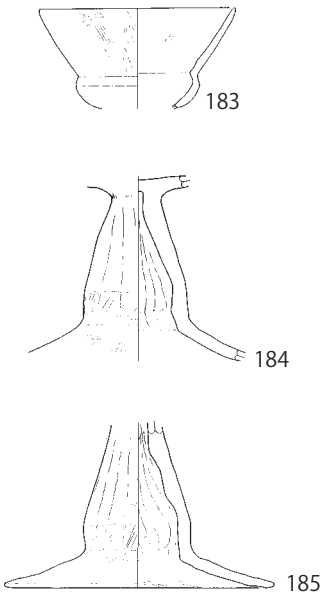


図51 遺物実測図13（SB25－②・SB26・27、SX１、SD１）

SD3（186～198）

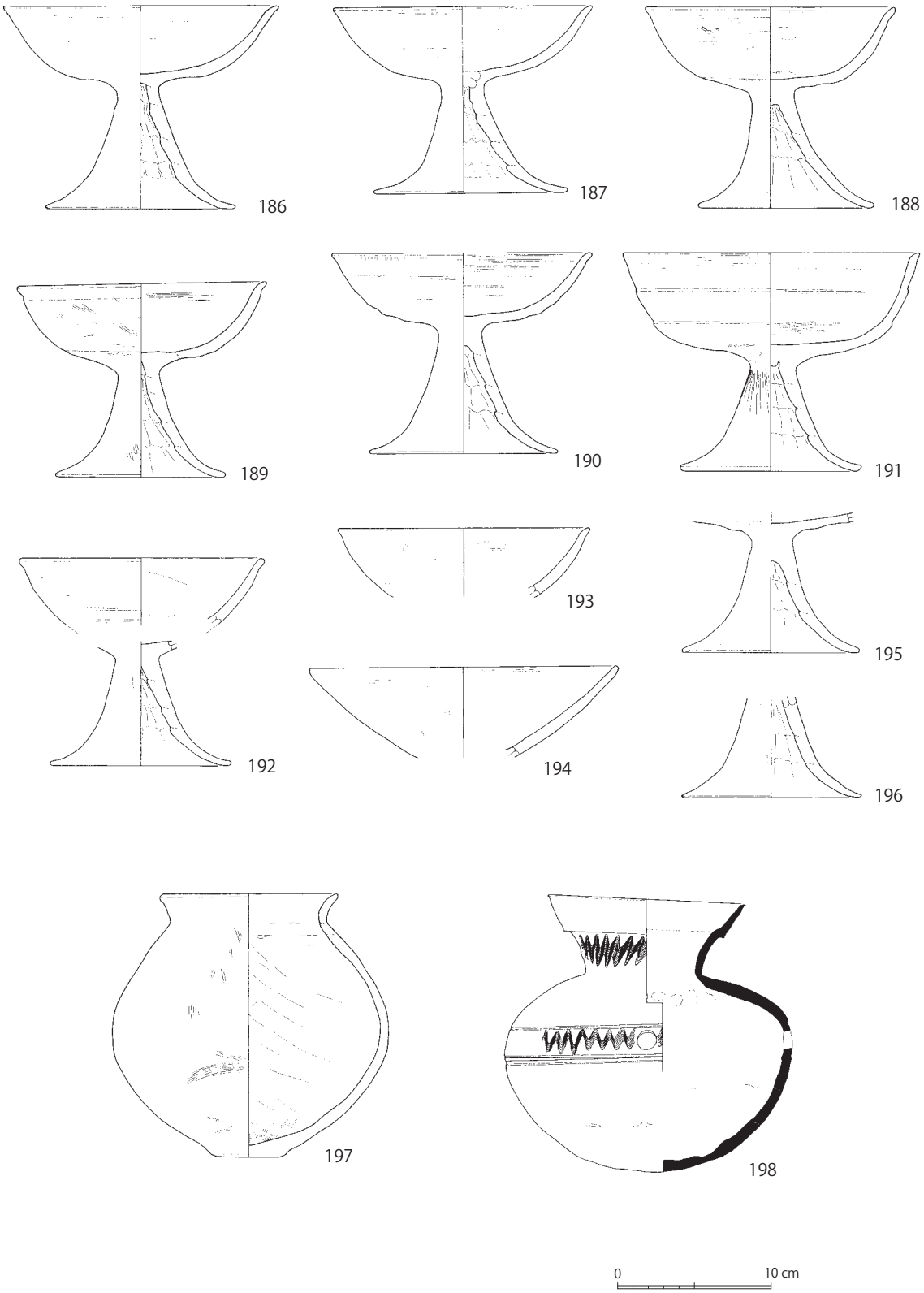


図52 遺物実測図14（SD 3 ）

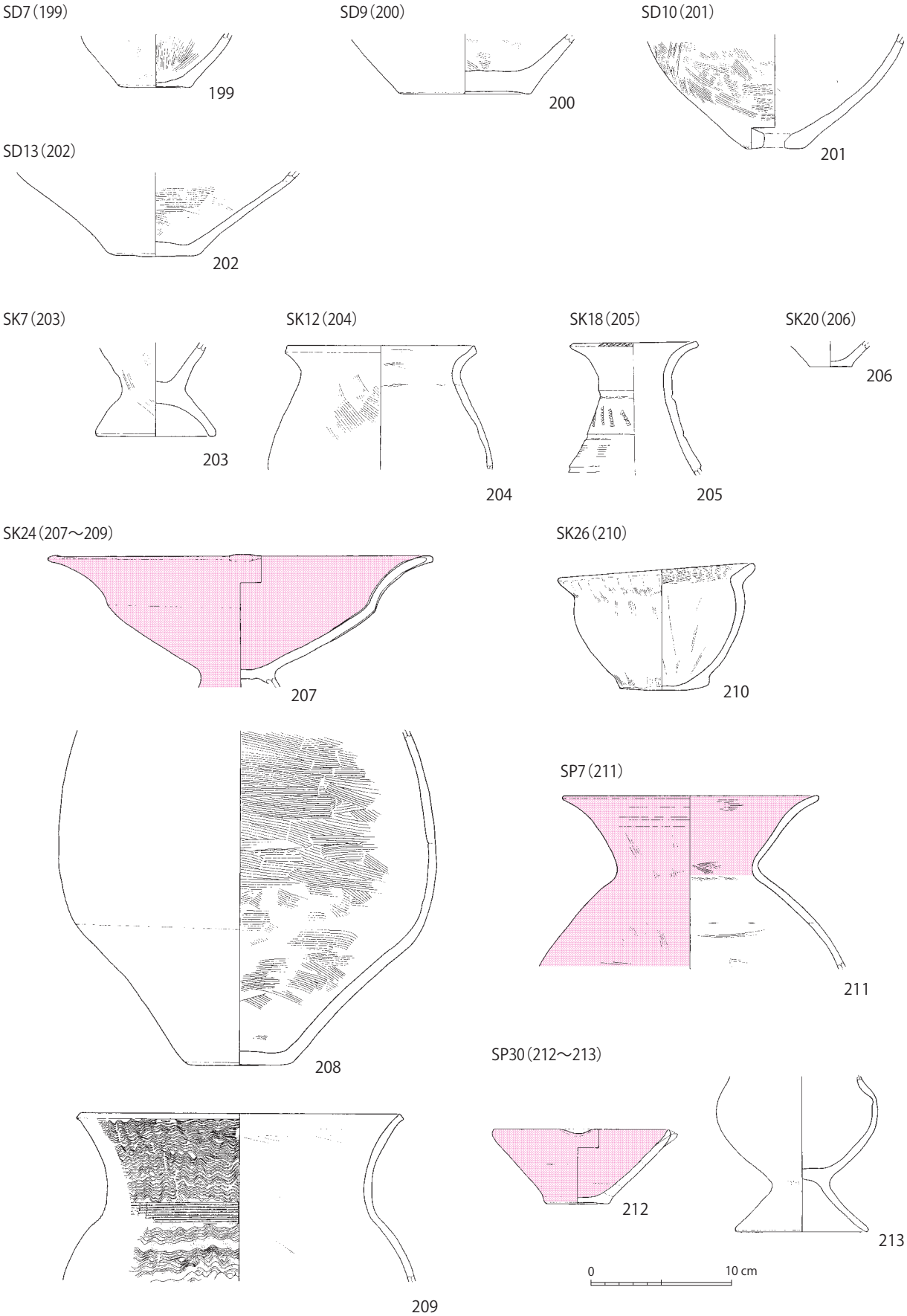


図53 遺物実測図15（SD７・９・10・13、SK７・12・18・20・24・26、SP７・30）

SZ1（214～226）

図54 遺物実測図16（SZ１）

谷状地形-①（227～251）

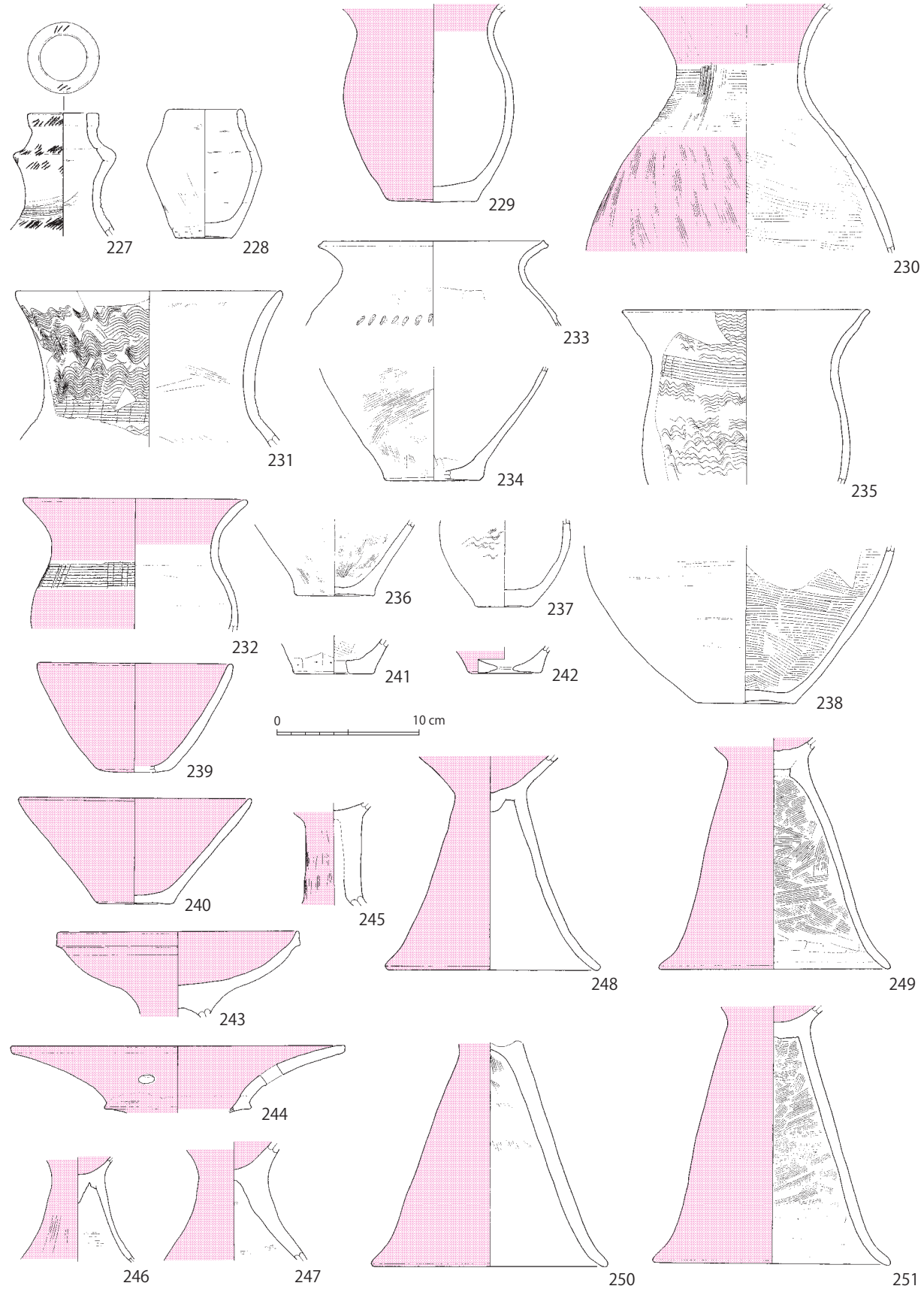
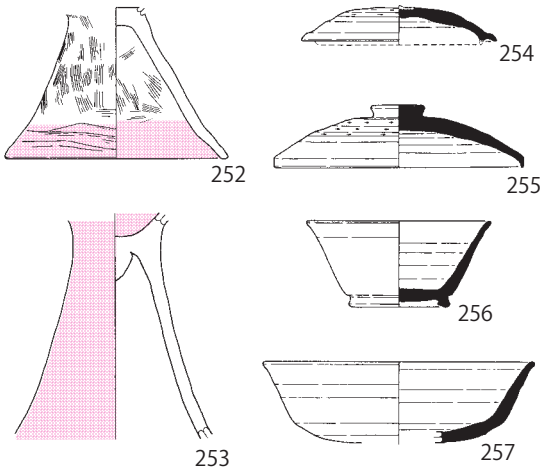
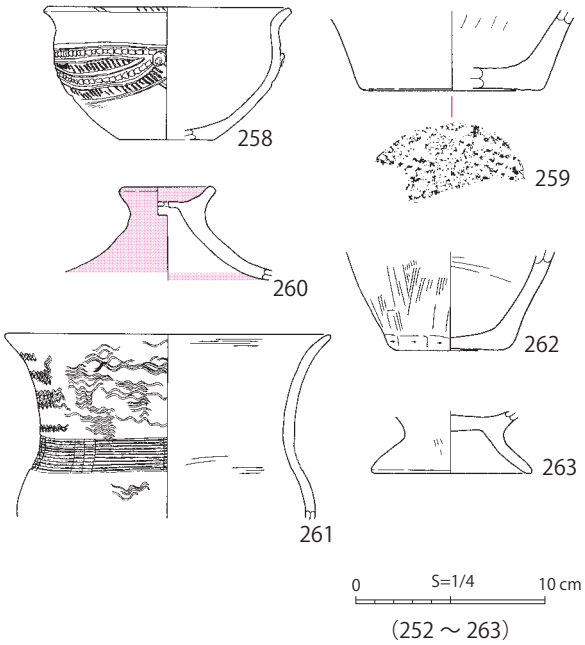


図55 遺物実測図17（谷状地形－①）

谷状地形-②（252～257）

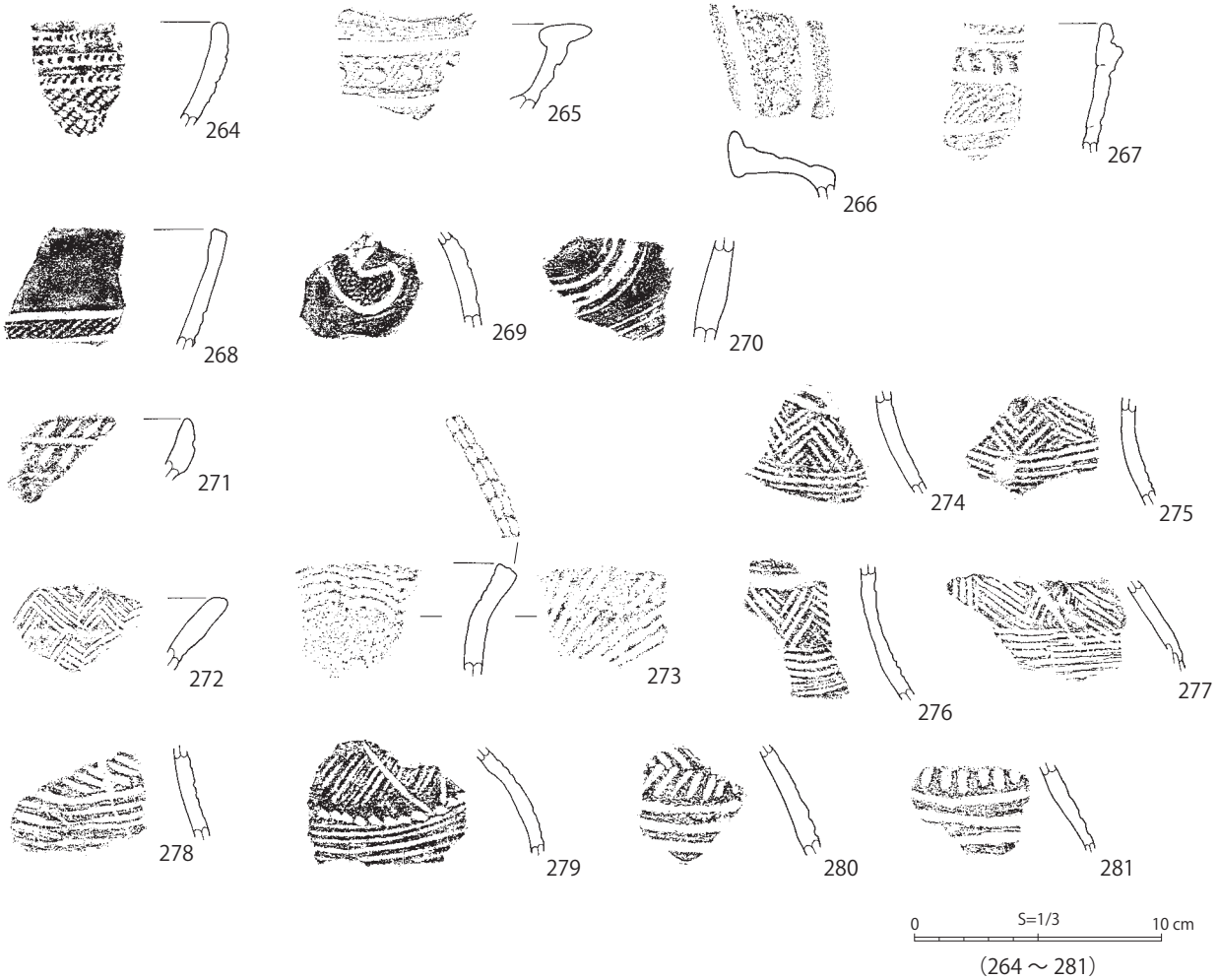


包含層・検出面（258～263）



（252 ～ 263）

弥生時代中期以前の遺物-①（264～281）



（264 ～ 281）

図56 遺物実測図18（谷状地形－②、包含層・検出面、拓本－①）

弥生時代中期以前の遺物-②（282～320）

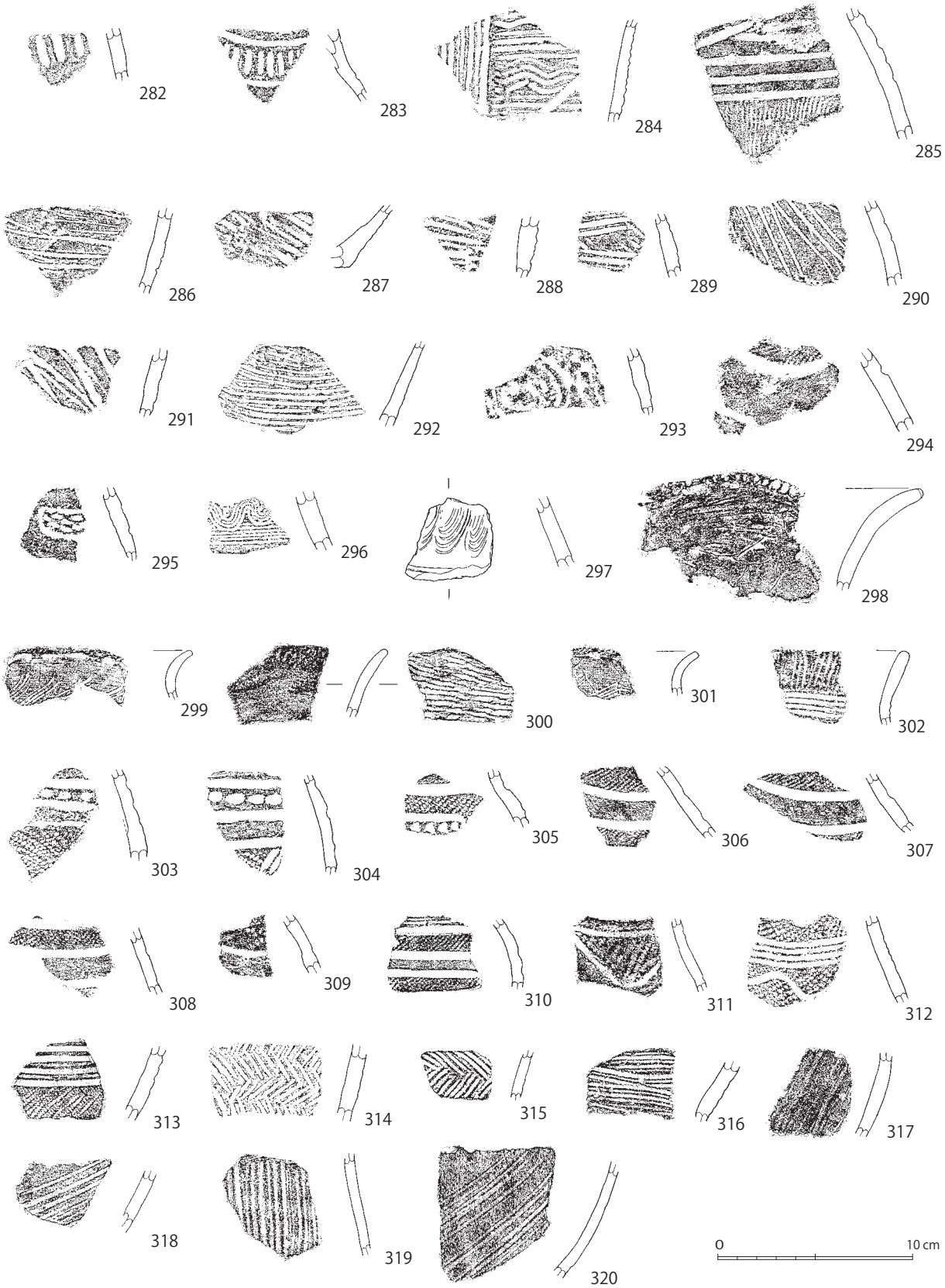


図57 遺物実測図19（拓本－②）

土製品・ミニチュア土器(321～331)

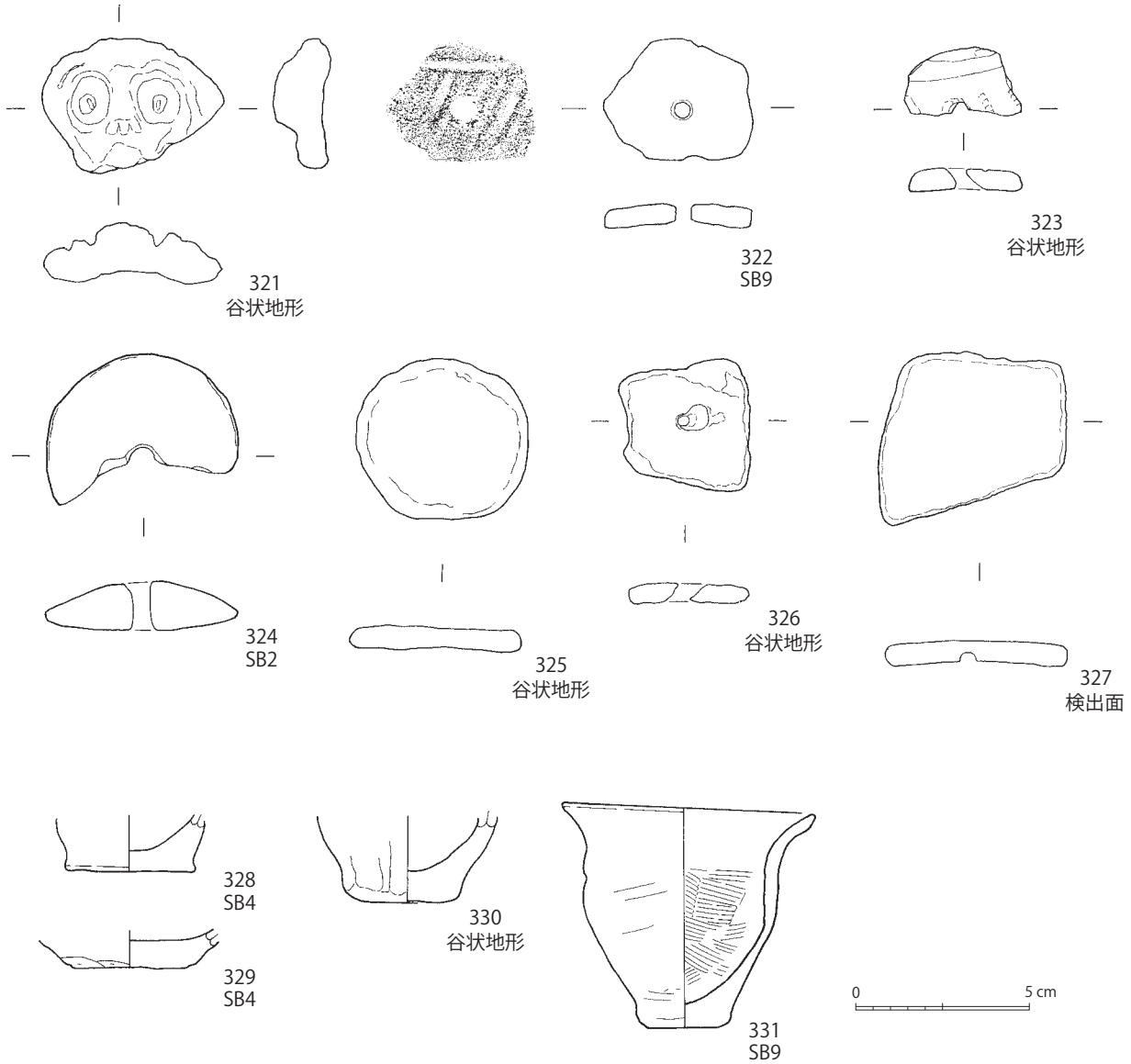
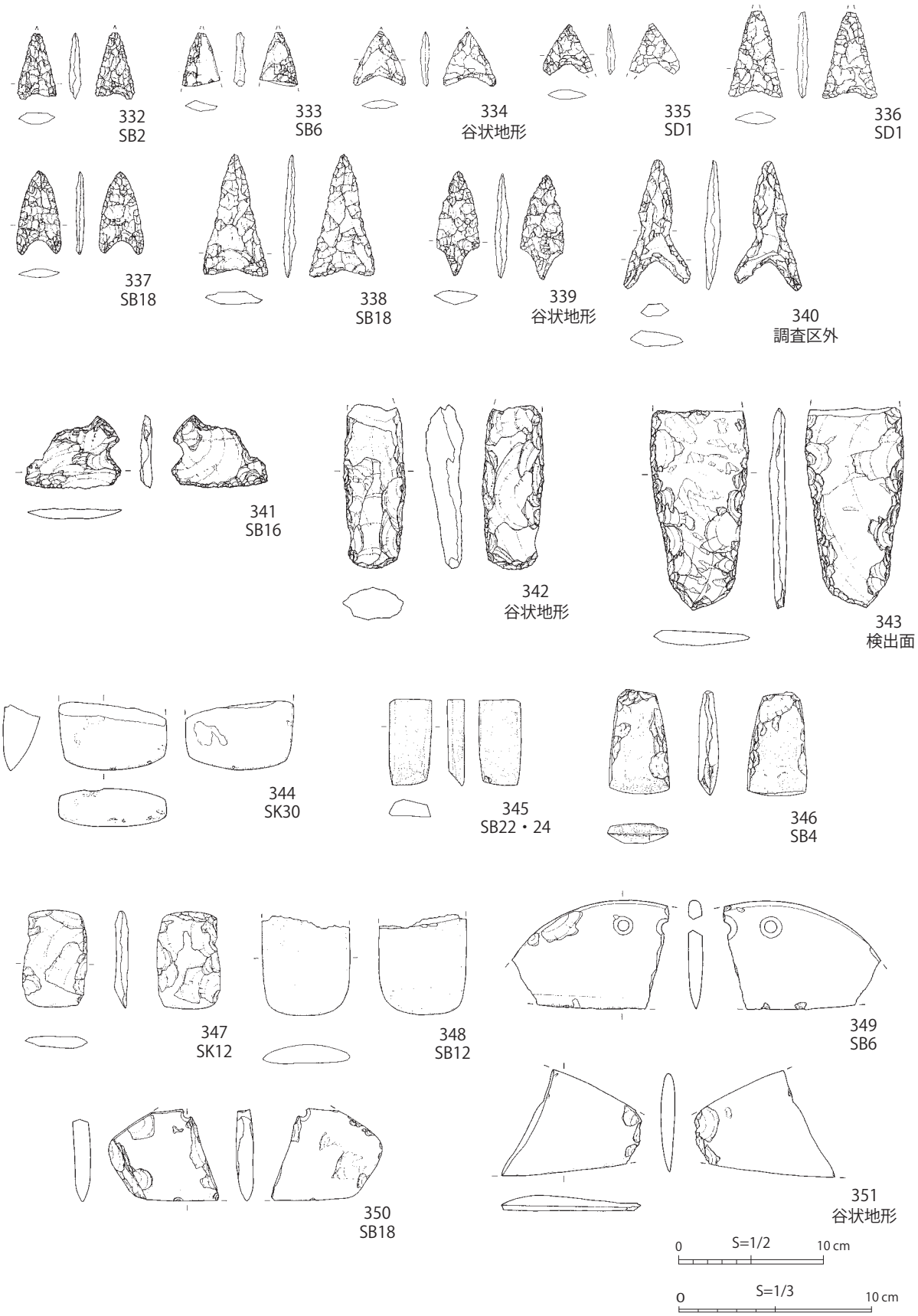


図58 遺物実測図20（土製品、ミニチュア土器）

石器-①（332～351）



（332～341・345～348：S＝1/2、342～344、349～351：S＝1/3）

図59 遺物実測図21（石器・石製品－①）

石器-②・石製品-①(354～360)(352～353)

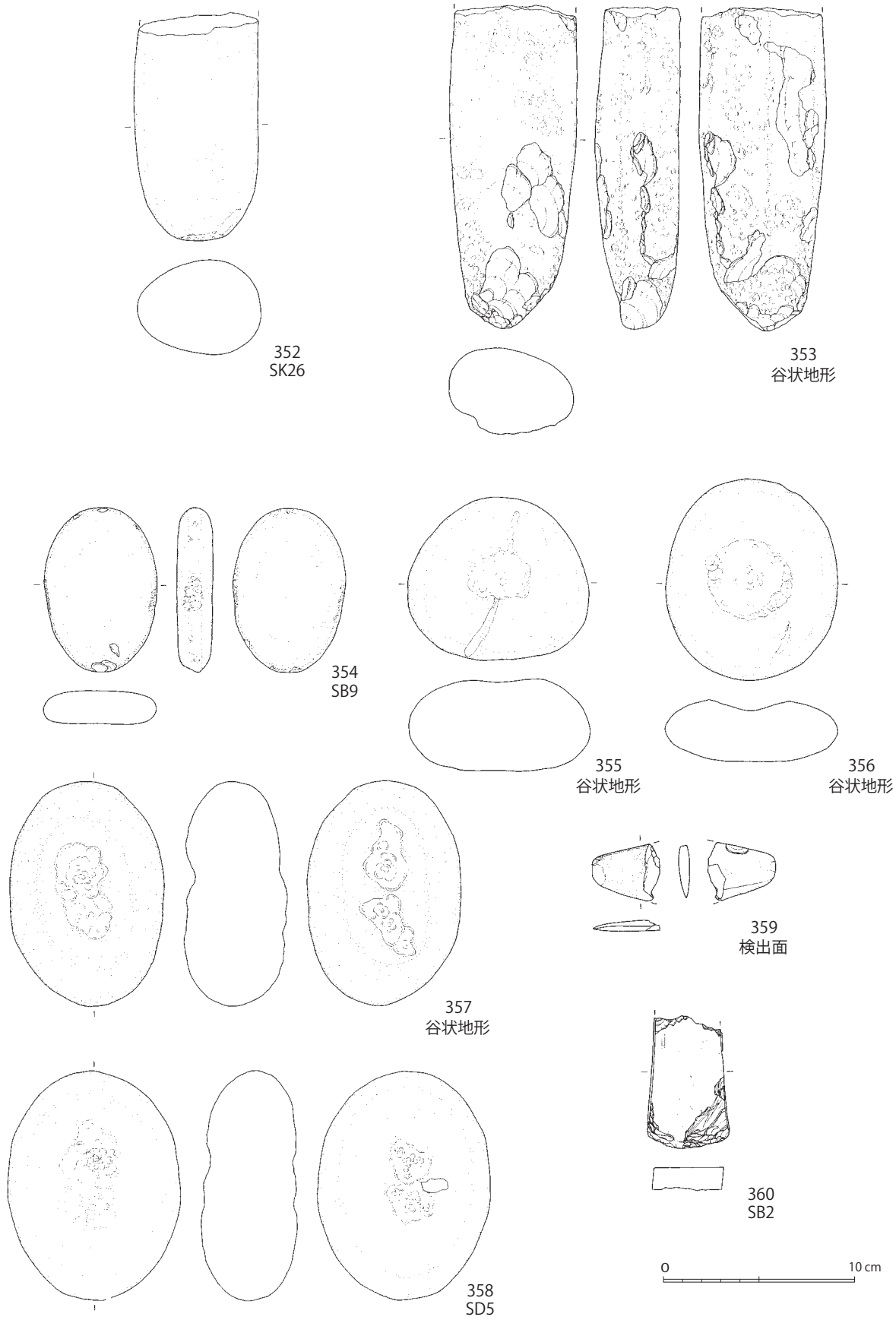
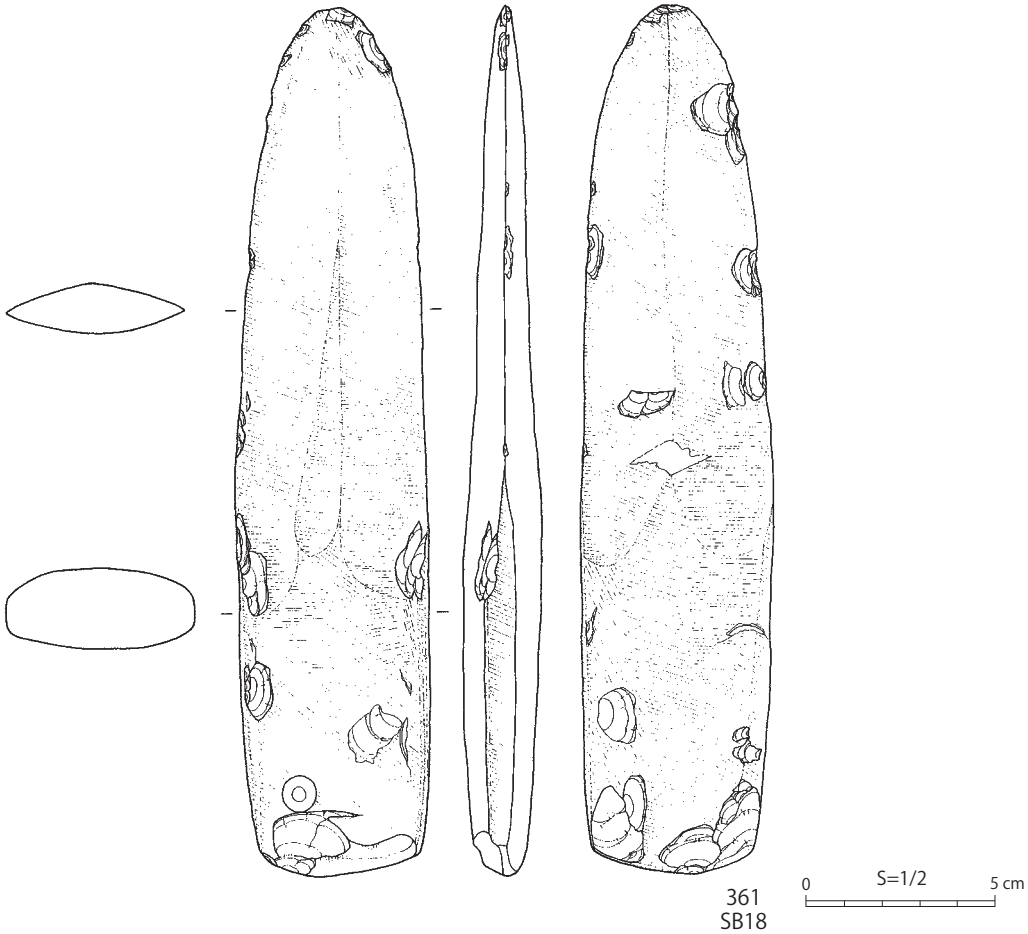
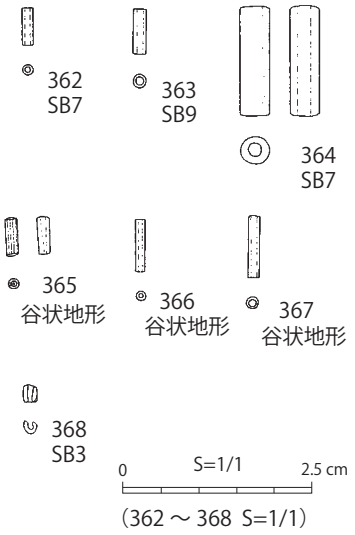


図60 遺物実測図22（石器・石製品－②）

石製品②(361)



玉類(362～368)



金属製品(369～373)

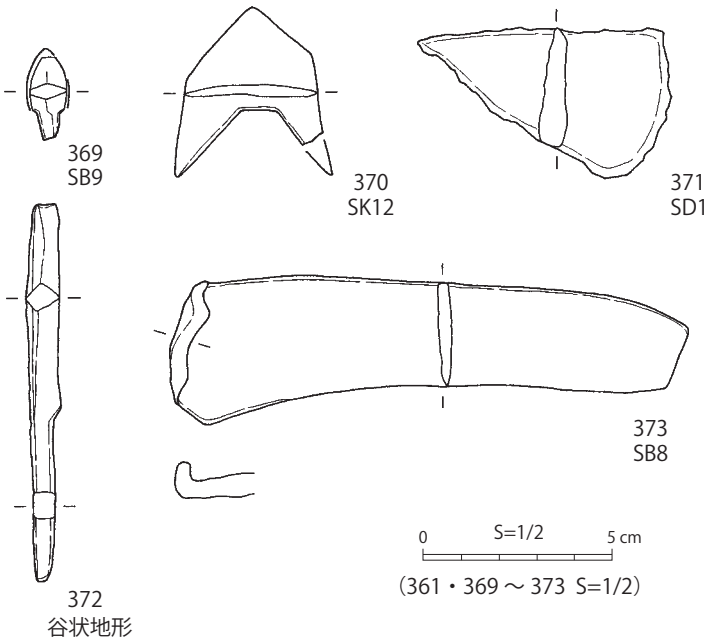
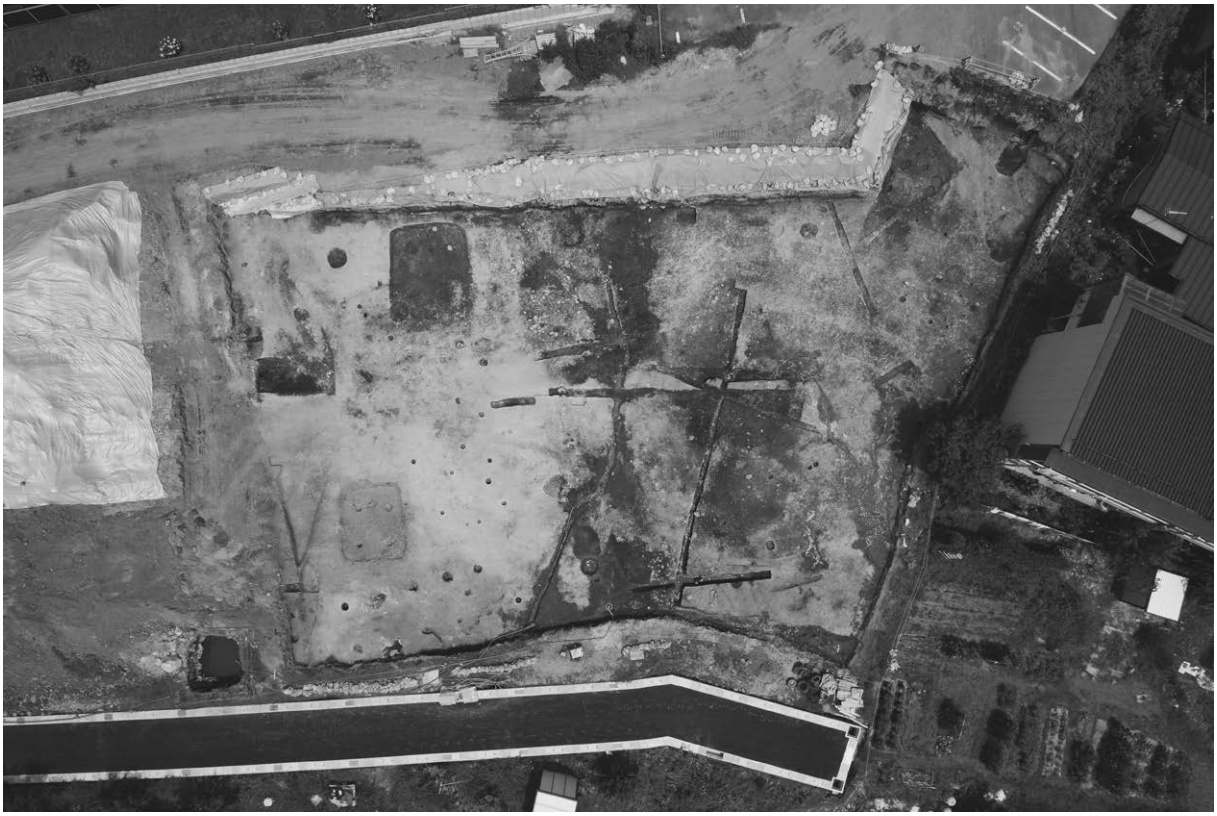


図61 遺物実測図23（石器・石製品－③、玉類、金属製品）

調査区　航空写真（C区）



調査区　航空写真（B区）

遺構写真図版２

調査前風景（調査地北東から）

Ａ区　全景（東から）

Ａ区　全景（西から）

Ｂ区谷状地形　全景（南から）

Ｂ区北東部　全景（北から）

Ｃ区　全景（東から）

Ｃ区道路拡幅部分　全景（ 南から）

Ｄ区　全景（南から）

SB１　完掘（西から）

SB２　完掘（南東から）

SB３　完掘（南東から）

SB３　炉完掘（北西から）

SB４　完掘（西から）

SB５　完掘（東から）

SB６　完掘（南から）

SB６　遺物出土状況（南から）

遺構写真図版４

SB７　完掘（南から）

SB８　完掘（南から）

SB８　遺物出土状況（南から）

SB８　遺物出土状況（南東から）

SB８　遺物出土状況（南西から）

SB９　完掘（南から）

SB９　遺物出土状況（南から）

SB９　銅鏃出土状況（南から）

SB10　南西部分　完掘（南から）

SB10　北東部分　完掘（南から）

SB11　完掘（南から）

SB11　炉断面（南から）

SB14　完掘（南から）

SB15　完掘（南東から）

SB16　完掘（南から）

SB17　完掘（南から）

遺構写真図版６

SB18　完掘（東から）

SB18　石剣出土状況（南から）

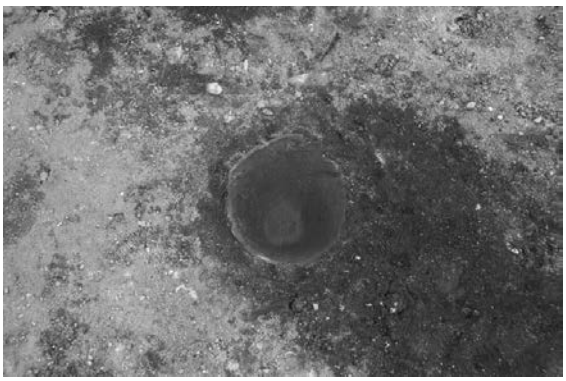
SB19　完掘（西から）

SB20　完掘（南東から）

SB21　完掘（南東から）

SB22・SB24　完掘（東から）

SB22　完掘（南東から）



SB25　炉完掘（西から）

SB27　遺物出土状況（西から）

ST１・ST２　完掘（西から）

ST３　完掘（西から）

SD１　完掘（南東から）

SD１　礫出土状況（北西から）

SD３　完掘（北西から）

SD５　完掘（北から・B区）

SD５　完掘（南西から・C区）

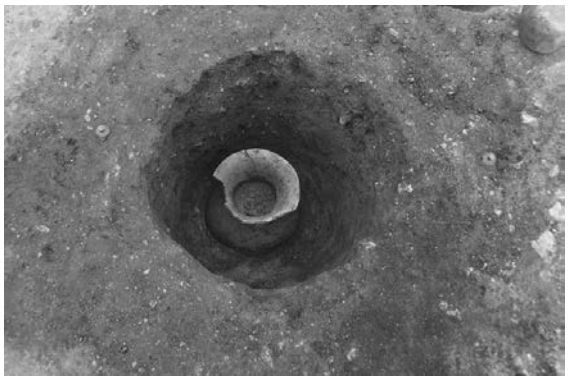
遺構写真図版８

SD６　完掘（南から）

SK24　遺物出土状況（南から）

SK25　断面（南から）

SK26　遺物出土状況（南から）



SP７　遺物出土状況（南から）

SP30　遺物出土状況（西から）

調査区壁面（SZ１北西側）

SZ１　完掘（北西から）

1

2

3

4

7

18

9

14

19

22

23

29

32

35

遺物写真図版２

42

43

44

45

46

47

48

54

55

56

58

59

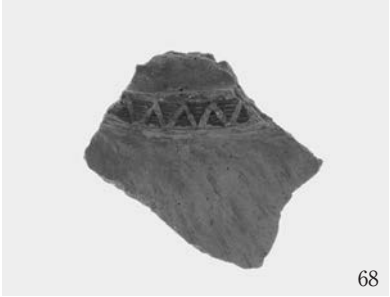
60

61

62

64

70


68

68 文様部分

71

72

76

77

79

81

82

85

90

遺物写真図版 4

87

88

89

91

95

102

101

104

111

113

114

112

115

123

116

119

121

126

126

129

130

132

133

136

138

140

141

148

144

145

150

遺物写真図版 6

154

156

157

160

161

162

163

164

165

166

167

168

170

171

176

172

173

174

175

177

185

178

180

186

189

190

191

197

198

遺物写真図版８

207

210

213

208

211

227

248

249

253

255

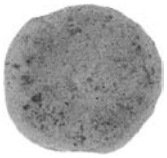
331

261

321

322

324


325

—

217

222

224

—

219

225

—

218

226

332

333

334

335

336

337

338

339

340

341

345

346

347

348

354

344

349

350

351

遺物写真図版10

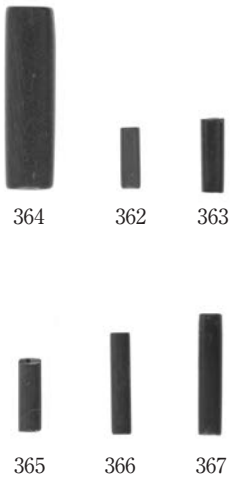
359
342
343
353
360

355

356

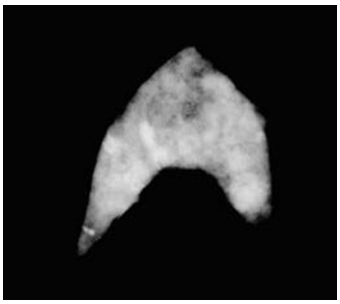
357

358

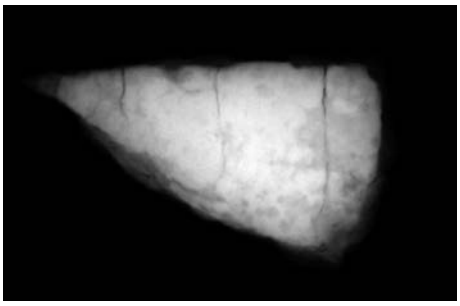

364
362
363
365
366
367

361
368

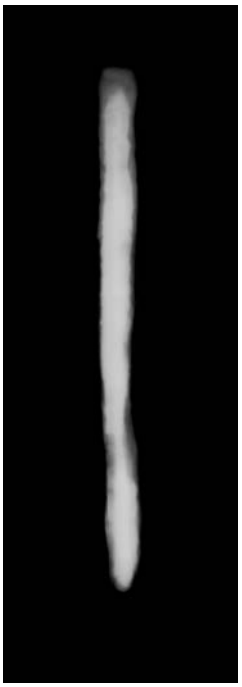
369



370

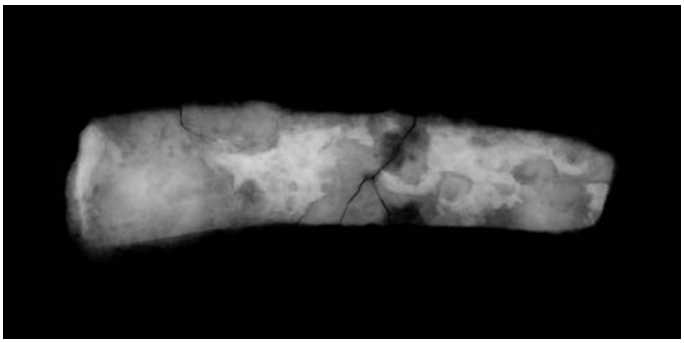


371



372

373



報告書抄録

ふりがな	ながのいせきぐん　しんすわちょういせき
書名	長野遺跡群　新諏訪町遺跡
副書名	救護施設旭寮新築工事に伴う発掘調査報告書
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第149集
編著者名	飯島哲也　篠井ちひろ　鈴木時夫　パリノ・サーヴェイ株式会社
編集機関	長野市教育委員会　長野市埋蔵文化財センター
所在地	〒381-2212　長野県長野市小島田町1414番地　TEL 026-284-0004・FAX 026-284-0106
発行年月日	2018（平成30）年３月23日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
新諏訪町遺跡（しんすわちょういせき）	長野県（ながのけん）　長野市（ながのし） 新諏訪１丁目（しんすわちょうめ） 908番外（ばんほか）	20201	C－001	36° 39′ 36″	138° 10′ 17″	20151116 ～ 20160114 20160412 ～ 20160719	2,829㎡	その他の建物

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
新諏訪町遺跡	集落	弥生時代後期～古墳時代前期	竪穴住居跡　27軒 掘立柱建物跡３棟 溝跡　５条 土坑　３基 小穴　２基 性格不明遺構１基	弥生土器 土師器 須恵器 土製品 石器 石製品 金属製品	北陸系土器 銅鏃 磨製石剣 （目釘式石戈） 埴輪
		古墳時代中期	溝跡　１条 古墳（周溝）１条		
		時期不明	溝跡　７条 土坑　37基 小穴　56基		

要約

遺跡は裾花川河岸段丘上に立地する。最上段から二段目の段丘で、他の段丘面に比べやや範囲は狭い。調査では弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての集落跡と、古墳時代中期の墳墓が検出された。出土遺物は在地の箱清水式土器を中心に、北陸系土器、石器各種、石製品、ガラス小玉、金属製品等が出土した。竪穴住居跡出土の土器群は、箱清水式土器と北陸系土器が認められ、一括性の高い土器群として注目される。

長野市の埋蔵文化財 第149集

長野遺跡群

新諏訪町遺跡

平成30年３月23日　発行

発　行　長野市教育委員会
編　集　長野市埋蔵文化財センター
印　刷　大日本法令印刷株式会社